語言研究會幹事 影山修編著

漢字起原の研究

東京 天泉社

序

およそ世界において文字學のもつとも進歩した國はおそらく支那の右に出るものはあるまい。說文解字以來今日まで漢字の研究に關するものが無慮數百千種の多きに上るであろう。かくのごときは漢字がそれぞれ深遠なる哲理の上に發達した爲であるから、その字源を研討することが支那哲學の重要な作業となることは言を待たない。實に支那における文字學はエジプト文字やペルシャ文字におけるが如く、たゞ單に字形の發達や變遷を說くものとはおういにその趣を異にして居るのである。

わが小學校では義務年限の期間において、國語讀本に提出せられる漢字がおよそ一千三百六十餘字であり、歷史や理科やその他の教科書に提出せられるものを合算すると、二千數百字を下らないのである。これらの漢字につき、一々その字畫を記憶して運用をあやまらない樣に指導することが、小學校における漢字教育の重大な工作である。ところが漢字の意義と字畫とを正確に記憶させてその運用をあやまらない樣に教育することは決して容

易な業でない。ゆゑに敎授指導の方法がその宜しきを得ると否とは、學習の成績に多大の關係を有するのであるが、それには敎授者が字源をよく硏討してその知識をたくみに利用すれば、あまり困難なくこれを記憶させることも出來るし、字源の哲理に興味を覺えて愉快にこれを學ばせることも出來るから、その成績に至てはたゞ機械的に一點一畫を學ばせるものとは到底同日に論ずることが出來ないのである。

著者は深くここに着目して字源を明にしその哲理を說くこととに努力せられたのであるから、漢字敎育の局に當るものに取つては本書は實に無二の師友である。もしこれを一通體得して指導を進めれば、學習上少からぬ興味を感じ愉快にこれを學んでいく樣に仕向けることが出來るから、漢字敎育の工作上その利するところもつとも大なるものがあると信ずる。ゆゑに一言こゝに所感を陳べる所以である。

保　科　孝　一

例言

一、本書は國定尋常小學國語讀本卷一より卷十二に至る十二卷中に、兒童に教授される漢字千三百六十五字に準據して、その字源を究め出來得る限り平明にこれを解說し、同時にその本義・轉義等を明らかにすべく編纂したものである。

一、由來字源研究に二つの目的がある。その一は文字本來の性質構造の沿革を詳にして、文字相互間の關係、その系統發達を研究すること。その二は古代文字の形や構造を基礎として、上代各般の文化の歷史に遡り、その當時の社會文明を明らかにすることで、考古學的基礎に立脚するものである。

一、本書は勿論前者の目的によつてなされたものであるが、間々後者の立場よりの見解を加味して、一般にはあまり關心を持たれなかつた興味深き字源を知らしめ、漢字に對する形・音・義のよつて來たる根本知識を味得せしめんことを企圖した。

一、本書を讀むにあたつて、箇々の漢字の解說を讀む前、是非共第一篇の漢字成因研究上の基礎知識を通讀して頂きたい。この豫備知識がないと簡單に解るところも、容易に理解し得ないかも知れたいからである。

一、第二篇新出漢字の研究は、國定讀本に現はれた順序により配列したもので

590〔從〕ジュウ ショウ じゆ

とある五九〇は索引檢出上便宜の番號、ゴチック體の片假名は慣用音、單に片假名は漢音、平假名は呉音を現はしたもの、又片假名のみしか書かれてゐないものは漢音、呉音共通のものである。又

32〔山〕サン せん　新　やま（二・九）　替　サン（六・二）　假　金剛山（六・二三）

とある中の新やま（二・九）は新出漢字として「やま」と讀む字として卷二の九課にて教授されることを意味し、替サン（六・二）は卷六の二課に於いて山の字をサンと讀替られて教授されることを表はし、その下の假とあるは卷六の二三課に山と假名がふられて現はれてゐることを意味する。

一、上記の番號も發音文字もなく上欄に掲出された三號活字は國定讀本に教授されぬ文字である。

一、國定讀本卷一、卷二は昨年改正されて新出文字にも變更を來たしてゐるが、それは極く小部分であり、卷十二迄の改正には今後數年間を要するであらうから、本書は全體の統一を計る上、卷一も卷二も舊版に則り編纂した。實際の教授上にも本書にて當分不便を感ずることはなからうと思ふ。

一、字源の研究は他の學術分野の進歩驚くべき程目醒しいにもかゝはらず、殊に古代文化の研究熱が旺

盛なる今日、識者の間に忘れられてゐるかの感が深い。又他面國字問題のやかましい折柄、字源の研究はもつと盛んに行はれなくてはならぬと思ふ。この意味に於いて本書が幾分でも斯界に貢獻する所があるならば甚だ幸せである。

語言研究會幹事　影山　修

漢字起源の研究　目次

第二篇　國定讀本新出漢字の研究

第一篇　漢字成因研究上の基礎知識

第一章　漢字構成上の四種

我々が日常使用してゐる漢字の字書には、一體どのく〻〻文字が載つてゐるかといふに、大抵のことには不自由をしないといふ程度の字書だと、多いものでは七八萬、少いものでも二三萬字は採擇してゐる。七八萬といふ數字の大きなことはいふまでもないが、二三萬にしたつて決して少い量ではない。そこで漢字の字數といふものは隨分多いものだといふことに氣がつくのだが、その數があまり多いので素人目には漢字は何だか統一もなく、ただ雜然と作られたかのやうに思はれるのである。しかしながらこれら數萬の漢字もよく〳〵調べて見ると、その成因には自ら一定の秩序が見出されるのである。たとへば「大」の字の如き、人間が兩手兩足をひろげて、天地間に立ちはだかつた形から出來たものであるが、この字の下部に地平線をあらはす一線をつけ加へて「立」の字とし、又上部へシルシをつけて人間の頭の上卽ち「天」なる文字を作り、また大の字の兩脇へものを挾んでゐるシルシをつけて「夾」の字とする如く、漢字は文字と文字との間に親から子、子から孫といふやうに一つの系統をたどることが出來る。これなども漢字がただ雜然と作られたものでないことの一つの證據であるが、さうした縱に關係

を見出されるのは、特に選ばれた文字と文字との間においてのみであるから、從つて系統のちがふ文字とは全然聯絡がないのである。

そこでかかる局部的なものでなく、漢字全體に通ずる何かの法則はないだらうか、そして共通した法則によつて漢字を分類することは出來ないものだらうか、といふことが念頭に浮ぶのであるが、やはりそれがあるのである。卽ちさきに述べた縱の關係においてではなく、大の字がものの形から出來た文字であるとして見れば、また他にもかういふ風にものの形から出來た文字はなからうか、また天の字は大といふ字の頭へ或るシルシをつけた文字であるが、かかる性質の文字は他にないだらうかと、字形の成り立ちの方から横に系統を見つけてそのツレを集めることである。かくの如くして漢字を形式上から系統だてて行けば數萬の漢字も僅に四種の範圍を出でないのである。その四種とは

(1) 象　形　(2) 指　事　(3) 會　意　(4) 形　聲

であつて何れも構成上よりの分類である。

なほこれに第二章において説明する運用上より見ての (1)轉注 (2)假借 の二つがあり、都合六種によつて漢字は完全に分類せられるのである。卽ち

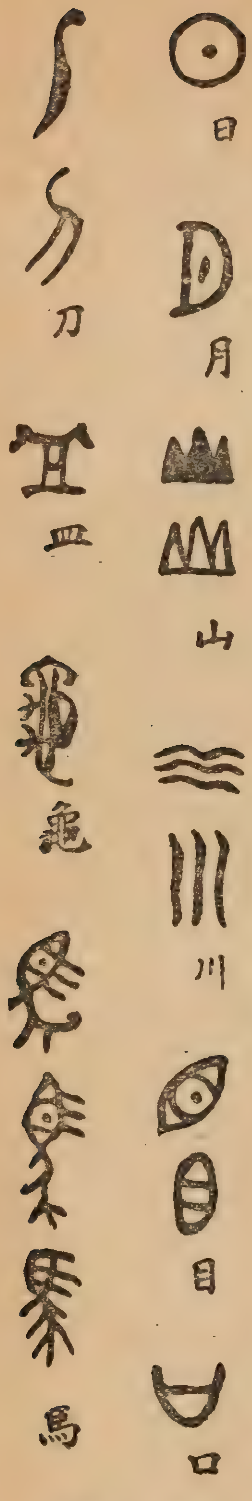
象　形
指　事

漢字は｛會意・形聲｝構成上よりの分類
　　　｛轉注・假借｝運用上よりの分類

となるのである。箇々の漢字の成因を研究するに當つて、先づ第一に漢字全般へ通ずるこの法則を知つておくことは最も必要なことであるから、以下順を遂うて簡單なる解說を試みておかう。

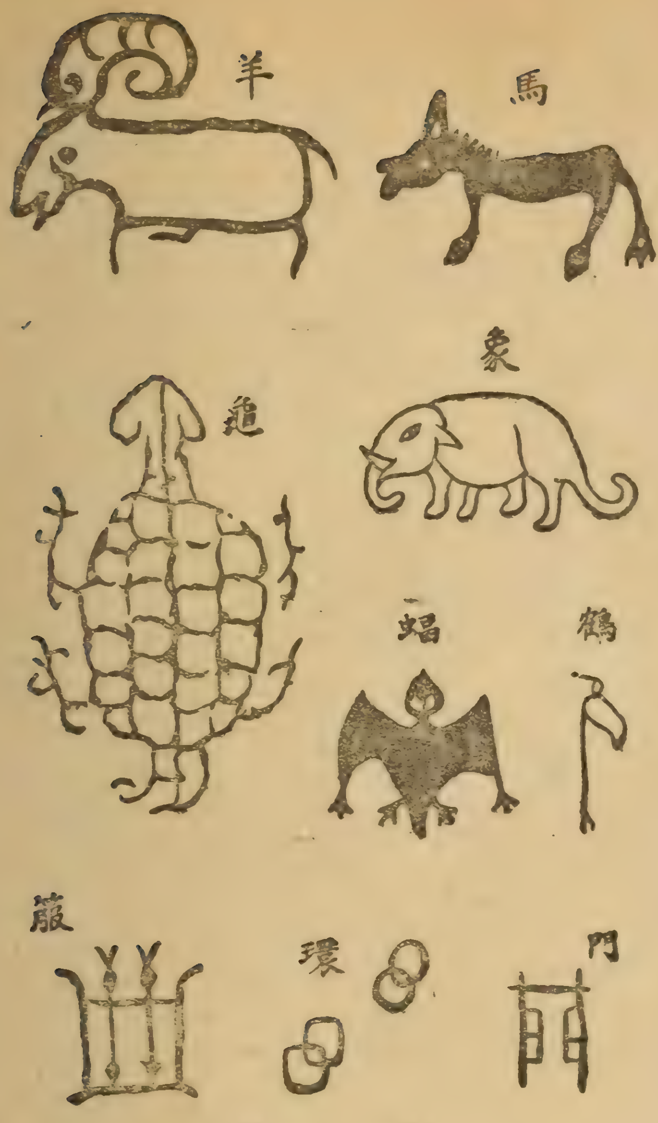
第一節　象形

日月、山川、草木、鳥獸、器具、身體等すべて我々の目に見えるものの形を寫して文字とする方法*



（第一圖）

*であるからこれを象形といふ。象形とは「形を象る」といふ意味でこの方法によつて作られた文字がよく我々の話題にのぼる象形文字である。象形文字はいはば幼稚な寫生畫または簡略畫見たやうなもので、發生的に見て行くと文字としてはごく原始的なものといふべきである。象形文字の主眼とするところは、ものの形を寫すに當つて簡單でありながらもよくその特徴をとらへることである。第一圖に掲げたものは象形文字の代表的な二三の例である。



（第二圖）

以上で大體象形文字のいかなるものかがわかつたことと思ふが、上の第二圖に示すものは殆ど繪畫と異るところがない。その筆法から言つてもよほどうまく出來たものもあるがこの中には純粹な象形文字といふよりも、寧ろ繪畫をかねた裝飾的意味で書かれたものも

あるにちがひない。この中の象や龜に至つては實物を克明に寫した感があるが、文字は自ら繪畫と異るもので決して忠實に物の形を寫すことがその主眼ではない。要は特徴をとらへて居れば事が足りるのである。しかもこんな風に書いてゐては、一字を書くにしてもかなりの時間がかかり、文字としては全く不向きといふべきである。だから現在我々の使つてゐる龜の字や馬の字の字體が、さきに象形文字の例として擧げた第一圖の簡單な象形の方に近いのもそのためである。また刀の字にしても後には内部を塗りつぶす手數を省くやうになつてゐるのも、如何に文字が手つ取り早く書くことの出來るといふことを條件としてゐるかがわかるであらう。

最後に一言しておきたいことは最初は象形文字が使はれてゐたが、後になつて他の文字が出來て象形文字の方は使はれないやうになつたものもある。同じく第二圖の鶴や蝙蝠(かうもり)の如きもの、環の字や艆等の如き文字がその例である。これは文字を作ることが次第に巧みになつて來ると、象形文字は文字としては非常に幼稚なやうに見え出して來るのによるからである。これをもつて見ても象形文字が文字としてごく原始的なものであることが容易に想像することが出來るであらう。

第二節　指　事

前節に述べた象形の方法によつて文字を作るには何かしら目に見える形態物のあることをその必要の條件とする。然しながら我々は、我々の精神生活を始めとし、これを文字として現はさうとする世上萬般の事柄なるものは、むしろ目に見える形態のあるものよりか、却つて形のとらへどころのない抽象的なものの方により澤山あることに氣づくであらう。しかも象形の方法のみでは形のない抽象的な概念をあらはす文字を作ることが出來ないことは自明の理で、ここにおいてかその必要にせまられて指事の一法が生れたのである。

指事なる名目は「事物に假託してその眞意を指し示す」といふやうな考へから作られたものであらうと思ふが、この名目のあるが如く、指事文字中最も多い形式は既に作られた象形文字を土臺としてそれに點畫を加へることである。たとへば物の本末をあらはす「モト」「スヱ」なる意の「本」「末」は既成文字たる（木）を拉し來り、その根元の方へシルシをつけ「コチラの方だ」と指定して（モト）なる文字を作つたのである。また梢の方へシルシをつけたものが（スヱ）なのである。

ところで木なるものとモト及びスヱとの關係を考へて見るに、それらの間には本質的には何等の關係もないのである。だから本・末の字を作るに當つて必らずしも木を引き合ひに出さなくてはならないといふことはない。たとへばの如き棒を引いてその下方へシルシをつけてを作りそれをモトの意とし、スヱをもつてスヱなる意をあらはす文字としてもよいわけである。しかしこの場合特に木を選

んだといふことは、他のいづれの方法をとるよりも、木を利用して本末なる文字を作ることが一番よい方法であると考へられたからであらう。といふのは木は地上に生えてゐるものであるから、その屬性としてネモトとコズヱとがあつて、必然的にモトとスヱとを具有してゐる。然るに紙上に引いた一本の棒（線）には棒そのものとしてどちらがモト、どちらがスヱといふ本質的な屬性はないのである。だから上記の棒に加へたシルシは他の色々な意味に想像せられ易いのである。然るに文字を作るにはなるべく不要な想像、言ひかへれば紛らはしい解釋にとらはれない方法を講ずることが大切なことであるから、幸ひにはつきりとモトとスヱとの二つの概念を抽出することの出來る木を利用したものである。上記の棒の例はそれでもまだモトやスヱをあらはす方法としてマンザラでもないが、これを横にすると何れが始めであり何れが末であるか區別がつかない。たとへ左右にしるしをつけてとしても、それらがモトなりスヱなりの意に用ゐられるためには、先づ左の方を始めとするとか右の方を後とするとかの約束が更に入用となる。さうなるとこれはヒダリとミギとをあらはす符號的の文字とも解せられ、木の立體的なるには及ばないのである。進・退といふ文字にしても古形はと書き、進の場合は草木が地上に芽を出すことになぞらへての如く下を太くして上へ筆を細く引いた。これ明らかに立體的のものの方がかかる概念をはつきり文字にうつすことが出來るからである。

以上本・末の例は形體を有するものの屬性の一部を利用したものであるが、上・下の如き文字になる

とやや趣きちがつてゐる。それはウヘとかシタとかいふやうなものも本・末におけるが如く形體のあるものに假託して、そのものの屬性を利用しウヘ・シタの觀念をあらはすことが出來ないでもないのだが此の場合もはや容易に假託する適當なものが見出だされないのである。勿論形のあるものならば何物に限らず空間の一部を占めてゐるのだから、必らずウヘもありシタもあり澤山のものの中から何か一つくらゐは引き合ひに出すことが出來さうなものだが、却つてそのために苦しむのである。といふのはなまじひ何かの形體を畫いてそれにウヘ・シタの指事的符號を加へると、その形體の方へ人々の注意の焦點が移つて肝心なウヘなりシタなりの觀念にわざはひを及ぼすこととなるのである。そこでウヘとかシタとかいふやうな何物へも通ずる概念的なものは他の形體を有するものに假託することは不適當なこととなる。よつて形體に假託しようとする考へをサラリと捨てる結果となるのである。思ふにウヘといひシタといふからにはその標準となるべき分界がある。そこでその標準をあらはすために横に一線を畫しその上方はウヘ、下方はシタなることが考へられるのである。卽ちウヘ・シタなる文字はかかる考へ方から出來たもので古形の・一、二、丄、はウヘ、一・、二、丅はシタである。この場合標準線の上下に加へられた點なり線なりが、おのおの上下をさし示したものである。現形の「上」「下」はこの古形から變遷したものである。

次にまた心理的聯想作用による場合もある。たとへば刃（やいば）といふ字の右旁に點を打つて刅としキヅック

といふ指事文字を作るが如きものである。

また血といふ字の如きは皿の上部へノなるシルシをつけたものであるが、もと支那では神に捧げた犧牲を皆で共食したこともあり、更に盟約をするときには犧牲の活き血をすすりあつた習慣もあるので、さうした時に屠つた犧牲の血が皿の上に流れることをしばしば目撃してゐたものである。しかもこれらの儀式はまことに重大なものであつただけにチといへば直ちに犧牲をのせる皿を聯想したので皿の字へ工夫を加へて血なる文字を作つたのである。

かくの如く聯想作用を喚起せしむる場合の刃や血に含まれた一點一畫は別段どこへ組合はせてもよいわけで、それは全く便宜によるものであるが、本。末の如き文字になると屬性を利用するものであるから、點畫の加へられる場所は決定的のものであり絶對的であるといふことを忘れてはならない。更にこのことを説明すると刃といふ字は刀（第一節の第一圖を見よ）のハの方卽ち切れる方へシルシをつけ「ココが切れるところゾ」といふ注意を喚起したもので、この點は絶對的にその位置になければならないが、刃の右旁の點になると必ずしもその場所でなくともよいのである。これ屬性を利用するものと聯想作用によるものとの相異であつて、一と口に指事文字といつても心理的に考察すればかくの如くなるのである。然しそのいづれにしても指事文字は點畫を加へて作られたものが一番數において多數を占めてゐるのである。

次にまた既成文字から點畫を減じて聯想作用に訴へるものもある。たとへば夕といふ字は月の出るこ

ろといふ考へによつて月の字から導かれて出來たもので月の一畫を省略してゐる。また烏といふ字は、（鳥）といふ字の目に相當する部分の一畫を省いたもの。これは烏はその色が黒いので遠くから見れば目があるかないかわからないのでかくの如くしたものである。點畫を省くものは指事文字の中でも極めて少數である。

更にまた既成文字の向きをかへる形式もあつて、それには反對の概念をあらはすものと心理的聯想作用や類推作用を起さしめるものとがある。反對の概念をあらはすものの例としては正といふ字の向きをかへて（乏）とし不正の意をあらはすが如きものである。聯想作用によるものの例としては派とか脈とかの字に含まれてゐる𠂢の字の向をかへてナガイといふ概念をあらはすやうな方法である。𠂢の字はもとと書いたもので、水の流れが支脈を作つてゐるかたちをあらはして作つた文字であるが、河川に支流が出來るやうになるには相當永い間の時期を經過したものであり、また流れそのものも長いものでなければ支脈が出來ないから、これらの觀念を綜合して、ナガイといふ意を聯想させる手段として𠂢の字を反對にしたものである。これ現在の活字體にある永の字である。

既成文字の向きをかへる樣式には上記の如き反形のものもあるが倒形とする場合もある。即ち匕の字の如きはそれである。この字は變化の化の字の本字であるが、匕は（人）といふ字を逆にしたものである。即ち年老いて人のすがたがかはることを示したものである。

以上で大體指事文字の如何なるものであるかを述べたつもりであるが、紀數文字の一・二・三等の如き指事文字もある。數のヒトツ・フタツをあらはすに當つて何かのモノに假託するといふと、モノには圓いもの、角いもの、長いもの、短いもの、太いもの、細いもの等があるやうに純粹なる數の觀念をあらはす上に不必要なものが附帶して來る。卽ち○や□でその數量をあらはしたとすると、却つて圓いものではなからうか、角いものではなからうかとその形にとらはれ勝ちとなる。そこで可及的に本質の失はれぬやうにとの考へから、なるべく意味を持たない單純なる橫線を、一二三の如く書きつけて紀數文字を作つたのである。（紀數文字のうち一を指事とし二や三は會意文字として說明する人が多い。詳しくは紀數文字の項を見よ。）

第三節　會　意

一箇又は二箇以上の既成文字を組合はせて異つた意味の新しい文字を作る方法である。卽ち甲なる文字と乙なる文字とを組合はせて兩字に含まれてゐる意味（概念）を會はせて（結合）別箇な意味の文字を作る方法である。この方法を會意といひかくの如くして作られた文字を會意文字といふのである。

そこで會意文字は、その字を形成する各文字の間に一種の單文的關係が存在してゐる。たとへば、

「東」「杳」の二字について考へて見るに東の字は「木」と「日」との合字であるが、これは「日が木の間（日を木の中に入れる）にあがる方角……卽ちヒガシ」といふ考へ方から作字されたもので、東といふ字を形成してゐる字素ともいふべき木と日との間に一種の單文的關係が存在してゐる。同樣に杳の字は「日が木蔭に沒した（日を木の下におく）場合……卽ちクラシ」となるのである。

次の第四節に說く形聲文字もその外形から見れば會意文字の如く既成文字の組合はせではあるが、形聲文字は言葉の音がその主眼點となつてゐるので、會意文字の如く單文的關係、卽ち各字素間における概念の結合といふことには拘束されないのである。反對に會意文字にあつては作り上げられた文字とこれを組立てる字素との間に全然音韻上の關係はない。卽ち東の字は日(ジツ)と木(ボク)との合字ではあるが、トウ（東）なる音はジツ（日）・ボク（木）いづれの音とも關係のないことである。卽ち兩者の異る點は

會意文字＝字素の間に單文的關係がある。（音は顧みない）

形聲文字＝字素の一つに聲符字がある。（單文的關係は顧みない）

會意文字は發生的に見て象形や指事に次ぐものであるから、象形文字と指事文字との組合はされた場合が多いのである。前節における指事の方法にて抽象的な事柄をあらはすことにやや成功はしたけれども、指事の方法では觀念的なものとか極めて單純な概念しかあらはし得ないが、本節における會意の方法によれば複雜した概念をもなほ且つ十分に表現し得るので、作字の方法としてはかなり發達の域に達

したわけである。卽ち會意の方法によれば義・歪・話・美・看の如き抽象的意義を有する文字も自由に作られ、さきに述べた象形や指事にて企て得なかつた缺陷を十分に補ひ得たものといへるのである。これ會意文字に抽象的意義を有する名詞・形容詞・動詞等の多い所以である。

會意文字はこれを形式上から分類すると同母會意・異母會意の二つに大別することが出來る。

(一)同母會意は同じ文字を二個またはそれ以上組合はせて、その意を強めたり、または類推作用や聯想作用によつて他の概念を形成せしめるものである。その例

(1) 二箇の場合　炎 火か重なること卽ちホノホ。　赫 火の色のアカアカすること卽ちカガヤク。　林 木がナラビタツこと卽ちハヤシ。

(2) 三箇の場合　轟 澤山な車の音卽ちトドロク。　晶 日輪のやうにキラキラヒカルこと。　磊 石の多いこと。

以上は二箇及び三箇の例であるが勿論それ以上のものもある。ところで同母會意によつて意味を強める場合の最も多い形式は、同じ文字を三つ組合はせることでこれは漢字全體に亙る常法ともいふべきものである。何が故に三箇とするかといふに、一は物の始であり、二はやや多くなるがまだ完全ではない。三に至つてはじめてものがマトマルと見たのである。

(二)異母會意。異つた文字を組合はせたものでその中にも合體會意と省體會意との二種類がある。會意文字中一番主要な地位を占めるものは實に合體會意に屬するもので、會意文字の大部分はこの種類に屬するものである。その例を左に

(1)合體會意。異つた二個またはそれ以上の文字をそのまま組合はせたものである。

明　光りの代表的なる日と月とを組合はせたもの。アキラカ。

訥　言葉の內なるもの。

古　十と口との合字。多數(十にてそれをあらはす)の人々の口に語られたこと。即ちフルシ。

鳴　鳥と口との合字。それにて鳥などのナクことをあらはす。

解　角と刀と牛との合字。牛を屠殺して刀で切り角や肉をわかつこと。即ちトク。

盥　兩手と皿と水との合字。皿の上に兩手を出して水を注ぎアラフ意。

以上は二字又は三字の例であるが甚だしいものになると六七字を組合はせた文字のあることはいふまでもない。

(2)省體會意。異種の文字を組合はせるに當つて畫の繁雜を防ぐため、その一部分を省略して組合はせたものである。

(A)一方のみを省略する場合。

孝　老人の老と子との合字にて子が親に事へることであるが、老の字は匕の部分を省略してある。

勞　營の省畫と力との合字にて努力してものごとを經營する意である。

義　美の省畫と我との合字。自分を美しくすること。

(B)兩方を省略する場合。

寤　寢の省畫と悟の省畫との合字。寢てゐるものがサメルこと。

以上で大體會意文字の諸例を擧げたつもりであるが、畠、畑、辻、働の如く我が國で作つた所謂「國字」と稱せられるものがある。勿論支那人へは通用しない文字であるが、日本で製作したこれらの文字

はすべて會意になつてゐることである。即ち

榊（さかき）　木と神との合字。神に捧げる木。

俤（おもかげ）　人の弟は兄の面影を存してゐるゆえ。

枡（ます）　木と升との合字。木で作つた升。

噺（はなし）　口と新との合字。口より新しく出すもの。

糀（かうじ）　米と花との合字。米が花のやうになつたもの。

鰯（いわし）　魚と弱との合字。弱い魚。

梻（しきみ）　木と佛との合字。佛にそなへる木。

峠（たうげ）　山と上・下との合字。山の上り下りるところ。

毟（むしる）　少と毛との合字。毛を少くする。

怺（こらふ）　心と永との合字。心を永くする。

躾（しつけ）　身と美との合字。身を美しくする。

裃（かみしも）　衣扁に上と下との合字。

梺（ふもと）　林と下との合字。林の下のところ。

凪（なぎ）　風の省畫と止との合字。風が止むの意。

襷（たすき）　衣と擧との合字。衣を擧げる。

込（こむ）　入と之遶との合字。送り入れること。

等がその一例である。本邦製作字の特徴は訓のみにて音がないことである。支那で出來た文字でないから當然さうなつて來るわけである。もつとも勞働の働の字の如きものは動の音にまねてドウなる音を持たせてゐる。

以上は全然漢字にその字體がないものであるが、漢字の有無、本義の如何に係らず別の意をもたせて我が國で作つた文字もある。

沖（おき）　漢字にての本義は「虚シ、深シ」。我が國にては水の中にてオキ。

偲（しのぶ）　本義は「相責ム」。我が國にては人を思ふにてシノブ。

嘘（うそ）　本義はフク。我が國にては口と虚との合字と見て虚言。

樋　本義は木の名。我が國にては水の通ずる木即ちトヒ。

鐚（びた）　本義はシコロ。我が國にては金と惡との合字にてビタ。

鰹（かつを）　本義はハモの大きなもの。我が國にては堅い魚、即ちカツヲ。

中にはまた麿（まろ）・杢（もく）の如く二字を合はせて一字としたものもあり、これは音の假借である。

第四節　形聲

二つの文字を組合はせてその一半にて意義をあらはし、他の一半にて聲音をあらはしたものである。二つ以上の場合においてはその中のいづれか一つが聲音をあらはしてゐる。

例をもつて示せばもと支那では黄河のことを單に「カ」といひ、揚子江のことは「コウ」と呼んだものである。これらの川の名を文字としてあらはすに如何なる方法をとつたかといふに、川といふものについて考へて見るに川は水の流れであるからその屬性は水である。そこで水の象形から出來た三水を書き、そのかたはらに黄河の場合には「カ」なる音を有する可の字を組合はせ、また揚子江の場合には「コウ」なる音を有する工の字をこれに組合はせたのである。だから可や工は單に言葉の音を寫すために組合はせたものであるから、可や工は本質的に見て川とは何等の關係がないのである。かくの如くして出來た文字が形聲文字であつて、その特徴とするところは、實にその文字の中にその言葉通りのまたはその言葉に最も近い聲音をもつてゐる文字が組合はされてゐることである。これ會意文字と異るところでありまた形聲といはれる所以である。即ち「形質（意義、本質）と聲音とよりなる文字」なる意味より與へ

られたる名目である。形聲はまた諧聲・象聲ともいはれるがこれらは「聲音を諧（とも）なふ文字」「言葉の聲音を象つた文字」といふ意に外ならない。

更に分り易い他の例をもつて說明するならば鷄・鴿・鳩・鵞等はすべて形聲文字であるが、これらの言葉はその鳴き聲の擬聲から出來たものであるから、それ〴〵鳥といふ字に擬聲をあらはす文字を組合はせて作字したものである。我が國でも鷄のことは古語で「カケ」といつたがこれは「コケッコー」と鳴くその鳴き聲から來たものであるのと同樣に、支那に於てもかうした自然聲が源になつて出來た言葉がかなりあつて、鷄はケイケイといつたものらしい。そこで鳥に屬してゐるものでケイといふ名の鳥だといふ意味で鷄なる文字が作られたのである。鴿のポッポ（合の字にはボウなる音もある。）またはキユー〳〵、クー〳〵（鳩）鵞鳥のガー〳〵は合　九・我等によつていかなる鳥かがチヤンとわかるやうにしてある。狐のコンコン、猫のミヤーオ〳〵、蟬のジーン〳〵等も瓜・苗・單が組合はされていかなる獸（ケモノ扁）かいかなる虫かがわかるやうにしてある。また犬をけしかけるシッシッの聲が奬の字の上部に將となつて組合はされてゐる。さきに例として擧げた「コウ」「ガ」の如き川の名前の言葉にしても、もと水の流れる音から出來た言葉であつて、それが文字となつたものである。卽ちまん〳〵とたたへた揚子江の水が「ゴーウゴーウ」とゆるやかに流れることから、この川の名に「ゴウ」といふ名稱が與へられたので、これを文字にして作る場合にはその音をもつ工（現在の支那音はKung）の字を借りて來てそれを三水に組合はせたのであ

る。また黄河の方は「ガッガッ」と勢づいて流れる音から出來た言葉であつて、やがて可（現在の支那音ではKö。）の字が三水に組合はされたのである。

以上は形聲文字の一半が言葉の音をうつしたものであるといふことをわかり易く說明したかつたので特殊なものを引合ひに出したまでであるが、上記の例においてもわかるやうに形聲文字の音をあらはす部分の文字は、その字の持つ固有の意味とは全然關係がなく、單に言葉の音さへ寫してくれれば十分なのである。かくの如く音を寫すために加へられた部分の文字を聲・聲符・音符又は音符字と稱する。說文に江の字を說明して「水に從ふ工の聲」とある聲に相當する。これは聲音をあらはすといふ意味である。又從は屬性をあらはすといふ意味でこの方から意を求めればよいのである。ところで我々日本人にはこの音符字の音によつてその文字を解することが出來ないけれども、支那人にして見れば言葉通りの音符字が加へられてゐるのだから、他方の形質をあらはす文字と相關聯して直ちにその文字の意味がわかるのである。たとへ同音の言葉においてもこれを文字に書けばその意味はチャントわかるのである。たとへば我が國で「コラッ」と人をとがめるやうな場合の言葉は、支那では「カ」といふのでその言葉の音の持つ可の字を人の字に組合はせて誰何の何とし、また言を加へて訶責の訶ともし、また口を加へて呵の字をも作るといふ風に、文字を見れば一見してその意がわかるのである。この例は「カ」なる言葉の意味に聯絡した内容をもつ文字の例であるが紅・訌・肛の如きものになると、それは同音でも各文字の

間には全然異つた意味がある。この場合においてもそれらの區別はおの〳〵糸・言・肉月等から容易に見出すことが出來るのである。

ところでここに注意しておきたいことは、さきに形聲文字においては、一方は單に聲符として加へられたものであるから、その字のもつ意味の如何は顧みないといつたが、これは形聲文字としての所謂原則的なことで、中には音符たる役目をなす以外に、更に會意文字における場合と同樣に、聲符の文字が意味をもかねてゐる場合がある。卽ちどうせ音符字を加へるならば、出來るだけその音符文字が會意をかねるやうにしようとした氣持ちがうかがはれる。しかしそれがうまく行かない場合にはそんなことにとらはれる必要なく、純然たる音符字を加へれば事が足りるのだから、形聲文字は非常に自由な立場におかれて作字し得る便利をもつてゐる。卽ち最後のキリフダは單なる音符といふことにあるのである。だから漢字の中では形聲文字の數が一番多いことになる。卽ち形聲文字は

形聲文字 {（A） 一半は純然たる音符。
（B） 一半は音符にして更に意味をもかねたもの。

との二つになるわけであるが、（B）の場合の意をもかねさせることは比較的困難であるから、更に形聲文字中でも（A）に屬するものの方が多いのである。

さて上記の形聲の方法によつて文字を作ることは非常に便利なことであるから、漢字の八九割はこの

方法によつて作られてゐる。その理由は象形文字だとすれば形のないものは文字として表現が出來ないし、また形體があるにしても文字は繪畫とはちがふから、一々これを象形文字とすることも事實上出來ないわけである。また指事の方法はごく觀念的なことに限られてゐるから到底人事の複雜なることを寫し出すことが出來ない。會意文字にしても組合はせられる文字がピツタリあてはまつてくれればよいがさう〳〵かかる文字を見つけることが困難である。然るに形聲文字になると既に作られた文字中から、言葉の音をうつす文字ならば、何でもかまはず大膽に利用することが出來るのだから、この方法の發達するのも理由なきことではない。そこで形聲文字において漢字の發達は全く最高の域に達したものといつてよいのである。

さて形聲文字を形式上から區別して唐の賈公彥は左の六種に分類した。卽ち形質をあらはす文字と聲音をあらはす文字との位置による分類法である。

（一）左形右聲　（例）江・河・猫・銅。
（二）右形左聲　（例）鳩・鴿・雞・鵲。
（三）上形下聲　（例）草・藻・箭・界。
（四）上聲下形　（例）婆・鵞・齒・忿。
（五）外形內聲　（例）圃・國・匣・閾。

（六）内形外聲　　（例）輿・問・聞・悶。

我が國において漢字の扁(へん)・旁(つくり)・冠(かむり)・脚(くつ)（沓）といふのは、かくの如くして作られた文字の一部をいふのである。

なほ漢字に百姓讀みといふことがいはれてゐるが、これはその字の意義もわきまへずして組合はされた文字の一部分を便りに讀むことである。そこで往々にしてまちがひが起るが、しかし初めて出會つた漢字でも我々は大體に誤りなく讀むことが出來るのは、漢字には形聲文字が多いから、その字に聲符として組合はされた部分の文字を心得てゐるから無意識に正しい音で讀んで行けるのである。

そこで、まことにむづかしいもののやうに考へられてゐる字音假名遣の如きも、若し聲符字として組合はされた部分の文字の假名遣を基本的に知つておけば、その系統に屬する文字はすべて基本字と同一の音をもつといふことが會得されしかも非常に便利なのである。このことについては第四章形聲文字の聲符の條下に說明をゆづることとする。

なほ最後に一とこと言つておきたいのは、松とか液とかいふやうな文字の公・夜は共に聲符なのであるが、我々は公の音はコウ、夜の音はヤとのみ心得てゐるから、公がシヤウなる音を、また夜がエキなる音を持つてゐるといふことを知らない場合が多い。然し

公——松・頌・訟。

夜 ——— 液・腋。

として見ればいづれも公がショウ、夜がエキなる音をあらはしてゐることに氣がつくであらう。かかる音の變化、或ひは音の分化については、これまた第四章形聲文字の聲符のところにて説明を加へることとする。

第二章　漢字運用上の二種

漢字の構成法は前章において述べた象形・指事・會意・形聲の四種をもつて盡されてゐるがかくの如き諸種の方法によつて作られた文字もこれを實際に使用するに當つてなほ圓滑なる使用に不便を來す場合が多い　そこで既に特定の意味を含む文字として作つたものを、その本義だけに固定させずして更に本義以外の意味にも轉用させて、漢字の運用を遺憾なく發揮せしむる方法が講じられて來た。これが次に說明する轉注及び假借の二つであるが、この二つのものは新たに漢字を作り出すのではないから構成法たる象形・指事・會意・形聲の如き形式的のものではない。

第一節　轉注

轉注とは最初或る意味の文字として作つたものを更に他の意味に流用することである。だから最初に文字を作つた時の意味を本義とすれば別に轉義が出來るのである。この本義と轉義との關係は心理的に

見て深い關係のあるもので必らず意義が類似してゐるといふことである。もつとも單に心理的といつただけでは誤解され易いが、決して反對の概念をあらはすやうなものではない。卽ち善といふ字がその反對の「ワルイ」といふ意味に使用せられるといふやうな突飛的なものになるのではないのである。その具體的な例を擧げるならば一といふ字の本義は數のヒトツであるが、それが有形無形に拘らずすべてハジメといふ意になるのは一は數の始めだからである。また一は數の中では最小のものであるから單一といふことが聯想されモツパラ（專一）ともなるのである。だから本義と轉義との間には必ず意味上の關係がある。しかし中にはそれからそれへと轉義して行くうちに最後は本義と轉義との意味上の關係が全然なくなつてしまふ場合もある。例へば横の字の如き、本義は門扉へさしこむカンヌキであるがこの木は横に差込まれるので、物のヨコタハルこととかヨコとかいふ意になつて木なる觀念が失はれてしまふ。しかしそれにしてもまだヨコなる觀念は殘つてゐるが、更に物が横たはるといふことから邪魔といふ意味になり、それよりまた傍若無人の意（横着）にも轉義する。かうなつて來ると傍若無人とカンヌキとの間にはその中間の聯絡を取除いたなら全然無關係なことになる。卽ち本義とは全くかけはなれて全然緣のないものとなつて來るのである。しかしかくの如き緣遠いものへ移るにしても決して本義から一足飛びに行くものではないのである。中にはまた轉義同志の間の意味が反對になつて來る場合もある。例へば等といふ字の本義は役人が書類を整理することであるが、ものを整理するためには同一のものを

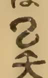
ならべるからヒトシ（齊等）といふ轉義が生じ、部類分けにもするから區別の意（品等　等級）も生ずる。かうして一字の意味に多少矛盾したやうに見受けられる二つのものも出來る場合があるが決して不合理だといふことは出來ない。

以上は轉義の場合においても音は同一であるが中には同一文字で音の相違により意味のちがふものもある。これまた轉注に入るべきもので、例へばタノシムといふ言葉は支那ではラクであつたがその文字がないので、音樂の樂の字を借りてその意の文字としたものである。即ち音樂は人の心を樂しませるからである。またコヒネガフといふ言葉はゲフであるがこれまた安樂は人のコヒネガフところといふ考へから樂の字が使用されたのである。

なほ轉注については昔から種々むづかしい議論もあるがあまり專門的になるので全部省略することとする。最後に轉注なる名目についてであるが、これはその義を引き伸ばし或ひは發展せしめて、他の近似せる意味に注ぎ轉用するの意から與へられたものである。

第二節　假　借

前節に述べた轉注には本義と轉義との間に意味上の聯絡があるが、さうしたことを全然考慮に入れな

いで單に既成の文字の音を借りて他の意味のものに借用する方法がある。これは音が同じでありさへすればよいのである。例へば爼豆（禮器）の豆の本義は實はマメではないのだが音が同じところより菽(まめ)の意に使はれ、余の字はワレといふ字であるが同音なるため餘分の余としても用ゐられるやうなものである。又一二三四に壹貳參肆等を使用するのも同音なるがために假借されたもので、これらは本字があるにも拘はらず他の文字を假借したものである。助辭の類の如きは形を象ることも出來ず、更にまた事によつて指し示すことも出來ないから本字がない場合が多い。例へば焉（古形はにて鳶の象形）、矣（古形はにて箭鏃の象形）、耳(のみ)（耳の象形）等がそれである。そこで假借には本字のあるものとないものとの二種があることとなる。

また外國語や外國の地名・人名等をあらはす場合に比丘(ビク)、護謨(ゴム)、英吉利(イギリス)、佛蘭西(フランス)、亞米利加(アメリカ)、倫敦(ロンドン)、成吉思汗(ジンギスカン)の如く言葉の音をそのまま寫し出すのも假借である。サンフランシスコ港を桑港とし、ナポレオンを奈翁とし、イギリスを英國とするが如きものは原語を簡單化したものである。

なほ或る文字が長い間假借されて使用せられてゐると、終ひには本義が忘れられて、假借の場合の意味のみに使用せられるやうになり、それを本義と誤解されるやうになつて來ることがある。たとへば、新といふ字の本義はタキギであり、然といふ字の本義は犬の肉を燒くことであるが、同音なるところより前者はアラタの意に假借され、後者はシカルニとなつていつの間にか本義は忘れられる運命に遭遇し

てしまつた。しかもかうした場合に、本義をあらはす文字へは更に他の形質をあらはす文字が附け加へられて薪　燃とされるやうなことがあり、新・然は全く聲符字となり切つてしまふ場合が多い。あたかも軒下を貸して主家を奪はれた形である。

第三章　六書の名目及び順位

漢字の書物を見るとよく六書(リクショ)とか六義(リクギ)とかいふ文字が出て來るが、これは前述の如く漢字を六種に分類して研究するからである。六書といふ言葉は既に周禮保氏や漢書の藝文志などにも載つてゐるから、支那ではよほど以前からかうした分類法が行はれてゐたものと見える。何の學問によらず段々と研究の歩が進んで來ると自然に科學的な研究方法が講ぜられるやうになるのは當然で、したがつて漢字の場合にも必然的にかかる分類法が發達したのである。漢字の研究を「六書の研究」といふのも、六書によらずんば徹底的に漢字を研究することが出來ない關係にあるからである。

さて六書箇々については前二章に亙つて說明したが、もと〳〵六書に對してはつきりした定義を與へたのは後漢の許愼が最初である。この人の著した說文(セツモン)といふ書物は字書としての體裁を整へた最初のものであり、且つ漢字の研究者にとつては非常に大切なものであるがその中に次のやうに規定してゐる。

一に曰はく指事。指事とは視て識るべく察して意を見る、上・下これなり。

二に曰はく象形。象形とはその物を畫き成し、體に隨つて詰詘す、日・月これなり。

三に曰はく形聲。形聲とは事をもつて名となし、譬を取りて相成す、江・河これなり。
四に曰はく會意。會意とは類を比し、誼を合はせ、もつて指撝をなす、武・信これなり。
五に曰はく轉注。轉注とは類を建つる一首にして同意にて相ひ受く、考・老これなり。
六に曰はく假借。假借とはもとその字無し、聲により事を託す、令・長これなり。
我々は大體においてこの定義によつて漢字を分類してゐるのであるが、定義を言ひあらはす文字がいろいろに解釋され易いので、從つて同じ許愼の定義を説明するにしても人によつて種々の相違がある。これ漢字本來の性質として、文字の中に蘊蓄が多過ぎ、上記の如き短い言葉では解釋が如何やうにもつけられ、したがつて最初記述した人が言ひ現はさうとした概念が明確につかまへられないからである。そこで轉注の如きに至つては頗る澤山の異説が出て來るやうなわけである。しかし我々は許愼がかういふ意味でかう定義したからそれに從ふといふのではなく、最も科學的なるものを六書の定義として立てるのが理由あることと思ふから、さうした異説の研究は別箇な研究と考へ、差しあたつて必要なことは最も妥當と思へる定義を選べばそれでよいのである。この意見によつて本書は六書箇々の解説を試みておいたつもりである。
次にこの六種に分類したものの箇々の名目は古來から一定してゐるかといふに決してさうではない。
漢書藝文志には、

象形　象事　象意　象聲　轉注　假借

鄭衆の六書略には

象形　會意　轉注　處事　假借　諧聲

許愼の說文解字には

指事　象形　形聲　會意　轉注　假借

となつてゐるやうにその間多少の相異があり何れも一長一短がある。本書においてはしばらく許愼の說文に從つておいたが、人によつてこれ以外のものを使ふ場合もあるから、他の書物を讀む上の參考としてそれを定義の內容によつて對照しておかう。

說文＝	象形	指事	會意	形聲	轉注	假借
漢書＝	象形	象事	象意	象聲	轉注	假借
書略＝	象形	處事	會意	諧聲	轉注	假借

更にまた六書を列記する場合においてその順序が說文、漢書藝文志、六書略いづれにしても異つてゐるところであるが、この相違はその人々の意見の相違を物語つてゐるといふことが出來る。といふのはこれらは無意義に、卽ち思出したものから書きつけたものでなく、漢字を發生的に見た場合の先後によつて次第したものだからである。何でもない單純なことのやうに見えても、かうしたことからかなり重

大きな議論が起つて來るのであるから、學術の研究に當つては瑣細なことにも注意しなければならない然し本書は學術的に深入りすることは特に避けてゐるのであるからこれらについてはすべて省略しておく次第である。なほ六書の順位については漢書藝文志に從つたものである。

第四章　形聲文字の聲符

漢字には形・音・義の三方面があり、したがつて漢字を深く研究するには音韻の研究も重要なこととなる。然し本書は主として形式上の研究にその主眼をおいてゐることだし、また音韻の研究は極めて專門的なものでもあるから形聲文字を理解する上に必要な程度に簡單な說明を加へておかう。

第一節　規則的な聲符

形聲文字の性質については既に述べた通りであるが、擔・襟・棲の如き文字が時に担・衿・栖の如く書かれる場合がある。これは詹と旦、禁と今、妻と西とが同音の文字なるがため比較的字畫の少い他の形式のものに交換されたのであるが（略字にはこの種のものが多い。）、いま形聲文字を音によつて分類して見ると

韋　緯　葦　違　圍…………ヰ

袁　猿　遠　園　薗…………エン

エ　功　攻　紅　貢　………　コウ

となるやうに、同一の音を有する文字には同一字形の聲符字が加へられてゐることに氣づくであらう。これは形聲文字の性質上必然的にさうなつて來るのであるが、したがつて面倒とされてゐる字音假名遣の如きも、聲符となるべき基本字の音さへ知つておけば後はその類推によつて容易にいかなる音の文字なるかがわかる。勿論漢字の音は古く支那から傳はりその上日本式の音に變化してはゐるが、それにしても右のことを心得ておけば非常に役立つので次に形式を見て直ちにその音を知ることの出來る一覽表を掲げておかう。あはせて字音假名遣の一斑をも會得されたい。

	假名	基本字	系統字	○本表以外の假名○除外例とその假名
い	ヰ	韋	偉煒緯葦違圍闈	イ
		胃	渭蝟謂	
		惟	帷唯維	
		委	萎餧痿逶	
		尉	蔚慰	
		畏	位爲威恚遺彙	
	ヰツ	聿	鷸	イツ
	ヰキ	域	閾	イキ
	ヰン	員	隕殞韻	イン
		院	筠尹允	

	假名	基本字	系統字	○本表以外の假名○除外例とその假名
え	ヱ	回	廻	エ
		會	繪	
		畫	惠慧衞穢烏淮	
	ヱイ	衞		エイ
	ヱツ	戉	越鉞	エツ
	ヱン	宛	蜿踠苑怨鴛	エン
		袁	猿轅遠園薗	
		爰	湲援猨媛	
		圜	垣宛	
	ヲ	烏	鳴塢	オ
		汙	汚	

假名	字音	主字	諧聲字
		惡	
お	ヲク → オク	屋	
お	ヲツ → オツ	越	
お	ヲツ → オツ	膃	
お	ヲン → オン	溫	慍縕
お	ヲン → オン	苑	怨
お	ヲン → オン	遠	園
お	ヲン → オン	穩	
おー	アフ → アウ	押	狎鴨
おー	アフ → アウ	凹	
おー	オウ → アウ	嘔	謳歐毆甌嘔嫗
おー	オウ → アウ	應	鷹
おー	ヲウ → アウ	翁	蓊
おー	ヲウ → アウ	甕	
おー	ワウ → アウ	王	汪往旺枉尫皇凰
おー	ワウ → アウ	黄	横潢簧
	クワ → カ	化	花訛靴貨
	クワ → カ	禾	和科蝌
	クワ → カ	果	菓課夥顆裹窠
	クワ → カ	華	嘩譁
	クワ → カ	過	渦禍蝸窩
	クワ → カ	火	
	クワ → カ	戈瓜寡瓦臥畫	
	クワイ → カイ（海）	回	徊廻蛔
	クワイ → カイ（海）	會	檜獪膾繪鱠
	クワイ → カイ（海）	塊	槐嵬隗魁傀瑰
	クワイ → カイ（海）	灰	恢詼
	クワイ → カイ（海）	悔	晦誨

假名	字音	主字	諧聲字
か	クワイ	懷	壞
か	クワイ	快乖怪（恠）潰穢外	
か	クワク → カク（確鶴）	獲	穫蠖鑊矍攫
か	クワク → カク（確鶴）	郭	廓槨
か	クワク → カク（確鶴）	畫	劃
か	クワク → カク（確鶴）	霍擴馘幗	
か	クワツ → カツ（割）	活	括刮闊
か	クワツ → カツ（割）	滑	猾
か	クワツ → カツ（割）	豁月	
か	クワン → カン	官	倌菅管棺館逭
か	クワン → カン	喚	換煥
か	クワン → カン	環	環還寰
か	クワン → カン	灌	懽讙[illegible]鑵勸歡觀驩
か	クワン → カン	元	玩翫頑
か	クワン → カン	完	莞冠浣
か	クワン → カン	貫	慣
か	クワン → カン	丸	紈
か	クワン → カン	串	患
か	クワン → カン	寬款關鰥盥緩願卷桓	
きゅー	キフ → キウ	及	吸汲級笈㚟
きゅー	キフ → キウ	給	翕
きゅー	キフ → キウ	急泣	
きゅー	キュウ → キウ	弓	躬窮穹
きゅー	キュウ → キウ	宮	
	キョ	共	供拱恭蛬
	キョ	凶	兇匈恟洶胸（胷）
	キョ	恐	跫[illegible]蛩

きょー			こー		
ウ	ケフ	ケウ	カフ	コフ	コウ
喁 興競矜凝	夾 協 劫 業	交 喬 孝 徼 堯 叫 梟	合 甲 盍	劫 業	口 工 公 空 侯 洪 孔
顒	俠挾狹峽鋏頰莢篋 蛺 脅（脇） 怯 鄴	校絞皎 驕 蕎僑橋矯嶠憍蟜轎 教 邀竅 僥澆曉磽驍翹	洽恰蛤袷閤 岬狎匣押胛 溘闔	刦	扣叩釦句勾苟拘 鉤（鈎）后垢詬逅 功攻虹紅訌汞貢鴻 槓 蚣 倥控腔 候喉猴 哄閧 吼
キャウ			カウ		江肛巧項 腔

	こー	しゅー		しょー	
	クワウ	シフ	シユウ	セフ	セウ
冓 亙 厚 後弘興寇肯肱薨	光 黄 皇 宏 荒 盲 轟嶸	習 葺 拾 執集襲濕溢	宗 終 衆 聚	妾 捷 聶 渉 摺葉	小 召 焦 蕭 笑 咲燒椒
構溝媾購篝 恒姮	恍洸胱晃幌觥 廣壙擴礦纊曠黄黌 惶徨湟煌蝗篁遑隍 紘閎 慌	摺慴褶 揖楫緝輯	崇 螽	接霎 睫 攝囁躡顳	少抄杪鈔俏肖悄消 哨梢硝誚銷逍峭鞘 宵霄 沼招昭照詔紹韶 樵礁憔譙醮蕉 簫嘯瀟
講	カウ	シウ		シヤウ	

一	じ							じ	
シヨウ	チ	チキ	チク	チン	チヨ	チユツ	チヨク	ジフ	ジ
松 訟頌鬆 升 昇陞 從 慫樅縱蹤聳 衝 腫踵鐘鍾 悚 竦 承 勝稱誦證	持 峙痔 尼 怩 貳 膩 治 地 除	直	軸 紬 忸 笠衂	陣 沈 塵	女 絮 抒 除	朮 怵	濁	十 什汁 拾 澁	從 縱蹤
	ジ 寺侍特時	ジキ	ジク	ジン	ジヨ 如汝恕 舒序徐叙	ジユツ 述術	ジヨク		ジウ

ゆ一		じよ一					ず		
ユウ	チユウ	ゼウ	ジヨウ	チヤウ	デウ	デフ	ズ	ズキ	サフ
充 銃 戎 絨	頭 重 住	饒 蕘繞遶 擾	丞 烝蒸拯 乘 剩 冗 繩茸	丈 仗杖 定 掟錠 孃 釀 娘 場	嫋 溺 條 條 尿	帖 捻 疊	受 壽誦從數 手	隋 隨髓 瑞 惴 蕊 蘂	插 歃 雜 囃 匝
		ジヤウ		襄壞穰讓			ヅ	ヅイ	サウ

そー	ソウ	宗	崇淙踪粽綜	
		叟	搜痩艘	嫂艘
		曾	僧増憎贈層	
		奏	湊輳	
		匆	悤	
		怱	偬總聰	窻
		嗽	漱	
		簇	嗾	
		宋叢走送藪		
ちゆー	チフ	蟄		チウ
	チユウ	中	仲冲忡忠衷	
		注	柱註駐	
		厨	蹰	
		偸	鍮	
		誅蟲		
ちよー	テフ	帖	貼	チヤウ
		喋	牒蝶諜	
	テウ	兆	佻挑眺誂跳銚晁窕	
		超	貂髫迢	
		朝	嘲潮	
		鳥	蔦	
		凋	蜩調雕彫脩鯛	
		弔釣趙肇寵糴		
	チヨウ	冢	塚	
		徴	澂懲	
		澄寵		
		東	凍棟	タウ
とー	トウ	冬	疼鼕	
		豆	逗頭痘登橙磴鐙鬪	橙
		同	洞恫桐胴銅筒	
		童	僮朣憧瞳艟	
		動	董慟働	
		讀	瀆竇	
		桶	樋	
		藤	籐	
		投等統透偸兜彤謄騰		
	タフ	答	塔搭剳	
		沓	踏	
		榻	蹋	
		納	衲	
にゆー	ニフ	入		ニウ
	ニユウ	柔	糅	
		乳		
によー	ネフ	捻		ニヤウ
	ネウ	撓	繞鐃遶	
		尿溺		
のー	ノウ	農	濃膿	ナウ
		能		
	ナフ	納	衲	
ひよー	ヘウ	表	俵	ヒヤウ
		票	漂標嫖縹鏢剽瓢	
			飄	
		苗	描猫庿	
		秒	眇渺	

ー	ー	ほ	ほ	ほ ー	みよー	もー	よー	よー	よ
ウ	ウョヒ	ハフ	ホフ	ホウ	メウ	モウ	イフ	ユウ	ヨウ
謬 莩飈雹廟豹	氷馮	法乏	法	朋某奉峰封矛鳳 龐剖豐眸貿夢賵呆	苗妙	蒙	邑挹	熊勇 裕雄融	用膺容 塍蠅孕[illegible]
繆	冰 凴憑			崩硼繃鵬 謀 俸捧 烽蜂鋒逢縫蓬 葑 袤		濛朦艨蠓	挹悒		俑涌蛹踊庸傭鏞 鷹雍擁壅 溶鎔蓉熔
		ハウ 崩 棒 茅			ミヤウ	マウ	イウ		ヤウ

ー	ー	ゆりー	ゆりー	りよー	りよー	りよー	ろー	ろー
エフ	エウ	リフ	ウュリ	レフ	レウ	ウョリ	ラフ	ロウ
曄 葉靨	遥要曜幼夭 杳姚窯	立	隆龍	獵	僚 寥了料聊	菱龍	蠟臈拉	瀧婁 陋漏弄
燁	搖瑤徭謠繇 腰 燿耀 拗窈 妖殀	笠粒	窿	鬣	燎瞭遼寮療	凌陵稜綾	臘	壟瀧朧籠聾 僂螻樓縷鏤髏
		リウ		リヤウ			ラウ	

第二節　聲符字音の分化

前表にて聲符文字のいかなるものであるかが、容易に理解されたと思ふが、永い間には發音は變遷するものでもあり、また音韻の分化することもあつて、中には聲符字の音と、それを含む形聲文字の音とが似ても似つかないやうなものになつて來る場合がある。たとへば「公」の字が聲符となつてゐる翁がオウとなり、松がショウとなる如きはその一例である。しかしかかる現象にもやはり一定の法則が見出される。次にその規則の中から主要なものだけを簡單に摘記しておくから參考にされたい。

（一）カ行とサ行及びヤ行との關係

（カ行）	（サ行）	（ヤ行）
牙芽雅	邪	耶（邪と同字）
谷	俗	欲慾浴
區軀驅	樞	歐（嘔歐嫗）
公	松頌訟	（翁）
甘堪	甚斟	
支岐妓	枝	
声磬	聲	
戶雇	所	
季	子	

（區・公の如く最後にオの母音となるものもある。）

（二）タ行とサ行及びヤ行との關係

（タ行）	（サ行）	（ヤ行）

睪澤擇　釋　譯驛
酉酎　酒　猶
迭　失　佚
的　勺芍　約
透　秀銹　誘
蝶牒　枼葉　葉
單彈　戰蟬
直　植殖
獨　蜀囑屬
賣讀贖　續
知智　矢
致　至鵄
珍　㐱診
點店　占
注柱住　主

彫　周週
當　尙賞償常

（三）カ行とラ行との關係

（カ行）　（ラ行）
各閣格　洛略路
監鑑艦　藍覽
柬　闌蘭練煉
京　涼
僉險驗劍　斂
禁　林痳淋
季（キ）　李（リ）

（四）タ行とラ行との關係

（タ行）　（ラ行）
豊體（タイ）　禮
隶逮（タイ）　隸

龐　龍

（五）ハ行とラ行との關係

（ハ行）　（ラ行）

剝（ハク）　錄（ロク）

聿（ヒツ）筆　律

品　臨

變蠻　戀

（六）マ行とラ行との關係

（マ行）　（ラ行）

謬（ミュウ（ビュウ））　翏蓼

萬邁　癘（レイ）

埋（マイ）　里理

（七）ラ行とサ行との關係

（ラ行）　（サ行）

麗　灑（サイ）

卒　蟀（シツ）

林痳淋　森

吏　使

良　娘（孃と同字）

李　子

（八）マ行とサ行との關係

（マ行）　（サ行）

麥（マク（バク））　嗇（シヨク）

彌（ミ）　爾璽

妙眇秒　少抄鈔

（九）タ行とカ行及びナ行との關係

（タ行）　（カ行）　（ナ行）

莫嘆歎　漢艱　難

堪（タン）　勘（カン）

癡（チ）　疑（ギ）

（十）カ行とマ行との關係

（カ行）　（マ行）

黑　默墨

勿忽　物

晦海悔　每梅

（十一）ハ行とマ行との關係

（ハ行）　（マ行）

必　蜜密

（十二）同行變化

ア　イ　ウ　エ　オ

暗闇　瘖（イン）　音

艱　銀　限　根

員　圓

因　烟　恩

腕捥椀　宛苑

ア　イ　ウ　エ　オ

甘　紺

嶽　獄

戔殘　淺錢箋

他蛇　地池

頗波　皮彼被

貧　分忿

倫　論

（十三）語頭音の消滅

軍暉葷　運

甲　押

舒　予

除　余

（十四）語頭音の消滅と同時に同行變化

亘（クワン）桓　喧（ケン）

雚(クワン)觀勸灌　權(ケン)

厂(クワ)雁岸顏　彥

願(グワン)　原(ゲン)源

頑(グワン)玩翫　元(ゲン)

（十五）淸濁の關係

瞰　巖

巧考　號

才載裁　財材

筌詮　全

刃　認認

旦坦袒　壇

黨當　堂

半判　伴

方放芳　妨防紡

弗沸髴　佛

免　勉娩晩

苗　猫

盲盲網　忙忘

（十六）キ・ク・ツ・チ・フ（入聲）に終るものは他の音に變化し又その音の消滅する場合がある

キ

辟(ヘキ)僻　璧(ヘイ)

赤螫　赦(シャ)

液腋　夜

斥　訴

式　試

ク

莫幕　模

告酷　浩

度　渡

洛　路

畐福　富

惡	亞堊
著（チャク）	著（チョ）
ツ　夬決訣	快
癹發	廢癈
列冽	例
察	祭際
潔	契
弗沸拂佛	費
必	祕
室桎	至鵄
チ　八（ハチ）	肺
七（シチ）	切
フ　合（ガフ）	合（ゴオ）
缶（フ）	寶

（ク・ツ・フの語尾をもつものが支那での入聲音であるが五つとなつたのは我が國の訛音である。）

（十七）入聲の相互轉換

益（エキ）	溢（イツ）
篥（リキ）	栗（リツ）
商適敵（テキ）	謫（タク）
冊柵（サク）	刪（サツ）
卽（ソク）	節（セツ）
妾（セフ）	接（セツ）
七（シチ）	切（セツ）
葉	渫

（この種のものは我が國で起つた場合が多い。）

（十八）語尾のンと入聲との轉換

本（ホン）	鉢（ハチ）
産（サン）	薩（サツ）
珊（サン）	冊（サク）

（十九）語尾のンの消滅

萬　邁
端　瑞
縣懸　系係
眞　竇(シ)
夋酸　唆(サ)
軍　揮輝
研　形開

（二十）ヤ行音とア行音との轉換

龍(リユウ(リョウ))　隴(ロオ)
恐　空(クウ)鴻(コオ)
共供　洪(コオ)
良　郎狼
像　象
鐘　童

兆　逃桃
充銃　統
尙常　當

（二十一）二重母音より單母音へ

（アイ又はエイが轉じてエイとなり更にイとなる。或ひはまた直接イとなるものが多い。）

（アイ）　（エイ）　（イ）
哀(アイ)　裔(エイ)　衣依
米(マイ)　迷(メイ)　麋
髀(ハイ)　睥(ヘイ)　卑碑婢
排(ハイ)輩俳　悲悲斐
愾(ガイ)　氣餼
慨溉槪　既
昧　未味
麗　驪
泥　尼

塊　　　鬼傀

（三十二）二重母音とヤ行音との關係

莖輕　經

平　評

境　竟鏡

丁　町頂

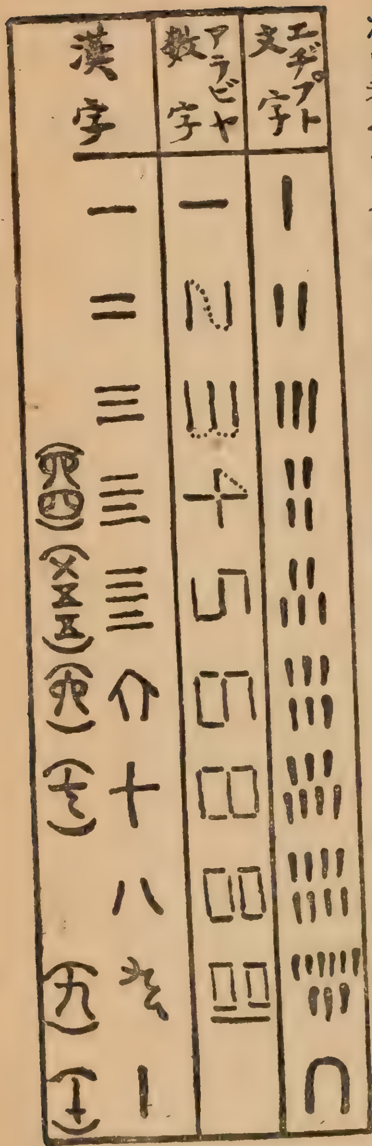
第二篇　國定讀本新出漢字の研究

第一章　巻一の新出漢字（紀數文字）

1〔一〕 イッ いち　新 イチ（一・三〇）　替 イ ッ（一・三七） ひとつ（一・四九）　一昨日（九・一二）（おとゝひ）

横に一線を引いてヒトツの意を指事したものである。

ヒトツの意をあらはすには必らずしもかくの如き方法によらなければならないといふわけはなく、○や□の如き記號的なものをもつてしてもこれをあらはすことが出來る。然し效果といふ點から考へて見るに○や□のやうに特別な形をもつてゐるものになると、○は圓形□は方形を意味するものではないかと誤解され易いので却つて價値が乏しくなる。そこで單純なる線を利用してその



（第三圖）

表現の手段としたのである。元來數なるものは極めて觀念的なものであるからさうしたものをあらはす場合には、とりわけ不要な概念を呼び起さしめない形式のものを選ぶのが一番理想的である。エヂプトの楔形文字においても、數をあらはす文字が單純なる線の組合はせになつてゐるのは理由なきことではない。なほ點を用ゐてもさしつかへはなからうと思へるのだが、點は幾何學的に考へると位置のみで長さをもつてゐないから人の目にとどまりにくい。そこで昔の人はかうした理窟は考へなくても自然に理窟にかなつた作字の方法を講じたのである。

說文には一を說明して「惟初。太始。道は一に立つ。天地を造分し萬物を化成す」とおそろしく哲學的に解釋してゐる。一をもつてあらゆるもののハジメとしオホモトとし、更に宇宙萬物の根源であり理法であると見たのである。そしてこの字には全く生きた靈魂が宿つたのである。

しかし我々の考へをもつてすれば一なる文字はもと〳〵かかる深い意味があつたものとは思へない。たま〳〵一が數のハジメであつたため、そこで人々の考へが思想的に發展してもののハジメ、ことのオコリとなり、モツパラ（純一）ともなりスベテ（全一）ともなるやうに後になつていろ〳〵な意味が持たせられるやうになつたのである。しかし許愼は一なる文字（否、あらゆる文字）を非常に神聖なるものと考へ、一種信仰の對象とまでしてゐるので、我々の如く單純に考へることを好まなかつたのである。

かかる考へ方は一体何から來たかといふに、許愼は文字の淵源を彼等が信仰の對象としてゐる易の原理に結びつけ過ぎた結果によるのである。元來易の思想によれば、宇宙間のすべての現象は、陰陽二つが錯綜變化することによつて起るといふのである。早い話が我々の運命にしてもこの陰陽を適當なる方法により排列して行けば、それは神意を代表するものだから容易に未來の判斷が出來ると考へた。そこで先づ陰陽二種の記號を作つた。即ち ━ をもつて陽(男性)の表徴とし ╍ をもつて陰(女性)としたのである。そしてこの二つの記號(陽爻又は陰爻といふ。)を三箇づつ組合はせて挿圖の如き八種(これを卦といふ。八卦の名稱はこれより來たもの)を作つてそのおの〳〵に一定の意義を持たせたのである。



(第 四 圖)

而して世上萬般のことは變化極まりなきものであるから、以上の八箇を更に二箇づつ交互に組合はせて六十四通りの異種形を作りそれによつて種々の占(うらなひ)をしたものである。ところで貞の字の條下にあるやうに、支那人は古くから八卦に限らずすべてウラナヒとさへいへば非常に神聖なものと考へたのだが、易はもと伏犧(支那古代の帝王)の作と稱せられ、更に聖人孔子でさへこれを愛好したといふのだから、彼等獨特の尙古思想と相竢つて神聖おかすべからざるものと考へられたのである。そこで最初は單なる記號として作られたまでに過ぎない陰陽の爻に段々深い意味

を含ませて來るやうになり、やがて自らの作つたその偶像の前に跪くやうになつたのである。

許愼が紀數文字の一をもつて萬物の初めと考へそして萬物は一によつて作られて行くものだと見て來たのも、全く一なる文字が易の陽爻 ⚊ とその形式が同じだつたからである。二に對して「地の數なり」と説明してゐるのも陰爻 ⚋ は要するに紀數文字の二の變形にて ⚋ は ⚊ から産まれたものであるから二をもつて天に次ぐところの地と見たのである。

許愼は易の陽爻 ⚊ をかくの如く大切に取扱つてゐるので從つて紀數文字の一をもかく神秘的に解釋したのであるが、一があらゆるものの初であり、あらゆるものを形作り派成する原動力の本体であると考へれば、したがつて文字の方においても一なくしてはいかなる文字も産まれることが出來ないのである。ところが幸か不幸か事實いかなる文字もこれを形式上から見て行くと、一又は一の變形によつて成り立つてゐるのでここにも許愼は一層の强みを感じたことであらう。即ち一を二つ組合はせて二となり、三つ重ぬれば三となり、斜に交叉すれば ╳（昔の五の字。）となり、また □（昔の方の字。）にもなれば △（昔の集の字。合・會等の上部をなすもの。）ともなり、更に曲線になつて八ともなり、○（昔の圓の字。）ともなるやうに、何れの文字を眺めて見ても一をもつて組立てられてゐないものはない。ここにおいてか益々一へ對する信仰の度が濃厚となつて來るわけである。然し大體文字そのものは我々の思想を平面上に描出して行くのであるから、その方法として線描によるまでであつ

て、たとへ一なる筆畫があらゆる文字の素因畫をなすとしても、別段これを易の原理に結びつけて神聖なるものと解釋し、信仰の對象とする必要は絕對にないのである。

許愼は指事をもつて六書の第一位においてゐるが、それがかうした信仰に根據をおくのだとしたならば我々は決して同意し得ないのである（第一篇第三章六書の名目及び順位を見よ。）。とかく漢字の研究家は文字を偶像化し神聖視して解釋したがる癖があり、それをもつて深遠高邁と考へて自己滿足に陷つてゐるやうである。なるほど思想的に考へれば面白いところもあるが、然しこれは一大缺點といふべきである。けれどもここに我々の忘れてならないことは、さうした考へ方を持つ人々の心情に對して終始冷やかなる態度で當るといふことなく、理解ある思ひやりを加へなければならないといふことである。今日でこそ我々は思想の表現をなす一手段物に過ぎない文字が、非常に我々の精力を濫費さすことの寧ろ有害なることを承認してゐるものの、その昔は一箇の漢字にも偉大なる思想（武・法・思・用・外等の條を見よ。）が含まれ、一箇の文字にも人倫の大道（孝・忠等の條下を見よ。）が述べられてゐるとして誇つたものであり、文字の多數、筆畫の煩瑣はむしろ文運の發達とされたくらゐであるから、文字に對して深い憧憬の念をもつやうになつたことは察するに難くない。事實あらゆる國の文字の出來たあとをふりかへつて見るとき、よくも〳〵漢字だけがかくの如く特異な方面に發達したものだと驚嘆させられる點が多い。漢字をもつて魂あるものとして崇拜する人の出來るのも無理か

らぬところである。さればこそ許愼が造字といふすばらしき大業のヒントをその信仰の對象ともいふべき神韻縹茫たる易の原理に結びつけ、しかも飽くまで文字の成因を神聖視し深化させて行かうとしたのである。

2
〔二〕 ジ に　新 ニ(一・三〇)　舊 ふたつ(一・四六) 二十日(はつか)(三・三)　ジ(三・六)

横線二本をもつてフタツなる數をあらはしたものである。

數を表現する文字の形式は、その内容の性質上出來るだけ他の餘分な概念を呼び起さしめないやうにするのが理想的だといふことは、一の字の條下に述べた通りである。そこでこの字も單純に二つの平行的な線を引いてその目的に副つたものである。よく我々は文字によらないで指をさし出して數を示す場合があるが、その際に差し出された指の二本から直觀的に數のフタツなることが察せられるやうに、一二三の如き紀數文字はこの指をさし出すところの心理作用を直ちに紙上に表現したのと同じやうなものである。この文字を一と一との組合せの會意文字と説明する人が多いが自分はこれを指事文字と見たいのである。

說文にはこの字を解釋して「地の數なり」といつてゐるが、一の字の條に説明した通り易の陽爻 ⚊ は紀數文字の一に相當し、また陰爻 ⚋ は二に相當するので一の萬物を派生する力によつ

て二が分化して出來たものと見たからである。卽ち陽氣の發するところ萬物生ずとの考へで、陽たる天が陰たる地卽ち二を産んだものと見たのである。

この字は轉義してツグとなる。一は數のハジメにて二はその次ぎに來るものだから思想的に發展してこの轉義を生じたのである。次の字の左に組合はされてゐるのは二の變形したものでツグの意をあらはすものである。冷・凍の左扁とともにニスヰといはれ活字體では同形であるが、一方は二から、他方は氷の結晶した象形から來たものであることに注意しなければならない。このことについては氷の條下を見よ。

3〔三〕(サン・そん) 新 サン(一・三〇) 替 三郎(さぶらう)(三・二〇)

單純なる三つの線をもつて數のミツをあらはした文字である。

說文に「天地人の道なり」と哲學的に說明してゐるのは一や二の條下にて述べたやうに易の思想の息吹がかけられてゐるからである。卽ち天と地とが定まつて次にその中に住する人が生ずるといふ考へから三をもつてかく解釋したのである。

轉義してモロ〱・トトナフ・ソロフなどとなるが、これは一は數の最初のものであり、二はまだ漸く一つを加へたまでで小數の域を脱しないが、三に至つて始めて多數といふ觀念が起つて

來たのである。そこで上記のやうな意味に轉義するのであるが、漢字においてモロ〳〵即ち多數の概念を現はすために同一字形を三つ重ねる場合があるのもこれと同樣な心理によるのである。卽ち品・晶・森等の字や衆の字の下部に人の字が三箇組合はせられてゐるのはそれである。また澤山なものを略する場合にもモロ〳〵なる概念を失はしめないために三に止めておくのが漢字作字上の常法となつてゐる。卽ち又といふ字の如きがそれである（又の條を見よ）。

更にトトナフとなるのは思想的に發展したものであるが、說文にある「天地人」といふ言葉はたしかにトトナフといふ意にも利かせてゐるのである。なるほど人間本位にすれば天地人にて宇宙は定まるしまた時間的には過去・現在・未來、空間的には縱・橫・高さの三つをもつて間然するところなく齊整して來る。かういふやうなことも考へられたのであらうが、由來支那人は五とともに三の數を非常に意味深く考へ三皇・三去・三從の如く何かといへば三の命數が使用せられる。これは支那人の思想だけではなく三寶・三世・三千大仙世界・三位一體の如く他の民族においても見受けられるのである。あだかも我が國の八百萬神・八幡大菩薩・八咫鏡・八束穗　八ッ切りに於ける八の如きものである。

三の字を六書によつて分類するとき二と一との會意文字と說明する人が多い。これは二の字の條下にも述べたやうに指を三本差し出してミツなる數をあらはしたのと同じやうに、分析して考

へる筈のものでなく、三の字は「その身そのまま指事と見たい。といふのは少くとも紀數文字の一二三は先づ一が出來、次に二、最後に三といふやうに出來たものでなく、これらは同時的のものと見た方がよくはないかと思はれるからである。いかに數理觀念の幼稚な時代においても文字をもつて數を記錄する頃になれば、三つくらゐまでは十分に理解してゐたことと思へる。なるほど三の字の古い形のものにはの如くなつてゐるものもあるが、これは筆書にあたつての習慣上のものと見てさしつかへはなからう。ところでかかる文字の筆畫についても餘程漢字の有りがたみを說く人があるので、つひには王の字の條下に述べるやうな甚だしい誤解が起るのである。

4〔四〕　シ　新　シ(一・三〇)

もと橫線にて亖と書いたものである。現形の四はそれが縱の位置をとつてとなり、更に文字的意匠が加へられたものだらうともいはれてゐる。然し四なる文字は古形のに近いがととの間の字形上の關係がどうも見出し難い。そこでは別箇なものとして出來たもので從つて現形の四は亖の到形から來たものではないやうに思はれる。このことについては六の字と關聯して說明をするから六の字の條下を見て欲しい。

なほ說文には「陰の數なり、四方の形に象る」とし、更に古文の四としてをあげ籀文の四

として亖をあげてゐる。陰の數とは四は二と二との和であり、二は昜の陰爻（一の字の條を見よ。）に相當するから陰が陰の數だけ加つたからさういつたものであらう。しかし四方の形に象るといふのはどこがどうして象つてあるのかさつぱりわからない。

5〔五〕ゴ ぐ　新 ゴ（一・三一）　替 いつ（二・一三）

古形に☰㐅等がある。第一形は說明するまでもないことだから省略するが、現形の五の字第二形の㐅へ文字としての意匠が施されて𠄡𠄡等となり、それが五となつたものだらうと思はれる。第二形の成因であるが㐅は又（[illegible]）の字などと同じく手（[illegible]）の省略形ではないかと思へるのである。紀數文字の一から五までには第三圖の如く單に橫線による一二三亖☰なる一聯の形式のものがあることはもと原始時代においてものを數へるのに手の指を使用したことを物語つてゐるのではなからうか。片手の指數に相當する五までに限つて特にかうした文字のあることは注目すべきことである。しかし橫線を五本も引いては第一筆書にも不便であるし文字としても面白くないから、五をあらはすために手の指を省略した㐅が作られたものであらう。そこで先に述べた又といふ字であるがこれは[illegible]（手）が[illegible]に省略されて[illegible]なる形を取つたものであるが、更に又の字の組合はされてゐる友（[illegible]）や右（[illegible]）の字の上部が、現在では

ナの形をとつてゐるのを見ても手を省略したものが㐅なる形をとり得るといふことは想像するに難くない。

さて、數と指との關係を考へて見るに、我々が數理觀念の發達してゐない子供に數を敎へるとき、我々はともすれば彼等の身に最も近い指を使用させて數のいかなるものかをのみこませようとする。尤も現在の普通教育においてはなるたけ指を使用させないやうにしてゐるが、これは今日教育理論が非常に發達した結果、かかる方法は兒童の思考作用を鈍らす弊害が伴ふことがわかつたためである。そこでまだまだ一般にはこの方法が用ゐられてゐるやうに、何といつても一番原始的な方法は自分の指を使用することといはなくてはならぬ。

畋獵時代の昔の人は、數といへば獲物の量を數へる位の時にしか必要がなかつたらうから、數に對する觀念は子供と同樣に幼稚で大した發達をしてゐたとも思へないから、最初はたしかに自己の五本の指を使つたに違ひない。現在文明國の計數法は大部分十進法になつてゐるが、これも吾人の先人が最初は片手の指を使ひ、更に數が複雜した結果、次に兩手を使用したことの名殘りを留めてゐるものである。

說文には例によつて「五行なり。二に從ふ。陰陽天地の間に在りて交互するなり」と說明し更に古文として㐅をあげ「古文なり。五の省きなり」としてゐる。即ち☒の一 一は天地をあら

はし✕は陰陽が交互してゐるといふのである。五をもつて音の假借字と解すればまだしもであるが、單に紀數文字に過ぎない五に對してかかる哲學的な解釋を施すのはいつもながらの說文の癖であらう。更に✕をもつて⧖の省略形と見たのは全く我々とは反對である。然し陰陽が天地の間に交互すると解する以上いやでも⧖を最初のものとしなければ大切な天地が消え失せてしまふのである。

五の數は三皇五帝などいふやうに三の數と共に非常に尊ばれたもので五行・五帝・五倫・五爵・五味・五穀といふやうな言葉もある。勿論五を尊ぶ心理は文字製作の當初からの思想ではないが、これはもと數理觀念の發達しないとき、片手の指數たる五を基本數の最高のものと考へたことに淵源するのかも知れない。たとへ後に十進法を用ゐるやうになつたとしても、數と指とにかかる關係があつたとしたならば、五は小成の基本數と見ることが出來、何れにしても完全に數の纏つたものになるのである。算盤の上部の一箇の珠が五を代表し、我が國でも五の畫數をもつてゐる正の字を點取りに使用するのを見ても、いかに五といふ數字が我々の數理觀念のうちに特別な取扱ひを受けてゐるかがわかるであらう。これ一より五までに一二三亖𝍭なる一團の文字がある所以である。かく考へると單に五までについて見れば、三は小成の基本數となり一から三までは現在もなほ横線のみを使用し、四五に至つて現在使用する他の形式の文字が出來て

ゐるのも何かの理由があるやうに思へるのである。

〔六〕6 リク ろく 新 ロク（一・三一）

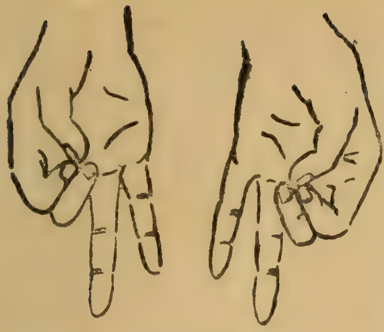
紀數文字の六以下になると横線のみで現はした文字がなく、また古形を見てもなか〳〵解しにくい節が多い。說文には六の字を「易の數なり。陰は八に變じ六に正す。入に從ひ八に從ふ」としてゐる。このくらゐにおどしておけば大抵の人は恐れをなし、すばらしくむづかしいことをいつてゐる。このくらゐにおどしておけば大抵の人は恐れをなして逃げて行くだらうが、これではこの字の作意の意圖はさつぱり窺へない。

人によつては、六以下はもと〳〵文字がなかつたので、他の同音の文字を借りて用ゐるやうになつたものと見てゐるがどうもさうとは思はれない。五の字の條下において數と指との關係を述べたが、六からは數が複雜になるので何れも兩手が使用せられ、更に奇偶の考へも加はつて出來たやうに思はれる。卽ち「五、七、九」と「六、八、四」とが字形上それぞれ各別に同じ系統をたどつてゐるやうに思はれるのである。もつとも數理觀念の幼稚な原始時代の人々に果して奇偶の觀念があつたかどうかであるが、旣に六以上の數が考へられるやうな域に達すれば、自然奇偶の觀念もハッキリと意識されたことだらうし、更に文字現象はさうしたことよりも後に起るものであるからかく考へて一向にさしつかへはないと思ふ。



（第　五　圖）

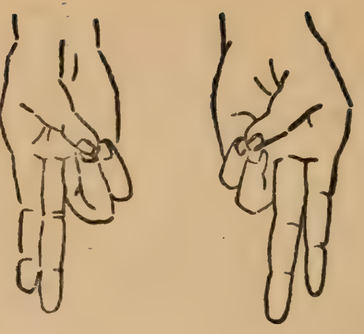
さて六なる數は三の倍數卽ち兩手の指を三本づつ出してそれを加へたものである。上圖の如く左右おの〳〵の拇指と食指とを結び、その結ばない方の指を以つて相手に目的の數を示すのである。六といふ字の古形の穴はこの形を寫したものではなからうか。此の場合作字に當つては、指にて數を指し示す方とは反對に、常に取り除かれた方、卽ち結んだ方の指に注意の焦點をおいて9Pの如き形を見出しそれがやがて「六」の字の古形穴となつたものと考へられる。同じ六の字に家屋の象形に似た介の如き文字もあるが、或ひは兩手から各二本づつの指を取除いたものといふことを無言のうちに物語つてゐるものではなからうか。



（第　六　圖）

そこで古形亖の變形だらうといはれてゐる「四」について考へて見るに、六の古形の穴に等しい穴なる形の四があることは注目すべきことである。これは第六圖の如く指を結べば前揭六の場合と同じ結果になるからである。そこで四と六との區別をつけんがため、六の方には上部に點を打つて穴とするやうになつたのではなからうか。

四（四）六（六）八（八）ともに「八」なる形が含まれて居り、しかも八は無圓、六は半門、四・は全圓を以て圍まれてゐるのは、指を以て數を示す場合、取除かれた部分の指に作字の基礎をおいたがため、不要な部分の指の數の多いものだけ圓孤を多くしたのではなからうか（この項八の字を參照せよ。）



（第七圖）

更にまた考へられることは數の四をあらはす場合に、第七圖の如く拇指、無名指、小指の三つを結ぶ方法もある。これは生理的にもゴク自然な形である。あるひはこの形から四なる形式を見出しそれが四となつたかとも思はれるが、ここまで考へる必要もあるまい。

かくの如く考へると數のヨツをあらはす文字は最初亖であつたのだが、後に「六」「八」なる文字が出來るに及んでそれに連絡して「四」なる形式が亖とは別箇に出來たものとも見られる。

7 〔七〕 シチ しつ 新 シチ（一・三四）

紀數文字の六からは奇偶の觀念の加はつたものだといふことは六の條下に述べた通りである。七は九と共に五の系統を引いたもので五の字の古形✕に線の變動を加へて七としそれが現在

の七の字になつたものであらう。この線の變動が九の場合よりも少いことに注意して欲しい。
說文には「陽の正なり。一に從ふ。微陰中に從ふ。衰出するなり」とあるがこれでははつきりその成因がわからない。

8〔八〕ハチ はつ　新　ハチ（一・三四）



（第八圖）

八は第八圖の如く拇指一本づつを曲げてその親指を見せないで數のヤッを人に示したもので、六の字の場合と同じくやはりかくされた母指の部分のみに着目したものであらう。

なほこの字は丿（此の字はモトルといふ意味の文字）と乀（此の字もやはりモトルといふ意味の文字）との合字にて一方は右から左へ他方は左から右へともに戻つてゐることの指事。そして二つは共に相合しないから反撥の撥（八と撥とは同音なることに注意）の本字だといはれてゐる。ところが數のヤッをあらはす文字がなかつたので八の字が同音なるところより、紀數文字として假借せられたものともいはれてゐる。分の字の上部に組合はされてゐるのは反撥の撥の意のものである。卽ち刀をもつてわかつ（八）といふ會意である。しかし紀數文字としての八と反撥の撥としての八とは字形が同一になつてゐても

最初は別箇な意味で作られたとも解釋が出來ないことはないのである。漢字にはさうした例の多いことにも注意しておくべきである。

說文には「別るるなり。分別して相背くの形に象る」とあつてやはりノと乀との合字と見てゐるやうである。

9〔九〕キウ く　新 ク(一・三四)　替 ここのつ(二・一三)

七の字と同じく五の字の古形✕から來たものであるが七よりも一層線に多くの變動を與へて九としたのが九となり、更に現形の九となつたのである。

說文に「陽の變なり。その屈曲究盡の形に象る」とあるが、たしかに線を屈曲させてゐる。たほ究盡といふことについては便宜上十の條下に說明をする。

なほこの字は究・染の如く他の字に組合はされて往々究・染の如く誤つて筆書され易い。究の場合は九が聲符字として組合はされたものであるから、丸と書いてはキウなる音は決して出て來ない。また染の場合は幾度も水に浸してソメルといふ意味から、度數の多い意を九によつてあらはしたのであるからこれも丸にしないやうにしなければならない。

10〔十〕 シウ じふ　新 ジウ（一・三四）

十の古形には┃┼等がある。十は最後の數であるから、最初の數たる「一」に對して單にその方向をかへて┃とし十なる意をあらはしたもので、字形上から見れば十は一と轉注の關係にある。現形の十は┼から來たものであるが下部の點は特に數の十なることの注意を喚起せしめんがためのシルシであらう。或ひはそれをもつて兩手をあらはしたものかも知れない。

說文には「數の具はるなり。┃を東西となし━を南北となす。則ち四方中央備るなり」と說明してゐるが感服されない。

最後に一言しておきたいのは第三圖の如く一から九までは手によつて出來たものであるが、最後の十に至つて單に┃なる別箇の形式があるのはこれは基本數の中でも十の數を特別に取扱つたがためである。その理由は數を表現するためには大體九つまでの文字があれば後は一にかへつてそれに僅かの工夫を施せばいかなる大數をも表現し得るからである。アラビヤ數字が九まであることや、又我が國の商店で使用する通り符牒に十までのものより寧ろ九までのものが多いのに徵してもわかる。

白米商　アキ　イノメデタサ

莨物商　ツルカメマイアソブ

植木商　チギ　ハラ　ウロコ　マヤ　丁半　ロンジ　セイナン　バンドウ　キワ

露店商　ハイ　フリ　カチ　タメ　シヅカ　ミヅ　ヲキ　アツタ　キワ（アブナイ）　ヤリ

取引所の箇數表示　

南京符牒（藥種唐物商）
ダ　ニ　リヤン　サンナ　スーウー　ーｒマ　チマ　パマ　キウ

の如きものである。また植木商や露店商などの符號に見るが如く九のことをキワ（際。窮まるの意）といひ、又ガケ（崖）ともいひ、更に變へ符牒としてその聯想によるアブナイ（危）といふ言葉を用ゐるのは九をもつて基本數の最高（究盡）と見、したがつて十を特別に取扱つた好例といへるであらう。

紀數文字についてはアラビヤ數字などと比較し記號的なものとして考察することも必要であるがすべて省略しておく。

第二章　卷二の新出漢字

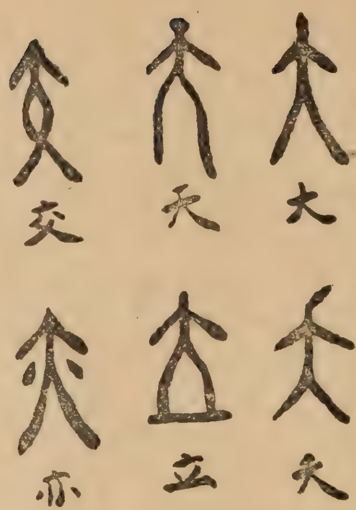
11 〔大〕 タイ だい　新　おほ(二・三)　替　タイ(二・二五)　ダイ(四・一六)　大人(おきな)(七・一九)　假　大蛇(おろち)(五・三)　大和(やまと)(一二・二〇)

この字の古い形はにて、人間が正面を向いて立つてゐる姿を象つたものである。しかもその姿たるや、兩手をひろげ兩足を踏ん張つて、廣い天地も塞がれよとばかりにヌックと立ちはたいだ形である。

およそオホキイとかチヒサイとかいふやうな抽象的な事柄を文字にあらはすには、どうしても「形のあるもの」を借りてその意をあらはすより他に手段がない。說文に「天大、地大、人また大。」と說明してゐるやうに、なるほどこの世の中でのオホキナものは何といつても天と地とであらう。卽ち天は日月星辰の懸かる所、常に我等の頭上を掩うて悠久無限である。大地は我等の足場、しかもこの足場こそは、人間はおろかその住居をも家財をも山をも川をも一つとして殘さず載せてゐる。しかしかくの如き悠遠なる大自然は却つてその形を象るに困難を感ずる。なるほど

天も大きく地も大きいにはちがひないが、その天地の大も人間を本位として考へれば、我等が生存してゐるからこそ認識されるのである。して見れば天地の大に匹敵するものは却つて我々人間といはなければならない。思ふに萬物中自由に口のきけるものは人間だけである。そこで人間こそ一番オホキイものだと威張つて、所謂「大の字なり」に天地に跨つた姿をもつてオホキイ意味の文字としたのである。

夭



（大の字の系統に屬する文字）

大の字の系統に屬する文字には夭・立・夨・交・亦等がある。新出文字となつてゐるものはおのおのその條下に說明をゆづることとして、夭の字であるがこれは人體の頭部に相當する部分を折り曲げたものである。これはすこやかに成長して大の字なりになれる筈の人間が、大切な頭を垂れ下げてしまつたことによつてワカジニしたことをあらはしたのである。即ち夭折と熟する文字である。古い字形には手を折り曲げて活動力を失つたことによつてその意をあらはしたものもあるが、現在の活字は頭の方から來たものである。

亦

亦の字は脇の下をあらはすために兩脇の下へ點を打つて、「ここだ、ここだ」と指事したものである。接續詞のマタとしても使用される（又を見よ）。

夾

亦の字の古形に類似した文字に夾の字がある。この字は脇の兩下にものをはさんだ形にてハサム・サシハサム等の意をあらはしたものである。

12〔小〕

セウ　新　ちひさ（二・三）　替　こ（三・八）　を（八・二七）　假　小路（こうぢ）（六・九）
セウ（五・一六）　小豆（あづき）（六・一三）

古形  に見るが如く三つの小さな線を無雜作に書きつけたものである。この不揃ひな三つの線は草木の嫩芽が僅かばかり地上へ伸び出たときの形にて、それをもつてチヒサイ意味を表現したものである。小篆では  となり現形に近い。說文では八と｜との合字とされてゐる。八の條下にも說明したやうに八はものの反撥することであり、從つてものの分かれること（分を見よ）。それを更に｜で分割するのであるからものがますく チヒサクなるのでこの二つのものを組合はせたものと見たのである。しかしながら古形は決して八ではない。前說に從ふべきである。

13〔木〕

ボク　もく　新　き（二・五）　替　ボク（四・一五）　こ（六・四）　假　木綿（もめん）（六・一九）
モク（五・四）　木下（しも）（七・一八）



木の象形から出來た文字である。古い時代には殆んど繪畫にも等しい上の如きものも用ゐられた。兩者はその枝ぶりから見て木の種類も違うし更に第一形には果實さへ加へられてゐる。しかし一般的に木なるものを表現する場合には、枝ぶりとか果實とかいふや

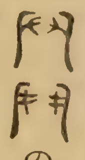
うなものは主要な問題とはならない。即ち上記の二つから何れへも共通したものを見出せば、「枝と幹と根」との三つである。この三要素さへつかめば完全に木なるものの表現は出來る。そこでこの主要なものをエキスして作つたのが木の字で古形のである。即ち中央の丨が幹、上部が枝下部が根なのである。

析

木の字は他の文字を作る上によく應用されるが、これは樹木は到る處に存在して常に我々の視野に入るものだからである。他の文字と組合はされたものに東・杳・杲（東の條を見よ）や相・休などがありまた指事的記號が加へられた本・末・未等があるのもそのためである。

以上は木の字に他の字を組合はせたのであるが、木の字を直接縦に二分してなる文字が作られてゐる。これは分析の析の本字であるが、ワカツといふやうな抽象的な事柄をあらはすに、直接木の字を二分してそれを示したことは非常に面白い。恰度門といふ字から戶の字が作られたのと同樣な趣きがある。なほ現在の析の字は木と斤との合字にて斤はオノの象形（折・斷を見よ）。最初は實際に木を二つに割いた形の字形をもつてしたものが、後になつて木を割く道具のオノが加へられて會意文字となつたのである。またものを割きわけたカタワレの意の片の字もの右の一片から來た文字であり、左扁は狀・壯等に含まれてゐる左の部分である。これについては狀の字の條下にその説明をゆづる。

14「人」 ジン にん　新　ひと（二・五）　替　ニン（三・二〇）ジン（四・一七）　假　二人（三・八）大人（七・一九）泣人（八・二八）狩人（九・一九）

古形はにて人間のからだを横から見たものの象形である。即ちの左上部は手で、右側は軀幹をあらはしたものである。これが現形の人といふ字の起りであるが以上の説明だけではどうも人の象形だといふことがはつきりわからないかも知れない。そこで他の文字を併せ掲げておくこととする。の字は現在の鬪の字の古形であるが、兩方から二人の人が向ひ合つて手でイガミあつてゐる樣をうつしたものである。即ちこの字の場合の右の方と人といふ字の古形とを比較すればが人間の象形から出來た文字であるといふことは論ずる餘地がないであらう。

さて人の姿を横から寫して「人」としたのは側面描寫は正面描寫よりも容易であり、しかも特徴となるべき點を簡單に把へることが出來るためである。なるほどものを正面から寫せば描寫としては正確に行くにはちがひないが反對に複雜になつて來る缺點が伴ふ。そも〱象形文字は繪畫と異りその特徴となるべき要點さへつかめばそれで十分なのである。この頃よく使はれる言葉に「日本のプロフキル」とか「B氏のプロフヰル」などいふプロフヰルも、ものの全貌よりか却つて側面的なものの方が簡單にしかも特徴を發揮せしめ得るからである。人といふ字が側面から見た人の象形となつてゐるのもかうした心理によるものである。そこで正面から見た大の字の如

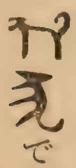
きものもあるが、却つてこの字がヒトといふ意味の文字として用ゐられずオホキイといふ他の意味の文字とされてゐるのもそのためである。

人間の全身を象つて作つた文字には、人の字の系統に屬する側面的なものと、大の字の系統に屬する正面からのものとの二つがある。第九圖はその中で主要なものを擧げたものであるが側面から見たものの方が作字の上に多く用ゐられてゐるのは、上に述べたやうな理由に基くものである（從・衆・北・比・化の字を見よ。）。



（第九圖）

15
〔犬〕 ケン 新 いぬ（二・六）

現形は大の字に點をうつたものであるが、もと犬の象形から出來たもので古形は  であ

る。尻尾(しつぽ)をあげてワン〳〵と吼えてゐる形を寫したもの。

狐・猿・猫・狼等の左扁をケモノヘンといふが、これは現今でも犬が家畜として我々に親しまれてゐるやうに、特に古代に於てその時代の人の日常生活と密接な關係があつたので犬をもつてケモノの代表と見たてて（牛・象・羊・豚家の條を見よ）以上のやうな文字にも應用されるやうになつた。そこで犬の習性の部分々々や樣子などから狎(なれる)・猾(ずるし)・狂(くるふ)・戾(もどる)・突(つく)・默(だまる)・狀(すがた)等の如き文字を作るに當つても組合はされ、廣く世上人事に應用される文字までが出來てゐる。これをもつて見ても、犬と古代人との關係がよほど深かつたことは想像するに難くないであらう。

狎　猾　默

犬は極めて主人思ひの性質をもつてゐるから、伏・狎等の文字も作られるのであるが、どういふものか、犬同志では仲が惡いものであるから孤獨の獨の字が犬によつて出來てゐる（羊を見よ）。また犬といふ字を二つ組合はせた㹜はイガミアフといふ字となり、その中に言の字を入れれば監獄の獄の字となる。獄の字は原告と被告の兩人が互ひに自己の辯護にこれつとめてゐることを二つの犬によつてあらはしたものである。これらはすべて犬の習性を應用して作つた文字である。

獄

犬はまた狩獵に使用したから、狩・獵の字を初めとし獲・奬等にも組合はされてゐる。守・巤・蒦・將等は何れも聲符字として組合はされたものであるから義はケモノヘン即ち犬より見出すべき性質の文字である。なほ奬の字の將はシッ〳〵と犬をけしかける時の擬聲的音符字であるがケ

獵　奬

シカケルことよりやがて奬勵と使用せられるやうになつた。

犬の肉は牛・羊・豚等とともに支那では食用にも供された。即ち「鷄豚狗彘をもつて親を養ふ」といふ言葉があるやうに人が口にしたものであるから、單にその性質からばかりでなくその方面からも人間と密接な關係をもつてゐた。禮記曲禮にも「犬を羮獻と曰ふ」とあり、我々日本人の想像外のところである。そこで飽食するといふ意味の饜（あく）といふ字にもこの字が加へられてゐる。これはもと猒と書いたもので甘（日）と肉（月）と犬との合字である。即ち甘い（おいし）犬の肉をタラフク食ふといふ會意文字なのである。また獻（ささげる）といふ字にも含まれてゐるがこれはもと犬の肉を宗廟へ供へたからである。なほ左邊の鬳（ケン）は供へものを載せる禮器にてその器の象形から來たもので鼎といふものの一種である。この說明は豆の字の條下にゆづつておく。また然・燃の字も犬の肉を燒いて食つたことから作られた文字であるがおの〳〵その條下で說明をすることにしよう。

饜　獻

16 〔川〕

セン　新　かは（二・六）　看　川原（かはら）（六・一八）

水の流れをかたどつた文字にて古形はである。即ち波うつ水の長く連續してゐるさまによつてそれを表現したものである。波線を三つにしてゐるのは漢字構成上の一種の常法ともいふべきもので、このことについては爻の字の條下で說明をする。この字は（水）（州）な

どと同系統の文字で流通、貫通等の意をあらはすために他の字に組合はされてゐる。即ち經・流

災

疏・巡、梳等に含まれる巛又は川はそれである。但し災害天災と熟する災の字はもと𡿧と書いたものである。川に邪魔物が横たはつてそのため水が氾濫して人畜にワザハヒを與へるといふ氣持ちから作られた文字。後に火の字が加へられて災となるに至つて、川に横たふ邪魔物の指事たる横線が取除かれた。火が加へられた理由は「水攻め・火攻め」といひまた「塗炭の苦しみ」といふ言葉にてわかるやうに、災害の尤なるものを水火と考へたからである。

ところで災の字として𡿧なる文字が作られるに至つたことは支那として誠に理由のあることなのである。といふのは支那民族の中心的人種たる漢民族はもと中央アジアの高原で牧畜をして生活してゐたが、水草を追うて次第に崑崙山脈の麓を過ぎり、黄河を下つてその兩沿岸に根據を定めて國を成した。今日支那の文明もその中心は黄河にあるが漢民族が黄河の流域に腰を下ろすやうになつてからは、以前の遊牧生活から次第に農業文明に進んで來た。ところでこの黄河は時々氾濫するので當時の人々はそれには非常になやまされたものである。そこで舜の時代に治水の業が行はれたが九年を經過してもなほ且つこれを完成することが出來なかつた。そこで禹に命じてこれを行はしめたところ彼は遂に三年をもつてこれに成功したと傳へられてゐる。よつて舜は位を禹に譲つたのである。説文、州の字下に「昔、堯洪水に遭ふ。民水中の高土に居る。故に九州

「といふ」とあるやうに堯・舜このかたすべて水にはなやまされたものである。災の字が川の系統をひいてゐるのもいはれなきことではない。

17〔口〕 コウ く　新 くち（二・六）　舊 コウ（六・二二）

古形はである。目・鼻・耳・手の如く人體に屬する文字がそれぞれその象形から出來たものが多いやうにこの字もまた口の形を寫したものである。

口は飮食乃至發聲の機關であるから、喰・咀・嚙・味・甘の如く他の字と組合はされて飮食味覺に關する文字が作られ、また問・言・叱の如く聲音に關する文字も作られる。更に注意すべきことは口は自分の意見を發表し、したがつて自己の存在を相手に確認させるものであるから、吾の字の如くワレといふ字などにも組合はされてゐる。言の字、語の字にワレといふ意もあるのはさうした理由によるのである。更に君とか右とかいふ字に口を組合はせられてゐるのも注目すべきことである。

曰

口の字の系統を引いた文字には以上に掲げた外に曰（いはく）・吾等がある。曰といふ字は日と區別して扁平にしたうへ更に左上部を離してと書いてゐる。小篆ではと書き口の上部にをつけて口中から聲氣の出るさまをあらはしたのである。

18【日】 ジツ にち 新 ひ（二・七） 春 ニチ（二・一一） 明日（あした）（四・二二） ジツ（六・一一）
今日（けふ）（三・二〇） か（五・二） 日本（にほん）（一〇・二一）
假 日本武尊（やまとたける）（五・一一） 日向（ひうが）（一二・一〇）
春日（かすが）（六・二）

古形は⊙で太陽の象形である。中の點は「ココが光るところゾ」と指事したものといはてゐるが、また單に圓形と區別するためのシルシとも見られてゐる。といふのは◯はもと圓といふ字だから內部に點がないと圓と太陽との區別がつかないからである。

天體のうちで我々の目に見える一番大きなもの（但し見掛け上）は日と月であるから、この二つの文字は相並んで作られたものと假定してもあながち無理とはいへないだらう。そこでこの兩者は單に象形といつてもその內部に多少の象形的工夫がこらしてあるのではなからうか。即ち月の場合においては兎の餅つきの如く容易にその斑紋に氣がつくことは明かなことである。しかし太陽の場合においては果してどうだらうかといふことであるが、支那はよほど以前から天文の發達してゐる國で日本人などとちがひその觀察は頗る鋭かつた（辰の字の條を見よ）。既に三千年の昔から「日中黑子あり、その大きさ鷄卵の如し」といふ記錄が殘つてゐるくらゐで、今日我々が太陽の黑點といつて大げさに騷いでゐる現象を早くから發見してゐた。太陽の中に金鳥といふ三本足の鳥が棲んでゐ

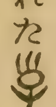
るといふ傳説もあるが、これは恐らく黒點の移動によつて出來た傳説であらう。專門學者の説によれば太陽に黒點が見えるのは毎年同じでなく、多い年と少い年とがあつて兩者とも十一年の週期をもつて居り、しかも各一年間においても日々不同だといふ。この不同があつて黒點の異動するところを異様な、しかも生きた三本足の鳥に見立てたのではなからうか。して見れば月の字の點が所謂月面の運河をあらはしてゐるやうに日の字の内部の點は黒點の象徴かも知れない。しかしこれは餘りに穿鑿に過ぎた考であるかも知れないから光りの指事といつておけば無難は無難である。恰度星といふ字の古形 ◎◎◎ にある點が、銀砂を撒き散らしたやうな無數の星から、キラキラと幽遠な光りを放つてゐる有様を、手にとるやうに頭にチラツカセル役目を果してゐるのと同様にである。

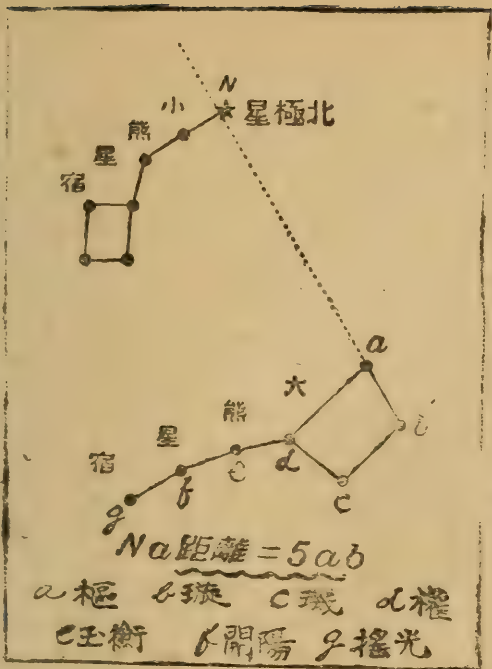
日の字の成因については以上の説の外に、女の字とともに女陰の形だと考へてゐる者が非常に多い。日の字を女陰だと解釋したのは我國では女性神たる天照大神を太陽になぞらへたからであらう。スパウキン氏（元東京外語の講師）はその著「横目で見た日本」の中に「東京帝大のドイツ人シュテルンベルグ博士が獨逸協會でした講演によると、その字は直接太陽の形を表象した字であるといふ學説はシ博士によると全く誤りで、實際は人間の原始的な宗教的觀念を表はした文字で、世の中の一般の生の力の具體的なシムボル、卽ち正面から見た　　の意味である。その見える部分

のうしろにおいて無限の距離に亙つてゐる全宇宙の生命を起したり保存したりする力のシムボルである。」といつてゐるが大なる誤りといふべきである（女の條を見よ）。

日の字が歴・時の如くまた早。晩の如く時の推移に關する文字や、また曇・旱・晴の如く氣象に關する文字に組合はされることは別に說明する餘地のないことであらう（月の條を見よ）。

19〔子〕　シ　新　こ（二・七）　替　シ（二・二五）　ス（七・一九）

古形にがあり小篆ではである。特に頭部の大きなところ一見して子供の形をあらはしたことがよく分かるであらう。なほ古形には頭髮の加へられたの如き文字もある（腦を見よ）。



（第一〇圖）

この字は十二支の記號として用ゐ、ネと訓じられる。これはこの字固有の義ではなく一年十二箇月を記憶に便ならしむるために、動物に配當したまでで鼠とは何等の關係もない。理學博士新城新藏氏の說によれば「子」は一年の最初の月、即ち第一月の記號文字だといはれてゐる。それは昔支那において北斗七星（大熊星宿）の柄杓に相當す

る部分が恰度地平線に垂直をなす季節を一年の初めとしたからであつて、七つの星を結べば「子」の字の形となるからこれを十二支中の第一の記號文字として使用したものと說明されてゐる。まことに面白い意見である。なほさうなると今形の子の字は子供の象形から來たものと、北斗七星から來たものとの成因のちがふ二つのものがあることになる。そしてたまたま字形が類以してゐたため、現在では同形にて二つの異つた場合の意味に用ゐられるやうになつたこととなるわけである。

20〔月〕 グワツ ゲツ 新 つき（二・八）　替 グワツ（二・一三） ゲツ（五・四）

古い字形はである。天體の中で特に目立つものは月と太陽とであるが、太陽は常に缺けることがないので圓形をもつてし、反對に月には折々みちかけがあるのでその特性をあらはすため半圓としたものである。內部の點は所謂月面の運河といはれてゐる班點であらう。

曆の字に日が組合はされてゐるやうに朔・期等には月が組合はされてゐる。太陽の出沒は一日を測定する方便とはなるが比較的長い期間を測定するには不便である。もつとも日蝕の如き現象もあるがこれは屢々起る現象でないからよほど注意しなければ見遁がすものであり、またその週期が餘りに長すぎる。ところが月のミチカケは規則正しい上に餘り長からず、また短くもないから

まことに便利な標準とすることが出來る。支那で發達した太陰暦、所謂我々のいふ舊暦はこれから來たもので一年を一月二月三月と十二箇月にわけるのは月を暦法に應用したものである。そこで各月の初めの意の朔(ついたち)といふ字や、期間の期の字に月が組合はされてゐるのである。

なほ我が國の言葉の「ついたち」は「ツキタチ」の音便でツキのハジメ即ち第一日のこと、「つごもり」は「ツキゴモリ」の略にて「月がこもる」即ち月末といはれてゐる。また「こよみ」は「日讀(かよみ)」から來たものといはれてゐる。

月の字形に類似したものに成因のちがつたものがある。それについては肉の字の條に説明をしておく。

21〔上〕シヤウ じやう　**新**　うへ(二・八)　**替**　あがり(三・八)　かみ(三・二四)　ジヤウ(四・一七)　あ・ぐ(三・一四)　のぼり(三・二六)　シヤウ(一〇・一二)

假　上海(シヤンハイ)(八・五)　上野(かうつけ)(一〇・一二)　上總(かづさ)(九・三)

古い字形に・ 二 丄 などがある。いづれも標準となるべき横線を引いてその上部に點なり線なりを加へその標準線よりウヘであるといふことを指事して「ウヘ」なる意の文字としたのである。これが現在の上の字となつたもの。大體上とか下とかいふやうな觀念的なものは、これを

形體によつてあらはすことが出來ないのでかくの如き方法をとつたものである。即ち進といふ字が古くはにてあらはされ退といふ字がにてあらはされたやうに、この場合は運筆の始めとなる太いところを標準點としたものでや等はそれぞれ一對をなして始めて意が通ずるものである。

22〔中〕　チュウ　新　なか（二・八）　螫　うち（三・二三）　チュウ（四・一六）

口と｜との合字である。口は何とはなしに一般的にモノをあらはしたシルシである。そしてその中央を縱線で貫いて「アタル」といふ意をあらはし、それよりナカ、ウチの意に轉義したものである（央を見よ）。

そこで中の字の口はクチでもなく、また國などの周圍に見受ける□でもなく特定されないモノをあらはす指事的な符號として使はれたまでに過ぎない。例へばモノの量を記す際に一つ二つ三つと順々にシルシをつけて記憶する場合、○を使つたり△を使つたり時には□などを用ゐるがそれは單に量をあらはすための方便として、他の形を借りるまでのことだからその形の如何は一向に問題とはならない。要するに便宜上の問題であつて、中の字の場合においてはかかる形のものが一番都合がよかつたからである（品・貞を見よ）。

23〔山〕 サン せん　新 やま（二・九）　替 サン（六・二）　假 金剛山（こんごうざん）（六・二三）

山の象形から出來たものである。山の字を作るに際して特に三つの連峯にて書きあらはしたことは注意しなければならぬ。卽ち山を現はすには別段峯を三つにしなくとも一つでも、二つでもまた四つでもよいのだが、一般に漢字の作られた跡をふり返つて見ると多數をあらはすやうな場合、又多數のものを省略するやうな場合には、ともに主として同一物の三箇をもつてそれを表現してゐる。卽ち又及び品の字の條下に說明する通りである（三の條をも參照せよ）。

24〔下〕 カ げ　新 した（二・九）　替 くだ・る（三・二六）　さが・る（四・一七）　カ（五・一）　お・る（五・一八）　ゲ（四・二）　おろ・す（四・二一）　さ・ぐ（五・七）　しも（六・一一）　下手（へた）（七・二三）　もと（八・二八）

古形は一・二・丅である。上の字の條下に說明したのと同じやうに標準となるべき一線を畫してその下方へ、點乃至線にてシルシをつけ「シタ」なる意の文字を作つたものである。

25〔年〕 ネン　新 とし（二・一二）　替、ネン（四・一三）

古形は小篆では。上部は禾、下部は千である。禾の字は五穀が實つて穂先きを垂れてゐる象形文字で、年の字は五穀が例年のやうにタップリ取れたことをあらはす文字だから禾の字を組合はせたのである。千は聲符字として組合はせたのだが更に豐かといふ意をもかねあらはしてゐる。

稔

稔の字はミノルと訓じてゐるが年と同意である。この字も形聲文字にて念が聲符字である。これらの文字が一年二年の年として用ゐられるのは一年の經過したことを穀物の成熟によつてはかつたからである。卽ち櫻の花が咲けば去年の櫻時分から既に一と廻りの歳月が流れて來たことが知られるのと同樣で、しかも農業本位時代において五穀の出來不出來は彼等の最も關心事だつたから、これがトシの意に使用せられるのは當然である。我國でも「トシが惡い」といへば不作のこと卽ちミノリの惡いこととなるのはかうしたことから來たのである。

なほ時季の季の字に禾が組合はせられてゐるのも禾穀の成熟によつて時季の測定が出來るからで、またこの字がスヱの意となるのはものの成熟は最後の場合だからである。季の字に組合はされた子もまた聲符字である。

26〔正〕 セイ しやう　新 シヤウ(二・一三)　替 まさ(五・二一)　ただ・す(九・一〇)
セイ(九・九)

一と止との合字。止の字の古形はにて足趾の象形。人が大地へしかと足をふみつけ直立してゐることをもつてタダシキ意の文字としたのである。卽ち上部の一は眞つ直ぐに上の方へ立つてゐることを指事したものである。

止の字は後に是・定などにも組合はされて正義の觀念が示されてゐる。これは足許が落ちついて居れば何事にもゆるがないで直立してゐることが出來るからである。或る說では正の字は「一をまもつて止まる」とし二心のないことにてタダシとなるのだといつてゐるが、この字はかゝる思索的な考へで作られた文字ではない。しかも上部の一は紀數文字の一ではなく上の字や辛の字の古形の上部にある一と同樣にウヘなる意味をあらはした指事的記號に過ぎないのである。

なほ直立してゐることをタダシと見たといふことは正の字の反對に用ゐられる邪や曲の字がまがつてゐるものの象形から出來てゐるのを見てもわかるであらう。

27〔田〕テン でん　新 た(二・一四)　音 デン(五・一九)　假 武田(たけだ)(七・一四) 田舍(ゐなか)(一一・一〇)

周圍の四角形は或る區域をあらはし內部の十は四方へ通ずるアゼミチをあらはしたものにて、田畑の田としたといはれてゐるが、しかしこの字は必らずしもさうと限られたものではなく農業文明以前の狩獵をしてゐた時代にそれらの場所をあらはす文字として作られたものではなからう

か。そこで田といふ字はその際に使用した網（網を見よ）の象形から來たものではなからうかといふ說さへあるわけである。畋獵といふ言葉があるがこの畋は田と攴（教を見よ）との合字にて狩獵をすることになるのもそのためであらう。從つて田は廣い土地をあらはすので野や里に組合はされ、また自分の獵場といふ所有的觀念が働いて疆・略・界等に組合はされたものだらう。更に畜や男に田の字が組合はさつてゐるのも狩獵や牧畜に關係があるからである。

28〔米〕 べい まい　新 こめ（二・一四）　舊 ベイ（八・一八） マイ（九・一三）

禾（のぎ）の第一畫を省いたものに米粒をあらはすための點をうつてこの字が作られたものといはれてゐるが、古形にがあるところより見るに草木の象形たるがもととなつて、それに澤山の米粒がなつてゐることをあらはすために四つの點をうつたものであらう。もちろん現形の米の字においては古形の點二つに相當する下部をもつて木の字の根に働かせてゐることは言ふまでもないことである。

なほ米の字の古形が胃の字の古形に含まれてゐるのを見ても、支那人が古くから肉食以外に米食をもした人種であることが察せられる。

29 〔白〕 ハク びやく　新 しろ(二・一四)　替 ハク(九・二〇)　假 白主(しらぬし)(一二・一七)

この字の成因には種々の説がある。その一説に古形はで昔の支那人の珍重した白玉(玉・節王の條を見よ)の象形だといはれてゐる。なるほどさう聞けば擬寶珠によく似てゐるし碧(あを)といふ字にも玉の字が含まれてゐる。これより察するにどうも玉の色から來たものらしいといふのである。他の説では枝頭に實つたドングリ樣の果實だともいはれてゐる。

前者に從へば白の字は白玉の色彩から來たことになり、後者に從へば果實が白日にさらされてアラハなるところより「シロ」の意となるのである。

説文によれば白の字の古形はにて入と二との合字だとしてゐる。その理由とするところは白は赤の陽色に對して陰色であるから、出の陽(男性)に對する陰の入(女性)と、一の陽に對する陰の二(一の字の條八卦の陰陽の爻を參照せよ)とを組合はせてシロなる意の文字としたといふのである。説文のいふところが論ずるに足りない窮説なることは明かである。

30 〔目〕 ボク もく　新 め(二・一六)　替 モク(九・一〇)

古形はで明らかに目の象形から來たことが肯づかれる。「目は横、鼻は縱」といふ言葉が

あるが、現形では筆書の關係上位置が變つて次第に縱となつてしまつた。漢字にはこれに類するものが頗る多く、馬・鹿・犬・豚等の動物から來た文字にしても最初は動物そのままの位置に書かれたものが次第に向きをかへるやうになつたのである（牛の條の第十二圖を見よ）。

眉

目の字は看・省・見・相等に含まれてミルといふ意をあらはしてゐる。また眉（古形は ）といふ字に含まれてゐる目はいささかこれらとは趣きを異にして目の上の毛だといふことをあらはしたものである。更に目は首の字に組合はされてゐるやうに頸から上の顔面を代表することがある。この說明は首の條にゆづる。

31〔耳〕 ジ に 新 みみ（二・一六）

古形は  にてミミの象形。小篆は  で現形の耳に近い。さて耳は聽音機關であるから聽・聞・聲の如き文字にはすべてこの字が組合はされてゐる。聖人の聖、職能の職等に組合はされてゐるのは「一を聞いて十をさとる」といはれるやうに相手の言葉を聞いて事理を察するからである。

聯

更に聯の字の耳はツラナル意を表現するために組合はせたのであるが、これは耳がコメカミのあたりから頰につらなつてゐることの聯想からである。同時に旁の絲にも連續の意が含められてゐる。

32〔畠〕 國字 はたけ　新　はたけ（三・一七）

白と田との合字。畑の字とともに我が國で作つた文字である。だからこの字には訓のほか所謂字音なるものはない。畠及び畑は野菜類等を植える陸田のことで稻を植えつける田即ち水田に對して作られた文字である。白田とは開拓に際して先づ雜草を燒くので火田即ち畑の文字が作られやがてそれが熟田即ち白く乾いた田となるので白田の合字で出來たものといはれてゐる。また田をシラゲル（精）ともいはれてゐるが支那にももと／＼白田・火田の語はあつた（田の條を參照せよ）。

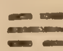
33〔土〕 ド ト　新　つち（二・一七）　替　ド（三・二〇）　ト（九・二）

古形に等がある。最後のものが現形の土に最も近いが下部の一線は土地をあらはしたものである。由來大地は萬物を發生する釀床とも見られるから地上にものの發生する現象をもつて地即ち土地なる意をあらはしたのである。上部に描いたものはこれを小さく見れば草木の芽生えとも見られまた鬱蒼たる大樹の形とも見られる。說文に「二は地の上と地の中とに象る。｜は物の出づる形なり」としてゐるが、これは現形の土の字だけについてならばさう考へられないこともないが、古形と對照し行けば實は土の字は二と｜との合字ではなく、古形のふくらんだ

ところが點となり更に線となつたことに氣づくであらう。古文では土といふ字も土の字と同形であるが、土(つち)は上部の線を短く書くやうにするがよい。

說文に「地の萬物を吐出するものなり」と吐の字を用ゐて說明してゐるのは誠によく利いてゐる。現在我々は主としてツチの意に使用してゐるが最初は地の意味に使用されたものである。卽ち「皇天后土」「普天の下、率土の濱」の如く天に對するものであつた。

34〔水〕 スキ 新 みづ（二・一七） 替 スキ（五・四）

古形から變化して現形となつたもので、川の字や州の字と同一の系統に屬する文字である。要するに川の字の古形の三波線のうち兩側にあるものを切離して、これによつて水滴なる觀念を表現したものである。八卦の坎の卦のから來たものやうに說明する人もあるが、まづ卦が出來てそれから水なる文字が作られたものではないと思ふ。

扁として組合はされてサンズヰ、脚部に組合はせられてシタミヅの稱があるが、すべて水の字の組合はされた文字は何かしら水に關係した意味の文字となる。卽ち江・河・瀧・沸・汁・漏等がそれである。

「水は方圓の器にしたがふ」といふ言葉があり、ためにその水面はいかなる場合にも平らかと

準

なるので水のこの屬性を應用して作られた文字もある。卽ち水準の準の字や法の字がそれである法についてはその字の條下に説明をするが、準の字は三水と隼との合字。隼は聲符である。水準

准

標準の如く熟し法則、ナゾラフ等の意となる。特にナゾラフ意の場合には准后・批准の如く二水（にすゐ）（氷を見よ）に書くが、これはナゾラフといふ意から「次ぐ」といふ聯想觀念が生じて來るのでかくの如く二とされたものであらう。

35〔又〕 イフ 新 また（二・一七）

この字の古い字形はにて右手の象形。本義はミギテのことであるがそれよりミギ・タスケルともなる。手の字の古形と比べて見ると又の字は指數が三本に省略されてゐることがはつきりわかるであらう。何故省略したかといふに手の字は左右にかかはらず一般的に手をあらはしてゐるので、新たに右手に限定された文字を作るとすれば多少とも手の字と異つた形式にしなければならない。そこで指を三本に省略して手の字とハッキリ區別をしたものである。特に三本に省略したことについては説文に「手なり。象形。三指は手の列。多きものも略するには三を過ぎざるなり」とある如く、漢字ではものの多いことを表現する場合は品の字が口三つになつてゐるやうにすべて同一物を三つ書いたものである（三・五の條を見よ）。ところで五本の指を略するに當つても、そ

の多いことの觀念を保存させるためやはり三本までに止めた。說文はこのことをいつたものでこれは漢字構成上における一つの常法となつてゐる。

叉

叉の字に指事的記號をつけて交叉點の叉の字が出來てゐる。しかし叉の字は後には專ら接續詞のマタといふ場合に用ゐられてゐるが、これは單に音の假借だけではなく亦の字とともにそれらの文字の成り立つた意味から聯想されて轉義したものといふべきであらう。

この字はミギをあらはす際には更に口の字が組合はされるやうになつた。即ち現形右の上部のナはから變形したものである。もつとも現形は左の字の上部と同樣であるからこれによつては右左の區別がつかないが、もとはと書いて左の字と區別した。それが筆書の便宜上次第に現形のやうになつたのであるが、然し一方は口、一方は工となつてゐるからそれにて十分にミギヒダリの區別をつけることが出來る（この項右・左・手の字と參照して理解されたし）。

叉の字は「もつ」といふ觀念をあらはすために他の字に組合はせる。これは右手はキキウデだからである。しかも力といふ字が手から來たやうに腕の力はやがて勢力を得る基であるから權力者たる君・尹・父や事・史・敎等の如き文字も出來てゐる（それ〴〵その字の條下を見よ。尹は君の條下にあり）。右・手・力・男等の條下と對照しあへばわかる通り、人間が他の動物を凌駕してこの地球上に大きな勢力を得るやうになつたについては色々の事情もあらうが、その一つとして人間は他の動物に比して手を働か

すことの巧みな動物だつたからだといふことが擧げられる。若し人類にこの才能が缺如してゐたならば今日の人類社會に存在する美術工藝を初めとしあらゆる文化は決してこんなにまで發達し得なかつたであらう。卽ち人類が他の動物に比して優者の立場におかれたのは手の働きによるものである。事實物事を實行に移すには手の力を借りなければならない。そこで實行にとりかかることを「着手」とか「下手(げしゅ)」とかいひ、また物事の巧みなことを「上手(じゃうず)」(good hand)といひ、反對の場合を「下手(へた)」といひ、更に「手腕」(man of ability)の如き言葉のある所以である。これは人と人との間においても同様で力の少いものは劣等の位置におかれる。だから君の字や役人の意の尹の字に右手が組合はされてゐるのは理由なきことではない。

なほ人類が他の動物と異る點として誰もが第一に擧げるのは言語の有無であるが、右の字や君の字に口が組合はしてあるのはよほど面白い現象である。大體又の字にはタスケルといふ意がありキキウデであるところよりミギといふ字を作るに當つて口を組合はせた。何故口を組合せたかといふと口は我々の意見を發表して自己の存在を相手に認めさせる助けとなる大切なものだから、そ



(第一一圖)

(これは、今から二十五萬年前のハイデルベルグ人で、人類の第二の先祖といはれてゐる原人である。この化石骨は、ドイツ　ハイデルベルグ市に近い地層から發見されたものである。)

こで右手と口とでともに助け合ふといふ會意なのである。卽ち「手八丁口八丁」でなければ大成功は出來ないやうに言語と手の働きとがひいて人類を萬物の靈長と誇らしむる原因となつたものである（佑・佐を見よ）。

又の字から出來た文字に寸の字があり尋・寺等に組合はされてゐる。丈・度など共にハカルとかノリ（法規）といふやうな意味がもたせてある。これはものを計る際に昔の人が指掌や兩手を使用した名殘りを留めてゐるものである。詳しいことは寸の條下にゆづる。

36 〔火〕 クワ 新 ひ（二・一七） 晉 クワ（四・二〇）

普通には單に火の燃えあがる形から作られた文字といはれてゐるが、古形に  などがあるところより察するに火山の象形であらうともいはれてゐる。なるほど山の字にもよく似たところがある。書經や山海經に崑崙山に火脈があるといふ言葉もあるから、太古の人が天に沖する火柱を見てこの字を作つたことは想像するにかたくない。

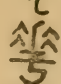
燒・煙・焰の如く他の字に組合はされて普通ヒヘンといはれてゐる。また炙・災の如く脚部にも、談の如く旁にも、炎・營の如く冠にも、灰の如く中間にも組合はされる。脚部に組合はされた場合には煮　烈の如く 灬 の形となる場合があつて連火・列火又はヨツタタキの稱がある。但

し無の字の下部はこれと同形であるけれどもその成因は異るものである。

37〔花〕  新 はな(二・一七) 替 クワ(九・一四)

華 垂

草冠に化の字を組合はせたもの。下部の化は聲符字として組合はされ意は草冠より見出すべきである。もつとも蕾から次第に花に變化して行くといふ會意も含まれてゐないことはない。

花の字は後世に出來たもので以前はハナには華の字を使つた。華の字の古形はで、は花が咲いて垂れ下つてゐる象形、即ち垂の字の本字でタレルといふ意の文字である。後に小篆では(垂)として下部に土を加へてゐる。土の字を附け加へたのは花が地上に向つてタレてゐるところから思ひついたので、實は後になつて餘分に附け加へられたものである。この土の字のない原始形のタレルといふ字の下部に聲符字たる亏を加へてとしたものが華の字の本字である。この字の下部は現形では于となり古音はク、それが音の分化によりクワとなつた。後更に草冠がつけられてとなり華となつたのである。花　華ともに字形は違ふけれどもいづれもハナの意に作られた文字である。漢字にはよくかうしたものがある。それは最初象形的に出來た文字があるにもかかはらず次第に文字を作る方法が巧みになつて、更に形聲の方法で別な形式のものが作られるやうになつたもので、その形式(字形)こそちがへその字に盛られた内容は同じであ

る。そこでどちらを使つてもいいやうなものの、一見したところ字形が違ふので一般の人々からは別種の文字の如く解せられるやうになり、次第に使ひ分けがせられるやうになつて來た。即ち草花・花卉には「花」を使ひ、華族　繁華。榮華等には「華」を使用してゐる。書名の「榮花物語」には花を使つてゐるがこれは花と華とは同字だといふことを著者が心得てゐたからである。

次に同字でありながら習慣上使ひ分けられてゐる文字の三四の例を示しておかう。

板——戸板。板挾。
版——活版。出版。

笑——わらふ。
咲——さく。

句——句讀。
勾——勾配。勾當。

偏——普偏。
遍——百萬遍。

疏——疏通。辯疏。上疏。疏明。
疎——疎遠。疎外。疎忽。

箇——箇所。箇條。
個——個人。個性。

巖——いはほ。
岩——いは。

匂——にほひ。
匀——ひとし。

周——周圍。圓周率。
週——一週間。

娘——村娘。
孃——令孃。

邪——正邪。邪說。
耶——有耶。無耶。

【駈—駈足。 駈落。

【驅—驅逐。 驅使。 疾驅。

【肉—牛肉。 肉食。

【宍—宍戶。 宍倉。

38【入】 ジフ にふ 新 いり（二・一七） 替 ニフ（六・一二） 假 奥入瀬川(おいらせがは)（一二・一二）

内の字から分化して出來た文字である。即ち内の字の古形はにてなるものへ上の方からものがはいつて廣がつてゐることの指事であるが、それより入の部分を拔出してイルといふ字に獨立させたのである。全の字の上部は入の字の系統であり、分の字は八から來たものである。

古形で見ればヒトの字を「入」と書く方が合理的であるが、筆書の便宜上「人」と書いたものである。恰度「內」の字が「内」と書かれるのと同樣である。しかしこれによつて見るに「入」の字がよほど古くから用ゐられた文字であることがわかるのである。

39【見】 ケン 新 み・る（二・一八） 替 ケン（四・二一）

古形はで目と人との合字。單に目だけの象形では目のことになるので特に人を組合はせて人間が目にてモノを見るの會意として目と區別したものである。

目にてものを見れば形があらはれるので轉義してアラハルとなる。後に出來た現の本字。見の字

を組合はした文字に視・觀・覽・覘等があるがすべてミルの意を含んでゐる。

40〔竹〕 チク 新 たけ（二・一八）

古文は↑↑にて竹の枝葉を二つならべたものである。一說には筍の生えてゐる形から來たものといはれてゐる。卽ち上部の∧は筍の皮、下部は幹といふのである。

竹の字は竺 篤 筑・築の如く聲符としても他の字に加へられるが、義をあらはす際には器物・樂器・書物等に關係のある場合が多い。それはこれらのものを作る材料として多くの場合竹が使用せられてゐたことによるのである。卽ち箱 笠 筆・策・竿の如きものがそれである。音樂のことを一と口に絲竹とか管絃といふやうに（絲を見よ）笛・管・筒・簫の如く有孔樂器にはすべて竹が組合はされてゐる。また書籍に關するもので籍・簡・篇・簿の如き文字があるのは、もと紙のない時代に竹片に字を書き、それを紐で結んだことによるのである。このことについては編の字の條に解說を加へておく。

更にまた竹の字は箇の字や支の字にも含まれてゐるが竹片が數とりの道具として用ゐられたことが想像せられる。これは箇の字の條下に說明をゆづる。

41〔太〕 タ タイ　新 タ(二・二〇)　替 ふと・し(三・八) タイ(七・一)　假 樺太(からふと)(六・一三) 太宰府(だざいふ)(一〇・二三)

この字はもと大と書いたものであるが、周の時代に文化が發達し、文字も繁畫を尊ぶやうになり大の字を二つ重ねて大大と書くやうになつたものである。これが現形の太となつたのは同字を二つ重ねるときには、二つといふ意味で多く上の字の下に二の字を書き記したものだから夳となり、その二が點に省略されて現形となつた。字義もハナハダとなり更にフトシとなつたものである。第二形の點を二つ重ねた部分は獨立させて々と書いてゐる。

々

42〔郎〕 ラウ　新 ラウ(二・二〇)

良と邑との合字である。本義は魯の國の村名。故に邑(邑に付いては鄕を見よ)。良は聲符。轉じて郎君(キミ)と亦中郎將の如く役人の意となる。また女より夫を呼ぶ稱ともなり、太郎・次郎の如く男子の名前に用ゐられる。いづれも良の音と通じるので假借されたものである。

43〔私〕 シ　新 わたくし(二・二一)

禾とムとの合字。ム(シ)は人間の鼻を横から見た(品を見よ)もので、自の字の如く鼻の象形によつてソ

レなる意をあらはしたものである（自を見よ）。そしてこの字は鼻を橫から見たものであるから特にワタクシゴトの意に用ゐられる（公を見よ）。

自分（自己・我）の意をあらはすに禾（稻を見よ）を組合はせたわけは、農業本位の時代には個人の社會的地位はその所有する穀物の多少をもつて決定したからであらう。禾即ち穀物は直接には自己生命の資源であるが、同時に對外的にはかかつて自己の地位を評價する標準となるものである。そこで肉體上の中心たるムと對外的に自己の中心となる禾とを組合はせてワレなる意の文字としたのである（私を見よ）。

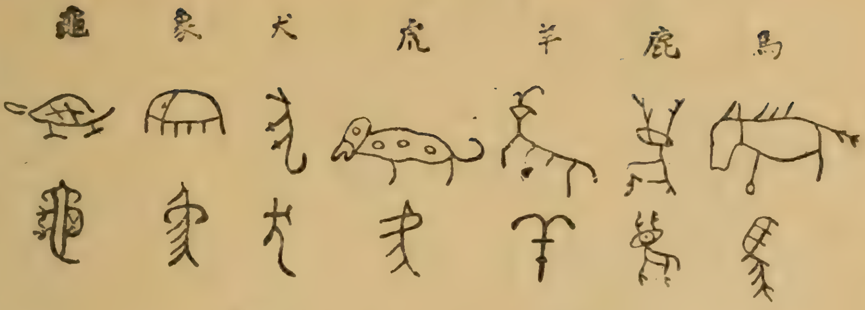
44〔本〕ホン　新　ホン（二・二一）　舊　もと（八・二七）　假　日本武尊（やまとたけるのみこと）（五・一一）

木の字の下方に一線を加へて根元の方だと指事して「モト」なる意の文字を作つたのである。指事文字の例としてよく掲げられる文字にて本・末・未の三字は連絡的に記憶しておく必要がある。

45〔牛〕ギウ ご　新　うし（二・二二）　舊　ギウ（一一・二三）

この字の古形はで牛を正面から見た時の簡略なる輪郭的象形から出來た文字である。この字は羊の字と同樣に特に角の部分を强調して印象的に描いたもので、羊の字の出來方とその揆を

一にしてゐる。兩者の角のちがふところは牛においては平行的に上方へ、羊においては放射的に外方へ描かれてゐる點である。牛の字の古形の下部が十字形になつてゐるのは主として顔面をあらはしたものであらうが、また縦の線は脊柱に利かせ、横の線をもつて合はせて四肢を想像させたものではなからうかと思はれる。



（第一二圖）

すべて動物に關する文字は第一二圖及び象形文字の條にてわかる如くその象形から來たものが多い。しかもその表現に當つては馬にはタテガミ、虎には斑紋といふやうに各動物の特徴となるべき部分を見逃してゐない。

牛の字は物の字の左扁に組合はされて天地間に存在する「モノ」の意が表はされてゐる。また動物の雌雄をわけるに牡牝の字があるが凡て牛が組合はされてゐる。これによつて見るに牛は動物（犬・羊を見よ）を始めとし廣くモノ（物件）の代表物となつてゐる。どうしてさうなつたかといふに牛は古くから犧牲として神に捧げられ、六畜五性の中の主たるものとして尊ばれまた食用にも供せられたからである。「犧牲」といふ字にも共に牛の字が組合はされてゐ

犧

るが、犧は毛の純白なる牛にて牛の中でも最も上等なものをいふのである。支那太古の帝王に伏犧といふ名があり、この帝王が初めて神に犧牲を捧げることを人民に敎へたと傳へられて居る。伏犧はまた庖犧とも書かれるが、伏と庖とは同音にてこの庖の字は庖丁と熟する字で動物を調理することなのであるから、彼はまた肉食の先導者であつたのだらう。牛は現在でも家畜として重要な地位を占めるものであるがそれは農業とか運搬作業等の力役に使用することが出來るし、またその肉は食用ともなつて肉食人種の間には無くてならないものになつてゐる。かかる動物が人々から非常に尊ばれ作字の上にも應用されて行くのは當然ともいふべきである（犬・羊・豚を見よ）。

牲

牲は牛に限らずすべて生きた動物のことであるが、この字に牛が組合はされてゐるのは勿論牛を動物の代表物に見たてたからである。天地間に存在するあらゆる「モノ」の意として物の字に牛が組合はされてゐるのは、牛が人間に貴重なるものであるのと軀體が巨大であるのとの二つの理由からである。また人と牛との合字たる件の字は、今は轉義してクダンの如くモノを數ふることとか條々の意となつてゐるが本義は辨別することである。卽ち牛の體軀が大きいので、否むしろあらゆる動物中で優れて尊いものだから畫然たる區別がつけられるの意で件の字が作られたものであらう（象・像を見よ）。

46〔出〕　シュツ　新　だ・す(二・二二)　替　で・る(二・二四)　シュツ(六・一一)　い・づ(四・五)　いだ・す(八・五)

古形に等がある。この字は止ととの合字。止の字はその條下にて説明したやうに足趾の象形である。說文には出の字を說明して草木が繁茂して上り出づるかたちとしてゐるが、出の字はやはり足に關係したものであらう。吳大徵の說では古禮に「入るときには屨(くつ)を解き出づるときには屨を納る」とある通り、人家に入る時には履物をぬぎ、出て行く時には履物をはくから出の字の古文の下部なるは履物をあらはし、その履物に足(止)を納めてまさに出でんとする意をあらはしたものだといふのである。

出の字の音は普通シュツであるが、これはデルといふ場合に用ゐられイダスといふ場合にはスヰと讀まれる。即ち出納(すゐたう)・出師(すゐし)の如きものがそれである。

47〔江〕　カウ　こう　新　え(二・二五)　替　カウ(一一・一三)　假　近江(あふみ)(一一・七)

水と工との合字。もと揚子江の名をあらはすために作られた文字である。だから三水。揚子江はむかしは單に「コウ」と呼ばれた。ゴウ〳〵とゆるやかにしかも大きく流れる水音の形容から來た名前である。そこで「コウ」なる音を持つてゐる「工」の字をサンズヰに組合はせてこの字

を作つた。よく形聲文字の例として河の字とともに擧げられる文字である。

48〔力〕 リョク　新　ちから(二・二五)　替　リキ(五・二六)
りき　リョク(七・二二)

古形はで右手の象形から出來た(又)の字を逆にしたものである。何故手を逆にしたかといへば力仕事をする際一番筋肉に力が出るのは、下にあるものを上から提げる場合だからである。そこで手を逆にしてチカラの表象としたものである。

協

この字を三つ重ねたものに協力の協の字がある。その古形はで氣持ちを揃へた三人の手が同一目的物に向つて懸命なる力を出してゐることを表現したものである。そこで協の字の旁は、力を三つ重ねるのが最初の作意にかなつてゐるわけで「刀」とカタナにするのは作字の意圖を辨へないものといはねばならない。

手・長・又・右、勢等の條下で述べたやうに腕力や手腕はやがて權力となるものであるから、從つて少と力の合字たる「劣」がオトルとなるのである。優者の立場にならうとすればどうしてもこれに實力が伴はなければならない。大昔における實力はむしろ頭の方ではなく直接的な腕の力であつたかも知れない。勵・勉・助・功・勞等の力はすべてツトメル意を含んだものである。

49〔天〕　テン　新　テン（二・二五）　督　あま（五・一六）

古形はで大の字の上部に點をうつたものである。大はその字の條下で説明したやうに人間が正面を向いて天地も塞がれよとばかりに立つてゐる象形である。「大の字なり」の人間の頭の上はもはや天より他にはないから、その上部にテンを打つて天地の天の字としたものである。或る説では天は顚と同音にて頭（顚）の意だともいはれてゐる。勿論天と顚とは同根の言葉なることは想像するに難くない。

第三章　卷三の新出漢字

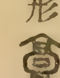
50〔雨〕ウ　新　あめ（三・九）　替　あま（五・一四）　ウ（六・二一）　假　時雨（しぐれ）（五・九）

この字の古形には等がある。何れも天上から雨滴が落ちてゐることを表現した文字なることは說明する余地もあるまい。外廓の冂は我等の頭上を掩ふ蒼穹の象形であるが我が國語においても天地のことをアメツチといひ天と雨とは同根の語なるが如く、支那において雨なる文字を作るに當つて天を聯想したことは當然だと思ふ。

現形の雨の字はさきに掲げた古形の最後にあるものから來たもので、上部にある一線は、大の字の上部に一線を加へて天の字とした如く、上方卽ち天なる意を一層明確にしたものである。

この字は俗にアマカムリと稱せられ雨・露・霜・雪に關する文字や、雷・電・霹・靂・震等の天象氣象に關する文字に加へられてゐる。

51〔高〕 カウ こう 新 たか（三・九） 舊 カウ（六・二）

古形に等があり、第二形は、城郭の郭の字の古形の半分と同じく、これらの文字が同一系統のものであることは容易に想像がつく。郭の本字は要塞堅固なる城郭の大手搦手に、高い望樓（ものみやぐら）が築かれてあるかたちをあらはしたものでなる古形もある。即ち四方に出てゐるのは望樓でこの望樓は第一三圖イの如く作られたものであらう。敵の襲來にそなへるためのものであるから、それが極めて高く築かれたのは當然である。要するに高の字はこの望樓の一つで第一三圖（ロ）の如きものの象形から來たものであらう。そこでこの字がタカイといふ意味の文字となるのである。

（イ）


（ロ）


（圖 三 一 第）

この字の系統に屬するものに京・亭・與・稾等がある。それぞれその字の條下にて見られたし。

52〔石〕 セキ しやく 新 いし（三・九） 舊 シャク（六・一六） セキ（六・二三）

小篆にて。この字の上部は崖といふ字の中に含れてゐるものと同形のもので斷崖の象形で

ある。崖下にイシコロがごろごろしてゐるさまをうつしてイシなる意の文字としたのである。

我が國では䄷の音に假借して米などをはかる單位となる（斗を見よ）。

53〔方〕 ハウ 新 ハウ（三・九） 替 かた（三・二四） 假 此方（こなた）（七・六）

小篆にて。說文に「併船なり」とあるやうに二隻の船を併せつなぐことがその本義である。
それより轉義してクラベル意となり、□○（方圓）の□に假借されて四角の意となつたものである。
なほ舟といふ字はであるから此の字を二つ書くべきところを略してとし、更につなぐ意味でとしたものである。

54〔足〕 ショク そく 新 あし（三・一〇） 替 ソク（五・一〇） た・る（六・二三）

古形はにて足部全體の象形から來てゐる。それが筆書の便宜上省略されて現在の足の字の形となつたのであるが、これは足趾の象形たる止の字の上部にシルシをつけてここは略してあるが全體だといふ考へを示したものである。卽ち。止から現形となつたものである（止を見よ）。

55〔手〕 シウ しゆ 新 て（三・一〇） 替 シュ（五・一九） 假 上手（じやうず） 下手（へた）（七・二三）

手の象形から出來た文字である。卽ち古形はにて、五本の指までがチャンと揃つてゐる。他の文字に組合はされて所謂テヘンとなる時はなる形となるが、要するに古形に幾分變化が加へられたまでに過ぎない。

さて左・右・又の條にて說明したやうに手にはヒダリとミギとがあるが左手の象形はで右手はとなつてゐる。この左右の兩手を組合はせたものはで手をそばだてるとかうやまふとかいふ意。この字は(承)(尊)(共)等に含まれ現形では弄・尊・共・兵・具等の下部に見ゆる如く廾寸六等の形をとる。また兩手を上から下にしたものにの字がある。手を下に組むといふ意で音はキヨクである。舁(かつぎ・あげる)の字や臼(つか・ぬる)のに相當するものである。更に兩手が反對に組合はされたものに(音はハン)の字がある。攀の本字で現形では大の形となつてゐる。

56〔村〕　ソン　新　むら(三・一二)　替　ソン(四・二〇)

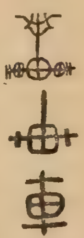
木と寸との合字。本義は椿に似た木の名前にてもと杶と書いたものでもとムラなる意味の文字ではなかつた。この字の旁が寸となつたのは屯の字の古形がでよほど寸の字の古形のに似てゐたので篆書を隷書や楷書に釋文するときに誤つたものである。

邨

ムラと訓ずる字に邨の字があるがこの字は地名として作られた文字である。故に聲符字たる屯の字に小里（郷を見よ）を組合はせたのであるが、もと〳〵地名としての固有名詞であるから本來はムラの意はなかつた。しかし屯の字の組合はされた文字に⿱竹屯といふ字があつてこの字がムラの意に用ゐられたこともあるので、したがつて邨や杶（村）がムラとして使用せられるやうになつたものだといはれてゐる。⿱竹屯の字はもと囤とも書いたもので米を蓄へる非常に大きな籠のことである。この籠のあるところへ人々が集つてムラをなすから、轉じて邨杶村の字がムラとして用ゐられるやうになつたのだらうと言はれてゐる。

57〔車〕

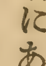
シャ　新　くるま（三・一一）　替　シャ（四・二一）

象形から出來た文字である。古形に等がある。即ち第一形から第三形の如く變化しつひに車輪が縱の位置をとるに至つたものである。

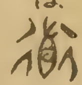
この字は軍の字などにも含まれてゐるが、もと支那の戰爭では車戰が主となつてゐたからである。そのことは旅の字の條下にて說明する。

58〔長〕

チャウ　新　なが（三・一二）　替　チョウ（四・二〇）　假　長谷（はせ）（七・一四）　長刀（なぎなた）（一〇・一二）

この字の古形はで上部は兵（）の字の上部と似てゐる。下部は人。卽ち兵器を持つてゐる人のことで本義は兵團の長のことである。昔は武力乃至腕力のあるものが人の上に立つたのでやがて一般的に長上の意となり、更に長短の長ともなつたのである。また古形になる形のものもあるが、上部のは斤の字の古形にてオノ、下部の右にあるは人、左のは人が倒逆（さかしま）になつてゐる象形。これにて人が兵器をもつて相手を打ち倒したことをあらはしたもので最初に掲げた古形よりも一層よく意味がわかる。なほ中間の横線は兵器を持つ人といふことを特に指事したものであらう。

59〔道〕タウ どう　新 みち（三・二）　替 ダウ（五・九）　假 突道（しんせ）（一・二二）

古形はである。行の字の中に首といふ字を書いたのが次第に變化して首と之遶とになつたものである。之遶については行の字の條下に説明したやうに之遶はもと行の字から出來たものである。ミチは人の進むところであるから、首の字を組合はせたもの。首をもつて人を代表したことは首の字の條下に説明をゆづる。

60〔右〕イウ う　新 みぎ（三・一二）　替 イウ（五・二六）

（又）と口との合字。又は右手の象形から來たものであるからこれをもつてミギなる文字とすることも出來るのであるが、更にその意をはつきりさすために後に口を加へた。卽ち右手はキキウデであるから手と口とでもつて、ともに相助けて事をなすといふ考へから口を加へたのである（又を見よ）。

現在の形では左右の字に含まれてゐる手の部分はどちらも同形であるが、もと右の字はと書いた。それが運筆の都合上左の字の上部と同様になつたものである。

佑

右といふ字は勿論又といふ字もタスケルといふ意味があつたのであるが、後になつてその場合には人偏が加へられて佑の字が作られた。佐の字と好一對の文字である。また右にはタツトブといふ意もある。これは右手はキキウデだから實行力が伴ひその實行力はやがて權力を産むこととなるからである。人間が右手を使用するのは心臓が左にある關係上、これを保護するといふ生理的作用によるものである。

61〔左〕

サ　新　ひだり（三・二一）　瞥　サ（五・二六）　假　左衛門（さゑもん）（一〇・一二）

と工との合字。これが現形となつたものであるが上部は左手の象形、工は大工の持つサシガネの象形である。何故左手にサシガネを組合はせたかといふとツチの如き力が入るものは右手

を使用し、したがつてサシガネは左に持つといふわけで、右と區別するために工の字を加へたものだらうと思はれる。我が國に飲酒家のことを「左利き」といふ言葉があるが、左手にはノミを持つので「左は鑿手」といふ考へから來た言葉だといふのと思ひ合はせれば、自ら左の字の成因もわかつて來るやうな氣がする。川柳に「甚五郎、左が利いて削るなり」とあるが「削る」は板を削る」にて飲酒することにたとへたもの。板は酒の本場たる伊丹に利かせたもので「左利き」といふ言葉は俗間にてよく使はれる言葉である。

左といふ字に組合はされてゐる工の字に以上のやうな何等かの深い意味がなくてはならないといふことは、工の字音が左とは全然音韻上の連絡がないからこれを單に形聲文字と考へることは出來ない。したがつてかくの如き意味の會意文字と見たいのである。このことは右の字の場合においても同樣である。

佐

左の字は右と同樣に人偏がつけられ佐（たすける）といふ文字が出來てゐる。手は右手に限らず左手もまたものごとをなす際に役立つので補佐の佐の字が出來て來るのは當然である。佑の字が天佑と熟用され偉大な力をあらはすに反し、佐の字がやや消極的であるのは、又や右の字の條に述べたやうに左よりも右を尙んだ結果によるためである。このことは大工の役を助けるものを左官といひ、粗末な品を左物といひ、役目がおとされて轉任せられることを左遷といふが如きに徵してもわか

るであらう。

62〔持〕 チ ち 新 もつ(三・一二) 替 ヂ(八・一一)

手と寺との合字。寺は聲符字でもあるが、また正しく持つといふ意をも含ませるために、ものに法度ある意の寺を組合せたものである。それ故「身を持する」といふ言葉などにも使はれるのである。

63〔通〕 ツウ トウ つ 新 とほ・る(三・一二) 替 ツウ(五・二二) 假 通有(みちあり)(六・二一) かよふ(七・一六)

甬と辶との合字である。通達と熟するやうに歩行して行くべきところまで行きつくこと。故に進 道 退などと同様に辶を書いたものである(進を見よ)。道の字と音が甚だ近いのは注意すべきである。

甬

通の字に含まれてゐる甬は聲符であるが、しかしこの字は甬々然と使はれ、草木の花が垂れ下つてゐるかたちを形容する言葉となり、その成因は𢎘(音はカン)と用との合字である。𢎘の古形はで草木の花が開き切らずツボミ〳〵してゐる有様をあらはしたもの。ヨウなる音には開發といふ意味があるのでその音を有する用の字を組合はせて、ツボミが段々開いて花になつて行

くといふ意の文字としたのであるから、通の字は形聲文字ではあるが多少の會意もあるといふべきである。そこで甬の字の組合はされた文字の勇(いさみ)痛(いたむ)。涌(わく)。踊(おどる)。蛹(さなぎ)等について考へて見るに甬が聲符字たることは勿論であるが、これらの文字にいづれも動的事象が含まれてゐることは注目すべきである。これは作字に當つて特に意をもかねた甬なる文字を組合はせた深い考へによるものである。

64〔海〕　カイ　新　うみ（三・一四）　替　カイ（五・四）　假　海原(うなはら)（一二・一）

水と毎との合字。ウミのこと。故に三水。毎は聲符。しかし母の古音にはマイ（梅）クワイ（晦・海）等があつたのでこの聲符の基礎は母にあるといふべきである。黑々と水がたたへてゐるので海のことを滄溟といひ、くらく幽遠なることを溟晦といふやうに、クワイなる音はクライといふ意の言葉だつたのであらう。

65〔舟〕　シウ　新　ふね（三・一四）　替　シウ（一二・一七）

古形はにて獨木舟(まるきぶね)の如きものの象形である。これが縦の位置をとるやうになり更に現形の舟となつたのである。

この字を船の略字と思つてゐるのは誤りである。單獨ではまらぎはしいこともないが他の文字即ち朝・朕・服等に組合はせられると月の字と誤られ易い文字である。これらのことについては肉の條に説明をゆづる。

66〔毎〕 バイ まい　新　マイ（三・一四）　替　ごと（五・一九）

本義は草の芽が後から後からと盛んに伸び出ること。そこで草の象形たると母とを組合はせたもの。母（ボウ）は聲符。

毎の字がシバシバ、オノオノ、スベテ、ゴトニの意に轉義したのに草の盛んに伸び出る本義から聯想したものである。梅・苺（バイ）、海・悔・晦（クワイ）、侮・敏（ビン）等に含まれる毎はすべて聲符として應用されたものである。

67〔玉〕 ギョク　新　たま（三・一四）　替　ギョク（一〇・一一）　假　兒玉（こだま）（七・一三）

この字の古形の又はは三箇の玉を連續した象形である。

支那古代の禮服には玉で作つた種々な形のものを紐で結はへそれを飾りとして帶に下げたもので貝とともに古くから最も貴重なものとされた。玉とは要するに特殊な素質をもつてゐる石に彫

琢を加へたものであるが、我が國においても三種の神器の中に八坂瓊勾玉（やさかにのまがたま）があり、英國の皇室にあるダイヤモンドは世界的に有名なものであるやうに寶玉は古代からとこの國においても非常に珍重されたものである。珍の字や弄の字に玉の字が含まれてゐるのもそのためであり、更に寶といふ字に含まれる「王」がタマであり略して宝と書くのに徴してもわかるだらう。文化の發達した現代ですらダイヤモンドやルビー、サファイヤ等が寶石として一般の人々から頗る所望せられ婦人の首飾りや指輪等に使はれてゐるのを見ても古代人がいかに寶玉を愛好したかも察するに難くない。そこで支那の大昔において高貴な人々が寶石類を澤山集めこれを紐で結はへて服飾としたのである。玉といふ字の古形が前掲の如き形になつてゐるわけはこれで容易に理解されたであらう。特に玉が三つにしてあるのは澤山あるものの中から代表的に三つだけを選んだまでで、これは又・品・三等の條下を見れば自から理解されるであらう。

玉の字の小篆が王となつてゐるのは前掲古文の簡略されたもので、説文に三玉を連ねたものに象り｜は玉を貫ねるものといはれてゐる通りである。そして古文としてを擧げてゐるがこの兩側に垂れてゐるものは玉をゆはへた紐のタレをあらはしたものであらう。現形玉の字の點は王の字と區別して用ゐるためにこの垂れから思ひついて打たれたものであらうと思はれる。

然るに小篆の王（ワウ）の字と玉（ギョク）の字とは王（王（わう））王（玉（たま））となつて居り頗る字形が近似してゐて

まぎれ易い。そこでこの兩字の字形の差異を論ずるに當つて、說文には特に王の字の中畫は第一畫に近いと註し王はその三線間の間隔が均等であると說明してゐる。その根據とするところは王者は天地人の三德を兼ね備へたものだから、この字は紀數文字の三を縱線にて貫いたものといふにある。許愼は紀數文字の三を二と一との會意文字と見たからである。なるほど三の古文には三線間の間隔に不同なものがある。しかしそれが主要な問題でないことは三の字の條下で說明した通りである。だがしかしここでより一層根本的なことについて考へなければならないことは、そもそも王といふ字は紀數文字の三から出來たものかどうかといふことである。由來支那人は漢字の成因を極めて深遠に解釋したがる癖があるが、太古文字の作られた當初にあつて、天地人の道などといふやうなそんなに深い考へがあつたかどうかは誠に疑問である。豈んや文字なるものはドコの誰兵衞にもわからすことがその本來の使命であるから、この字の如く比較的古い時代のものに天地人の三德などといふ意味が含められて考へられやうとは、作字者は夢にも想像しなかつたところではなからうか。

　かく考へれば王の字と玉の字とはもと〳〵區別のあつたものでないといふことに思ひあたる。卽ち貴重なる玉は萬人の欲するところではあるが誰もが所有してゐるものでないから、玉はやがて王者のシムボルとなつたものではなからうかといふのである。このことはさきにも言つたやう

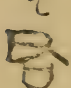
に我が國の三種の神器に勾玉があり、皇位繼承の御しるしとして代々の天皇がこの神器を受けつがせられることなどと較べ合はすれば容易にかかる想像もつくわけである。更にまた支那では王者が諸侯を任命してその任地におもむかせる際に、その任命のしるし即ち現在の辭令書に相當するものとして與へた節（符節・節度）が玉をもつてなされたことも有力な一つの證左となる。このことについては節の字の項を參照されたい。

68〔箱〕　シャウ　さう　新　はこ（三・一四）

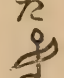
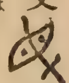
本義は物を容れるために車の中に作つたニグラのことである。ハコはその轉義であるがもと竹材をもつて作つたので竹冠にしたものである。相は聲符。

69〔父〕　フ　ほ　新　ちち（三・一四）　舊　フ（八・二八）

古形はである。右手（又）に一本の鞭をもたせて家長たるチチの意をあらはしたものである。即ち鞭は支配權を意味し一家を治める長といふ峻嚴なる意匠にて作られた文字であるといはれてゐる（又・手を見よ）。

この字に酷似したものに（現形の尹。役人の意。）の字があり更に口が加はつて（君）ともなるが、こ

れらはみな人民の長にて下民を支配するから手に支配權のシムボルとして丨を持たせてゐる。攴の字や敎の字の條を見ればなほよくこの邊の消息がわかるであらう。

上記のやうに考へると父性には古くから支配權があつたかのやうに解釋せられるが、果して父性は最初から女性よりも社會上優越な立場におかれてあつたものかといふに事實はさうでなく、莊子盜跖篇に「神農の世、民その母を知りてその父を知らず」の言葉もあるやうに父權といふものは一向に認められてゐなかつた。いづれの民族においてもさうであるがその原始時代にあつては、かなり長い間母權尊重時代が續いたらしく、文字や言葉の方面においてもその蹤跡の顯著なるものがある。一例を擧げると女性を現はす文字が人の姿から來て居るにかかはらず男性のそれには人の姿があらはれてゐないことである。女の字の條下で說明する通り支那人は祭祀を非常に尊重するが、人が跪坐（きざ）して神に仕へる神聖な姿を寫したが「女」といふ字の古文であり、それに乳を指事して二つの點を打つたものが「母」といふ字の古文であり、更に「民は母の生むところ」といふ意から母に一線を加へた「民」の字の古文が出來てゐるやうに、これらの文字にはすべて「ヒトのスガタ」が含まれてゐる。更に妣（はは）の字の本字（ヒ）は「人」といふ字の古形の向きをかへたものである。だから「ヒ」は「人」とともに人の姿を象つたものといへる。

ところが男性に關する文字には「ヒトの姿」は全然認められない。卽ち父の字は腕力より發展した冷やかなる權力の意を以てあらはし、また男といふ字は田と力との合字で力役に從事する意匠にほかならぬ。思ふに男性はむしろ女性の奴隷の立場にあつたのではなからうか。其の後父性が母性よりも優越な地位におかれるやうになつたのは、もと〳〵羊や豚の群を追うために手にした棒が生活上の物資を供給する原動力ともなり、また或る時は外敵にあたる棒ともなつて、やがてそのチカラが反對に女子を奴隷としたのである。男性が次第に社會上の勢力を得るやうになつたのはよほど後のことで今日歐洲の言葉で人の汎稱としてマン（man男）を使ひその中に女をも含ませてゐるのや、イヴがアダムの肋骨から出來たとか、諾冊二神の傳説の如きはよほど後の思想に基くものといはねばならぬ。

支那では人民を治めることに牧民といふ言葉がありまた古くから民團の長を牧といつた。これは統治者の群衆を治める有様があたかも迷へる羊の群を導くのに等しいからであるが、牧畜と支配權とが言葉の上で結びつけられるやうになつたのは甚だ面白い。これをもつて見ても勞務に從事したものが次第に支配權を得るものだといふことは想像するに難くない。キリスト敎において敎誡者のことを牧師（pastor）といふのもそれに類するものである。

もつとも漢字にも男性の場合に「ヒトのスガタ」の組合はされたものがないではない。卽ち般の

時代の帝王の名に（大甲）（大乙）（大丁）の如きものがある。これは大の字に甲乙、丁等を組合はせたものである。大の字は人が正面を向いて天地も塞がれと踏ん張つた形なることは既に説明した通りである。ところで后妣の方はどうかと見るに（妣甲）（妣丙）（妣丁）（高妣己）の如くすべてが組合はされてゐる。この字はさきに述べた如く「比」の字の片方で人を右側面から見た形である。由來「人」の字の古形は人を左側面から見たもので、「匕」の向きをかへた「人」の字が今日なほヒトの意に使用せられてゐるに反し、大の字は永久に「大」の字で、イクラ踏ん張つて見てもヒトの意に使はれてゐないのは、特に男性をあらはす象形の文字がなかつたともいふべくこれ全く母權中心時代の思想に基づくものではなからうか。

我が國の言葉においてもやはりヒトと女性との關係はまことに深いものがある。我が國で一番尊ばれる神樣は天照大神卽ち女性神である。この神樣は物に象つて太陽とし「オヒイサマ」といはれてゐる。天の岩戸の傳説によつても知られる如く女性の代表者ともいふべき天照大神と、萬物を生成化育する太陽とを結びつけたことは、神祕的なる人間の生殖、子孫の繁榮はかかつて母性にあり、その神祕な靈力はあたかも天に輝く赫々たる太陽の熱と光りが、人類は勿論草木鳥獸に至る生きとし生けるものを育て上げるのに等しいからである。なるほどこの宇宙から太陽の姿が

消去つてしまつたら恐らくあらゆる生物は地球上にその生を全うすることが出來ないであらう。思ひをここに致すとき太陽を母性に象つた思想たるや決していはれなきことではない。かくして我が國最高の神は女性神たる天照大神であり而して人々から「オヒイサマ」として崇められる所以である。

深窓に育つた令嬢のことを「おひめさま」といふのは萬物の親たる「日」の產んだ「女の子」卽ちヒメ（姬）なのである。そして男の方は「日子」となつて彥の字があてられてゐる。皇位のことを「天つ日つぎ」といひ、皇子のことを「日の御子」といひしかも人間全體を意味するヒトといふ言葉は、實に「日の後」の略といはれて居り、我が國の言葉もまた漢字における女・母等に見るが如く、全く男性を埒外においたものである。しかもその蹤跡は漢字のそれよりもなほ一層明瞭なものがあらう（母の條とあはせ讀まれたし）。

70〔母〕　ボウ　も　　新　はは（三・一四）　　替　ボ（八・一二）

古形はで女といふ字に點を二つ打ち、それにて兩方の乳房を指事してハハなる文字としたものである。

母といへば直ちに父のことを聯想するが、母の字の成因は父の字とは全然關係がない。支那の、

太古においては母權中心時代があつて父性は母性の隷屬物に過ぎかなつた。これは單に支那ばかりでなく、どこの民族も原始時代には女性は生得の事實として男性よりも優越な地位にあつた。このことについては父及び女の條を見ればわかるからここでは省略し、かはりに我が國における親子關係の言葉について見よう。

さてチチとかハハとかいふ言葉は性によつてオヤを區別した言葉であるが、古語ではタラチネといふ言葉しかなかつたと言はれてゐる。タラチネといふ言葉は「乳を垂らしてゐる親しい人」といふ意であつて、母親が愛兒に乳をふくませることから來た言葉でもと父に對する言葉はなかつたものである。そこでオヤといふ言葉はどうかといふにこれはオイ卽ち、「老」の意から來た言葉で親を尊敬する意から出來たものである。だからこの言葉からも父だけの要素を拔き出すことは出來ない。けれどもそれでは大變不便なので後に母性と父性とを分けるためタラチネからタラチヲ（父）タラチメ（母）なる一對の言葉が派生した。そのため父の方に對しては「乳を垂らしてゐる男」といふやうな眞理に合はない言葉さへ出來たのである。かくの如く言葉の上から言へば父は全く母の附屬物に過ぎなかつたのである。

さて古來氏族制度の國といはれてゐる我が國では母權が中心となり家長となつて一族の者は同じ垣內に住まつたものである。そして家長の住居をオモヤと言ひ女の子が產れるとこれにワキヤ

を與へて次第にその數を增した。そこで同じ垣內にゐるものを氏（內の泗つたもの）と言ひ、ウヂの祖たる母性をウヂガミといつて尊敬した。このウヂガミに屬するものがウヂコである。卽ち現在俗間で使はれるオカミサンといふ言葉はこれから來たものでオカミサンはウヂガミの現身のものである。だからこそ時に恐れられて「山の神」ともいはれる。そしてカミは「神」「上」「君」と同系の語で長上とか權威者とかいふ意をあらはしたものである。

また我が國に假名文字が作られてゐなかつた時代、國語に漢字をあてて書くに際し「おも」といふ言葉に「女」の字をあて、しかもそれに「右」の意を含ませてゐることである。たとへば「おもかじ」の如き言葉は「女舵」又は「母舵」と書き船首を右の方に廻すことや右舷のことである。右の尊ばれたことは右・又・手の條下において說明したが、これらを見てもいかに我が民族が女性を尊重したかが分かるであらう。現在「重」卽ち「重要」の意に使つてゐる言葉は古語の「おも」から來たものでもと母といふ意味の言葉だつた。勿論現在でも古い家柄のうちになると母親のことを「おもさま」といつてゐる。そしてこの言葉がもとになつて表（裏の反對）、重い（重要・充實）、主家（側家に對す）、おもし（重鎭・君侯）、おもひ（思卽ち心。物の本體）等の言葉が派生してゐる。漢語では夫娼婦和といひ、夫婦といひ、更に父母、男女等の言葉があるが、これらの言葉は旣に母權が尊重されなくなつてから出來た言葉である。然し我が國の純粹の古語

では夫婦を「めをと」（女男）・「いもせ」（妹背）といふが如く常に女性の方を言葉の初めにおいてゐる。「つま」といふ言葉も現在では妻の字であてられて有夫の婦のことに專用せられてゐるが、我が國本來の「つま」の意味はさうとは限られてゐない。着物のツマ障子のツマの如く二つのものが共に合する意である。

かういふ風に日本支那ともに太古には女權中心時代のあつたことが文字や言葉の上からも容易に想像することが出來るのである。もちろん文字や言葉といふものは古い昔の習慣によつて作られる場合が多いので、それらの言葉が使はれ初めた時をもつて母權尊重時代だと斷定することは早計である。

71〔東〕 トウ　新　ひがし（三・一五）　舊　トウ（四・一三）

木と日との合字である。木の間へ太陽の出る方角といふ意でヒガシの文字としたものである。

杲　東の字は日が木の中間におかれてあるが、これが木の上になつて杲となると日中のアキラカなる意。また太陽が木の間に沒したといふ意匠で日が木の下となり杳となれば「杳として」あやめも

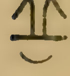
杳　わからぬクラキ意となる（暮を見よ）。

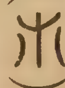
72〔西〕 セイ さい　新 にし(三・一五)　棲 セイ(六・二〇) サイ(一一・一四)　假 西藏(チベット)(一二・一三)

古形はである。說文に鳥が巢の上にとまつてゐる象形とある。太陽が西の方に沒する頃鳥が塒を探して木の上に宿るといふ考へから出來た文字である。上部は鳥が憩つてゐるかたち、下部は巢の象形である。後に木扁を加へて栖の字を作り、更に同音の妻を木に組合はせて棲なる文字も出來た。栖・棲ともにスム、ヤドルといふ字である。

栖 棲

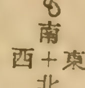
73〔南〕 ナン　新 みなみ(三・一五)　楠 ナン(七・三)

この字の小篆はで說文によれば(ジン・ダン・ナン)と(ハツ・ホツ・ハイ)との會意文字とされてゐる。字形より察するに內部のは干(カン)(ほこ)の字の古形によく似てゐるから恐らく同一系統の文字であらう。そして(干)(おかす)の字には獸角を利用して作つた槍の形のものもありは羊の角の象形から出來た(羊)にも似てゐる。干(ほこ)をもつて進むの意ではなからうか。次に南の字の外廓をなすは草木がズンズン成長する盛んなありさまをあらはした文字である。さて我々の住居にしても南向きの家は冬は日當りがよく、夏は冷しくて生活上まことに都合がよい。かうした關係から「天子は南面す」といふ言葉も出來たのであるが說文の丘(小篆)の字のところを

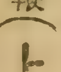
見ると「北に從ひ一に從ふ。土の高きなり。一は地なり。人居は丘の南にあり。故に北に從ふ。中邦（支那人が自分の國の自稱）の居は崑崙山の東南にあり」とあつて暖かい南を人居としてゐる。支那民族の中心人種たる漢民族はもと中央アジャの高原で牧畜を以つて生活してゐたが、水草を逐うて次第に崑崙山脈の麓を過ぎり、黄河の兩沿岸に腰をおちつけたもので、彼等がむかし遊牧民族であつたことは明らかである。ところで遊牧生活に大切なものは何といつても水草であるが、牧畜に適する水草の繁茂（）せるところは所謂崑崙山の東南で暖なる南の地方でなければならない。そこで「君知るや南の國」でミナミミナミミとあこがれたものであらう。だからミナミといふ字に羊の如き獸角と牧畜に適せる草木の繁茂せるかたちとを組合はせたのかも知れない。なほまた新地を開拓するには他の團體とかなりの鬪爭もあつたらうから中間のの字はその場合の兵器と更に羊にも利かせてゐるのかも知れない。

74【北】ホク　新　きた（三・一五）　督　ホク（五・四）　假　北條（ほうでう）（七・六）　北京（ペキン）（七・一二）

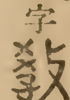
小篆ではである。人の字の條下にあるやうに人の象形から出來た文字で人間が互に背中合はせをしてゐるのである。本義はソムクといふ字で肉月がついて背となれば肉體の正面にソムク意でセとなり、また乖の如く加へられてソムク・ハナレル（乖離）ともなるのである。

北の字が方角のキタとなつたのは南に反した方向だからである。何が故に南を標準としたかは南の條下について承知されたい。なほ參考のために附け加へておくが西洋流だと方角は北を標準とする。地圖の矢のシルシがその一例である。これは地球の磁氣に關係するものであらうが、同じ磁氣の關係から出來たものにしても支那では指南車の如く北を默殺して南をあげてゐるのは南の方を本態としたからである。そして東西南北を四隅に分書するに當つてもの如く南を上にする。この考へが根本になつて、我が國でも「北面の武士」略して「北面」の語などの使はれる所以である。

75〔學〕　ガク　新　ガク（三・一六）　替　まな・ぶ（七・二）

古文のなどから小篆のとなり、現在の字形になつたものである。古文の第二形と小篆と現在の活字體の學とは極めてよく似てゐる。これらはいづれも子供（）が家の中で保護をうけつつ（）（）ものごと（）を手に取るやうに（）教へられてゐるのである。古文の第一形にはが組合はされてゐるがこの字は鞭（）と手（）との合字にて後の扑（撲）といふ字の本字である。敲・鼓に含まれる旁がそれであり、現在の活字體では枚・牧・效・教等の旁の如く變化してゐるものでタタクといふ意の文字である。それ故教の字に含まれてゐるのは數

育者が所謂「敎鞭を執り」覺えの惡い者や行儀のよくない子の薰育に當る意である（父・君の條を見よ）。

學の字は今ではマナブと使はれてゐるが、この字の作意から見れば寧ろヲシヘルことである。もとはマナブもヲシヘルもハッキリした區別がなかつたものらしい。卽ち敎（をしへる）の字は學の字の兩手と家の形とが省略されたものに過ぎないのを見てもわかるであらう。またナラフといふ意の效の字も學・敎の系統を引いたものなることは明かである。

76〔校〕 カウ けう 新 カウ （三・一六）

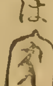
木と交との合字。說文によれば本義は木を交へて作つた木囚（かせ）といはれてゐる。だからこの字は會意文字で交は更に聲符をも兼ねてゐることとなる。

學校の校に使用されるのは璜といふ字に假借せられたものだといふ。璜といふ字ももと〳〵學校の意味に作られたものではなく玉で作つたこんな形をした服飾具のことである。玉を半分にしたものだから半璧といはれる。そこで玉と聲符たる黄とを組合はせたもの。この字が學校の意味に用ゐられるやうになつたのは、もと天子の學校卽ち帝都の大學校には、周圍にお濠がめぐらされてゐたので璧廱といつたものである。しかるに諸侯の學校はこれと同様にするわけに行かないから濠を半分にした。その濠の形が半璧の璜に似てゐるところからやがてこの字が學校の

ことに用ゐられるやうになつたものといふ。のち學の省畫と黄とを組合はせて黌と書くのもそのためである。更に學校の意味として校の字が用ゐられるのはこの璜の音に假借せられたものであることは前に言つたが、或る説では敎の音に假借せられたものともいはれてゐる。

校の字はまた覈の音に通じて校合と使はれクラベタダスともなり、號に通じて將校の校となり軍中に號令すること又は號令する者ともなる。

77〔家〕 カ け　新　いへ（三・一六）　替　ケ（四・一七）　や（六・四）　カ（五・二一）

ウ冠と豕との合字。古形に等がある。上部が家の象形なることは説明するまでもなからう。下部に豕（ふた、豚）が加へられてゐるのは支那では豚を常食としてゐたのでイへなる觀念をあらはすに建物の象形たる宀（住）に更に豕（食）を組合はせたものである。羊や豚などが犧牲として神に捧げられたことは牛の條下で説明したとほりであるが豚は三牲（牛・羊・豚）の中でも最下等のものであるからどこの家でも飼ひ、またどこの家でも食つたものである。日常人々の口に上せられるものが文字に應用されたことは當然で、中にはの如く犬を組合はせたイへなる文字もあるくらゐである。

なほイへの象形から來たものにウ冠の他麻垂（まだれ）（庭を見よ）、向・奥等に含れる冂等がある。穴の字の

條下にて說明をする。

78〔字〕ジ　新　ジ（三・一六）

ウ冠と子との合字にて本義は母親が乳を與へて子供を育てる意。卽ち家（宀）の中に子供を大切に入れてゐることを以てそれをあらはしたものである。文字の字として使用せられるのはもと字といふ言葉に對して文字がなかつたので幸に同音なるこの文字を假借したのであるが、この字は學の字たるの下部と同形であることは注目すべきである。卽ち教育――子供を育てるといふことには精神的及び肉體的の兩方面があり、學は主として精神的文化教育をあらはし、字は肉體的方面のものであるが、やがてこの字が文字の字として假借せられるやうになつたのはいはれなきことではない（育の條を參照せよ）。

我々はふつう字のこと（字といふそれ自體もこゝではよくないのだが……）を「文字（もじ）」とか「文字（もんじ）」と一と口に言つてゐる。しかしこれを嚴格にいへば「文」と「字」とは區別されてゐる。漢字のことに何時でも引合ひに出される「說文」といふ書物は實は「說文解字」が本名で、便宜省略して「說文」と呼んでゐるのであるが、この書名が特に「說文解字」と題せられ、文と字との二字が使はれてゐるのは漫然たる考へからではないのである。

然らば文と字とは如何なる差別があるかといふに、宋の鄭樵の六書略には「獨體を文とし合體を字とす」といつてゐる。どういふことかといふと今日我々の用ゐる漢字の大部分はその形式上からいふと既に作られてゐる一つの文字（A）と、更に他の文字（B）とを組合はせて、そこに新しい（1）なる文字を作る場合が多い。たとへば

鳥（B）
口（A）
　　鳴（1）（口と鳥とを組合はせてナクの意とした）

日（B）
木（A）
　　東（1）（木と日とを組合はせて太陽が木の間から出る方向ヒガシとした）

の如きものである。此の場合における鳥、口、木、日等の（A）（B）に屬する文字はそれぞれ鳥の形、口の形、木の形、太陽の形から出來た文字であるから、これを分解したり切離したりすることは出來ない。かかる文字が獨體でありこれを文といつたのである。然るに（1）に屬する鳴・東の如き文字はその字を作る當初において既に異つた二つの概念をもつ二箇の文字を組合はせて、この兩者の概念を總括して新らしい他の概念を作つたものであるから、當然これらは二箇の文字に分解することが出來る。かかるものを合體といひ且つこれを字と稱したのである。説文が字を説明して「字は滋なり、孳乳して滋多きなり」といつてゐるのもやはり合體といふことを言ひあらはしたかつたものであらう。だから漢字の A＋B＝1 に於てA及Bは單體（Simple）であり、1は複

合體（Complex）となる。A及びBは化學でいふところの元素（Element）の如きもので單體（Simple Body）である。この單體に相當する「文」を說き、化合されたる「字」を分析し解剖したのが說文であるからその書名を「說文解字」と題した所以である。

今日では文は多く文章の意味に使はれ文字のことには字書・字彙・字典・漢字の如く字の方が用ゐられてゐるが以前は反對に文の方が用ゐられた。說文の各部の初めに「何百何十何文」とか「文何十何新附」とあるのは文字兩方を文といつたものである。但し各部の初めに「凡何千何百何十何字」と字數を計算する場合には字の字を使つてゐる。しかし文の方が多く使はれたことは事實である。古文孝經といふ名前も文章の古體といふ意味でなく古文で書いてあつた孝經といふ意である。現在我々は小篆以前の古い文字のことは古文と稱し古字とは言はない。本書に於いても小篆以前文字は古文又は古形と云ふ言葉を用ゐてゐる。また合文析文の如き言葉が漢字研究者の間に使はれるのもそのためである。

79〔新〕 シン

新 シン（三・一六）　**舊** あたらし（三・一六）　あらた（一〇・一）　**假** 新田（にった）（七・六）

にひ（六・二）　あら（一一・七）

新の字はもと單に亲木と書いたもので辛と木との合字である。本義はタキギのこと。そこで聯想作用により後に斤（斤・斷を見よ）の字が旁に加へられて新とされやはりタキギの意味に使はれたのであ

るが、アタラシイといふ言葉の音がタキギといふ言葉の音と同音だつたため、便宜上タキギ（新）の字をアタラシイ意味をあらはす場合にも借りて用ゐるやうになり、とう／＼本義のタキギが忘れられて全くアタラシイ意にのみ專用され出したので、そこでタキギの方へは更に草冠がつけられて薪なる字が出來た。いはば間貸しをしてゐるうちいつの間にか間借人に主家まで奪はれた形の文字である。

薪

では亲といふ字はいかにして出來たかといふに、說文には木に從ふ辛の聲としてあるやうに、活字體では立と木との合字になつてゐるが原形は小篆の如く辛と木とであつて、意味は木であらはし辛をその聲符とした。しかしタキギは火をつけられるのでさぞツライことだらうといふ聯想から特にこの聲符を選んだものかも知れない。

80〔今〕キン こん　新 いま（三・一六）　替 コン（四・六）　假 今日（けふ）（三・二〇）　今年（ことし）（四・一）

△と㇏との合字。上部は集合の合の字の上部と同様にモノが集まること。即ち△はモノが三方から集まつてゐる指事。下部はオヨブこと。即ち上から下の方へダラ／＼と曲つた線を引いてそれをあらはしたもの。そこで既往のことが相集つて現在に及ぶの意からイマの意となつたのである。

81〔青〕 セイ しやう 新 あを（三・一六） 替 セイ（六・一七） ジャウ（一二・八）

古形は青にて說文によれば生と丹との合字。下部の丹は丹青の丹で「あか」と訓ぜられる字である。說文には丹は赤色の材料となる石ころの象形だといつてゐる。この赤より青が生ずる——口紅などの濃きものは青びかりを發する——といふ考へから作られたものだらう。一說にはこの丹は丹心卽ち赤心、赤誠、まごころで木の中心の赤味を帶びてゐるところのことを意味し、そこから枝葉に滋養が供給されて草木の青々と繁茂するによるとも解釋されてゐる。

この兩者いづれにしても青の字の下部は月ではない。卽ち青に從ふ文字の清・請・精・情・靜等がそれである。なほ青の古文の下部は井の字だといふ說もある。

82〔寺〕 ジ 新 てら（三・一六） 替 ジ（一一・二八） 假 榎寺（えのきでら）（一〇・二三）

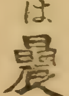
この字の本義は政治をつかさどる役所のことにて、之と寸との合字。卽ち小篆の寺が現形となつたものである。寸の字が加へられてゐるのはその字の條下にて說明したやうに政事には法度があるからである。また之は聲符が主となつてゐるが役人が常に政廳のあるところへおもむくといふ義も幾分含められてゐる。我が國でサムラヒと訓ずる侍の字は寺廷に伺候する役人の意から

侍

出來た文字。故に人扁へ組合はせるに義と聲符とを兼ねた寺をもつてしたのである。

寺の字が佛寺のことになるのは後漢の時印度から佛敎を輸入し、僧侶を時の役所たる鴻臚寺におき後に白馬寺などを建てたからである。

83〔星〕セイ しやう　新 ほし（三・一七）　替 セイ（一二・一三）ジヤウ（一二・一九）

古文に等がある。銀の小砂をまき散らしたやうな澤山の星を三つの圓形にてあらはしたもの、中の點はキラ／＼光る光りの指事ともいふべきである（日・月を見よ）。第三形の下部には更に聲符たる生の字が加へられたもので現在の星の字の元をなしてゐる。即ち現形の星は上部の三箇のを一箇に省略したもの。星をあらはすに三つのを書いたものが現形にもその名殘りをとどめてゐるものに參の字がある。冬になると日沒直後東の方に行義よくならんで出る星のことで古形のから來たものである（參を見よ）。朝早いことを晨といふがこの字ももとはの如く

晨

星を三つ書いたものだが後に省略して一箇とされた。この字が早朝のことになるのは「夕に月をふみ旦（あした）に星をいただく」といふ言葉の通りまだ星が天上にちらついてゐる早朝といふ意から出來たものである。

歳・辰の字が星に關係をもつて居りまた二十八宿・十二宿・九星などいふやうに星は天文・暦

法・卜筮等に非常に關係が深いものであるからここで辰といふことについて一とわたりの說明を加へておかう。

木（キの）		火（ヒの）		土（ツチの）		金（カネの）		水（ミヅの）	
兄（エ）	弟（ト）	兄（エ）	弟（ト）	兄（エ）	弟（ト）	兄（エ）	弟（ト）	兄（エ）	弟（ト）
陽	陰	陽	陰	陽	陰	陽	陰	陽	陰
甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉
甲戌	乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰	辛巳	壬午	癸未
甲申	乙酉	丙戌	丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰	癸巳
甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥	庚子	辛丑	壬寅	癸卯
甲辰	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌	辛亥	壬子	癸丑
甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥

支那では古くから甲乙丙丁の十干、子丑寅卯の十二支を組合はせて年月やモノの順序を記してゐた。即ち現在還暦といふ言葉を使ふがこれは十干と十二支とを順次組はせて行きそれが六十をもつて一廻轉し再び最初の甲子にかへることである。この暦數に使用せられたる子丑寅卯等の文字は、單に音を假借せられたもの乃至記號的文字だともいはれ、又一方さうでないとも論じられて居りなか／＼むづかしい議論がありしたがつて本書の目的とするところとは遠いこととなるからそれらのことは一切省略するが、とにかく十二支は十二辰ともいはれ天體の十二宮のことである。この十二宮といふのは黃道十二宮といはれるもので黃道とは太陽が一年中に通過する見懸け上の軌道を名づけたものである。そして黃道附近の星の集りを結びつけてそれ／＼動物の形に見立てて十二の名稱を與へたものがネ・ウシ・トラ・ウの起りである。これは記憶に便するためとか又は他の未開な國の人々へ天文の智識を傳へるための方便か

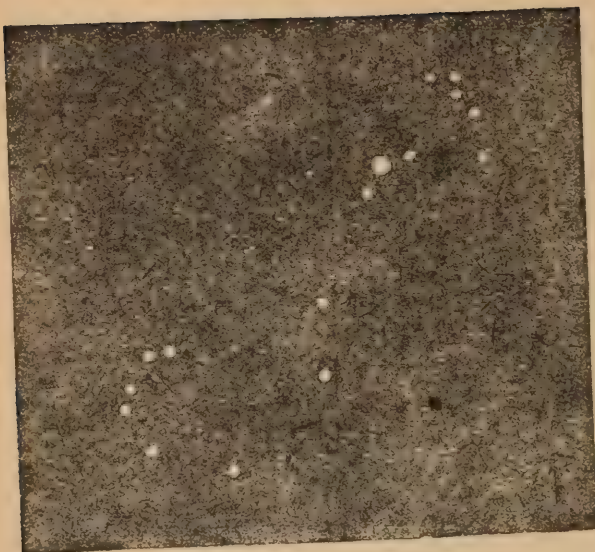
ら起つたものであるが、今日黃道の南北十二度までの範圍を動物圏（十二獸帶）といふのもそれから起つた名稱なのである。そしてこの十二宮の名は支那で使つてゐたものと希臘時代から傳はつたものと殆んど同一であるから、その出所も同一系統に屬することが想像せられる。

さて年月を記す際に何月吉辰と代表的に書かれる辰の字であるが、この辰といふのは何かといふにこれはかかる星の衆團の中から特に目立つてゐる標準的な星を選り出してそれに與へた名稱なのである。現に我等が北辰明見樣として尊崇するものは北極星のことでこれも辰の一種だつたのである。

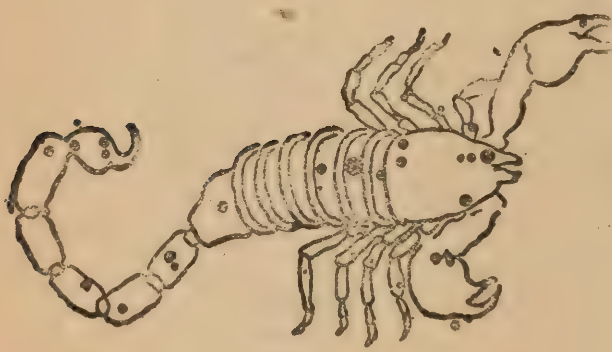
何が故にかかる標準的な星が必要になるかといへばそれによつて氣候の早晩を判定するよすがとしたもので、太古生活の基礎となつた農事に時を誤らないことが主要な原因だらうと思ふ。假りに若し鎭守の森の二番目の杉の木の上に、赤味を帶びた大きな星が出始めたらもうそろ〳〵菜種を蒔いてもよいとか、麥を蒔かねばならぬ頃だとか、とにかく星を以て農業上に一つの標準を定めることが出來たらいかに人間生活にとつて好都合なことかは想像するに難くない（この星の例はよくないが）。更に荒漠たる森林に立入つて歸路に迷つた時、北斗を發見して方向を見定めるやうなことを知つてゐたならば、それが人間生活に如何に役立つことであらうか。かうした關係からも自然に星が注目せられるやうになつて來るのは當然なことと思はれる。

歴史以來の文明は西紀前約三千年頃からだと言はれてゐるが、當時の文明は農業文明でその頃から各民族はおの〳〵の土地に適した農業暦を作り出さうとしたことは歴史上明かなことで、エヂプトの古代においてはシリアスを、バビロンの古代においてはカペラを觀察して一つの標準星としてゐた。かうした目的のために日沒直前又は日出直前にあらはれる目立つた星に對して與へられた名稱が支那の所謂辰なのである。

この辰は時代と地方とによつて異るが、周以前即ち西紀前一千年頃に用ゐられたものの有名なものは「大火」と「參」と「北斗」である。大火は一名「火」ともいはれ今日の學名でサソリ座のアルフア（第十四圖中のアンタレス）と稱せられる一等星である。夏の夕方南中する大きな星でとりわけ赤味を帶びてゐるから「大火」又は「火」といはれる



（第一四圖）



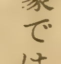
（第一五圖）

卷三の新出漢字（八三）

所以である。この星は長く殷の時代を通じて用ゐられてゐたため、やがて辰といへば大火のことを指稱するやうになつた。この星が南中する時を夏の眞中、卽ち五月の標準としたものといふ。第五の月のことを辰といふのは辰が十二支中の第五位にあるからである。

辰

脣　唇　賑

そこで辰といふ字の古文をしらべて見るにとなつて居り第一四圖及び第一五圖に見る如き蜘蛛科に屬する毒虫蝎（さそり）の形狀及びサソリ座に類似してゐる。小篆ではとなりやや今形の辰に近い。禮記の月令に「蟄蟲始めて振く（うごく）」とあるところや古文の形などから察するに辰の字は蝎の象形か、又は他の動物から來たもののやうに想像せられる。そこで他の文字に組合はされる場合において震の如く雨冠がつけば天の霹靂となり、肉月がついて脣となれクチビル（唇は俗字）となつてゐる。更に貝（古への通貨）の字が加はれば賑となつて貨物の集散する殷賑なる都となる。かくの如く辰の字の組合はされた文字はいづれを見てもすべて動的事象が表現されてゐるのは、これ標準となる辰を含んでゐる星座が絶えず動いてゐるからであり、そのためにまた辰を含む星座に對して動物の名前を與へたものであらう。

農業の農に辰の字が組合はされてゐるのも天の運行によつて農業の時季を判定したことによるものであらう（農を見よ）。

蜃

辰の字と虫との合字である蜃に就いては蛟の屬にてその狀蛇に似、能く氣を吐いて樓臺城郭の

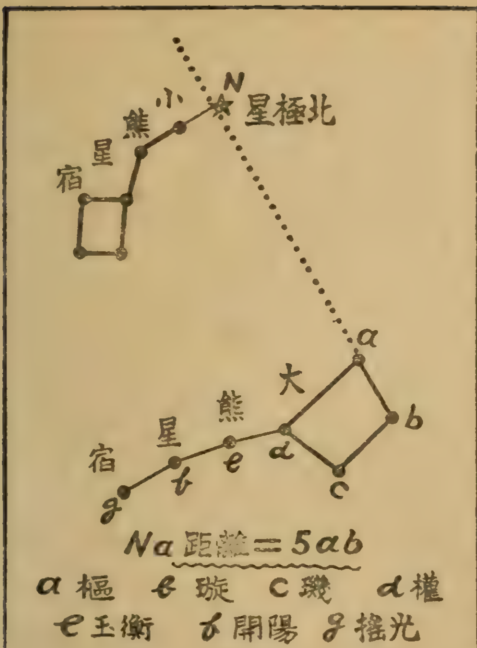
狀をなすといはれるがこれは蜃氣樓のことだらうが、それが蛟の屬といふのは龍の考へから脫化したものであらう。しかもタツマキといふ現象と同樣にやはり天文に關係を有してゐることは注意すべきことである。

辰の字は我國ではタツと訓ぜられ、龍と同一に使はれてゐるが、支那においても「國語」(戰國時代に書かれたものといはれてゐる)に龍角と書べきくところに辰角とあるから、辰、龍は同一物に見られたことは明らかである。我が國でタツと訓ぜられるわけは、季節を建てる卽ち季節の標準といふことからいつたものがやがて龍に混用せられるやうになつたものともいはれてゐるが、これはいささか問題として保留しておく。

さて龍とは如何なる動物かといふに、支那では麟・鳳・龜と共に四つの靈物とされ四神とこれてゐる。頭は蛇に似、角は鹿に類し、目は鬼、腹は蜃、鱗は魚、その爪は鷹の如く、掌は虎、その耳は牛に似てゐるといふ靈物だから、諸獸の特異なところを一身に寄集めたが如き觀がある。更に蛟龍(鱗のあるもの)應龍(翼のあるもの)虬龍(角のあるもの)螭龍(角のないもの)等の種類もあり見龍・飛龍等の語もあり、いかに龍を神聖視したかがわかる。然し考へて見るに、かかる動物は到底我等の常識では此の地上のものではなく一箇の架空な動物たるに過ぎない。また龍はアギトに珠をもつてゐると言はれますます怪奇の極であるが、これはサソリ座の中で最も光彩のある星卽ちアルファをいつたものであ

らうと新城博士はいつて居られる。說文によれば「龍は鱗蟲の長にして、能く幽、能く明、能く細、能く短、能く長、春分にして天に登り、秋分にして淵に潜むものなり」とあるのは、これ星の運行を神秘的に述べたものにちがひない。

現在我々は辰といへば北辰の語があるので北極星を想像し、ひいて北斗を思ひ出すがこれは北方の地方で使用せられた辰である。北斗七星卽ち大熊座を柄杓に見立て、その斗（ひしやく）（斗を見よ）の柄に相當する權と搖光との二つを結んだ線が、日沒直後垂直に下を向いた時を一年の始めとするのである。論語爲政篇に「子曰く、政をなすには德を以てす。譬ふれば北辰其の所に居り、而して衆星之に共ふ（むか）が如し」とあるやうに北極星は殆んど天の北極に近くこれを中心にして北斗七星が動くのである。そこで第一の月を十二支にて子とするのはこの字の古文が北斗七星が斗杓を下に向けて地平線に垂直をなしてゐるところをうつした象形だからであるといはれてゐる。

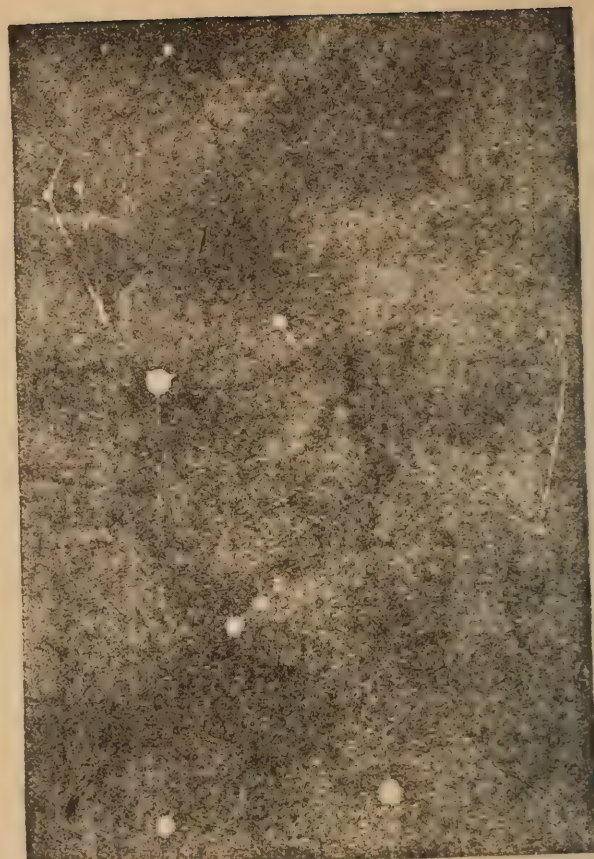


（第一六圖）

次に「辰」の中の參といふのはオリオンの三ツ星のことで、この星が日沒直後東方に見え始める

時を冬の眞中即ち十一月の標準としたものといふ。即ち第十一の月を戌とする所以である。この戌の古文は戉と同じくその意はオノであるが、參の附近の星の集團を斧鉞に見立ててそれを象形的文字としたのであらうと言はれてゐる。

以上は理學博士新城新藏氏の說を參考にして說明を加へたものである。



（第一七圖）

84〔光〕 クワウ 新 ヒカリ（三・一七） 替 クワウ （七・一六） 假 光盛(みつもり)

小篆は光にて說文によれば火と人との會意文字となつてゐる。光りのあるところへ人が密集するといふやうな會意かそれとも人が燈火を高くかかげてゐる會意か未だよくわからない。古文の中には炗となつて居るものがあり、更にこの字の系統を引いたものに黄（黃）の字もある。黃金色といふやうにこれも光り輝くことに關係してゐる。これらの古文の上部は廿卽ち

二十にて數の多きことをあらはしたものといはれてゐる。卽ち火の多き意にてヒカリカガヤク意になると説明されてゐる。

85〔何〕カ　新　なに（三・一七）　替　いづれ（一〇・一）　假　何時（いつ）（六・一〇）　何所（どこ）（七・一六）

人と可との合字。可は聲符。本義は人が物をニナフ義。訶（シカル・トガメル）の音と同音だつたのでその意味にも使用せられるやうになり、つひにものを問ひ訊すところのナニ・イヅレ・イクバク等の意となつた。そこでニナフの意の場合には荷の字を使ふやうになつた。實は荷の字の本義はハス（蓮）なのであるが「薪をになふ」などの聯想とでもいふべきか特に草冠のあるこの字が借用されるやうになつたものである。

荷

86〔弟〕テイ　だい　新　おとうと（三・一七）　替　テイ（一一・二）　假　兄弟（きやうだい）（四・二四）　弟橘媛（おとたちばなひめ）（九・三）　弟子（でし）（七・一五）

この字の古文はで物をツカネル順序をあらはしたもので、ものを重ねてナメシガハでグル〲巻きつけたかたちといふ。ものをつかねるには順序があるからそこで同胞の順序を示す意の文字たるヲトウトに轉用されたものといはれてゐる。

そして字形が類似してゐるところより後には第一第二の第の如く本義の場合には竹冠となつた

のであるが、これは往古の書籍は竹簡で作られてゐたからその聯想によるものであらう。詳しいことは第の條へゆづる（編をも参照せよ）。

87〔兄〕ケイ きやう　新 あに（三・一七）　替 ケイ（一〇・一八）　假 兄弟（きやうだい）（四・二四）

古形は。兄は弟妹を指導する地位にあるものだから口と人とを組合はせたといはれてゐる。祝人。祝詞等の祝に兄の字が含まれてゐるのも神に奉仕する者は衆人中の長老がこれに當るからだといはれてゐる。

88〔書〕ショ そ　新 か・く（三・一八）　替 ショ（五・二二）　假 書（ふみ）（一一・二四）

古文はで聿と者との合字である。聿は筆の本字。これにて意をあらはし者は聲符である。しかし單に聲符といつても者は諸の字の本字でモロ〳〵といふ意があるから、アレやコレと委曲を盡して書き分けるといふ會意も含まれてゐる。

89〔池〕チ　新 いけ（三・一八）

もと揚子江の一支流の川の名として作られた文字。そこで河や江と同じ考へ方で三水を書き、

その川の呼び名と同音を有する也の字を組合はせたものである。イケのことになつたのは音の假借である。なほ池の字の旁の成因については虫。地の條を見よ。

90〔虫〕キ　新　むし（三・一八）　替　チユウ（七・一九）

古形はで蝮の象形。頸部のふくらんでゐる様や鎌首をあげてゐる様がよくあらはれてゐる。本義はマムシのことで音はキであるが今日では蟲の字の略字と見なされ一般に虫の意となり音もチユウといはれるやうになつた。しかしもとはムシの總名としては蟲の字を、昆虫の意としては䖵の字を使用したものである。蠶の字の下部に組合はされたものがそれであるが今ではこの字は單獨では使用されなくなつた。

小蛇の象形（巳や）蛇の象形（它）などとよほどよく似てゐる文字であり、虫の字に它が加へられると今日の蛇といふ字になる。「蛇蝎の如くきらふ」といふ言葉があるやうに（まむし）や（へび）の屬を我々は非常にきらつてゐるが、これは原始時代において我々の祖先がこれらの爬虫類に大變なやまされたからであらうと思はれる。

蛇

そこで現在の蛇といふ字がその象形の外に更に後にまで加へられて蛇とされたものであらう。它の字は現在では也と書かれ地・池・他等に組合はされてゐる。これらの文字に組合は

された也は聲符となつてゐるのであるが、しかし地の字の如きは單なる聲符と解釋することは出來ない點がある。このことについては地の字の條下に述べておいたから是非參照してもらひたい。

91〔名〕 メイ みやう　新　な（三・一八）　替　メイ（四・一七）　ミヤウ（七・二三）

夕と口との合字。むかし燈火の發達してゐなかつた時代には普通の家には燭をつけなかつた。そこで夕方から晩にかけると家の中が眞暗になり同じ家にゐる親子でさへ誰れ彼れの見分けがつかなかつたので名名（めいめい）自分の名をいつたものである。よつて夕と口とを組合はせてナの字とした。

我が國のタソガレ（黄昏）は「誰（た）そ彼（か）れ」から來たものといふが、瓦斯燈や電燈が街燈として用ゐられなかつた時代には全く「誰そ彼れ」の感を深うしたものであらう。そしてすでに「誰そ」「彼れ」の語がある以上そこには當然「熊さん」とか「八さん」とか答へるだけの名があるわけで、これを見ても名の字が夕と口との合字とされてゐることは故なきことではない。

92〔前〕 セン ぜん　新　まへ（三・一九）　替　ゼン（五・一六）

古形はにて（止（あし））と（舟）との合字。そこでススムといふ意となり、更にマヘの意にもなつた。現形の前は更に立刀が加へられたのであるが、實はこの字はハサミといふ意とし

て作られたものである。即ち歬(セン)が聲符とされたもの。ところが後になつて前の字が前進の意に使はれるやうになつてからハサミのときには更に今一つ刀をつけて剪の字が出來るやうになつてしまつた。

93〔色〕 ショク しき　新 いろ(三・一九)　替 ショク(九・五) シキ(一二・二)　假 金色(こんじき)(九・一六)

古形はにて人と卩(せつ)(節の本字)との合字。「十人十色」といふ言葉もあるが、人の心の動きは色になつて顏にあらはれるといふ會意から出來たものといふ。

94〔來〕 ライ　新 き(三・一九)　替 くる(三・二四) ライ(四・一七) こ(六・二三) きたる(七・三)　假 勿來(なこそ)(九・一六)

古形はで說文に「周の受くる所の瑞麥なり。その芒刺に象どる」とある通りに麥の穗を象つたもの。即ち第一形の上部のは麥の穗先きのに相當し下部は莖や葉や根をあらはしたものである。から出來た禾の字と比べ合はせればよくわかるであらう。この麥がもと天から降つて來たといふ傳說があるので、來がキタルの意に轉用せられるのだといふ。また單に音の假借ともいはれてゐる。キタルといふ意をあらはすために行人偏を組合はせた徠の如き別字が既に周の時に出來てゐる。瑞麥が天降つたといふことはとにかく傳說に過ぎないが、漢字中には

徠

法の字の如く傳説がもとになつて出來た文字もあるから來がキタルといふ意に使はれるのを單に音の假借と說明し切るわけには行かないかも知れぬ。面白いのはキタルといふ字に用ゐられる來よりも却つて麥の字の方に足の象形が加へられてゐることである(麥を見よ)。

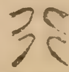
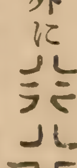
耒

來の字の本義はコムギとせられ、麥の字はオホムギ又はムギの總名として用ゐる。

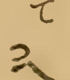
來の字は略して耒・来とも書く。來の字に紛れ易い文字でやはり來と同音の耒(すき)といふ字がある。耕・耘・耡の如くすべて耕作に關する文字に組合はされてスキヘンといはれてゐる。耒の字は曲つた木で作つたスキのことで木の先きに雜草がひつかかつてゐるかたちを現はしたものである。來の字と區別するためにライスキといはれてゐる。

95〔行〕

カウ ぎやう　新　い・く(三・一九)　當　カウ ギヤウ(五・一五)(七・二)　ゆ・く(七・一〇)　おこなふ(七・二四)　假　行燈(アンドン)(八・一六)

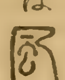
古文はである。左右對象的の文字である。筆書の便宜上現在では彳(てき)と亍(ちく)とになつてゐる。テク〳〵歩くことを躑躅(テキチク)といふがそれの本字である。行の字は前掲の外にがあり小篆ではとなつてゐる。足の字を略してとし、それを三つ重ねて幾度も前へ進むことをあらはし、また反對の形のものを右へ組合はせてゆるやかに往きつ戻りつする意の文字としたのである。この字はまた道が四方にわかれてゐるから來たものといはれてゐるが行の字形は足の

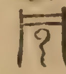
形から來たものである。このことについては街の條を見よ。

彳(てき)の字は扁として使はれすべてユクとかススムの意が持たせられてゐる。行人扁といふのは字形が人扁に似てゐるのでそれと區別するためである。左扁を用ゐて右旁を用ゐなかつたのは筆書の便宜によるまでである。最初行くとか進む意味の場合には專ら行人扁が書かれたのであるが後更に足趾の象形たる止の字が加へられて之遶が出來たものである。だから行人扁も之遶も意味は同じなのである。しかしもとは徒・徙の如く或る字(此場合土・止)の左方へ彳を、下部に止を書いたものであるが後に彳・止が一緒になり現在の如く辶に變化したものである。なほ延・廷等に含まれる廴も之遶から來たものである。これは之遶を彳止に書くのが面倒だから省略してとしと書いたのがその起りである。

96〔風〕

フウ　新　かぜ(三・二〇)　替　フウ(六・二一)　假　屛風(びやうぶ)(一二・二一)　風情(ふぜい)(一二・二〇)

この字は種々議論のある字であり未だ適確なる成因がわからないが小篆ではとなつてゐる卽ち凡と虫との合字。凡はフー〳〵と風の吹く擬音を聲符として組合はせたもの。虫は星の條にて說明したやうに辰の字が虫から來て居り更に蜃(蜃氣樓)の如き字や虹の字の如き天象等に關する文字に虫が加へられてゐるのを見るに虫は氣候とか雲氣をあらはしたものであらう。或る說では

凬はもとと書いたもので凡と雲の本字たるの合字とされてゐる。或ひは雲乃至電（いなづま）（申を見よ）の形をもつて風雲の風をあらはしたものかも知れない。

97〔男〕

ダン なん　新　をとこ（三・二〇）　替　ナン（四・二）　ダン（八・一五）　を（五・二一）

田と力との合字。田野の耕作牧畜等すべて力役には男子が從事したのでヲトコをあらはす文字として田と力とを組合はせたのである。

しかしここで注意しておきたいのは田の字の條下においても説明した通り、この字に含まれる田は今日でいふ田畑（はたけ）の田の如き狹い意味のものではなくむしろ畋獵と熟する畋に相當するものと見たい。即ち農業文明以前の畋獵時代において男子が狩獵や牧畜に從事してゐたことから出來たものである。畜の字にしても田畑の耕作に從事する家畜の意味で田が加へられたものと見ればそれまでだが、しかしこれも畋獵に關係のあるものと見る方が一層明確にその眞意が理解される。

98〔草〕

サウ そう　新　くさ（三・二〇）　替　サウ（八・一〇）　假　草履（ざうり）（七・一八）　煙草（タバコ）（九・一五）

もとは草が地上に生えてゐる象形の屮を二つ重ねて艸としたもの。のちに聲符字たる早の字が加へられて現形となつたものである。早は勿論聲符であるがまた草とも關係のある文字であ

ることは早の條下で述べた通りである。

艸の字は筆書に際して艸と書き更に略して卄 廾 ㄓとも書く。草冠（くさかんむり）又は草冠（さうかう）と稱せられ草木に關係のある文字に組合はされてゐる。

99〔近〕 キン　こん　新　ちか（三・二〇）　替　キン（七・八）　假　近江（あふみ）（一一・七）

斤と之遶との合字。道のチカイこと。故に之遶（行を見よ）。斤は聲符（斤・斷を見よ）。

100〔着〕 チャク　新　き・る（三・二二）　替　つ・く（四・二一）　チャク（五・一九）

箸　著

この字は箸（はし）といふ字が變形したものである。箸といふ字の小篆は〓で竹と者との合字。また筯とも書き本義はハシのこと。故に竹冠。者・助はともに聲符である。箸の字が着となつたのは漢の時代に竹冠を艹と書く習慣があつたのでこれを著と書くやうになり、更に着の字に變化したものである。

到着とか着物といふ場合に用ゐられるのは絮の音に假借せられたものである。即ち打ちかへしの古綿を綿入着物とするから身にツケルキモノとなり到着の着ともなるのである。

著者・著名となるのは曙の音に假借せられたのであるがもと／＼いづれも箸の字から出來たも

のであるといふことを忘れてはならない。

101〔物〕ブツ もち　新 もの（三・二二）　督 ブ（四・二一） もつ（五・八）

牛と勿との合字。勿（ブツ もち）は單に聲符として組合はされたもの。牛の字の條下に說明したやうに牛は動物の中でも體軀が大きくまた人間にとつても非常に貴重な動物であるから、他のモノと區別することが容易である。そこでモノの意をあらはすために牛を組合はせたものである。

102〔黑〕コク　新 くろ（三・二二）　督 コク（一一・一）

熏　燻

黑の字の古形は㷍。卽ち囪と炎との合字。上部は古文のマド（窓）である。說文に「火の熏ずる所の色也。炎上りて囪を出づるに從ふ」とある通り煤煙のため窓が黑くなることから考へられたものである。熏（くすぼる）の字もこれと同じ意匠から出來た文字。後更に火扁が加へられて燻の字も出來た。

103〔廣〕クワウ　新 ひろ（三・二二）　督 クワウ（五・七）

广と黃との合字。本義は御殿とか大屋のこと。故に家屋の象形から出來た广（庭を見よ）と聲符字た

る黄とを組合はせたものである。ヒロシとなるのは御殿の廣いことより轉義したものである。

104【赤】セキ　しやく　新　アカ（三・二二）　替　シヤク（一一・一九）　セキ（一二・一三）

古形はにて大と火との合字。卽ち火がドン〈（大）燃えて居ることよりアカキ意の文字としたのである。

105【祭】サイ　新　まつり（三・二二）　替　サイ（一一・二一）

肉と又と示との合字。はニクヅキにて肉の象形。又は右手。示は祭壇。そこで肉を手に持つて祭壇に捧げる會意より神をマツルの意となる。（示・肉・又を見よ）

106【鳥】テウ　新　とり（三・二三）　替　テウ（八・一三）

古形はにてトリの象形なることは一見して明らかであらう。雉・雙の如き字に含まれる隹も鳥の象形から來たものである。俗にフルトリといはれるのは舊の字の中に含まれてゐる形の鳥といふ意味であらう。

鴿

鳥の組合はされた字は鷄・鴿（はと）。鳩（はと）・鵞（がてう）・鴉（からす）の如くすべて鳥の屬なることをあらはしてゐる。こ

鳩 鵞 鴉 雙

れらの文字の奚・合・九・我・牙はそれぞれその鳥の鳴き聲に似た音を持つ文字を組合はせたものである。

雙の字は一つがひの鳥である。もと贈物とする鳥は雌雄一羽づつをもつてしたから隹を二つと手（又）とを組合はせたのである。又は右手の象形で、贈る意味よりこれを組合はせたものである。よつて隻は一對にならざるもの。

107〔羽〕ウ　新　はね（三・二三）　替　は（四・一七）　ウ（一〇・一二）

鳥のツバサの象形から出來た文字にて小篆にて羽である。習・翌・翼等に組合はされてゐる文字。

108〔時〕シ　じ　新　とき（三・二三）　替　ジ（四・二一）　假　時雨（しぐれ）（五・九）　何時（いつ）（六・一〇）　時計（とけい）（五・九）

この字の古文は旹で之と日との合字。本義は日足が行くこと。故に日を書く。之はユクの意と更にシなる音とをかねたものである。現形では日と寺との合字。日足は一と時一と時と時間を刻んで行くのでこの字はトキなる意に轉義した。寺は聲符であるが、その字の條下にもあるやうに時間といふものは嚴格なるものであるからその會意も含まれてゐる。

109〔空〕コウ く　新 そら(三・二三)　替 クウ(八・一三) から(九・一三)　むなし(一〇・一二)

穴と工との合字。穴の中がウツロなる意。故に穴冠。工は聲符。ソラの意に用ゐられるのは宇宙を見渡せば遠い空と地との間はウツロなる穴にも等しいからである。

110〔夕〕セキ　新 ゆう(三・二四)　假 夕(ゆふべ)(一一・二)

月の字の一畫を減じて月の出る頃、即ちユウべなる意を聯想せしむるやうにして作つた文字である。鳥から鳥が出來たのと似てゐる。

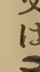
111〔雲〕ウン　新 くも(三・二四)　替 ウン(一一・二四)　假 出雲(いづも)(五・三)

古形はである。第一形は單純にクモの形をあらはしたものといふことがわかるであらう。第二形はさうでなく二は上の字の古形でそれにて天即ち空をあらはし(雨を見よ)下部は雲氣の象形。現形は更に雨冠をつけ加へたもの。それは雲はやがて雨を催すからである。

云

なほ云の字がモノをイフ意味に使はれてゐるのは音を假りて用ゐたのである。

112〔吹〕スキ　新　ふ・く（三・二四）　假　吹雪（ふぶき）（六・一四）

口と欠との合字。欠の字は歌・欲・飲・歐等の旁と同形で古文は。即ち人が口をあけてゐる象形（盜を見よ）。そこで口扁をつけて口より氣の出づる會意。

113〔遠〕エン　をん　新　とほ・し（三・二四）　替　エン（五・一〇）

袁と之遶との合字。道のトホイこと。故に之遶（行を見よ）。袁は聲符（猿を見よ）。

114〔松〕ショウ　新　まつ（三・二六）

木と公との合字。マツのこと。故に木扁。公は聲符として加へられたもの。ショウの音とコウの音とは非常に遠いやうに思へるが、公の字は訟（しょう）・松（しょう）の如く使はれてゐる。これは英語におけるCが發音上（K）と（S）とに分化する（Cake, France）のと同様な現象である。また翁の如くオウともなるが、これらの變化は第一篇第四章形聲文字の聲符の條にて承知されたい。

115〔原〕ゲン　ぐわん　新　はら（三・二六）　替　ゲン（九・一六）

源

小篆では原。泉といふ字の上部へ崖・岸等に含まれてゐる厂（断崖の象形）を組合はせたものである。
本義はミナモト。水源地は分水嶺にあるから崖の象形を組合はせたものである。假借せられてハラの意に用ゐられるやうになり、ミナモトの場合には更に三水をつけた源の字が出來た。

116〔美〕

ビ　み　　新　うつく・し（三・二六）　替　ビ（一〇・二一）　假　美濃（みの）（五・一五）　美作（みまさか）（一〇・二七）

羊と大との合字。羊はもと牛などと同じく犧牲として神に捧げたものであるが、犧牲の中でもよほど大切なもので、とりわけ神樣へはその大きなものを供へた。祭事がすむとそれを下げて皆で一緒に食べたものである。その時の彼等にとつては日本の所謂「お頭つき」の大馳走と同樣なわけで、その味の美味に醉つたことであらう。そこで美味、甘美の意をあらはす文字として羊と大との二字を組合はせてこの字を作つたものである。

中には羊の大きなものはウックシイから美麗、優美の意としてこの字が作られたものといふ人もあるが、試みに動物園に行つて見てもわかる通り羊は決して美しいものではない。これは味のウマイことからひいてウツクシイことに轉義したものである。なほ羊及び義の條を參照せよ。

117〔女〕

ヂョ　によ　　新　をんな（三二・六）　替　ヂョ（四・一一）

古文は。跪坐して神に仕へてゐる姿である。この字形で見るに恭しく兩手をさしのべ爪先きで全體の重みを支へ、膝を折り曲げしかもお尻の部分が踵につかないやうにした恭謙此上もない坐法である。現形の女はこの象形の頭部と脚部とが省略されとなりそれが更に向きをかへてとなつたものである。



第一八圖

支那は我が國と同じく家族制度の國であるが、我が國においては家といふものの癈絶しないことに重きをおき支那では祭祀を絶やさないことにその重點をおいた。ところで父や母の條下で述べたやうに古代の社會においては母權が尊重せられたのでその大切な祭祀には女子が自ら當つたのである。

巫祝・巫女と熟する巫は神に仕へてゐる女のことで人間の最高のものとされてゐるが、これらを見てもいかに女性が重要な地位にあつたかがわかるであらう。

この字は他の字に組合はされて女扁といはれ婦・婢・奴・娼・妓・妬などの如く組合されるまた妻・妾・妄・姦の如く脚部にも組はせられるが、これらの文字は大抵の場合いい意味を持つてゐない。卽ち婦の字の條下に說明するやうに婦・妻・婢・好・妾等の成因は掃除や罪罰に關係して居り、また他の文字が女性を侮蔑する意味で組合はされてゐるのは父・母等の條下に說明した

やうな大昔の母權尊重時代がトックに過ぎ去つて遂に男性が絕對の支配權を握るやうになつたからである。

この字から出來たものには母とか民の如き文字がある。それ〴〵その條下に說明をゆづる。

118 〔國〕 コク かく 新 くに(三・二六) 替 コク(四・二四)

國の字はもと或と書かれたものでそのまた以前は單に或と書いた。この字は棒杙と口とを組合はせたもので角は一定の區域卽ち土地といふ觀念を表象したものである。棒杙の組合はされてゐるのは、ここは自分たちの占有地だといふシルシである(占・弌の條を見よ)。ところが更に境域をあらはすために角の下に一線を加へて或としたものである。これ或の字の起りであるが、これが國となるのはこの字へ更に匚を加へて國とし更に口を加へて現形の國となるやうに一層その境界の觀念をはつきりさせたものである。重複の甚だしいものといふべきである。

國の字の戈はもと地上に立てた棒杙の象形であるから干戈の戈とちがひ點がないのであるが現形の國の字はもはや棒杙(弋)でなく干(戈)になつてゐる。これは古形の棒杙がホコの象形文字たるの第二形の方に酷似してゐるところから國の境界を武器にてまもるといふ聯想でこの字が用ゐられるやうになつたのである。漢字にはかうした例が往々にしてある。

圀　域　惑

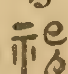
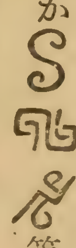
或る人は國といふ字の内部は國家成立の三要素たる土地。人民。主權の三つをあらはしたもので、今日學術上の定說とされてゐる事柄を既に業に數千年前の太古の人がよく知つてゐたものだといつてゐる。その說によれば「或」の字の口はクチにて人民、一は境界線にて土地、戈は武器にて主權といふのである。然し古文の成立を見れば「口」はクチでなくて土地を意味したものであることを忘れてはならない。

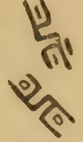
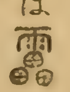
この字の略字には幾種類もあるがその中よく用ゐられてゐるものには国や囻がある。国の字は國土と王（王者）との會意に見立てたもの。水戸光圀と使はれる圀は國威を八方に宣揚するとの意味で秦の始皇帝が國の字にかへて作字したものである。

次に或の字に土が組合はされると地域、境域の域となる。心が組合はされると疑惑の惑となる。國境を守るのは敵が襲つて來はしないかとのウタガヒがあるからであり、また邊境を守つてゐれば絶えず敵が來はしないかといふウタガヒも起るのでマドフとかウタガフとかの意味の文字とされたものである。

119【申】　シン　新　まう・す（三・二六）

この字の古形には（一）（二）の二つの系統がある。（二）に屬する方は申束の

束にて両手でものをしかとツカマへ自ら用心する意。（一）の方はイナヅマの象形で現在の神の字の本字である。神といふ字の示扁（示を見よ）は祭壇を聯想して後につけられたものでもとは單にイナヅマの象形をもつてあらはしてゐた。古文にもやはり祭壇のあるの如きものがあるが右旁はやはりイナヅマの象形である。申の字の古形には上記のほか等があつていづれもイナヅマの象形。イナヅマは空中の電氣に原因して起る現象であるがその來るや忽然として何處からともなく來り、また何處へともなく去りその意全く計り知ることが出來ないのでこれを神と見たのである。

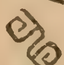
電雷は多くの場合雨を伴ふから電の古文にはの如く大空から雨の降つて來ることをあらしたものやの如く雨滴を配したものもある。また雷の古文はで小篆ではとなつてゐるが、車輪様のものはゴロ〲となるカミナリの意をあらはしたものである。これらは人畜に危害を與へることさへあるので古への人がこの現象を神の啓示と見、これに對して一種の恐怖を抱いたことは當然である。聖人孔子も迅雷風烈には必ず變ず（論語郷黨篇）といひ雷のひどい時や風雨の烈しい時などには容をただし顔色をあらためて恭謙なる態度を持したといふ。

我が國で雷のことをカミナリといひナルカミといふのは單に上の意ではなく神の意の含まれてゐることは明らかで、いかに原始人が雷電を神祕なるものと見たかが想像されるであらう。そこ

で支那においては申と電とはともにカミ（神）と解釋したのである。
學術の進歩せる現在においては吾人は既にこの得體の知れない神（イナヅマ、カミナリ）の本態を十分につかむことが出來た。しかもこれを完全に電光・電熱・電話・電送寫眞・テレヴィジヨン・ラヂオ等にまで利用し、今では却つて人間こそ神の力をもつてゐるものではないかの觀さへあるが、しかしこのテレヴィジョンやラヂオが目に見えない電波の力によるものとすればやはり昔の人の考へてゐたやうに「申は電であり」「電は神である」との考も故なきことではない。ただ昔の人は神（電）の本態をつかみ得なかつたまでのことである（電・雷の字を見よ）。

呻 伸

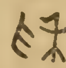
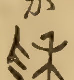
申の字がマウスといふ意に使はれるのはイナヅマに伴ふ音によるのであらう。口が加はつて呻となればウメク、人が加はつて伸となればノベル即ち思ひをノベルこととなる。なほ伸の字は雷電は生物を生長せしむるゆゑノビルの意となり轉じて思ひをノベル（マウス）となつたともいはれてゐる。

說文に申の字の古文としてあげてゐるによく似てゐる字に（玄（くろし））の字がある。幻（まぼろし）の左扁に相當するもので深玄とか幽玄とか熟しすべて物事の奥深いことに用ゐられるが、これは申の字の古文や雷の古文などと同じ系統のものではなからうか。（玄）の字は絲を束ねた象形といひの中の點は黑い意味の指事（時に點を略しても使はれた）にてクロキが故に幽遠と說

明されてゐるがむしろ雷電のあるときはとかく陰雨を伴ひ、しかもこれ神の啓示なればその意計り知られざるによりクロシとなり、奥深き意となつたものと見てはどうだらうか。説文にを「小なり」といひを「微なり」といひ、を「隱なり」といふのは雷電を神と見たことによると解釋すればその間の聯絡がよほどよくつくやうである。

120〔袖〕シウ　新　そで（三・二六）

袂　采

古文はで左扁はキモノの象形、右旁の由は聲符である。説文には即ち袂の俗字としてある。この字はがの中に組合はされてゐるがは左がツメ（爪）右がノギ（禾）である。活字體では采となつてゐる。穗の字の本字である。この兩字が組合はされてゐるのは袂の垂れてゐるのは恰度穀物の穗が垂れるのに等しいから、垂れ下がる意をあらはすためにこの二字を組合はせたものといふ。

第四章　巻四の新出漢字

121〔**森**〕シン　新　もり(四・一)　替　シン(一一・一二)

木を三つ組合はせはて木の多いこと即ちモリをあらはしたものである。數の多いことをあらはすに同一物を三箇組合はせることは漢字の作字上よく應用される方法で、そのことについては又及び品の字の條に説明してある。

122〔**立**〕リツ りう　新　たつ(四・一)　替　リツ(七・二一)

古形はで大と一との合字である。大の字の條にて説明したやうに大は人が正面向きになつてゐる形。下部は地平線をあらはしたものでタツといふ意の文字としたのである。

リツトル(Litre)の意に使はれるのは音の假借である。

123〔宮〕 キュウ く　新 みや（四・一）　舊 グウ（六・二六） キュウ（一〇・一三） クウ（六・二六）

古形に等がある。說文には家屋をあらはす宀と躳の字の旁たる呂との合字にて呂は聲符と說明してあるが、古形を見てもわかるやうに內部のは聲符ではなく窓の象形である。古文中にはこの窓に一種の枝巧をこらした等もある。

この字の本義は「室なり」と說文にあるやうに一般に建物のことで、もとは宮室とか宗廟に限つたものではなかつた。至尊の居所として使用せられるやうになつたのは秦以後のことである。

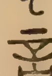
124〔店〕 テン　新 みせ（四・一）　舊 テン（四・七）

麻垂と占との合字。广は庭の條に說明したやうに家をあらはしたもの。占(てん)は聲符。卽ち商業を營むところの家の意味であるが、もとこの字は坫と書き御殿の前に衝立樣のものをめぐらしお客をするとき色々な御馳走をその中の棚に載せた。そこで土扁を書き聲符たる占を組合はせたのであるが、その際種々のものをならべる樣が恰度商家が商品を陳列するのに似てゐるので、つひにミセといふ字に用ゐられるやうになり後に土扁が麻垂となつたものといはれてゐる。

125〔賣〕バイ め　新 う・る(四・一)　替 バイ(五・二六)

小篆にて。買入れたものを賣出す意なる故に買と出とを組合はせたものといふ。一説には出でて商品を買集めることともいはれてゐるが、畢竟それも賣るための準備とも見られる。いづれにしても會意文字にて買は更に音をもかねてゐる(買・網を見よ)。

126〔音〕イン おん　新 おと(四・一)　替 ね(九・八)　イン(一一・一〇)　オン(一一・七)

言の字の古形たるの字の口の部分に一點を入れてとしたもの。それが今形の音となつたのである。言の字に一點を加へたわけは音聲は言語に伴ふからである。これによつてオトとか樂器の音色などをあらはす文字としたのである。

127〔柿〕シ　新 かき(四・二)

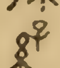
木と市との合字。カキのこと。故に木扁。市は聲符(姉・市を見よ)。

128〔生〕セイ しやう　新 うま・る(四・二)　替 い・く(四・一七)　なま(五・二)　シヤウ(五・一三)　セイ(五・二)　は・ゆ(五・三)　き(五・一八)

古形は。小篆ではである。と士との合字にて上部は草冠の一方と同じく草木の芽が地上に伸び出るかたち。卽ち草木の嫩芽が土中から地上に萠え出づる會意をもつてものが生ずる意の文字とした。それより死の反對イキル、枯れるの反對ナマ等の意に轉義した。

先生と熟するのは先きに生まれて知識を豐富に持つてゐる人といふ意からである。漢の初め頃から學問のある人を儒先、儒生といひ始めそれから讀書する人を書生といふ言葉が出來、次第に學生自ら自分のことを生と呼んだ。小生・野生等の謙稱もこれから生じたものである。

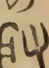
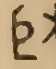
129〔孫〕ソン　新　まご(四・二)　替　ソン(一二・二)

子と系との合字。系は糸と丿との合字にて萬世一系と熟し、親から子、子から孫と次々に絲が引くやうに連續すること。故に孫は子と系との會意文字である。古形になどがあつて必らずしも系とはなつてゐない(縣を見よ)。

130〔枝〕シ　新　えだ(四・二)

木と支の合字。エダ。ここでは支は聲符となつてゐるが、支脈・支店と使はれるやうにこの字が既にエダといふ字。木の枝といふ聯想にて後に木が加へられたものである。

131〔取〕シュ　新　と・る（四・二）

今形の取は古形の小篆のから來たもの。耳と又（手）との合字。（この字の右旁は人が兩手をさしのべてゐるかたち）の如く亘（規矩の矩の本字にてモノサシのこと、工を見よ）、の如く舟を組合はしたものもあるが、これは字形が近似してゐるところよりかくの如き文字が出來たのであらう。しかし單に字形の類似からといつても左といふ字にサシガネが組合はされてゐるやうに、なるたけモツとかトルとかいふ概念を頭にピンと思ひ浮ばしめる方がよいので亘の字が組合はされたのである。規矩の矩の字の本字にの如く人が（大は人の象形）サシガネを持つてゐる文字のあるやうに、サシガネとトルといふこととは深い關係があるからである。舟が組合はされてゐるのは聲符の役をなしてゐるのであるが、この字は受。授等の古形に含まれて居る。舟で物貨を輸送する際積んだり卸したりしてトツタリ、ワタシタリするその會意も含まれてゐるのかも知れない。

さて取の字の左扁が耳になつてゐるのは戰國の末頃からといはれてゐるが、說文の最の字の條下に「捕取することなり。又と耳とに從ふ。周禮に獲者は左耳を取る。司馬法に曰はく、載せて馘を獻ずと。馘は耳也。」とあり、戰爭のときには敵陣に突入して敵をたふしそのしるしとして左の耳を切り取つたものである。だから耳は武勳の證據となるものであるが敵陣において人の首

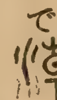
（耳）を取ることは容易な業ではない。それだけに若しこの耳を取り得たならば我こそ敵の首を取り得たりと非常に誇りを感じたことだらう。そこでトルといふ字が耳と又（手）との合字とされたものである（最の條をも見よ）。

132〔節〕セツ せち　新　セツ（四・三）　替　ふし（一一・九）

本義は竹のフシのこと。故に竹冠。下部の卽は聲符として加へられたもの。轉義して木のフシ、物事のフシブシ、ククリメ、ホドヨキコト（節操）、音樂の調子、もののツガヒメ（關節）等となる。

ワリフ（符節・節度）の意に用ゐられるのは卩（せつ）の義を取つたものである。卩の字は今は廢字となつてゐるがもとの片方から來たものである。杖の如きものの先きに一箇の玉を二つに割つてつけ天子が諸侯を任命する際にそのしるしとして卽ち現在の辭令書の如き意味で一方を諸侯に與へたもの。他方は朝廷にとどめおいたので萬一のときには眞疑がわかるのである。符節を合するといふ言葉もこれから來たもので、今形の卿の字の左右にあるのがそれである（卿を見よ）。令の字に含まれてゐる卩も符節であつてこれは朝廷において時期を定めて諸侯を集め△その符節をしらべたことによる（令を見よ）。なほ卽の字の條下を併讀して理解されたい。

133〔朝〕 テウ　新　あさ（四・三）　替　今朝（六・七）テウ（八・一〇）　假　朝（一一・二）爲朝（六・一〇）

朝の字の古形には種々の形のものがあるが現形はに近い。左扁は太陽⊙が草木屮のある丘丅の上に出てゐることをあらはしたもので朝日が照り輝くこと。旁は兩岸があつてその中に水がたたへてゐる形。そこでの如く水との合字もある。兩字を合はせて滿々とたたへた水に朝日がうつらふこと。のちに大河へ小川がそそぐこととなり潮といふ意にもなつて來た。潮の字は後に三水が加へられたものである。朝廷の朝となるのは「百川海に朝宗す」といふやうに、朝廷へは群臣が集まり諸國からは貢物を持つて來るからである。そこで家の象形たる广垂（庭を見よ）がついて廟となれば宗廟・廟堂の如く使はれる文字となる。アサとなるのはこの字の左邊がもと〱朝日に關係して出來たものだからである。

廟

134〔式〕 ショク　しき　新　シキ（四・三）

この字は弋と工との合字であるが、儀式禮式と熟し物事に法則のあること。卽ち工は大工の持つサシガネにてものごとに規矩準繩ありて規則正しきことをあらはしたもの。弋（よく）は說文によれば單に聲符字として組合はされたものとされてゐるが、然しこの棒杙は何かの相談をするやうな場

合に、この場所に集まれといふシルシのために立てた目標物で、その目標のある範圍外には行かないやう、卽ち規(のり)を超さないとの意を含ませたものともいはれてゐる（國を見よ）。

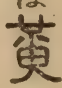
135〔皇〕 クワウ わう　新 ワウ（四・三）　替 クワウ（六・二一）　假 皇子(みこ)（五・一一）

自の省略形白と王との合字にて王のハジメたる三皇のことと說文にあるが、後に火扁が加はつて煌(かがやく)といふ字が出來たやうに皇の本義はヒカリカガヤクこと。卽ち古形のは臺の如きものの上に光りを放つものが組合はされたもの。この字が變形すれば（昊）となり昊天と使はれる。日と天になつてゐるがこれは皇の意の聯想作用から起つたものである。光（火と人との合字）黃（光と田との合字）と晉も同じく意味もまた似たもの。支那の太古に大昊氏・小昊氏・黃帝・炎帝などがあるのはその德の光り輝くことを賞めたたへた尊稱である。

136〔谷〕 コク　新 たに（四・三）　假 長谷(はせ)（七・一四）　大谷(だいや)（一〇・二一）

古形のから來た文字である。下部は現形の口。上部は水の字が省略されたやうなもので「水の流れる口」といふ會意である。

137〔黄〕 クワウ わう 新 き(四・四) 假 黄浦(一一・三) 黄金(一二・五) 黄櫨(一一・二八)

この字の古文はで、光の字の古文と田との合字といはれてゐる。土の色はキであるからこの字へ更に聲符字として光を組合はせたものであらう。田はその字の條下に説明したやうに水田といふ意味ではなく廣く土地を意味したものにちがひない。黄塵萬丈といふ言葉があり、また支那文化の發祥地を流れる河の名に黄河があるのは、支那の土質が黄土性だからであらう。天地玄黄とも熟し黄は非常に尊ばれてゐる。なほ光の字は單に聲符たるばかりでなく黄金色といふやうに、黄色はヒカリを伴ふの意から特にこの字が組合はされたものだらうと思はれる。

138〔麥〕 バク 新 むぎ(四・四) 假 蕎麥(九・二一)

來と(夂)との合字。夂は復や後の字に含まれてゐる字形と同じく足の後方を紐の如きもので引いたやうな形であらはされた字。ユル〳〵歩むとかカヘルの意がある。來の字の條下で説明したやうに周の時代に瑞麥が天から降つて來たといふ傳説があるので、來の字とこの字を組合はせてムギの字を作つたものである。

139〔氣〕キ け　新　キ（四・四）

气と米との合字。气の字は空氣雲氣などの如く絶えず流動し發散して定まつた形のない氣體のこと。故にそれをあらはすために小篆にてと書いたものである。現在では气を用ゐずすべて氣の字を使用してゐるが、實は氣の字はもと〳〵人に餼米を贈る意の別文字であつた。そこで氣においては米の字にその意があり气は單に聲符たるに過ぎないのである。ところが氣が气と同樣に空氣の意に用ゐられるやうになつてからは气の字はあまり使はれなくなり、やがて氣の字が全く气にかはつて風雨、寒暑、陰晴等の天地間の現象や又人間の氣力、意志、感情等にも使用せられるやうになつた。气（ひいては氣）の字がかうした意味に轉義して來るわけは气の字が本來空氣や雲氣の如くトリトメもないものだからである。これをものにたとへれば气の字は僧侶の乞食行脚と同樣で行雲流水一所不住往くところを知らず歸へるところを知らない『流るるまま』のものである。これを他から見れば全く氣分本位の氣まぐれである。風來坊である。氣まぐれな心の持主を「お天氣」といひ、御機嫌斜なるを「低氣壓」といふ俗語があるのも人の氣分を天氣にたとへて豫斷を許さないことにあてはめたものである。

氛

氛圍氣（atino.phere）の氛の字に气が組合はされてゐるのも自らその眞意が了解されるであらう。

また「あそこではどうも氣分が味へない」とか「氣分が出てゐない」の氣も今更說明する必要もあるまい(汽の字を見よ)。

140〔島〕タウ　新　しま(四・五)　替　タウ(九・二)　假　兒島(こじま)(一〇・二七)

鳥の字の畫を省いたものに山を組合せたものである。鳥(てう)は聲符。シマは水中の山の如きものであるから山を加へたもの。この作字法には水の意があらはれてゐない。

141〔居〕キョ　こ　新　ゐ(四・五)　替　を・り(五・一一)　キョ(一一・三)

居の字は踞(うづくまる)といふ字の本字で、尸と古との合字。尸は人が身體をかがめてゐる象形(屋を見よ)。古(こ)は聲符。居の字はもと凥とも書いた(殿の字を見よ)。几は机の本字で床几(しょうぎ)の象形である。即ち家の中で床几の上に人が腰をおろしてゐる會意である。支那人は日本人が疊の上に坐るやうな生活をしないで椅子に腰をおろしてゐることも忘れてはならない。

142〔多〕タ　新　おほ・し(四・五)　替　タ(八・四)

夕を二つ組合はせてオホシといふ意をあらはしたもの。よく子供などに『今晩と明日の晩と二

つ寝たらお正月が來ますよ』と敎へるのと同じく、ものの重なること卽ちオホイことに夕の字を重ねてこれをあらはしたのである。

143
〔少〕 セウ　新 すくな・し（四・五）　替 すこ・し（四・一七）　セウ（八・二〇）

小とノとの合字。スクナイ意の文字である。小に意を有しノは單に聲符。「多少」「大小」と使はれる文字で少はスクナイ・スコシ・ワヅカ。小はチヒサイ。多はオホイ。大はオホキイ。また太はフトイことである。

144
〔毛〕 バウ もう　新 け（四・五）　替 モウ（一〇・一一）

古形は。小篆ではそれを略してとなつてゐるが鳥の羽毛の象形である。轉じて獸類その他一般にケ。

毫

この字は尺度の單位として厘の十分の一卽ち十絲（十朱）のことにも用ゐられるがこれは「毫末も存ぜぬ」などいふ毫の字から來たものである。毫の字は高の字の畫を省いたものに毛を組合はせたもので、細くとがつたウブゲのこと。高は聲符。また毫釐と熟して僅かなことになるが分厘の厘は釐から來たものである。また揮毫と熟して毫が筆のことになるのは筆は獸の細い毛で作る

からである。秋毫とは夏から秋にかけて動物の毛が拔けかはるときの細い毛のことである。

145〔神〕 シン じん　新 かみ（四・五）　替 シン（五・一〇） ジン（五・一六） かうがう・し（一〇・一一） 神戸（かうべ）（七・九）

示と申との合字にて古形にの如きものがある。申の字の條にて說明したやうに示扁がなくても既に申といふ字がカミのことであつたのだが、後に祭壇の象形から出來た示の字をつけ加へて神としたものである。詳しくは申・電・示の條を見よ。

146〔樣〕 ヤウ　新 さま（四・五）　替 ヤウ（七・一九）

木と羕との合字。本義はイガタのこと。故に木扁。羕は聲符。轉義して樣子・有樣のサマとなる。なほ羕の字は羊と水との合字にて水が流れること。そこで水が長く流れてゐる意をあらはすために作つた𠂢（派の本字）を逆にした永の字を書いたものである。羊は單に聲符。後に更に三水を加へて漾の字を作つた。タダヨウといふ場合に使用してゐる。

漾

147〔主〕 シュ す　新 ぬし（四・五）　替 シュ（六・一七） おも（七・三）　假 坊主（はっす）（一二・二一）

小篆ではである。下部の土の字形は燭臺。上部は油皿の如きもので其の中心から焰がもえ

上つてゐる。卽ち本義は火が燃えてゐることであるが、後に火扁が加へられて炷の字が出來、主の字はオモとかヌシ等の意に使用せられるやうになつた。これは焔が油皿の中心から上へ上へと眞直に燃上がるから物の中心卽ちオモ・ヌシ等に轉義したものである。

148〔早〕　サウ　新　はや・し(四・五)　替　サツ(八・一一)　サウ(一二・二三)

古形はにて上部は日、下部は甲である。甲の字の古形は草木の實が殼を破つて地上に出かけたばかりの象形である。種子が皮穀を破りまだその皮穀を上にかぶつてゐる。この芽は太陽の光によつてハヤク生長するものだから日の字を組合はせたのであらう。なほ甲の字の古文は單にとも書きこれは草木の種子が地上に斤裂して出づることをあらはしたものである。

149〔後〕　ゴ　こう　新　のち(四・五)　替　あと(四・一一)　ゴ(六・一一)　おく・る(八・三)　うしろ(五・一六)　コウ(七・一二)

彳と幺と夂との合字。彳は行の字の左邊にて進む意。幺は奚の字の中間に含まれた文字にて。物賣りが商品を入れ頭の上に載せて運搬する器具の象形。夂はから來たものでスリアシをしてゆつくりと歩む意。重いものを運べば(幺)自然その歩み(彳)がのろく(夂)なるのでオクレル意の文字としてこの三字を組合はせたものといはれてゐる。轉じてウシロとなつた。

奚

なほ奚の字の古文はで上部が爪、下部は人が正面を向いた象形。即ち頭の上に運搬する容器をいただいてそれが落ちないやうに手（爪にてあらはす）で持つてゐる形である。支那古代においてものを運搬するのに頭を利用したことがわかる。我が國にも此の風習が諸方に殘つてゐる。

150〔町〕 テイ ちやう　新 まち（四・七）　替 チヤウ（四・七）

田と丁との合字。アゼの意味。丁は聲符である。

丁

なほ丁の字は、甲乙丙丁の如く成績品を採點する場合の符號に用ゐられるが、それは十干（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）が年月世代その他ものの順位をしるす符號として用ゐられてゐたからである。この字の古文にがあるがこれはクギの象形で第一形はその頭の部分であらう。同音なるところより丁の字は後に壯丁の意に用ゐられるやうになり、クギの場合には金扁が加へられて釘となつた。木を伐る音を形容して伐木丁々（たんく）といつてゐるが、クギを打つ音から聯想したものである。劍戟の「丁丁發止」、碁を圍む場合の「丁丁」はみなこれから來たものである。

151〔電〕 デン　新 デン（四・七）

雨と申との合字。下部は申の古文から來たものである。イナヅマだから曲げられたも

のであらう。雷電にはトカク陰雨を伴ふから雨冠を附け加へたものである（申・神・雷を見よ）。

152〔屋〕ヲク　新　や（四・七）　替　ヲク（九・一〇）

尸と至との合字。尸は居の字の上部と同様に人が身をかがめてゐる象形（尸の條を見よ）。太古は穴居生活をしてゐたからよほど家の中がせまかつたのでかかる文字が組合はされたのである。至はイタリトドマルの意卽ち屋は人のイタリトドマルところだからである（室を見よ）。

153〔夜〕ヤ　え　新　よる（四・七）　替　よ（四・九）　ヤ（四・二四）

小篆にて。（亦の字の古文。大の條下を見よ）の字の省略形と夕とを組合はせたもの。亦（エキ）は單に聲符として組合はされたものであるから意は夕の方から見出すべきである。なほ亦と夜との音は遠いやうに思へるが夜の字が聲符として他の文字に組合はされたものに液・腋・掖等がありいづれもエキとなる。音の變化については第一篇第四章形聲文字の聲符の條を參照せよ。

154〔話〕ワ　ゑ　新　ワ（四・七）　替　はなし（四・八）

言と舌との合字。ハナシ。故に言扁。舌は發聲機關のうちでも重要な役割をなすもの。試みに

我々が舌を用ゐなかつたら恐らく滿足なる話が出來ないだらう。そこでハナシといふ文字を作るに當つてこの重要なる舌の字を言語の言の字に組合はせたものである。

155〔工〕 コウ く 新 コウ（四・七） 替 ク（四・一六）

大工のもつサシガネの象形である。我が國では┐型のものを用ゐまた製圖用としては丁字型の定規を用ゐてゐる。これらに相當するものである。

矩

矩の字に含まれてゐる巨の古形はであるが古文にの如く人（大の字はヒトの象形。大を見よ）がサシガネを持つてゐる形のものもある。これに矩の如く矢が加へられたのは往古ものの寸法を計るに矢を用ゐたからである。また左の字に含まれてゐるのはサシガネは左手に持つたからである（左を見よ）。大工が建築や彫刻をするには必らずサシガネを用ゐるのでやがて工の字はタクミの意（巧を見よ）になる。

匠

また工匠の匠(しやう)の字はサシガネ（）と斤(をの)との合字。藝術品を作るにはサシガネと彫刻用のオノとが必要だからである。或はまたは匿。區・匡の如くものを入れる箱の象形にて大工道具が箱の中に入れてあるものとも見られないことはないが、やはりサシガネの象形と見た方がよからうと思ふ。工の字はまた式の如くものに規矩準繩のある字に組合はされる。天下を治める王者の王

の字も工から出來たものであるといふ說もある。このことは王の條下を見よ。

156〔場〕　ヂヤウ　新　ば(四・七)　替　ヂヤウ(七・九)

土と昜との合字。場所のこと。意は土の方にあり昜は聲符(陽の字を見よ)。

157〔向〕　キヤウ　かう　新　むかふ(四・八)　替　むき(六・六)　カウ(一〇・四)　假　日向(ひうが)(一二・一〇)　手向(たむけ)(一二・二〇)

古文はで本義はキタマドのことである。家の象形たるへ窓又は入口の意で口を加へたものである。家や宿の字がウ冠になつてゐるがこの字は奥の字の古文とともに堀立小屋式の古い面影を存してゐる文字である。

ムカフといふ意になるのは入口又は窓が南に對してゐるからである(南を見よ)。

158〔友〕　イウ　新　とも(四・八)　替　イウ(一二・九)

古形はで又の字即ち右手を二つ組合はせたもの。手に手をとつて助け合ふとの會意。これがトモである。又(いふ)はまた音をも兼ねてゐる(共・供を見よ)。

159〔答〕 タフ　新 こたへ(四・八)　舊 タフ(一一・二六)

荅の字の俗字といはれる。荅は小豆のこと。故に草冠。合は聲符。この字をコタへの意に用ゐるやうになり誤つて竹冠にしたものといふ(着を見よ)。コタへの時にはもとは單に合の字を使つたといはれてゐる。

160〔先〕 セン　新 さき(四・八)　舊 まづ(四・一〇) セン(五・二)

古形はにて之と人との合字。之はその字の條下に説明したとほり進み往くこと。兩字にて後進に對する先進(先輩)の意をあらはしたものである。それより廣くサキ・ススム等の意となつたものである。

161〔其〕 キ　新 そ・の(四・九)

もとに書く。ザルのやうな入れものの象形にて本義はミである。現形の其はから來たもので下部のは入れものをのせてゐる臺をあらはしたもの(基を見よ)。其の字がソノの意に假借されるやうになつてからは本義の場合には竹冠をつけて箕と書くやうになつた。ミは竹で作るから

箕

である。

162〔此〕シ　新 こ・の（四・九）

止と匕との合字。匕は比の省略形で人が並んでゐること。人が並んで立ち止まつてゐるコノトコロといふ考へから出來たもの。止はまた聲符をも兼ねてゐる。

163〔明〕メイ みやう　新 あ・く（四・九）　替 メイ（五・一八）　あかる・し（七・四）　明日(あした)（四・二二）　假 明(ミン)（七・二三）
あきらか（六・二一）　ミヤウ（七・一四）　嘉明(よしあきら)（一一・七）

天體の中で最も勝れたヒカリを持つてゐる日と月とを組合はせて、アキラカなる意の文字としたものである。一説には古形のの左扁は太陽ではなく明り窓の象形にて、月光が明り窓からさしこむ意匠から作られたものといはれてゐる（間を見よ）が、どちらの意味でも作られたものであらう。

164〔林〕リン　新 はやし（四・九）　替 リン（一〇・二五）

木を二つ並べて平地に竹木が生えてゐる意の文字としたのである。後には專ら樹木の密生してゐるハヤシの意となつた。

165〔烏〕ヲ う　新　からす（四・九）

鳥の字の古形の目に相當する部分が省略せられて烏となつたものである。カラスの色は黒いので遠方から見れば目と羽毛との區別がハッキリわからないために眼球に相當する部分を省いたものといふ。

嗚

單獨では鳥と烏を間違へるものはないが、これに口が附けられて鳴、嗚となると誤用せられ勝ちである。即ちアアといふ感歎詞のときには「カラスにクチ」。そこで嗚咽の嗚もカラスの方である。

166〔所〕ショ　新　ところ（四・九）　替　ショ（五・一三）　假　此所（ここ）（五・一〇）

戸と斤との合字にて本義は木を伐る音のこと。おので木を伐る時のコツ〳〵。コン〳〵の音をあらはすために戸の字をもつてし、それに斤（おの）の字を組合はせたのである。この字がトコロの意に使はれるのは処の字に假借せられたものである。処の字は夂（）と几（）との合字にて人の止まつてゐるこのトコロといふ意から作られたもので恰度此の字が止と人（匕）との合字になつてゐるのとよく似てゐる。処の字は處の略字のやうに考へられてゐるが實はさうでなく、號

の字の條にて述べたやうに文字としての意匠が加へられたものである。

167〔鳴〕 ベイ みやう　新 なき（四・九）　替 メイ（一二・一四）　假 鳴門(なると)（一一・八）

口と鳥との合字。それにて鳥類等のナクことをあらはしたものである。

168〔勝〕 ショウ　新 かち（四・一〇）　替 ショウ（七・一四）

朕と力との合字。本義は物事に堪え忍ぶといふこと。故に力を書く。朕は聲符。カツの意に轉義するのは堪え忍ぶ者は必らず他の者より優るといふ考へからである。なほ朕の成因については藤の條を見よ。

169〔番〕 ヘン ばん　新 バン（四・一〇）

古形にて釆田。本義はウヅクマル。獸の足跡の象形から出來た文字。卽ち上部は足指の象形で下部が足掌の紋といはれてゐる。

蹯

足扁を加へて蹯(うづくまる)の字としたのは後のことである。カハルガハルの義となつたのは足は歩行に際して交互に運ぶからである。回數・ツガフ・ツキ等の意になるのもそのためである。字書には田

の部首に屬してゐるがこれは番の字の表面上の形（字面）を見て田に入れたものである。

170〔心〕シン　新　こゝろ（四・一〇）　替　シン（五・一九）　心地（一一・一〇）

古形はで心臟の象形である。ものを思ふココロを心臟の象形であらはしたのは誠に理にかなつてゐる。といふのは一朝にして心臟の働きが止まればもはや人間の生命はない。生命のないところには思ひ（ココロ）はないからである。なほ詳しくは思の條を見よ。

171〔負〕フウ　ぶ　新　まけ（四・一〇）　替　ブ（七・一四）　おひ（八・四）

人と貝との合字にて自負の負といふ。卽ち人が澤山の貝貨（古への貨幣）を所持して金の威光で安心してゐるといふ會意文字。說文に「恃む所あるなり」とあるのがソレで金權に賴つてゐるわけである。一說には他人に負債がありしかもそれを返濟することが出來ず借りた當初の意に背く義ともいはれ、マケルの義となつたのはこれがためだといふ。

172〔昨〕サク　新　昨日（四・一一）　替　サク（六・一二）

日と乍との合字。キノフのこと。故に日扁。乍は聲符。

173〔外〕グワイ　げ　新　そと(四・一二)　替　ほか(四・二〇)　グワイ(六・二)
はずれ(五・九)　ゲ　(六・二六)

夕とトとの合字。トはウラナヒといふ字であるが古くから支那人はウラナヒを非常に神聖なものと考へてゐたので、これを行ふに當つてはなるべく神氣爽やかな朝をえらんだものである。そこでこれをユウべに行ふことは神意に合しないこととなり、ハヅレタごととなるので夕とトとを組合はせてハヅレル意の文字とした。それよりソトといふ義にも轉じたのである。なほ支那人が如何にウラナヒを神聖視したかは用や貞等の文字にトの字が組合はされてゐるのでもわかるであらう。

174〔机〕キ　新　つくえ(四・一二)　替　キ(一二・二二)

几

木と几との合字。もとは几とのみ書いたが後に木扁が加へられたもの。几は床几の几にて人が腰をかけたりまたは物をのせる簡單な臺でその象形である。もつとも机の字はサルナシといふ木の名として作られた字にて、後にツクヱの意に使用せられるやうになつたものだともいはれてゐる。

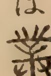
175

〔戸〕コ　新　と（四・一一）　替　コ（一〇・二五）　神戸（かうべ）（七・九）

門の字の左邊を取つたものである。即ち門の古形はにて戸はから出來たものである。戸の字によく似た字にシカバネカムリといはれる尸の字がある。これは古形から來たもので人の象形文字を横にして死んだ人とかうづくまつてゐることなどを現はしたものである。だから正確にいへば戸の字との相違は單に上部の點の有無のみならず、一方は左方の筆畫が連續して居り他方は離れてゐるわけである。屍の字の尸はシカバネをあらはしてゐるが同じ形にして屋。居の如きは死人をあらはしたものでなく身をかがめてゐることを表現したものである（屋を見よ）。

176

〔僕〕ボク　新　ボク（四・一一）

人と菐との合字。菐（はく）は掃くといふ字。その小篆はである。分解すればとになる。上部はハハキグサの象形。下部は兩手。箒を兩手に持つて掃除をすること。掃除は僕婢のなすところであるからもと菐の字僕が婢の意である。後に人扁が加へられて僕となつたのだが實は僕の本字は菐である。僕の字は自己の賤稱として男子の使用するものであるが目下の者から目上の者には使はず、友達同志の親しい間にのみ限られてゐる。掃除に關係して作られた文字には婦・歸

●婢・掃・棄などの字があるがそれらについては婦の字の條下で説明をする。

177〔吉〕キツ きち　新 キチ（四・一二）　替 よ・し（五・一八）　假 秀吉（ひでよし）（七・一八）

士と口との合字。メデタイ意。我が國においても「武士に二言なし」といふやうに士の言葉には間違ひがないので、メデタイ意の文字として士と口とを組合はせたものである。

178〔自〕シ じ　新 シ（四・一一）　替 シ（一〇・九）　おのづか・ら（一二・二〇）　みづか・ら（一一・二）

自分の自である。人間の鼻を正面から見た象形のが現在の自となつたもの。鼻をもつてオノレの意としたのは、自己の中心が何だか鼻のあたりにあるといふことを無意識的に感じてゐる人間の心理にその根底をおいたものである。試みに幼い子供に「坊やはどれ」と聞いて見ると「坊やはコレ」と鼻の先きを示して自分の存在を相手に認めさせる。これは幼い子供にも自分といふものの中心が何だか鼻のあたりにあるといふことが意識されてゐるからである。鼻を横から見た形は、　であるがワタクシゴトの意に用ゐる私の字の旁に含まれてゐる。また公（おほやけ）といふ字の下部も横から見た鼻の象形である（私及び公を見よ。）。

自分といふ意をあらはす文字には自。私・我・吾・余・予・己（身の條を見よ）等があり、新出文字とな

つてゐるものはそれ〴〵その條下に說明した通りである。

吾

吾は「吾輩」と使用するが如く一個人としてのワレである。人にはおの〳〵自分としての意見があり權利の主張もあらうからその意味で口を組合はせたもの（右・君・口を見よ）。上部の五は聲符である。

予

予の字の古形はで本來の意味は人に物を與へること。三角樣のものが二つ重なつてゐるのは一方から推し與へ一方はこれを固辭するかたちである。下の線は押しやる意を表はしたもの。この字がワレの意に使用せられたのはワレといふ言葉の音が予の字の音に近かつたので假借されたまでに過ぎない。

余

余の字もまた音の假借。本義は言葉がノビアマルこと。そこで分散する意の八を書き聲符として舍の省畫を組合はせたのである。なほ予は豫、余は餘の略字として使用せられてゐる。

なほ自の字がハジメといふ意になるのは鼻は顏面の突き出たところだからともいひ、また人が母胎にある際には鼻が一番先きに形作られるものと見たがためともいはれてゐる。

179〔分〕フン ぶん　新 ブン（四・一二）　替 わか・る（四・一二）　わけ・る（六・一七）
ブ（五・一〇）　ブン（七・三）

八と刀との合字。八は反撥の撥と同音同意である。公の字の上部と同形にて左邊は右から左へ右邊は左から右へ共に相戾つてゐる。これにてワカレル意をあらはし、更に刀にてキルことを意

味し兩字を合してワカツの意としたのである。

これに類した字に切(きる)といふ字がある。この字の七は聲符となつてゐるもので意は刀にある。分と切との字形を覺える語呂として「七つの刀でキリ八つ刀でワカツ」といふのがある。

180 〔内〕ダイ ない　新 うち(四・一二)　替 ナイ(六・二) ダイ(八・三)

冂と入との合字である。冂の中へ上からモノがはいりこんでゐることをあらはしてウチなる意の文字としたものである。

181 〔京〕ケイ きやう　新 キヤウ(四・一三)　替 ケイ(一〇・一三)

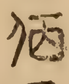
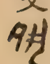
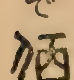
高。亭の字と同じ系統の文字にて古文に等がある。この字は高い丘の意の文字としたもので丘の上に高く建てられた家をもつて表現されてゐる。高い丘の意より一般に高いこと、大きいことの意となり更に天子の居城が高いところに築かれるので都の意ともなつた。京師・京兆京安と使はれる語がそれである。支那の北京・南京はいふまでもなく、我國の京都の名もその昔平安の都だつたからである。

明治のはじめ江戸へ遷都後もとの江戸を東京と改稱したので、舊皇居の地たる京都を西京とい

ふやうになつた。今でも東京の人が京落の地方をカミガタといふのは古くから京都に都があつて一國の中心となつてゐたからである。皇居のある土地が中心とされるのは現在汽車の上り・下りにしても東京へ向つて來るものが「上り」で、東京から他の地方へ發車するものが「下り」となるのでわかるであらう。

京の字はまた我が國では亰とも書く。これについて雜誌キングに面白い記事が出てゐたから揭載しておかう。次はその一部分。「明治の初年には、印度支那の東京と間違へられるを懸念して『京』の一字に一本畫を加へ『亰』の字を用ひその筋からも命令があつて一般に東亰に記してゐたものであるが、それが何時の間にか東京と書いて何等怪しまぬやうになつた。然し當時發行の『東京朝日新聞』『東京日日新聞』は何れも今以つて尙京の字を使用してゐる（昭和七年十月號雜誌キング揭載大東京物識漫談より）。

182 〔宿〕 シユク　新　やど（四・一四）　替　シユク（一〇・一二）　假　今宿（いまじゆく）（一〇・二七）

この字は小篆のから來たものである。ヤドル又はヤドのことであるから家の意をあらはすウ冠を書いたもの。內部の（ジク）は主として聲符の考へで組合はせたのだが會意にもなるやうに特にこの字を選んだのである。そのわけはの字は夙の古文から變形したもので

夙

夙は同意異形のものに過ぎない。そこで夙の字をしらべて見るとこの字は古文でわかる如く夕と丮（げき）との合字である。丮（げき）は人（）が兩手（）にものをもつてゐる（）形である。卽ち夙の字は明日のことを前の晩から準備しておくといふ會意である。とかく旅人は心忙はしいもので明日の出發を前の晩から用意しておくので、そのためこの字が宿の字へ聲と意を兼ねて組合はされたのである。

183

〔根〕コン　新　ね（四・一四）　舊　コン（九・五）

木と艮との合字。キノネ、故に木扁。艮（こん）は聲符（眼の字を見よ）。

184

〔聞〕ブン もん　新　き・く（四・一四）　舊　きこ・ゆ（五・七）　ブン（五・九）

門と耳との合字。耳は物音を聞く門といふ會意で出來たもの。更に門は聲符をも兼ねてゐる。

185

〔追〕ツキ　新　お・ふ（四・一四）　舊　ツキ（一一・七）

𠂤と辶との合字。オフこと。故に足の象形から出來た辶を書いたもの（行を見よ）。𠂤は聲符。

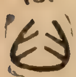
〔思〕 シ 新 おも・ふ（四・一五） 舊 おぼ・す（一〇・一） シ （一〇・一四）

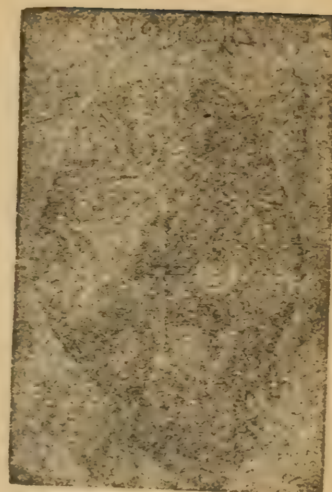
古形はである。この字の上部は腦の象形にて現在の腦といふ字の本字。下部は心臟の象形である。この二つを組合はせてオモヒといふ字を作つたことは會意の方法としては實に巧みなものといはねばならぬ。一朝にして心臟の鼓動がとまればもはや我等の生命はない。また腦神經の作用が完全でなければ思考力が缺如してゐるわけだから息こそすれ魂なきむくろである。此の兩者の働きこそは我々が物事を意識する根源となるものである。

腦

なほ腦髓を收めてゐる頭蓋骨をあらはす字は（シン）で思の字の古形の上部とよく似てゐるが特に上方を開けてゐる。これは「腦髓の容れもの」なる意をあらはす方便として出入口をつけたものである。ところが腦髓の方になると上部が塞げてある上に更に點まで添へてある。點は腦髓がチャンとはいつてゐるのだゾと特別に注意した指事的のシルシである。後に頭髮がつけられてともなつた。更に肉月が加へられて現在の腦の字も出來た（肉及び月を見よ）。なほ腦髓にせよ頭蓋骨をあらはす文字にせよ、內部のシルシはズキのあることを示したもつで×でも十でも同じことなのである。

兒

また兒童と使はれる兒の字の上部は（臼）でテッペンが開けてある。これは赤ん坊のヒヨ



（第一九圖）

メキが完全に縫合されてゐない特徴をとらへて作字したものである（第一九圖を見よ）。なほ下部は人の字。以上の如き文字は支那人がいかに生理や解剖の知識に富んでゐた人種なるかを如實に物語るものである。

187〔百〕ハク ひやく　新 ヒヤク（四・一五）　替 もも（一一・一九）　假 八百屋(やほや)（六・九）

一と白との合字である。十進法で行けば十位においては一がはじめ、百位においては百がはじめ、千位において千がはじめとなり一・百・千等はそれぞれ一に相當する。そこでヒヤクの字を作るに當つてはじめの意を有する自（自の條を見よ）と一とを組合はせたものといはれてゐる。現形では一と白との合字であるが百の古文にはがあり、第二形は第一形を省略したものだらうといはれてゐる。

また或る説には數を一から數へ上げて百に達すると一と先づ明かに呼び上げておき、またもとの一から數へ起こすので、一と白(まをす)とを組合はせたものといはれてゐる。更に百の字の白は聲符となつてゐるもので上部の一にて數なる意を示したものともいはれよほど議論の多い文字である。

188〔仕〕シ　新　シ（四・一六）　替　つか・ふ（五・一）
つかまつ・る（七・二三）

人と士との合字。人が人としての道を學び、士の本分を具備して官途につく意。そこで人と士とを組合はせたのである。我が國では「仕り候」の如く使ひ「爲す」「致す」等の敬語とする。

189〔事〕ジ　新　こと（四・一六）　替　ジ（四・二〇）

古形は[illegible]事で第一形は之と史との合字である。史は書き物をする役人のことであるからこれにて職務に從事してゐることをあらはしたのである。それよりコト・ツカヘル等となつた。なほ之（し）は聲符であるが往くといふ意があるので仕事を勵ますとか任地におもむくとかいふやうな會意をも含めて組合はされたものであらう。

190〔板〕ハン　新　いた（四・一六）　替　バン（七・一六）　假　甲板（カンパン）（七・一三）

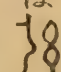
木と反との合字。イタのこと。故に木扁。反は聲符字として組合はせたものである。

191〔扇〕セン　新　あふぎ（四・一七）　替　セン（一二・二三）　假　團扇（うちは）（一一・二一）

戸と羽との合字。本義はトビラ。故に戸。扉は風にあふられるものだから鳥の羽毛の風にあふられてゐることに思ひついて組合はせたのである。それより轉義してアフギとなつた。

192〔弓〕キユウ　新　ゆみ（四・一七）

弦　彈　弔

この字の古形はでユミの象形から來たものである。これに糸を加へればとなり完全に弓の象形となるがこれは弦(ゆづる)の字として作られたものである。現形の弦の字はから來たものであるが右旁は絲の象形である。即ち弓と糸とを組合はせた會意文字である。また古文になる字があるが今の彈の字でハジキユミのことである。現形彈の字に含まれる單(たん)は後に聲符として加へられたもの。また弓と人とを組合はせた文字にがある。この字は今形の弔(てう)の字で死者をトムラフことである。葬の字でわかるやうに支那ではむかし死人を草むらの中に葬つたものであるが、父母の死體が鳥獸の餌食となるのを悲しんで、家族のものが弓を持つてこれらの鳥獸を追つたことに淵源して出來た興味のある會意文字である。

193〔矢〕シ　新　や（四・一七）

古形のから現在の形になつたものである。この古形は兩者とも上端がやじりで下端は

弦に矢をつがへるところをあらはしてゐる（射を見よ）。

194〔馬〕バ　め　新 うま（四・一七）　替 バ（五・一八）　ま（一〇・二三）

古形の等から現形となつたもので馬の特徴たるタテガミを特に印象的にあらはしてゐる。なほ第一形第二形の首に相當する部分は特に目がその大部分を占めてゐる。漢字は首から上をあらはす場合特に目を印象的に書いたものである。このことは首の字の條にて説明をする。

195〔度〕ト―タク　ど―だく　新 ド（四・一七）　替 タク（八・三）　たび（八・二四）

庶の字を省いたものに又を組合はせたもの。本義はハカリのこと。物をはかるには手をもつてするから右手の象形たる又を組合はせたのである。庶は聲符（廣を見よ）であるが衆庶・庶民と熟するやうに此の字にはモロモロの意がある。ものをはかるには同一のことを度々行ふのでその會意をも含めてこの字を組合はせたものであらう。度の字がタビタビと轉義するのもそのためである。

196〔雪〕セツ　新 ゆき（四・一九）　替 セツ（一二・一三）　假 吹雪（ふぶき）（六・一四）

古形のが省略されて現形となつたものである。下部は彗星（ほうきぼし）の彗の字で丰は竹箒の象形で

ある。は又と同じく右手の象形。ユキが降つた時にはこれを箒でかきのけることに思ひついて作つた文字かも知れない。

197〔皆〕カイ　新　みな(四・一九)

比と自の別體白との合字。比は人間が二人並んでゐる意。白はマウスにて多くの人が口を揃へて贊成する義である。それよりミナの義になつたものである。

198〔杉〕サン　新　すぎ(四・二〇)

木と彡との合字。スギのこと。故に木扁。彡は聲符(形を見よ)。

199〔死〕シ　新　シ(四・二〇)　替　しに(七・六)

この字の左扁の歹(ガツ がち)は小篆にてで、肉を削り取つたあとの骨の象形である。だからこの字は死の字を始めとして歿・殃・殊・殘の如くすべて死に關係したことに組合はされてゐる。右旁の匕は人を反對にしたもので變化の化の旁と同じく正常ならざる人といふ氣持ちで組合はせたもの。それによつて死者をあらはしたのである。

200〔知〕 チ　新　し・る（四・二〇）　替　チ（五・二二）

矢と口との合字。是非善惡を識別し得ることで、作意は人の言葉（口）を心にさとることが矢のやうに速やかだといふにある。矢はまた音をもかねてゐる。

201〔作〕 サク　新　つくり（四・二〇）　替　サク（五・八）　假　美作(みまさか)（一〇・二七）　サ（一〇・二六）

人と乍との合字。作興と熟する字にて本義は人民を奮起せしむること。故に人扁。乍は聲符。轉じてナス・ツクル。

202〔稻〕 タウ　新　いね）四・二〇）　假　稻村ケ崎(いなむらがさき)（七・六）

陥　　禾

禾と爪と臼との合字。ウス（臼）に入れてついた米（禾）を取り出す（爪）ことである。それよりイネの義となる。旁の舀(たう)は音をもかねてゐる。この旁は陥落の陥の字の旁と紛れ易い。陥の字の本字はで人と臼との合字である。人が落し穴におち入つてゐる會意で出來たものである。

なほ稻の字の扁は木と區別するためノギヘンといふ。古形はで木の字の上部が垂れ下つてゐるのは稻穗などが實つて頭を下げてゐる象形である。そこで禾本科植物卽ち米や麥や粟の如き

所謂五穀と稱せられる植物をあらはす字に組合はされる。卽ち穗・種・稾（稿）・移の如き文字がそれである。また穀物を計ることより秤・科・程・秒。稱の如くハカリに關する文字にも組合はされ、更に租　稅の如く上納に關係したものもある。これはもと租稅として穀物を上納した時代があつたからである。

203〔金〕キン こん　新　かね（四・二〇）　替　キン（五・四）かね（六・三）　コン（一二・二）

小篆にて金。今と土と點二つとの合字。今は聲符として組合はされたもの。土中にあるものの意にて土の中に點二つをつけたものである。

204〔間〕カン けん　新　あひだ（四・二〇）　替　ま（四・二〇）カン（五・四）　ケン（五・一六）

現形では門と日との合字であるがもとは門と月との合字であつた。戸のすきまから月光がさしこむ會意にてもののスキマとかアヒダの意となる。

205〔送〕ソウ　替　おくり（四・二〇）　替　ソウ（七・八）

本義は人をオクルこと。故に之遶（行を見よ）。关は聲符であるが㑞（ヨウ）の字を略したもの。㑞は後に媵

とも書いたもので、もと大名が自分の娘を嫁にやる際に附添ひをした女のこと。そこで㚇は聲符でもあるがやはりオクルの意をも兼ねさせたものである。藤の條を參照せよ。

206 〔汽〕キ　新　キ（四・二一）

水と气（氣を見よ）との合字。説文には水が涸れる意と説明してある。或ひはまた泣いて涙の垂れることともいふとある。いづれにしてもそこで三水を書いたもの。

我が國では汽車・汽船の如く蒸氣機關によつて運轉せられるものに使用せられてゐる。正岡子規の「墨汁一滴」に『汽車の汽を滊と書く人多し。字引に汽は水气也とあるを福澤翁の見つけ出して譯字に當てたるなりと。滊の字あれど意義異なり。』とあるのを見れば明治文化の開拓者ともいふべき福澤諭吉氏が始めて汽車といふ言葉を使ひ初めたことがわかる。蒸氣、水蒸氣の場合には氣がよく、蒸氣の釜は汽罐である。そして機關車の場合には機が正しい。これは蒸氣機關(Lo-comotive)による車の意だからである。

207 〔軍〕クン　新　グン（四・二二）　舊　いくさ（一一・七）

本義は軍團のこと。轉じてイクサとなる。旅の條下に説明したやうに昔の支那では戰爭には主

として戰車を使用したのでこの字を組合はせてその意をあらはしたものである。上部のワ冠は包の字の上部と同じく人がかがんでものをつつんでゐる象形で、戰車をひとまとめにするといふ意を含ませたものである。

208 〔河〕カ ガ　新　かは（四・二一）　替　ガ（八・五）

水と可との合字。もと支那の黄河の名前として作られた文字。黄河は今でこそ黄河といつてゐるが大昔は單にカといつたものである。カッカッと岩などにせかれて流れる水音が直ちにこの川の名稱として呼ばれるやうになつたものであらう。そこでカの音を有する可の字を三水に組合はせてこの字を作つたもの。轉義して一般にカハの意に使用せられるが大河と熟するやうに大きなものに限られる。

209 〔船〕セン　新　ふね（四・二一）　替　セン（六・五）

舟と㕣との合字。フネのこと。故に舟。㕣は聲符（沿を見よ）。蒸氣船・艦船・船舶と熟し舟に比し船は比較的大きなものに用ゐられる。舟は獨木舟の如く小さなものに用ゐられる。

210
椉 〔乘〕 ジョウ　新　の・る（四・二一）　替　ジョウ（七・八）

入と桀（はり・つけ）との合字。小篆にて。敵陣へ進んで敵の將兵を殘らずハリツケにするだけの大勝を博する意である。は矛（ほこ）では人である（比・北を見よ）から矛をもつて多くの人をつきさしてゐることがあらはされてゐる。勝に乘ずる、乘り氣になると使用せられるのはかかる意からである。轉義してノル・マタガル・倍加することとなる。

211
〔買〕 バイ　新　かひ（四・二一）　替　バイ（一〇・四）

小篆にて。上部は网（あみ）の象形（网を見よ）。下部は貝である。貝は古代の通貨。貝貨を與へて自分の欲するものをカヒトルこと。品物を得るのは恰かも魚鳥を羅網で捕へるのに似てゐるから网の字を組合はせたものである。

212
屯 〔春〕 シュン　新　はる（四・二三）　替　シュン（七・二一）

古形はである。卽ち（草）と屯と日との合字。中間の屯の字は一と（セツ）との合字にて一は土地を意味しは地上に出たばかりの草の芽の象形。そこで春の字は地上に出かけた

草木の嫩芽（屯）が、太陽の光り（日）によつて成長して草となる（艸）といふ會意。これによつて時候のハルをあらはしたものである。なほ屯（チュン／とん）の字は聲符にもなつてゐる（村を見よ）。

213 〔里〕リ　新　さと（四・二三）　替　リ（五・二）

田と土との合字。本義は鄕土。そこで土を書き更にそこには田野があるといふ意味にて田を組合はせたのである。

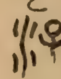
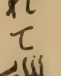
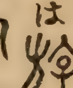
214 〔野〕ヤ　新　の（四・二三）　替　ヤ（八・五）　假　下野（しもつけ）（九・六）

里と予との合字。郊外卽ち原のことである。故に里。予は純然たる聲符である。予の字はから來たもので一方からものを推し與へ他方からこれを固辭してゐるかたちで（自の條を見よ）あるから野とは全然意味上の關係はないものである。なほ野の字の古文は埜と書いて上部に林の字のあるものもある。

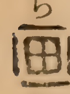
215 〔泣〕キフ　新　なき（四・二四）

水と立との合字。淚を流してナクこと。故に三水。立（りふ）は聲符。

〔遊〕イウ ゆ　新　あそび（四・二四）　替　イウ（九・七）

もと（汓）と書く。三水と子との合字にて本義はオヨグ。お河童（かつぱ）連中が水遊びをしてゐることに思ひついて出來たものであらう。之遶（行を見よ）が加へられてとなつたのは水中をおよぐのは地上を歩いてゐるのも同樣だからである。なほこの古形に含まれてゐるは子の字の條下に說明してあるやうに子と同字である。ところが後になつて字形が類似してゐるところより汓を斿と書く樣になつた。斿の字は古文では、小篆ではとなつて居り旗の垂れ足が風にヒラとなびいてゐる意の文字。卽ち旗の垂れ足の象形（㫃（えん））の字へ更に聲符として汓の字の㫃を省いて子を組合はせたものである。そこで汓と斿とがとりかへられて用ゐられるやうになり三水を加へた游や之遶の遊が出來たのである。

〔强〕キヤウ がう　新　つよ（四・二四）　替　キヤウ（七・二）し・ふ（九・九）

この字は弘と虫との合字にて本義は虫の名。故に虫。弘は聲符である。ツヨイ意になつたのは彊の音に假借されたもので武器の弓をもつてその意をあらはしたものである。畺は聲符である。なほ畺の字は田と田との間に横線を入れてサカヒの意として作られた文字である。卽ちから

疆 來たもので田畺のサカヒのことである。のち更に疆の字が作られ弓の中に土の字が加へられた。邊疆の如く熟する字である。强の字が勉强の强となるのは勥の字に假借されたもので、この字は力よりツトメル意を見出し强にて音を知るべき文字である。

218 **〔將〕** シヤウ　新　シヤウ（四・二四）　替　まさ・に（一一・二）

古文はにて牆の省略と寸との合字である。大將の將がその本義。故に威儀法度をあらはすために寸の字を組合はせたのである。將（替を見よ）は聲符として加へたものであるが或ひは壯（さかん）なる會意をも含めたものかも知れない。この字がヒキユルとなるのは大將は士卒を統率するものだからである。將來の將とか、マサニ……セントスとなるのは單に音を借りて使用したものである。

219 **〔引〕** イン　新　ひ・く（四・二四）　替　イン（一二・二四）

弓と丨との合字。弓をヒク（開）意味。それより一般にヒクこと。丨は弓を射るとき矢を弦に番へてグット引くことの指事である。

220 **〔急〕** キフ　新　いそぎ（四・二四）　替　キフ（五・一九）

古形はで及と心との合字。心がセハシイことでそれよりイソグ。そこで心の字を書き聲符として及を組合はせたものである。及の字はオヨブといふ字であるから、あとからあとからとおつかける意があり、汲々としてゐるやうな心持ちの會意を兼ねてゐることは明らかである。

221 〔合〕カウ がふ　新 あ・ふ（四・二四）　替 カツ（六・一〇）　ガフ（九・五）

亼と口との合字である。上部は集合の集の本字でモノが三方から集まつてゐることをあらはしたものである。會合の會の字の上部もこれと同様である。口が加へられてゐるのは多くの人のいふところ卽ち衆口が一致するの意からである。なほ合同の同の字にも口が加へられてゐることは注目すべきである（私・品を見よ）

222 〔刀〕タウ　新 かたな（四・二四）　替 太刀（たち）（六・一〇）　長刀（なぎなた）（一〇・一二）　假 馬刀貝（まてがひ）（七・四）　タウ（七・二三）

古形からとなり現形に進んだものである。最初の字がカタナの象形なることは一見してわかるであらう。それが第二形のやうになつたのは古い時代の筆は細いものを使つたので刀身の部分を塗りつぶすのが面倒だつたからそのまま省略されて第二形のやうになつたのである。

刃

この字のハの部分へ點がうたれて刃となればヤイバといふ意味になる。この點はここが切れる

刅　ところぞといふ指事である。更に刃の字の右に點をうつて刅とすればキヅックといふ文字となる。右旁の點は刄で傷いて血のついてゐる指事であらう。

第五章　卷五の新出漢字

223 〔陛〕ヘイ　新　ヘイ（五・一）

阝と坒との合字。本義は階段のある宏莊な建物のこと。卽ち阝（鄕を見よ）にてその建物の築かれてゐる場所が見晴らしのよい高き土地なることをあらはしたもの。坒は比と土との合字にて土が相比び續くことであるから土地の廣いことを意味し同時に聲符をも兼ねさせてゐる。

階段のある宏壯なる建物より轉義して天子の在ます御殿の階段の稱となり、それより天子を呼ぶ敬稱として陛下と使ふやうになつた。これは秦の始皇帝の時より始まつたものといふ。

224 〔民〕ビン みん　新　たみ（五・一）　舊　ミン（八・二〇）

母といふ字の古形に一線を加へてとしたものが現形となつたものである。この一線は母親が產むところの子といふ意を指事したものである。

225〔千〕セン　新　セン（五・一）　替　チ（六・二三）

古形はにて人と十との合字。人は聲符。千は十の百倍にて大數であるから、百が一と白との合字なるに對し特に十の字を組合はせたのであらう。

226〔萬〕バン まん　新　マン（五・一）　替　バン（五・七）

古形は。一種の虫の象形。發音の相通により數量のマンの意に假借されたものである。

万　この字の略字の如く考へられてゐる万の字は、實は印度の卍（卍巴の卍）の字が支那へ傳はりそれが變形して使用せらるるやうになつたものといはれてゐる。

227〔代〕タイ だい　新　よ（五・一）　替　かはり（五・一九）　ダイ（五・一九）　かふ・る（六・一〇）、　假　事代主（ことしろぬし）（一二・二）

人と弋との合字。人がカハルこと。故に人扁。弋は聲符。轉義してヨ（世）となる。

228〔當〕タウ　新　タウ（五・二）　替　あたり（八・一）　あて（九・一〇）

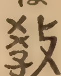
尙と田との合字。本義は田と田とが相對してゐること。故に田を書く。尙（ショウ）は聲符。

むかし殷周二代における田制に井田法といふものがあつた。九百畝の田を井の字形に九等分して中央の一畫は公田とし、八家が共同で耕作しその收獲を官に納めた。周圍の一畫づつが各八家の持分とされたものである。そこで田と田との區畫が井然と相對してゐることを當といつたものである。轉じて物事が理にかなふこととなり、また當年・當日の如く現に直面する事柄にも用ゐられるやうになつた。

229 〔徒〕ト つ　新 ト（五・二）　替 いたづら（一二・二二）

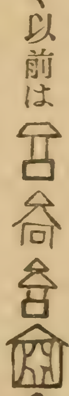
行人偏と走との合字。かちにて歩くこと。故に行人偏を書き（行を見よ）走を組合はせたもの。

230 〔教〕カウ けう　新 ケウ（五・二）　替 をしへ（六・四）

古形はにて學の字とよほどよく似てゐる。子供にもの（XX）をオシヘル意。旁の攴は手（又）に棒（ト）を持つてゐることでタタク意がある。即ち命令に從はないものや覺えの惡い子供を鞭でたたいて服從させ、また知識を覺え込ませるの意匠である。教鞭を執るといふ言葉もかうした考へから起つたものである（學を見よ）。

231 〔室〕シツ しち　新 シツ(五・二)　假 根室(ねむろ)(一一・一四)

家の象形から來たウ冠と至との合字にて祖先の靈をまつる祖廟のこと。至(し)は聲符。

然しこの字は最初から形聲文字として作られたものでなく以前はの如き象形文字であつた。第一形は祖廟がごく簡單に現はされてゐるが第三形になると屋根が完全に二重になつてゐる。第四及び第五になるとヘヤが幾つにも仕切られてゐる。これは後になつて祖廟の制がやかましくなり中央に大室を設け、東西南北の四方に四つの室をおいたからである。四隅に出來る室を亞室といふが、中央の大室だけは屋根も天井もなく明けつぱなしにしてかつて祖先がなした穴居生活のおもかげを遺したものである。大室の上部を明けつ放なしにする遺風は夏の時代まで續いたが、雨などが降つて祭祀の禮を妨げられることがしばしばあつたので(庭を見よ)、殷の時代から大室の上へ大きな屋根を二重に作るやうになつた。第三形はそれを物語つてゐる。第四第五は明らかに大室や亞室や四方の室があらはされてゐる。室の字が部屋の意になるのは間が幾つにも仕切られてゐるからである。

亞室	南	亞室
西	大室	東
亞室	北	亞室

なほ建築上に古代の風習を殘してゐる例は我が國においても出雲の大社の神殿造りがある。詳しいことは穴の字の條下にゆづる。

232〔級〕キフ　新　キフ（五・二）

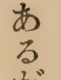
糸と及との合字。本義は絲が順次に重なつてゐること。故に糸扁。及は聲符。轉義して等級・階級の如く使用せられる。また首級と使用せられるのは秦の法に敵の首を一つ斬れば爵一級を與へられたからである。

233〔君〕クン　新　クン（五・二）　替　きみ（五・二）

尹

古形はにて尹と口との合字。尹の字は手（又）に一本の棒（丨）をもつてゐる形。役人といふ意味の文字にて棒は支配權をあらはしてゐる。それに指揮命令を意味する口を加へて君主・君王の意の文字としたものである（父を見よ）。

234〔冬〕トウ　つ　新　ふゆ（五・二）

古形はにてととの合字である。それが冬の字となつたのであるがは糸巻へ糸を巻いた形にて巻き終るといふ意味を現はしたもので終の字の古形である。は氷の古形で氷

が凍結して氷となつた樣をあらはしたものである。さて水の氷る冬は四季の終りであるから、終の字と氷の字との兩字を組合はせてフユなる會意文字としたのである。

235 〔問〕ブン もん　新　モン（五・二）　替　とひ（一一・一一）

門と口との合字。トフこと。故に口を書く。門は聲符にもなつてゐるが、トフには口が言葉の門をなすからその會意も含まれてゐる。

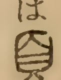
236 〔流〕リウ る　新　ながれ（五・三）　替　リウ（五・一四）

水と㐬との合字。㐬の古形はにて上部のは育の字の上部と同じく子供が母胎から產まれる時の象形である。だから子の字が逆になつてゐるがこれは正常分娩に際しては胎兒は頭の方から產れて來るからである。下部は川の字。合して子供が母胎からスラ〳〵と產まれ出る會意といふ。それに三水が加へられて水が滯りなくナガレル意の文字としたのである。梳（くしけづる）、疏（疏水、等の㐬はみなその意を含ませて組合はされたものである。

237 〔娘〕ラウ ヂャウ なら　新　むすめ（五・三）

女と良との合字にて良は聲符である。この字は孃と同字であるが習慣上娘の方はムスメ、村娘孃の如く用ゐられ、孃の方は令孃の如く使用せられてゐる。孃の字の襄は聲符である(讓を見よ)。

238
〔頭〕トウ ヅ　新 あたま(五・三)　替 トウ(五・七)　ヅ(一二・二一)　かしら(八・三)

豆と頁との合字。頁(かしら)の古形はで上部のは首といふ字の古文に酷似してゐる即ち頭部の象形。下部のは人の象形。合して人のカシラをあらはしたもの。豆は聲符として後に加へられたものである。

頁は他の字を作る際主として旁におかれる。貝の字と字形が類似してゐるので、それと區別するため大貝と稱せられる。これは貝の字に類似してゐて、しかも貝よりは字畫が多いからである。

239
〔尾〕ビ み　新 を(五・三)　替 ビ(九・一五)

古形はで尸と毛の字を逆にしたものの合字である。尸は屋の字の條下に說明したやうに人の象形であるが、假りに人の姿を持つて來てそのお尻のあたりから毛が垂れてゐることをあらはしてヲなる意の文字としたのであらう。

なほ古代の服裝は飾りとして尻のところに毛を垂らしてゐたのでそれから來たものともいはれ

てゐる。

240〔酒〕シウ しゆ　新 さけ（五・三）　替 シユ（五・二四）

水と酉との合字。酉は古形から來たもので酒を入れる瓶の象形である（尊・樽を見よ）。もと酉がサケの意であつたのだが後に水が組合はされて酒なる文字が出來たものである。

241〔待〕タイ だい　新 まち（五・三）　替 タイ（一二・一四）

行人扁と寺との合字。マツ・ハベルの意。故に行人扁（行を見よ）。寺は聲符。

242〔飮〕イン おん　新 のみ（五・三）　替 イン（九・二）

食と欠との合字。ノムこと。欠の古形はにて人が口を開けてゐる形である。即ち歐・歌・歡・歎・欺・欲などの字に組合はされてゐる旁がそれである。

243〔切〕セツ さい　新 キリ（五・三）　替 セツ（五・二二）サイ（六・二二）

七と刀との合字。キルこと。故に刀。七は聲符である（分を見よ）。

244
〔血〕ケツ けち　新　ち（五・三）

皿の上部へ一線を加へたもの。支那では生きた動物を神に犧牲として捧げ後にこれを屠つて皆で共食したものである。犧牲を屠る際皿の上に血が流れるので皿の上部に一線を加へてその指事としたものである。

盟約の盟の字の下部も實は血なのである。これは大事な約束をなすに當つて血をすすりあつた習慣を物語る文字である。

245
〔曜〕エウ　新　エウ（五・四）

耀

この字はもと燿と書いたものである。カガヤクといふ意の文字。故に火扁。翟は聲符。後に太陽の光りのことに用ゐられるやうになつたので火が日に取りかへられたのである。また耀の如く光扁にも書かれる。これは意義が似てゐるところから聯想作用によつて起る現象である。卽ち翻といふ字の羽が飛となり飜とせられる如く、また嶢が石の高い意味であるから磽の如く石扁にせられるが如きものと同様である（砲の條を對照せよ）。

なほ翟は羽と隹との合字。山雉のこと。故に隹（鳥を見よ）。羽を組合はせたのは非常に羽の美しい鳥だからである。燿の字に特に翟が組合はされてゐるのは幾分この羽のヒカリカガヤク意を含めたものと見られる。

曜の字は光りかがやく意より轉じて七曜の如く星の名ともなる。

246〔記〕キ　新　キ（五・四）　替　しるし（七・二三）

言と己との合字。言葉でいふことをシルスこと。故に言扁。己は聲符である。

247〔晴〕セイ じやう　新　はれ（五・四）　替　セイ（七・一二）

日と青との合字。一點の雲もなく青々と澄み渡つた空に太陽が光り輝いてゐる會意。青は音をもかねてゐる。

248〔病〕ヘイ びやう　新　ビヤウ（五・四）　替　や・む（九・六）　やまひ（一〇・一八）

疒（ダク にやく）と丙との合字にて丙は聲符。疒は小篆では。病氣にかかつて衰弱し切つた人間が力なささうに兩手を垂れてモノ（横の一線かそれ）によりかかつてゐる様をあらはしたものである。こ

の文字はヤマヒダレといはれるやうに疾・症・疫　痢　疲　痛　痘　痕　療の如く他の文字に組合はされて病(やまひ)の意があらはされてゐる。

249 〔曇〕タン どん　新　くもり（五・四）

日と雲との合字にてクモリ。太陽（日）を雲がかくすの會意である。

250 〔筆〕ヒツ ひち　新　ふで（五・四）　替　ヒツ（一一・一一）

古形は等で現形の如く竹冠は無い。この字に竹冠がついたのはズット後世のことで秦の毛恬將軍が竹管を用ゐたことに原因するのである。古形の聿に含まれてゐるは又の字と同じく右手の象形。しかも古形の第一は穂先に墨汁を含ませたもの、第二はまだ墨汁がつけてないからその穂先がバラバラになつてゐる。まことに面白い文字である。

この字は書・晝・畫・律等に組合はされてその義をあらはしてゐる。

251 〔葉〕エフ　新　は（五・四）　替　紅葉(もみぢ)（九・一六）　エフ（一一・一七）　假　落葉松(からまつ)（六・二四）

草と枼との合字。ハのこと。故に草冠。枼は世と木との合字にて木の葉が重なつて繁る有様が

笹　人の世が續くに似てゐる聯想から世に木を組合はせたもので世と同様な意味である。竹冠の笹も同様に使はれるが後に笹はササ、葉はハとして用ゐられるやうになつた。

252
〔**鯉**〕リ　　新　こひ（五・六）

魚と里との合字。コヒのこと。故に魚扁。里は聲符である。

253
〔**地**〕チ ち　　新　チ（五・六）　　替　チ（五・一九）

土と也との合字。也は它と同字にて蛇の象形である。この字は單に聲符として組合はされたものといはれてゐるがさうではなからうと思ふ。それは人類が地球上に勢力を得初めた頃にはまだ地上の諸所に圖體の大きな大蛇や鰐のやうな恐ろしい爬虫類が横行してゐてよほど人間の生活に脅威を與へてゐたものだらうと思はれる。そこで土地のチをあらはすに地上の怪物をつけ加へたのではなからうか。

生物を發生的に見て行くと蛇類はよほど人類に接近してゐる。卽ち一番最下等の原生動物はアメーバの類でそれより海綿の類、水母や珊瑚蟲の類、蚯蚓の類、なまこうにの類、貝類、たこ類蟹蜘蛛むかでや昆虫の類を含む節足動物と進んで行つたものである。以上はいづれも無脊椎動物

で昆虫類が一番進化したものである。次 人類の屬する脊椎動物の方では魚類が最下等でそれから兩棲類、次がへび・とかげ かめ。わにの如き爬虫類、その次が空を飛ぶ鳥類で最後が哺乳類である。人間はこの哺乳類の中に含まれるのであるから蛇類と人類とはよほど接近してゐる。そこで人類の祖先は前世紀の怪物として生き殘つてゐるこれらの爬虫類と絶えず闘爭して、その撲滅をはかつたことだらうといふことは想像するに難くない。

歴史以前を物語る各國の神話や傳説に大蛇（おろち）の出て來ないことは稀で、我が國においても古事記に大蛇退治のくだりがあり、その大蛇から出た劍は三種の神器の一となつて皇位繼承の證據とさへなつてゐる。どうしても蛇は退治しなければならなかつたのである。エデンの園でアダムとイヴに智惠の實を食はせたのも實に蛇であつた。そしてこれから人類が發生するのであつて、人類の初めには必らず蛇がつきまとつてゐる。我等の祖先が常に爬虫類と深い因縁のあつたことはいふまでもなからう。爬虫類の爬の字は爪と巴（は）との合字であるが鰐や蜥蜴の如き特異な爪を持つた動物や鱗を逆立てた大蛇どもがしきりにこの地上をのたうち廻つてゐたのである。しかもその逆鱗に觸れようものなら、それこそ一大事だつたのである。今でも蛇といへば大抵の人がただ何となくこわがつて石でも投げつけてやりたい氣持ちを起すのも、もともと我々人間とは大昔から性が合はなかつたからであらう。

254
〔告〕カウ、コク　新 コク（五・七）　替 つげ（八・一〇）

牛と口との合字。ツゲルの意。故に口。特に牛が組合はされてゐるのは神に祭意を告げる時に犧牲を献げたものであり、しかも犧牲の中で牛を代表的に見立たからである。

255
〔帶〕タイ　新 おび（五・七）　替 タイ（九・二）

古形は。衣冠束帶に用ゐるオホオビのこと。紳士の語はこれから來たものである。帶の字はその象形で上部の一は帶、は紐糸。そして大帶には巾を結びつけるのでそれをあらはすために巾を二つ書いて組合はせたのである。

256
〔客〕カク きやく　新 キヤク（五・七）

ウ冠と各との合字。家へ訪問してくれる人。故に家の象形たるウ冠。各は聲符である。

257
〔注〕チユウ シユ　新 チユウ（五・七）　替 そそ・ぐ（一〇・五）

水と主との合字。ソソグの意。故に三水。主は聲符。

258〔文〕ブン もん　新 モン（五・七）　替 ブン（一〇・七）

小篆にて。筆畫の交錯によつてアヤをなしてゐる樣をあらはしたもの。この字が文字の意に使用されるのは文字は紙上に記されて一種のアヤをなすからである（字の條を參照せよ）。

259〔反〕ヘン はん ―ヘン ほん　新 たん（五・七）　替 ハン（九・五）

古形はである。は又にて手の象形。は掌をかへす意の指事である。

260〔景〕ケイ きやう　新 ケイ（五・七）　替 景色（けしき）（五・一六）

日と京との合字。本義は日光のこと。故に日。京は聲符。後に影の字がこの字に代つて使用されるやうになつたので、景の字はアキラカ（景明）・シタフ（景仰）・オモムキ（景趣・風景）等の意に使用されてゐる。

261〔庭〕テイ ちやう　新 には（五・九）　替 テイ（一二・二三）

广と廷との合字。广は麻、魔の如き文字に組合はされ俗にマダレ（麻垂）と稱してゐる字であるがこの字の本義はガケノイヱである。說文に「厂に因りて屋をつくるなり」とあるが如く古形はにて家の棟全體の象形から來てゐるウ冠の半分である。もと山間などに掛小屋をしてゐた時代の面影を物語る文字である。そこでこの字の組合はされた文字は庇・廂・座・庵・廠・店・府・庫・廁・庖・廚　廄　廊の如くすべて家に關係をもつてゐる。

次に廷の字の古形は又はで人と士との合字。人が地上にタダシクタツことで坐の字の古文などと同じおもむきから出來たものである。說文には𡈼の字は人と士との合字にて士が君に事へる意をあらはしたものとしてゐるがこれは誤りである。それは士と土とはもと古文が同形だつたのでかかる誤りをなすに至つたものであらう（𡈼と壬との區別は任の條を見よ。）。それはさておき廷の字は𡈼へ更に廴の字が加はつたもの。廴の古文はにて行の字の左扁に類似してゐる。ユルクアユム意（行を見よ）。即ち朝廷へは群臣が來り集まるといふ意味で後に加へられたものである。

廷　庭ともに朝廷のことであるが、何故广が加はつたかといふに、支那の古代においては政をなすに當つて君主は群臣を屋外に集めた。これは室の字の條下に說明したやうに穴居時代の先王のおもかげをしのぶためである。そのために折角盛裝をこらした衣冠束帶が雨露によつて濡れそぼれ威儀が亂れるやうな結果となる。そこで後には屋（覆ひ）を作ることになりその方を覆のな

い廷と區別するため庭としたのである。しかし後になつて庭の方が廣くニハのことに使はれるやうになつて、廷は屋の有無にかかはらず朝廷の意となつた。

262〔栗〕リツ りち　新 くり（五・九）　假 栗鼠（九・三）

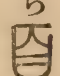
と木との合字。古形はにて小篆ではである。何れも下部は木で上部は草木の實をあらはしてゐる。本義は果實が下になつてゐることであるが轉じてクリの意となつたのである。

この字によく似てゐる粟の下部は米にて五穀の意をあらはしたもの。

粟　慄

戰慄の慄は單に栗が聲符として組合はされたもので、意は心（立心扁）の方より見出すべきものである。

263〔夏〕カ げ　新 なつ（五・九）　替 カ（八・五）

小篆にてと書く。即ち（頁・面・首を見よ。）と（兩手）と（麥を見よ）との合字。說文に「中國の人なり」と註してゐる。夏・殷・周といふやうに夏の字はもと支那古代の國號に用ゐられてゐる。夏は禹王が舜から帝位を讓られた時卽ち我が國の紀元前一五七一年に始まり、桀王が湯王に滅ぼされるまでの四百五十八年間である。支那では自國を尊んで他國のことを夷狄といふ習慣が

あり、東夷西獸北狄南蠻の語があるやうに自分の國のみを中國と見た。現在でも支那は自國を中國といひまた中華と呼んでゐる。我が國が日本に大をつけて大日本とし英國がグレートブリテンといふのと同樣な心理であらう。そこで夏の字も何かの美稱で中華の華の字の如きものではないかと考へられる。

字形の方から見るとこの字は人間の面部兩手兩足を組合はせて禮儀正しき人民の意をあらはしたもので、その盛んなる貌より氣候の盛んなナツの意に用ゐられたものとも解釋されないこともなからう。一說には人間が兩手兩足をあらはにして眞つ裸になつてゐる姿をもつてナツの意としたものといはれてゐる。眞裸では禮儀正しきどころか不體裁この上もない。

264 〔秋〕 シウ しゆ　新 あき（五・九）　替 シウ（七・二四）

禾扁へ龜火（焦の字の音と同じくセウ。意味は龜トに際して龜甲を燒き兆のないこと。）の字の畫を省いて火を組合はせたものといふ。本義は禾穀が實ること。それより轉義して禾穀の實る時節のアキとなつたものであるといはれてゐるが、龜甲を燒くこととアキとの間に適當な關係が見出せない。龜火は聲符として組合はされたものであらうと思はれるが、特にこの字を選んだのは秋は五穀の成熟するときであるから火熟の意にて火の字を含むこの字をもつてしたものかも知れない。

265〔表〕ヘウ 新 おもて（五・九） 替 ヘウ（七・一） あらは・す（一一・一）

裏

裡

古形はで衣といふ字の中間に毛の字を組合はせたものである。即ち着物として着る上服には毛が表につけてあつたからオモテといふ字に毛を加へたものである。なほ裏といふ字は衣の中へ里なる聲符を組合はせたものでこの兩字は相關聯して出來たことが察せられる。衣が扁となつてゐる裡の字も裏と同字である。

266〔歩〕ホ ぶ 新 ホ（五・九） 替 ある・く（六・一二） あゆみ（八・三）

古形は。小篆では。ともに足趾の象形から出來た止の字の方向をかへて二つ重ねアユム意をあらはしたものである（止の條を參照せよ）。

267〔晝〕チウ ちゆ 新 ひる（五・九） 替 チウ（七・一二）

畫

この字は畫といふ字によほど類似してゐる文字で中間の田が日になつてゐるまでである。畫の字は田のサカイをすることであるが、境界を作るのだから聿（ふで）とサカイの意味の一線とを組合はせ

たものである。同様に一日のうち晝夜の區別をするのは何を標準として定められるかといふにこれは太陽の出沒によつてなし得られるのであるから、そこで太陽（日）と筆（聿）と一とを組合はせたものである。

268 〔數〕スウ シュ す　新 かず（五・九）　替 かぞ・ふ（六・二一）　ス ウ（七・六）

婁　褸

婁と攴との合字。攴はタタク意（攷を見よ）。物をカゾヘル際に一つ二つと順々に數へるものをたたくので攴を組合せたともいはれてゐるが、攴は手に竹ぎれなどを持つてゐる象形であるから算用をする際棒で點取りをしたことに起因するのではなからうかと思はれる。婁（ロウ る）は聲符である。なほ婁の字は奚の字（鷄を見よ）と同様に微賤な物賣り女が、頭上に容器を載せてゐる象形といはれてゐる。即ち古文として說文に載せられたる[illegible]は上が容器で下は女である。更に籀文として掲げられた[illegible]は兩手（[illegible]）でもののはいつてゐる容器（[illegible]）を女が頭上に載せてゐるかたち。物賣り女は微賤なものであるから、そこで襤褸の褸の字にも組合はされるのだと說かれてゐる。またその物賣が一つ二つと數へて品物を賣るので婁と攴とが組合はされてカズ、カゾヘルの意となつたのだらうともいはれてゐる。

269 〔計〕ケイ かい　新 ケイ（五・九）　替 はかりごと（一〇・二七） はか・る（一一・一〇）

言と十との合字。數をカゾヘルこと。故に言扁。數なる觀念をあらはすために基本數中の成數十を組合はせたもの。古い字形に旁が千となつてゐるものもある。これは大數をもつて數なることをあらはしたのである。カゾヘルことより轉義してハカル・ハカリゴトともなる。

270 〔起〕キ　新 おき（五・一〇）　替 おこ・す（七・六） キ（九・一五） たつ（一一・二四）

走と己との合字。タチアガルこと。故に走。己は聲符である。

271 〔門〕ボン もん　新 モン（五・一〇）　替 かど（一〇・一二）　假 門司（もじ）（七・一二） 鳴門（なると）（一一・八）

古形はにてその象形から出來た文字である。問・聞等に組合はされて意及び聲符となる。間・開・閉等はそれぐ門よりの聯想作用を起さしめるために組合はされたものである。また戶の字は門の一片より出來た文字である。

閂　門の字に一（門のしまりをする横木をあらはす。）が組合はされると門となりカンヌキの意となる。

272〔平〕へイ びやう　新 ひら（五・一〇）　替 へイ（六・六） たひら（七・一二） ビヤウ（一二・一三）

古文は平にて亏と八との合字。亏は口氣がスラ〳〵と出て行くこと。八は分散する意。この二字を合はせて言葉が滯りなく口から出て行く意の文字としたものである。それより轉じて平易なることとなりタヒラカ・ヤスラカとなつた。

273〔匹〕ヒツ ひち　新 ひき（五・一〇）

八と匸との合字。布帛一匹のこと。匸は筐底の筐、隱匿の匿の字に見ゆる匸で物を容れる器物をあらはしたもの。ここでは布帛を容れる箱である。八は聲符でもあるがまた一匹は八丈だからその會意もあるのだらう（布帛一束は四丈、一匹は二束、したがつて八丈となる）。

匹夫匹婦と使はれるのは匹は二束だから一對をなすによつてである。

274〔橋〕ケウ げう　新 はし（五・一〇）　替 ケウ（九・一五）

木と喬との合字。ハシの義。故に木扁。喬（けう）は聲符であるが、この字はタカシといふ字であるか

ら橋が川の上に高く架けられてゐる會意も含まれてゐるのであらう。

喬

喬の字はタカシと訓じられる文字。天と高の省畫とを組合はせたもので本義は高い木がまがつてゐることである。即ち天にてまがつてゐることをあらはし高にて音及び高い意をあらはしたものである。

275 〔渡〕ト

新 わたし（五・一〇）　替 ト（一一・二八）

水と度との合字。水をワタル意。故に三水。度は聲符である。

276 〔瓦〕グワ げ

新 かはら（五・一〇）　替 グワ（一〇・一三）

小篆では。燒いた土器のことにてその象形。轉義してカハラ メートル法のグラムに使用せらるのは音の假借である。某博士が、自分の子供が「グラム煎餅」といふのでメートル法ばやりの昨今のこととて、メートル法でも書いてある煎餅かと思つたところ、豈はからんや在來の瓦煎餅だつたといふ笑ひ話があつた。これなどは瓦といふ字はカハラが本義でその音のグワを借りてグラムに當てたのだといふことを算術などのときに敎へておか

なかつた教師の罪で全く笑ひごとではない。

277〔用〕ヨウ ゆ　新 ヨウ（五・一〇）　替 もち・ふ（八・一六）

小篆にて。トと中との合字。モチヰルの意。或る事を爲さうか爲すまいかと迷つてゐる際にその事をウラナヒ（ト）然る上そのことは爲してもよろしいとアタレバ（中）取り行ふ（用）といふ考へから出來た文字であるといふ。いかに支那人が卜筮を神聖視したかが貞の字や外の字とともに想像される（占の條を參照せよ）。

278〔紺〕カン こん　新 コン（五・一〇）

糸と甘との合字。布帛の深青にして赤味を帶びた色のこと。故に糸扁。甘は聲符。色彩に關する文字に主として糸扁が加へられてゐることについては絲の條を見よ。

279〔御〕ギョ ご　新 ゴ（五・一〇）　替 おん（五・一一） お（八・一二） み（七・二） ギョ（八・二二）

この字の本義は馬を御すと使ふ場合で古文にの如きものがあるのは面白い。現形の御は行人扁と卸との合字。行人扁はアユム意（行を見よ）。卸は馬車をとどめて車から馬を解き放す意。合し

て馬を使ふこととなるのである。それより統御の御となる。我が國にては御門(みかど)・御所・御物・御元服の如く天子のことに關したる敬語として使ふやうになり、後には廣く物事に冠らせて敬稱とするやうになつた。

卸

なほ卸(しや)の字は午と止と卩との合字。午(ご)は單に聲符たるに過ぎないが、止は馬車をトドメル意。卩(節を見よ)は馬を御するには一定の法があるからである。我國では小賣に對しヲロシの意に用ゐる。

280 〔尺〕セキ しやく 新 シャク(五・一〇)

小篆にて。上部は屍の字に含まれてゐる尸(し)にて、やや形はちがつてゐるが人の象形と同じく人體の象形。一尺はこの邊だといふ考へからその後部の方へなるしるしをつけて十寸の意としたものである。恰度寸の字が指掌から脈搏をはかるところまでの長さ、また丈が十と又(右手)との合字になつてゐるやうにこの字も人體の一部の長さを應用して作つた文字である。寸の字が寺・時等に含まれて規矩準繩のあることが表現せられてゐるやうにこの字も局の字などに組合はされてゐる。

281 〔昔〕セキ しやく 新 むかし(五・一一)

古形はにて上部は肉の切り身の象形。即ちは肉の字の內部のや俎の字の扁のと同じ意匠から出來た文字である。本義は日に乾した乾肉(はじし)。そこで日を組合はせたのである。ムカシの意になつたのは昨の字の音に通じたからである。そしていつかしら昔がムカシの意にのみ專用されるやうになり、ホジシの際には更に肉月をつけて腊の字を用ゐるやうになつた。

腊

282 〔者〕シヤ　新　もの（五・一一）　替　シヤ（七・一〇）

古形はにてととの合字。本義は物事を區別する言葉。そこで（まうす）の字を組合はせたのである。白の字は自を省略したもので鼻のこと。言語は鼻から空氣を吸ひ込み口から息を出すのでマウスの意となるのである。上部のはまたとも書き桼といふ字の古文である。聲符として加へられたまでであるがこの字の音が旅の字と同音だつたので、つひにモロ〳〵といふ意に假借せられるやうになり、のち更に言扁が加はつて諸となつたものである。

桼

モノと訓ずるのはアノモノ・コノモノと區別するからである。「右者」と書いてミギノモノとかミギハと讀んでゐる。

283 〔造〕サウ ざう　新　つく・る（五・一一）　替　ザウ（七・一二）

告と之遶との合字。本義は物事が成就すること。物事が完成すれば行きて（之遶にてあらはす。行を見よ。）これを知らせる（告）といふ會意にてこの兩字を組合はせたものである。

284 **〔祝〕** シュク　新 いはひ（五・一一）　替 シュク（八・一九）　假 祝詞（のりと）（八・三）

示と口と人（儿）との合字。示は祭壇の象形にて神の意をあらはす。そこで神をよろこばせるためにノリトをあげる（口）人といふ會意となりハフリのこと。それより轉じてイハフ。また一說に示と兄との合字ともいふ。神に仕へるのは多くの人の中で長老（兄）がこれにあたるからといふのである。更にまた示と兌（よろこぶ）の省畫との合字ともいはれてゐる。

285 **〔呼〕** コ　新 よぶ（五・一一）　替 コ（一〇・二二）

口と乎との合字。呼吸の呼にて息を外に出すこと。卽ちヨブの意。乎の字は聲符にもなつてゐるが、單なる聲符ではない。この字を分解するとノと兮（けい）との合字である。兮は更に八と丂とに分けることが出來るが、丂（平を見よ）は口氣が伸び出ようとしてさへぎられたかたち（上の一をもつて示す）といはれる。八は發散の意。そこで乎の字は話の最初や途中でエーとかアーとかウーとか聲音を引いて次の語を導くための言葉のことである。上部のノはその言葉が伸長せられることを示したものである。

乎

286
〔息〕ショク そく　新 いき(五・一一)　替 ソク(九・九)

自と心との合字。自は鼻の象形。心は心臟の象形。兩字を合して心靜かに鼻から息を出すといふ會意。それよりヤスム、憩ふ、生存などの意ともなる。

287
〔蠶〕サン ざん　新 かひこ(五・一三)　替 サン(一〇・二五)　假 夏蠶(なつご)(九・一三)

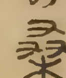
朁と䖵との合字。カヒコ。故に䖵(こん)を書く。この字は昆蟲類の總名。朁は聲符として加へられたもの。略して蚕と書くのは蠶より取る絹は大切なものだから天の與へた虫といふやうな心持ちからであらう。

288
〔頃〕ケイ きやう　新 ころ(五・一三)

匕と頁との合字。頭を傾けてゐること。頁は人間の頭部(顔・頭を見よ)。匕は比や化の條下に説明したやうに人の字を反對に又は身體を逆にした象形でそれによつて身體が傾いてゐることをあらはしたもの。後にシバラク・コノゴロ・田地百畝の意味などに假借せられるやうになり、本義の場合には更に人偏を加へて傾と書くやうになつた。

傾

289 〔桑〕サウ　新　くは（五・一三）

古形はにてクハの木の象形。現形の桑は小篆のから來たものである。上部のが右手の象形から來た又の字に類似してゐたので、桑の字の上部は桑の葉を摘むために差出された手であるとも説明されてゐるが誤つた解釋である。

290 〔棚〕ハウ・びやう　新　たな（五・一三）

木と朋との合字。木を編んで作つたタナのこと。そこで木扁。朋は聲符である。

291 〔動〕ドウ・トウ・づ　新　うご・く（五・一三）　替　ドウ（五・二六）

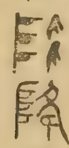
重と力との合字。本義はハタラクこと。そこで力。重は聲符。轉じてウゴク。それより人類禽獸蟲魚の如くウゴクことの出來る生物を動物と概稱して植物と區別される。

292 〔紙〕シ　新　かみ（五・一三）　替　シ（一〇・二四）

糸と氏との合字。本義は古綿や古布等をさらすスノコのこと。そこで糸を書き聲符として氏を

組合はせたものである。カミの意となつたのは轉義であるが紙はその製造に際してサラスからである。

293
〔降〕カウ がう　新 ふり（五・一四）　替 お・る（五・二六）　くだり（一〇・一八）　カ　ウ（一〇・一四）

古形はである。山阪の高いところから降りることである。詳しいことは階及び止のを見よ。

294
〔低〕テイ たい　新 ひく・し（五・一四）　替 テイ（一二・二〇）

本字は氐。人扁は後に加へられたもの。氐の字は氏と一との合字にて氏は山の一部が崩れおちてゐる象形といふ。山が崩壊する時には上の岩石は落ちられる限り上からトコトンまで落ちるのだからヒクイ意としたものである。一はその最底の地平線をあらはしたものである。

295
〔絲〕シ　新 いと（五・一四）　替 シ（五・一八）

糸を二つ組合はせたもの。蠶から取つたイトのこと。轉義して絲の如き細い條・紋のある樂器・またごく小量の名目卽ち毛の十分の一。絲と同音の朱も用ゐられる。

糸

糸の字の古文はで糸を束ねた象形から來たものである。系・縣・聯・孫・續の如く他の文字に組合はされて長く條を引いてゐる屬性が應用される。斷(たつ)・結(むすぶ)・締(しめる)・綻(ほころぶ)・縫(ぬふ)・繕(つくらふ)・綴(つゞる)・編(あむ)・組(くむ)・紐(ひも)・綱(つな)等もまた絲の屬性の應用されたものである。更に管絃絲竹の言葉の如く有絃樂器に使用されるところより音樂に關する文字にも組合はされてゐる。

この字に指事的符號をつけたは天地玄黄と熟する玄の字の古形といはれクロといふ意の文字とされてゐるが（この說には異論がある。申の條を見よ）糸の字が色彩をあらはす文字に組合はされてゐることは特に注意すべきである。色彩に關する文字を拾つて見ると青・赤・黄の三原色や白・黑・朱・丹・藍の如き文字を除けば大部分が糸との合字である。卽ち

紫（むらさき）　綠（みどり）　紅（くれなゐ）　紺（こん）　緋（ひ）　緇（くろ）
綪（あかね）　縹（青黄）　紈（土赤）（白色にて光澤あるもの）　素（しろ。染めない糸）

の如きものがそれである。

由來支那人は色彩に關する知識が非常に發達してゐたと見え、論語には「子曰、惡紫之奪朱也、惡鄭聲之亂雅樂也、惡利口之覆邦家者」（陽貨第十七）があり、墨子には「子墨子言見染絲者而歎曰、染於蒼則蒼、染於黄則黄。所入者變、其色亦變。五入必而已則爲五色矣。」（所染第三）の如き文句がある。論語の文句は服色としての紫は婦人などが好む色で美しいものではあるが、赤と青との混合だか

ら純粋な色ではない。それをたとへに取つて純粋なるものが不純なものに毒せられることを述べたのである。今日我々の知つてゐる色彩の數は實に四萬といはれてゐるがこれを還元すれば青・赤・黄の三つとなり、更にこれを圖の如く配合すれば紫・橙・綠の第二次色即ち間色が生ずる。前記の如く紫を不純色と見たのは既にこの理をよほど以前から承知してゐたことが察せられるのである。また論語郷黨篇には君子の用ゐる服裝の色彩についての記事もあり、「出藍の譽」の如き言葉は常に人々から用ゐられてゐる。色彩の知識が何によつて發達したかといふに支那では古くから織物が發達してゐたことに原因するのであらう。即ち織物には種々の色糸を用ゐるのでそのため色彩に關する文字にも糸が組合はされるやうになつたものである。



（第二〇圖）

支那が古くから織物の發達してゐた國であるといふことは古代の西洋人が支那を呼ぶにセリカといつたのに徴してもわかるであらう。そこで支那なる言葉の起りをしらべて見るにこれにはセリカとシンとの二つの語原的系統がある。即ち

(一)セリカ（Sêrica）　セレス（Sêres）　セラ（Sêra）

(二)シン（Sin）　チン（Chin）　シネ（Sinae）　シナ（China）

で、前者はその國産品たる絹布に關係を有し、後者は始皇帝が六國を併呑して確立した秦の國號

に淵源したものである。

セリカなる言葉が起つたのは、彼等が自分たちの製造した綿布繒綵の類を北方の陸路を經て印度やペルシャに輸出し更に遠くヨーロッパ洲にまで及ぼしたことに因る。ローマ人の如きは特にこれを賞美し、セリカを產出する國が遙かに東方の彼方にあることをおぼろ氣に知り、その品名をもつて直ちに支那の名稱としたといふのである。セリカの系統に屬する稱呼がよほど古代から用ゐられたことは事實であるが、その語原については種々の說がある。その中最も有力なのは繒兒の發音より來たといふのである。即ち繒兒は支那ではセル(Ser)といひ、朝鮮ではシル(Sir)、滿洲ではシルク(Sirk)、蒙古ではシルグ(Sirghe)といつたものでいづれも同一語根から地方的に音が分化されたに過ぎないらしい。また他の說によれば繒兒の色の黃色に起因すると說明せられてゐる。即ち黃色はチベット語でセル(Ser)といひ、トルコ語ではサリ(Sari)、蒙古語ではシャラ(Shara)といふやうにいづれも發音に一脈相通ずるところがある。しかもチベット語で「東」(East)は「黃色」の意のセル(Ser)と同音にて「東方」(Eastern)のことをシャル(Shar)といふから、これらの概念が關聯して『東方の繒兒を產する國』といふ意味で支那を指稱したものだらうといふのである。後說は前說に及ばないやうであるが、いづれにしてもその產出品たる織物に關係して說明されてゐることは理由なきことではない。今でも日本に來てゐる支那人の多く

がケンチュウ・シュス又はドンスの類を行商してゐるのに思ひ合はしてもこの間の事情が一層明らかになるだらう。

次に「シン」といふ稱呼は外國人が秦（Chin）を訛つたものといはれて居り織物とは關係がないが、然し我が國にとつてはやはり織物との關係が生じて來るので序でに說明を加へておかう。さてシンなる稱呼は南方の海路によりマレイ半島あたりに來た西洋人にチンの名が傳はり、更にそれが佛教徒を經て支那に入つたもので佛書に至那・脂那　莫訶至那・摩訶支那（マカはサンスクリツトにて大の意）とあるのは、その表音によるものである。支那のことを震旦。振旦或ひは眞丹とも書くが、これまた印度人が支那を指稱する語でチンとスタンとが結合したものである。卽ち印度人は支那をチナスターナ（Chinastana）といつた（スターナはトルキスタン（Turkistan）アフガニスタン（afganistan）の語尾に見るスタン（Stan）と同語で「國」の義をもつたものである。それを訛つてペルシヤ人はチニスタン（Tzinist n）といひアルメニア人はジエニスダン（Jenisdan）といつた。これ皆支那の意である。

我が國では秦の字をハタと讀んでゐるが應神天皇の御代に秦の王室の子孫である弓月君が多數の部民を率いて我が國に歸化し養蠶紡織の業を傳へたからである。そこでこの一族を秦氏といひ秦の字をハタ（機）と讀むやうになつたものである。その後雄略天皇は意を產業に用ゐられ殊に養

蠶紡織の業を奬勵せられた。皇后幡梭姬（はたびひめ）はみづから蠶を飼ひ給ひ、また使を支那に遣して織縫の工女を召された程である。そこで織物業は益々盛大になり、更に諸國に散在してゐた秦氏を以てこれを率ゐさせられた。彼等の献上した織物が殿前に堆高く山をなしたのでウヅマサ（太秦）の姓を賜つたといふことである。現に京都に太秦といふ地名が殘つてゐるのは彼等の住つてゐたところである。「秦」といふ字が我が國では織物に關係して居るところより見るに「反物」と書くべきところを「太物」とするのは「太秦」の太に何等かの關係があるのではなからうか。更に太物のことを「吳服物」といふが、これは應神天皇の御代にその部民を率いて歸化した漢の王室の子孫にあたる阿知使王卽ち漢氏が後に支那南部の吳の國に行つて織工や縫工をつれて來たことによるものである。我國の姓に服部（はつとり）（機織部の略）・吳（くれ）・秦（はた）等があるのはその名殘りであるが、もつて如何に支那が昔から織物の發達してゐた國かがわかるであらう。從つて染色も發達し色彩に關する知識が豐富なこともいはれなきことではない。色に關する文字に糸の組合はせられる所以である。
なほ藍の字の如く色素をとる材料をあらはすために草冠のものもあり、朱の如く木の組合はされたものもあるがこれは極めて少數である（染を見よ）。

296 〔支〕シ　新　シ（五・一四）　訓　つか・ふ（七・二二）

竹の字の半分个と又とを組合はせたものが現形となつたもので本義は竹のエダのこと。又は持つ意味であるが竹の枝のことを文字としてあらはすによい工夫がなかつたから、人が持つてゐることにしてあらはしたのである。これに木扁がつけば枝となり木のエダ。支の字は轉義して支線、支店の如くもののワカレとなる。この字が支配の支となるのは父・君の字に含まれてゐる棒が支配權を意味してゐるやうにやはり掌中に指揮權を握つてゐる會意に見たからである（敎・牧・改を見よ）

297
〔井〕セイ しやう　新 ゐ（五・一四）　替 セイ（一二・二〇）　假 天井（てんじやう）（八・九）

もとヰゲタのことにてその象形。ヰドの古文は丼で中に點がある。この點は井戸の中のツルベをあらはしたものといふ。我が國にて親子丼（おやこどんぶり）・鰻丼（うなどん）の如く丼をドンブリ又は略してドンといひ皿に類似した器の意に使ふ。これは井戸に釣瓶をおとせばドンブリと音がするのでその洒落に始まつたものだといふ。

298
〔薪〕シン　新 たきぎ（五・一五）　替 シン（一二・一〇）

タキギのこと。本字は新であるが後に草冠が加へられたものである。新の條を見よ。

299〔腰〕エウ　新　こし（五・一五）

コシのこと。故に肉月。本字は單に要と書いたのだが後に肉月が加へられたのである。要の條を見よ。

300〔喜〕キ　新　よろこび（五・一五）　替　キ（一一・二八）

壴と口との合字。壴の字の古形は[illegible]にて樂器の象形。卽ち面白い音樂を聞けば自然に感歎の言葉（口）が洩れて、心中にヨロコビを感ずる意から兩字を組合はせたのである。

鼓

太鼓の鼓はこの字に支を組合はせたものであるがこれは敲の字の旁と同じくタタクといふ意をもつたものである。

301〔或〕ワク コク をく　新　ある（五・一五）　替　あるひ・は（九・二五）

國の字の本字である。この字がモシャとかアルヒハとかに轉義したことは國の條にて說明したやうに、戈をもつて國境を警戒することは或ひは外敵が侵入して來はしないだらうかとの懸念か

ら起るのであるから、この字が遂にアルヒハといふ意に使用されるやうになつたのである（國を見よ）。

302 〔都〕ト つ　新 みやこ（五・一五）　替 ト（六・二） ツ（六・二）

阝と者との合字。宗廟のある邑をいふ。そこで阝（郷を見よ）を組合はせたもの。者は聲符。ミヤコの意となるのは天子の廟のあるところだからである。

303 〔親〕シン　新 おや（五・一五）　替 したし・む（七・一一） シン（七・二三）

本義は愛情の深いこと。常に目を離さないで見守つてくれるといふ意をあらはすために見の字を書いたものである。轉義してシタシ・オヤとなる。亲は聲符（新を見よ）。

304 〔孝〕カウ けう　新 カウ（五・一五）　假 信孝（のぶたか）（一一・七）

考の字の省畫と子との合字。作意は氣力の衰へた老人（考）を子が額に頂いてゐる形にて親の意志をついで行くことをあらはし、子として親に盡す本分なる文字としたのである。考はまた聲符にもなつてゐる。老の字と對照して理解されたい。

305 〔改〕カイ　新　あらため（五・一五）　替　カイ（七・八）

己と攴との合字。攴は教の字の旁と同じく輕くウツこと。過ちあるものを輕くたたいてアラタメさせる意。己は聲符。

306 〔細〕セイ　さい　新　ほそ・し（五・一六）　替　サイ（六・二六）　こまか（七・一九）

糸と田との合字。糸は蠶から取つた絹糸。田は腦の本字（思を見よ）である。絹糸はごく細いものであり、腦神經の機能も實に微細なものであるから、コマカイものの代表的なものを二つ組合はせてコマカイ・ホソイ。クハシイの意をあらはす文字としたのである。

この字の現形は旁が田になつてゐるが、思の字の上部とともに田野の田と異つてゐることを忘れてはならない。

307 〔砂〕サ　しや　新　すな（五・一六）　替　シャ（一一・二七）

とも沙と書いたものである。即ち水が少くて小石があらはれる會意にてスナ。この字が沙漠の意に使用されるやうになつたのは廣漠たるスナハラを一つの大海に假定して三水を書き少を聲符

と見なしたのであらう。

沙が沙漠（すなはら）の意に用ゐられるやうになつたので、後に三水を石にかへた砂の字が出來たのであるから、この字を石の小（ちひさ）なものといふ會意のやうに誤解してはならない。しかも少はスクナイ意である。

308 〔面〕ベン めん　新 メン（五・一六）　替 も（七・一一）おも（七・一二）　おもて（一〇・二）

小篆にて。カホ・オモテの意。内部は首の字にて人間の首から上の意をあらはしたもの。外部の□は首をグルッと一とまきして顔全體だといふことを示したものである。

309 〔社〕シャ じや　新 シャ（五・一六）　替 やしろ（八・三）

本義は土地の神様。そこで祭壇をあらはす示の字と土とを組合はせたもの。轉じてヤシロ。會社・社會の如く團體的結合の意をあらはすのは、支那の古代において民戸を編成するにあたり二十五戸をもつて里としそのおの〳〵の里に土地の神を祭る社を立てたことによるのである。

310 〔朱〕シュ　新 シュ（五・一六）　假 朱（あけ）（一二・二〇）　朱雀（すざく）（一二・二〇）

古形は朱で木の字の中に一點を加へたもの。本義は松や柏の木の如く樹心の赤い木のこと。中間の一點は此處が赤いところであると指事したものである。

311 〔殿〕テン でん　**新**　デン（五・一六）　**替**　どの（七・二六）

本義はデン〳〵とかトントンとかものを擊つ音である。そこで擊つ意味をあらはすため投の扌の旁と同形の殳を旁に書き、トンといふ音を持つ𡱂に組合はせたものである。𡱂の字を分解すれば尸と几と几とになる。卽ち人（尸）が腰掛け（下の几）に腰をかけてゐる（上の几）象形の文字にて、その樣が恰度堂宇に似通つてゐるから殿の字は、後に莊嚴なる堂宇の意に用ゐられるやうになつたといはれる。またシンガリの意に用ゐられるのは臀の字の音に通じたのである。

我が國では「どの」と訓じて貴人の尊稱として使ひそれより廣く人名に添へて人の尊稱とされてゐる。陛下・殿下。閣下　閣下等は宏大なる建物を指稱して直接の名前を敬避したことによるものである。殿下の語は支那では古くから諸侯の尊稱とせられたが漢以來は皇太子及び諸王の尊稱となつた。

312 〔浮〕フウ ぶ　**新**　うか・す（五・一六）

孚 孵

水に孚の字を組合はせたもの。水上にウカブこと。故に三水。孚は聲符。

なほ孚の字は爪と子との合字にて鳥が卵を溫めて孵化すること。萬遍なく溫めるために親鳥が爪で卵を轉がすので特に爪の字を組合はせたものである。のち更に卵が加へられて孵の字も出來た。

313

〔峠〕國字 タウゲ　新　たうげ（五・一八）

この字は我が國で作つた文字である。山の登りつめたところ即ちタウゲ。登りつめればそれより下り阪になるので山と上下とを組合はせたのである。この字に類似した國字に裃　挊などがある。衣扁はカミシモ、手扁はカセグまたはモテアソブの意。國字の特徵としていづれも音がない。

裃 挊

314

〔半〕ハン　新　ハン（五・一八）　替　なかば（一〇・一）

古文は八斗にて八と斗との合字である。斗は即ちマスのことにてものをはかりわけるもの。八にもまた分つといふ意があるのでこの二字を組合はせて、ものを二分する意の文字を作つた。

小篆では半となつてゐるが古文と字形がよほどよく似てゐる。これは古文の斗のところへ千

をもつて來たものである。牛は動物の中でも大なるものである。大きなもの牛をわければ（八）はつきり二分することが出來るといふ會意にしたものである。

315〔壁〕ヘキ ひやく　新　かべ（五・一八）　替　ヘキ（八・一三）

辟

辟と土との合字。敵を防ぐ（辟(さける)）ために土を以て築いたカベ。辟(へき)はまた聲符にもなつてゐる。なほ辟の字の本義は卩（節の本字。その條を見よ）と口と辛（辛・罪・辯を見よ。）との合字にて君主が罪（辛）を適當に裁判して（卩）判決を下す（口）意の文字である。裁判などといふあらだつたことは誰しも避けたいものだから、この字は後にサケルといふ意に轉義したものである。

316〔製〕セイ　新　セイ（五・一八）

制と衣との合字。布を裁つてキモノに縫ふこと。故に衣。制は聲符。轉じて廣くツクル。

317〔歸〕キ　新　かへり（五・一八）　替　キ（七・二三）

本義はトツグ。轉義してカヘルとなるのは婦人は生家を出て他家へ嫁ぐべきもので當然歸へるべきところへカヘルに似てゐるからである。それより身をマカスことともなる。

この字は母權が尊重せられないやうになつてから出來た文字で、帚は婦の旁と同じく掃除をするために雜巾を持つてゐること。そこで製字の意匠は嫁いだ家に何時までもとゞまつて（止）掃除（帚）をすることとなるのである。𠂤は聲符。

318 〔兩〕 リヤウ　新　リヤウ（五・一八）

本字は㒳。一は後につけられたものである。圍ひ冂の中央を縱線｜にて區畫し同一のもの、が一つづゝはいつてゐることをもつて二つの意をあらはしたものである（内を見よ）。轉じてナラブとかタグヒの意ともなる。

319 〔言〕 ゲン ごん　新　いふ（五・一八）　舊　こと（六・一七）　ゲン（七・二三）　ゴン（一一・一一）

古文は𧥢にて辛と口との合字である。意は口にあつて辛（しん）は聲符（辯を見よ）。

320 〔掘〕 クツ ぐち　新　ほり（五・一八）

穴をホルこと。よつて手扁。屈は聲符。土扁の堀もホルの字に混用せられてゐるが本義は土が突出してゐることといはれてゐる。

321〔置〕チ　新　おき（五・一八）　替　チ（九・一九）　假　笠置（かさぎ）（一〇・二七）

現形では上部が罒になつてゐるが俗にアミガシラと稱せられるやうにその古形は網の象形である。置の字は罷と同じく罪人をユルスこと。正直（直）な者はたとへ捕はれの身（网）となつてもやがて青天白日となつてゆるされるといふ會意。直はまた聲符をもかねてゐる。

この字がオクの意に轉じたのは無罪の者を放置することからである。

322〔貧〕ヒン　びん　新　ビン（五・一九）　替　まづ・し（七・九）

分と貝との合字。貝（古代の通貨）を分散すればマヅシクなるといふ會意。分はまた音をもかねてゐる。

323〔乏〕ハフ　ぼふ　新　ボフ（五・一九）　替　とぼ・し（九・二）

古形はにて正の字を反對にして不正なる意をあらはしたものである。心が正しくない者は天のめぐみを受けることが出來ないので、したがつて物にトボシクなるといふ考へから出來た文

字といはれてゐる（第一篇第二章指事を見よ）。

324
〔考〕カウ　新　かんがへ（五・一九）　督　カウ（一一・一八）

古形はとなり老と丂との合字。氣力の衰へた親のこと。現形では老が省畫されてゐるが古形では省畫されてゐない。丂(こう)の字は呼の字の條下に説明したやうにここでは心氣が伸びようとして伸び得ないことをあらはしたものである。卽ち木扁に組合はされて朽(くちる)となるのはそれがためである（老の字を參照せよ）。

この字がカンガヘルとなるのは老人はものごとに思慮が深いからである。また先考と熟し亡父のこととなり先妣に對して用ゐられる。

325
〔相〕シャウ さう　新　サウ（五・一九）　督　あひ（七・一四）　假　相模(さがみ)（九・三）

木と目との合字。遠いところを見るには木の上に登つて見渡すのが一番であるからこの兩字を組合はせたものである。それ故本義は物をよく視ること。轉じて人相を見ることになり、更にスガタ・カタチの意ともなつた。

326 〔談〕タン だん　新　ダン（五・一九）

ハナシをすること。故に言扁。炎は聲符である。

327 〔夫〕フ　新　フウ（五・一九）　替　プ　をつと（五・一九）

人が正面を向いて立つてゐる象形の大の字の上部に一線を加へたもの。この一線は一人前の男といふ指事である。男子が二十歳になると元服して簪を冠したから上部の一はその象形といはれてゐる。この字がヲットの意となるのは一人前の男になれば妻を娶るからである。更にまた公の賦役にも出るから人夫の夫ともなつたのである。

328 〔賛〕サン　新　サン（五・一九）

賛成の賛である。他人の事業を援助するには先づ何よりも物質が先きに立つので貝を組合はせたのである。貝は古代の通貨。上部の兟は聲符であるがススメルといふ意味の文字であるから多少會意もあるだらう。賛の字は實は贊の字の俗字であるから、上部を夫二つでなく先二つを書くのが正しい。然し便宜上賛と書いてさしつかへない。教科書では二夫となつてゐる。

329
〔成〕セイ じやう　新　セイ（五・一九）　替　な・る（八・一一）　假　正成（まさしげ）（六・二三）
ジャウ（一一・二八）　三成（みつなり）（七・二三）

古形はで戉と十との合字。戉は斧鉞の鉞の本字にて武器の象形。相手を完全に打ち滅ぼしたことによつてものごとが成就する意味の文字としたのであらう。十は基本數の最高であるから完全なる意をあらはしたものといふ。もつとも成の字の説には色々あるが、しばらく右の説に從つておく。

330
〔運〕ウン　新　はこ・ぶ（五・一九）　替　ウン（五・一九）

之遶と車との合字。本義はウツリワタルこと。故に之遶。軍は聲符であるが特に車といふ字の含まれた文字を組合はせたものである。

331
〔幅〕フク　新　はば（五・一九）

巾と畐との合字。本義は布のハバの長さが二尺二寸あるもの。故に巾。畐は聲符（畐を見よ）。それより廣くハバの意となる。

巾

なほ巾は布巾、雜巾の巾にて冂はキレの象形、丨はものを拭うた筋目である。

332〔首〕シウ しゆ　新　くび（五・一九）　替　シュ（八・二七）　かうべ（一二・二〇）

古形はで人の首から上の象形であるが、馬の字の古形を見てもわかるやうに、首から上を表現するに當つて特に目を印象的にしてゐることは注目すべきことである。面の字や頁（額を見よ）の字にしてもやはりさうなつてゐる。目をもつて首から上の代表としたことがこれによつてうかがはれる。

333〔翌〕ヨク　新　ヨク（五・一九）

羽と立との合字。本義は鳥が飛ぶこと。翌日の如くアクルヒと使用されるのは音の假借である。

334〔惡〕アク、ヲ　新　わる・し（五・一九）

亞と心との合字。上部は傴僂（せむし）の象形といはれてゐる。卽ちそれにて醜き意をあらはし心のワルキ意の文字としたのである。亞はまた聲符をもかねてゐる。

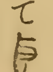
335〔賃〕チン　新　チン（五・一九）

任と貝との合字。相手の勞力に酬ゐるための金。故に貝。貝は古代の通貨。任は聲符でもあるが、また仕事に任ずるの會意も含まれてゐる。

336
〔錢〕セン　新　セン（五・一九）

金と戔との合字。通貨のこと。故に金扁。戔は聲符（淺を見よ）。支那の古代においては貝をもつて通貨としてゐたので金錢關係の文字には貝の組合はされたものが多いが、後に金、銀、銅等の金屬性のものが通貨とされるやうになつたのでこの字に金が組合はされてゐるのである（賤を見よ）。

337
〔身〕シン　新　シン（五・一九）　新　み（六・九）

小篆にて。説文によれば（人）の字へ聲符として申の字の畫を省いたものを組合はせたとしてゐるが、この字は人の象形で脊柱の曲つてゐる樣と腹部とをかたどつて出來た文字のやうに思はれる。この字とよほどよく似た形のものに臣の字がある。小篆にてであるが人臣身を屈して王者に仕へる象形といはれてゐる。兩者何れも鞠躬如として背を折り曲げて身をかがめた謙讓なる姿があらはされてゐる。字形から見れば人の向きが反對になつてゐるに過ぎないくらゐのもので音もよく似てゐる。このほか脊柱が主になつてゐるものに己といふ字がある。小篆では

乚となつて居りやはり人が自分のカラダを屈してゐる形である。身を曲げて長上に事ふる意をあらはしたものであらう。臣にはケライの意があり、身は「その身正しければ、令せずして行はれる」とか「修身」と使はれ、己は「己を捨てて人に從ふ」と用ゐられるが如くいづれも謙讓の氣持ちが含められてゐる。



（第一二圖）

己といふ字の古文には［己］の如きものがあり、これは椎骨を二つ連續して作つた呂（りよ）（せぼね）の字から變化したものだらうといはれてゐる。然し必らずしもその變形と見る必要はなからう。いづれにしても自分をあらはすに軀體を支へる中心ともなるべき脊柱をもつてしたことはまことに面白いことといはねばならない。しかもその脊柱の自然に彎曲してゐる樣をうつしてそれを人の謙讓なる氣持ちの表現と結びつけたのも面白いことである。



（第二二圖）

實踐躬行の字に呂の字が組合はされてゐるのは椎骨をもつて自己を表現したものである。この字はまた躬とも書かれるが弓は聲符たるのみではなく「からだを弓なりにする」といふ言葉があるやうに、人間の脊柱は自然の場合においても幾分弓なりになつてゐるから己の字の乚と同じやうな意味を表現するために

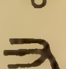
弓の字が加へられたものであらう。

338 〔藏〕サウ ざう 新 ザウ（五・一九）

草冠と臧との合字。本義はカクシヲサムルこと。草にて上から覆ひかくす意をもたせたものである。臧は聲符である。

なほ臧の字は善いといふ意味の文字。分解すれば臣と戕とになる。君によく仕ふる臣なる意匠から作られた文字。故に臣を書く。戕（シャウ さう）は聲符。そこで更に戕の字の成因であるが、この字は戈（ほこ）（伐を見よ）と爿との合字にて相手を刺し殺すこと。故に戈。爿は聲符である（壯を見よ）。そこで溯つて臧の字の場合の戕は單に聲符たるばかりでなく、君主にそむく敵を刺し殺す會意も含まれてゐるのではなからうか。

339 〔妻〕セイ さい 新 つま（五・一九） 替 サイ（一二・一九）

古形はにてとと女との合字である。は箒の象形。は又と同じく右手の象形。卽ち箒を手に持つてゐる女といふ會意にてツマをあらはしたものである。婦・歸などと同意匠の文字である。

340 〔植〕ショク　新　うゑ（五・一九）　替　ショク（七・一九）

木と直との合字。本義は門戸を鎖すために用ゐる縱の閂(かんぬき)。木を直立させるので木と直との兩字を組合はせたもの。直は更に聲符をもかねてゐる。轉じて植物と使はれ草木や竹の如く根生物の總稱となる。これは閂が直立してゐる樣から聯想されたものである（横を見よ）。更に轉義して植物をウヱルこととなる。

341 〔苦〕コ く　新　ク（五・一九）　替　くる・し（五・二二）にが・し（一二・一四）

草冠と古との合字。本義は一種のニガキクサの名。古は聲符。それよりニガシ・クルシ。

342 〔勞〕ラウ ろう　新　ラウ（五・一九）

熒の字の省畫と力との合字。力を盡して事に當ること。それよりツカレルともなる。熒(けい)は聲符。なほ熒の字は炏と冖との合字。冖は家。炏は火焰。合して家の中にあるトモシビのこと。

343 〔念〕ネン　新　ネン（五・一九）。

今と心との合字。オモフこと。故に心を書く。今は聲符。今の音は念と甚だ遠いが、この變化については第一篇第四章形聲文字の聲符の條にて理解されたい。

344 〔郡〕グン　新 グン（五・一九）　舊 こほり（一二・二〇）

君と邑（阝）との合字。郡縣の郡がその本義。故に邑里の邑（阝）を書く（郷を見よ）。君は聲符であるが治めるといふ會意もあるのだらう。なほ州の條下を見よ。

345 〔叔〕シュク しく　新 叔母(をば)（五・二一）

淑　菽

左扁は示の字の如く祭壇の上にものの載せられてゐるかたち。右旁は又にて右手の象形。この字は淑女の淑（水が静かに流れる意より附け加へたもの）の本字にて意はシヅカ。卽ち神に仕へるには擧措シヅカなることが第一だからである。叔父、叔母と用ゐられるのは音の假借である。なほ草冠がついて菽となればマメのことにて豆の本字。叔は聲符。

346 〔舞〕ブ む　新 まひ（五・二一）

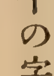
上部は無の省書にて單に聲符。下部は止の條下に説明したやうに人の兩足を反對にした形。そ

れにて人が舞をマフときの足取りをあらはしたものである。

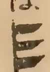
347 〔返〕ヘン ハン ほん　新 ヘン（五・二一）　替 かへり（八・一一）

往つたものがふたたびかへつて來ること。そこで之遶（行を見よ）と反（かへる）とを組合はせたもの。反はまた音をもかねてゐる。

348 〔報〕ハウ ほう　新 ハウ（五・二一）　替 むくい（九・二四）

古形はである。左扁は大ととの合字。は干犯の干の字に更に一を加へて重犯をあらはしたものといふ。更にそれに大の字を加へて罪惡の益々深いことを意味する。右旁は𠬝の本字にて伏する意。卽ち罪に相當した刑罰を加ふるの意である。それよりムクイ。

349 〔階〕カイ　新 カイ（五・二一）

阝と皆との合字である。皆は聲符であるが左邊は又はから來たもので現形の阜の字である。これは土地の斷層を描いたもので山に石のないものとせられてゐる。卽ち高い平原をあらはしたものである（段を見よ）。

350 〔洗〕セン　新 あらひ（五・二一）　替 セン（五・二六）

足をアラフこと。故に三水。先は聲符。轉じて廣くアラフ。

351 〔助〕ショ　新 たすけ（五・二一）　替 すけ（七・一三）　ジョ（七・二三）

且と力との合字。タスケルこと。そこで力。且は聲符（祖の字を見よ）。

352 〔軒〕ケン　新 ケン（五・二一）　替 のき（六・二五）

小篆にて。現形では車と干との合字。轅(ながえ)の曲つた車にてその兩わきに轓(おほひ)のあるもの。干は聲符。大夫（周の時代の官名。卿の下に位す。）の乘用した車。ノキの意となるのは車のオホイの意から轉義したものであらう。

353 〔安〕アン　新 アン（五・二一）　替 やす（六・三）　假 安部川(あべかは)（七・一七）

ウ冠と女との合字。家政を司るべき主婦（女）が家（ウ）の中にゐるといふ會意にてヤスラカ。

354 〔辻〕国字 ツジ　新　つじ（五・二二）

十と之遶との合字。道（之遶にてあらはす。行を見よ。）の十字路（十）になつてゐるところ。卽ちツヂ。

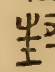
355 〔郵〕イウ　新　イウ（五・二二）

交通機關の發達してゐなかつた時代には、文書や布令等を持ち運ぶため要所々々に宿場をおいて、そこで人馬を交替させて目的地へ屆けたものである。郵はこの宿場のことである。そこで邑と同字の阝を書いたものである（郷を見よ）。垂の字は聲符といはれてゐるが、これは邊埵の埵の本字であるからその會意も含まれてゐよう。

356 〔便〕ベン びん　新　ビン（五・二二）　舊　ベン（五・三）　たより（九・二）

人と更との合字。本義は都合のよいやうにすること。卽ち人間（人）に不便なところがあればこれを改めて（更）便利にするといふ會意である。轉義してタヨリ。オトヅレ。

357 〔封〕ホウ ふう　新　フウ（五・二二）

古形はにて止（あし）と士と寸との合字。諸侯に領地を與へ任地に行かしめて（止）その土地（土）を治めしむる（寸）の意である。轉じて領地・境域・包む等の意となる。

358 〔承〕ショウ　新　ショウ（五・二二）　替　うけたまは・る（九・二三）

古形はである。現形の承の字は小篆のから來たもので卩と手と兩手との組合はされたもの。諸侯が天子から任命のしるしとして授與される符節（卩）を受ける（手）に當つて、うや／＼しく兩手にてこれをさし載くの會意である。そこでこの字の意義はウケタマハル・ウクル。なほ卩は節の本字。節の條を見よ。

359 〔枚〕バイ　まい　新　マイ（五・二二）

木と攴との合字。本義は恰度枝に作るに適してゐるくらゐの木の幹。枝にはウツ意があるのでその聯想から攴（うつ）（攴を見よ）の字を組合はせたものである。

一ヒラ二ヒラと紙の如き薄きものを數へることにも使はれるのは音の假借である。

360 〔種〕ショウ　しゆ　新　たね（五・二二）　替　シュ（五・二四）

禾と重との合字。本義は先きに蒔いておいた禾穀のタネがおくれて成熟すること。故に禾。重は聲符。轉じてタネ　モトの意。

361〔商〕シャウ　新　シャウ（五・二二）

章の字の省畫と冏（あきらか）との合字にて章は聲符ともいひ、また辛冏の合字ともいひ、或ひはまた言と內との合字ともいはれてゐる。アキナヒの意になつたのは、𧶠といふ貝に從ふ形聲文字があつたのだが後にそれに代用されたともいはれてゐる。本義は商量（物事をはかる）する意で、それよりアキナヒに轉義したもの。

362〔品〕ヒン ほん　新　ヒン（五・二二）　替　しな（五・二二）

口を三つ書いてものの多いことをあらはしたものである。多數を表現するために同一物を三箇重ねることは漢字作字上における常法ともいふべきことである。さてこの字は衆口一致せずといふところよりマチ〳〵の義をあらはしモロ〳〵の意ともなりまたシナともなるのだといはれてゐるが、この字を組立ててゐる口は單にものをあらはすマークとして○や△の如きものが使用されるのと同様に、はじめは一種のマークだつたのが後に形の類似してゐるところより口（くち）と解釋され

るやうになつたのではなからうか。たとへば員の字の如きは、もと上部は丸を書いたもので、後に筆書の便宜上角となつたものである。即ち貝は通貨として使用せられた時代があるから、それを計算して數量や員數をあらはす意味で○や□を組合はせたやうに、品の字の口も、ある纒つたものをあらはす一種のマークとも見られるのである。

そこで或る品物とか所有物をあらはすには○□△いづれでもかまはないこととなる。よつて公の字の如きも、モノ(△)を公平に分配することであるといはれてゐる。又古代の農作物たる稻を自分のものと認識する場合には禾(稻)の右側へ△をつけたのだ(私といふ字)といふ説もある所以である。公　私については別に意見もあるがともかく形の類似してゐるところよりかくの如き意味でも使用せられるやうになつたことは明かで、若しそれが一種のマークだとしたならば○□△そのいづれでもよいわけとなる。

363〔價〕カ　新　あたひ(五・二二)　替　カ　(九・一一)

人と賈との合字。賈の字は商賈の賈。「坐して賣售する也」といはれ、店舗を構へた商人のこと。上部の襾は説文にいふが如く聲符ではなく、貝貨を容れて坐右において居る金庫のカブリブタの象形だらうといはれてゐる。人扁を加へてモノのアタヒとなつたのは物價は商人の手によつ

てきまるからである。

364〔刻〕コク　新　コク（五・二二）　替　きざみ（九・一八）

亥と立刀との合字。木をホリキザム意。そこで刀。亥は聲符。轉じてサイナム・キビシ。また時間のことになるのは水時計が時を刻むといふ考へから來たものである。なほ亥の字の古形はにて豕（ぶた）の字によく似た形をしてゐる。これはブタノコであるが亥・爻・彫の字に見られる線と同じくものを刻んだ形をあらはしたのかも知れない（形を見よ）。

365〔途〕トづ　新　ト（五・二二）　替　みち（六・一七）

之遶と余との合字。ミチのこと。そこで之遶（行を見よ）。余は聲符（餘を見よ）。

366〔悲〕ヒ　新　かなし・む（五・二二）　替　ヒ（一〇・二〇）

非と心との合字。カナシムこと。故に心を書く。非は聲符。

367〔進〕シンじん　新　すす・む（五・二三）　替　シン（九・六）

之遶と閵の省畫との合字。ノボルこと。それよりススム。よつて之遶（行を見よ）を書く。閵は聲符。なほ閵は鳥の名。故に鳥の象形から來た隹を組合はせたものである（鷄を見よ）。

368〔針〕シン　新　はり（五・二三）　替　シン（一二・三）

金と十との合字。ハリのこと。故に金扁。十はハリで布を縫ふことをあらはしたもの。即ち横の線にて布をあらはし縦の線にて針をあらはしたものである。

369〔銀〕ギン　新　ギン（五・二三）　替　しろがね（一〇・一六）

金と艮との合字。シロガネのこと。故に金扁。艮は聲符（眼を見よ）。

370〔實〕ジツ　新　み（五・二四）　替　ジツ（六・二一）

ウ冠と貫との合字。家（ウ）の中に財貨（貫）のあること。それよりミツル・マコト・内容・果實等の意となる。

371〔類〕ルヰ　新　ルヰ（五・二四）

犬と頪との合字。説文によれば犬はどの種類の犬もよほどよく似てゐるので、形の似てゐる意味の文字として犬と頪とを組合はせたものといふ。頪は聲符。

372 〔停〕テイ ちやう　新　テイ（五・二六）

人と亭との合字。亭は高の字の畫を省いたものと丁とを組合はせたもの。意味は高の方にあつて丁は聲符に過ぎない。驛亭の亭の字で宿場における旅館。宿場には高い物見樓を作つて宿場の頭たる亭長が盗賊などを警戒をしてゐたので、高樓の象形から出來たこの文字を組合はせたのである。本義は驛亭であるが、旅人が止宿するので人偏が加へられてトドマルの意となつた。停車場の停には人偏のあるものを使ひ、亭の方は専ら宿屋とか四阿屋(あづまや)の如く家に關するものに使用せられてゐる。

373 〔洋〕ヤウ　新　ヤウ（五・二六）

水と羊との合字。もと川の名として作られたもの。だから江や河と同じく右旁の羊は川の呼び名をあらはした聲符である。轉義して大海のこと。

我が國では歐米のことを西洋といひ、歐米産の輸入品に洋の字を冠して洋燈(ランプ)　洋琴(ピアノ)・洋筆(ペン)・洋(サー

鈚(ベル)・洋銀(ニッケル)の如く冠らせて用ゐてゐる。

374
〔第〕テイ　だい　新　ダイ(五・二六)

もと弟と同字でものの順序をあらはす文字としたのであるが、書物の編次を定めるといふ聯想からでもあらうか後に竹冠(竹を見よ)が添へられるやうになつたものである。

375
〔帝〕テイ　たい　新　テイ(五・二六)　普　みかど(一一・二四)

古形はにて二ととの合字。上部の二は古文の上にてこれをもつて上帝　天帝の意をあらはしたものといはれてゐる。下部は朿(し)の字でトゲといふ意の文字であるがもとテイ・ダイの音があるので聲符として加へられたものといふ。

朿

なほ朿の字は木といふ字へ芒(ごけ)をあらはすためにを加へたものだといはれてゐる。

376
〔役〕エキ　やく　新　ヤク(五・二六)　普　エキ(九・二四)

彳(行を見よ)と殳(殺を見よ)との合字。殳(ほこ)を執り、行きて(彳)國境を守ること。轉じて人民を強制して公用に使ふこと。また戰爭の如き事件や勞作の義ともなる。もとは行人偏でなく人偏にも書いた。

377
〔央〕アウ／やう　新　アウ（五・二六）

冂と大との合字。ナカバの意。大は人が正面向きに立つてゐる象形。即ち人が冂の眞中に立つてゐる形を以つて中央の意をあらはしたものである。

378
〔局〕キョク　新　キョク（五・二六）

尺と口との合字。尺はモノサシの意にて正しいこと。即ち言語（口）を愼しみ（尺）無駄口をきかないこと。それよりカギル・セバメル。更に區畫　室　盤面等の意となり郵便局とか印刷局の如く事務を執る房室即ち官廳の意ともなる（尺・寸を見よ）。

379
〔替〕テイ／たい　新　かへ（五・二六）　替　爲替（八・一三）　タイ（一〇・一三）

夫を二箇と曰との合字。二人の人がカハル〴〵ものを曰ふの會意にてカハル、カヘル。

380
〔發〕ハツ／ほち　新　ハツ（五・二六）

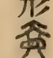
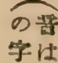
癶と弓との合字。本義は弓を射ること。故に弓を書く。癶は聲符であるが弓を射るときには兩

足を踏んばるので特にこの字が組合はされたのであらう。轉じて出發の發となる。

癹は足で草を踏み蹂ること。兩足（癶）と殳（ほこ）（殺を見よ）とを組合はせたもの。この場合癶（ハツ はち）は又音をもあらはしてゐる。この字については止の條に詳しく説明がしてあるのでそこを見てもらひたい。なほ癶の字は祭の字の上部に似てゐるが、祭の左は肉月、右は又の字にて右手の象形であるからその成因は全然異るものである。

第六章　卷六の新出漢字

381〔去〕キョ こ　新　キョ（六・一）　舊　さ・る（七・一六）

古形は。現形では上部が土となつてゐるが壺といふ字の古形（ツボの象形。）の上部と同じく蓋（よ）の象形である。下部は柳などで作つた飯入れの象形。故に本義は辨當箱。近年はアルミニユーム の如き輕金屬製の便利な辨當箱が出來るのであまり使はれないが、以前は日本でもよく使はれた ものである。說文によれば去の字は人が去ることにて大（人を正面から見た象形）と聲符字たる（音はキョ凶の字の系統に屬す）との合字とあるが上部が大の字でないことはさきの說明でわかるであらう。サルといふ意に なつたのは音の假借である。

382〔俵〕ヘウ　新　ヘウ（六・一）　舊　たはら（六・一）

人と表との合字。本義は人にものを分けてやること。表は聲符。

我が國ではタハラと訓じ米を入れる苞のことに使用してゐる。

383 〔飯〕ハン　新 めし（六・一）　替 ハン（九・一九）

食と反との合字。メシのこと。故に食扁。反は聲符である。

384 〔卵〕ラン　新 たまご（六・一）

古形はである。魚胎を二つならべてタマゴの意をあらはす文字としたのである。即ち魚胎を二つならべたから思ひついたものである。

385 〔丸〕グワン　新 まる（六・一）　替 グワン（九・一〇）　假 弾丸（たま）（八・二四）

人と乙との合字。乙はものの曲つてゐるかたち。人が身體をまげてゐる會意にてマロシ。轉義してマロブ・タマとなる。

この字はまた仄（そく）（そばだつ）と云ふ字から導かれて出來たともいはれてゐる。仄の字の古形はで人がけはしい崖の下に立つてゐる形（巽・危を見よ）。支那の古代においては山間の崖の間とか土地に穴を堀つて生活をしてゐた時代があつたので自然住居も陜隘で（穴・屋・室を參照せよ）身體を屈めてゐるやう

なことがあつた。そこでマロシとかマロブといふ意の文字を作るに當つて崖下卽ち陜隘な家屋の中で人が身體をまるめてゐることをあらはすため厂の字の向きを反對にしてとしたものといふのである。しかし前説の方がよささうである。

386〔湯〕タウ　新　ゆ（六・一）

水と昜との合字。アツイミヅ卽ちユのこと。故に三水。昜は聲符（陽を見よ）。

387〔拾〕シフ じふ　新　ひろ・ふ（六・一）

手と合との合字。ヒロフこと。故に手扁。合（カウ ごふ）は聲符といはれてゐるが手を合はせるの會意も含まれてゐるだらう。この字が筆書の改竄を防ぐため十の字の代用として使はれるのは拾十ともに同音だからである。

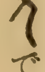
388〔晩〕バン ベン　新　ベン（六・二）

日と免との合字。太陽が沒すること。故に日扁。轉義してユフグレ。免は聲符。

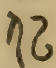
389 〔寒〕カン　新　さむ・し（六・二）　替　カン（一〇・一二）　假　月寒（つきさっぷ）（一一・一四）

古形はである。本義はサムシ。上部はウ冠にて家屋の象形。内部のは人の象形。その下にあるは氷の字の古形で水の結晶してゐるところをあらはしたもの。人の上下左右にあるは草。寒氣のために人が家の中にはいり込んで身體の周圍に草をひつ被つてゐる會意である。

390 〔次〕ジ シ　新　つぎ（六・二）　替　シ（六コ五）　ジ（六・二一）

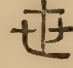
二と欠との合字。本義は氣がススマナイこと。欠の古形はで疲勞した人がアクビをしてゐるかたち。それにて氣分の進まないことをあらはしたもの。また二は聲符でもあるが數の最初たる一にツグものだから、氣はすすまないが、やむなくついて行くといふやうな會意もあるのだらう。そこで轉義してツグともなるのである。

391 〔以〕イ　新　イ（六・二）　替　もつて（一〇・一八）

以の古文はで後に右旁へ人の字が加へられたものである。本義はニセル。似せることは人がする（人爲的）のだから人を書いたもの。後さらに似の字も出來た。なほ以の字の旁は聲符と

して組合はされたのであるが本義は語のやむこと。
以はニセル意より轉じてモチユ・モッテ等となる。

302 〔世〕セイ セ　新 セ（六・二）　替 よ（八・二五） セイ（一〇・一）

小篆ではと書く。紀數文字の十を三つ組合はせたもの。西洋で百年を一世紀（Century）といふやうに支那では三十年をもつて年代の一區畫としたものである。それが世の字の本義であるが後に轉義してその年數の如何に係はらず一人の王者、一人の戸主の代をいふことになつた。また時・歳・生涯の意ともなる。

世の字はもと丗とも書かれたが現在ではこの字は專ら三十の略字として用ゐられてゐる。

303 〔界〕カイ け　新 カイ（六・二）

田と介との合字。田のサカイのこと。そこで田を書き介(かい)は聲符。但し介の古形はにて人と八との合字で人がものともの（八）との間に立つてゐる。そこで界の字における介はサカイをするの會意も含まれてゐる。なほ介の字における八はものの分散する意をも含んでゐる。公や分の字を見よ。

介

介の字の本義はハサマルことで轉義してナカダチ、タスクとなる。「一介の武辨」といふ言葉があるが、これは介の字形が箇の本字个に類似してゐたので「一箇の武辨」といふべきところを誤つて用ゐるやうになつたのである。

394 〔岡〕カウ こう　新　をか（六・二）　替　カウ（一二・二〇）

网（網の古形）と山との合字。山の背の平らかなところ。即ちヲカ。网（ハウ まう）は聲符（網を見よ）であるが、田の字が網の象形から出來たものではなからうかともいはれてゐるやうに、この字に特に網の字が加へられてゐるのは小高い丘に網を張つて畋獵をするといふ會意が含まれてゐるかも知れない。

この字はまた崗とも書くが崗は後世の俗字で山の字の重複である。花崗岩の時にはこの字を用ゐるのが習慣である。

395 〔仲〕チュウ　新　なか（六・三）

人と中との合字。兄弟中にて第二番目の者。よつて人と中とを組合はせたのである。中はまた聲符をも兼ねてゐる。

396〔銅〕トウ どう　新　ドウ（六・三）

金と同との合字。アカガネ。故に金扁。同は聲符。

397〔指〕シ　新　ゆび（六・三）　替　シ（八・二三）

手と旨との合字。ユビ。故に手扁。旨は聲符。

398〔鐵〕テツ てち　新　テツ（六・三）

金と戴との合字。クロガネ。故に金扁。戴（てつ）は聲符。

399〔釘〕テイ ちやう　新　くぎ（六・三）

もと丁がクギの象形から出來た字であつたのだが後に金扁が加へられるやうになつたものである。

400〔艦〕カン がん　新　カン（六・三）

舟と監との合字。イクサブネ。故に舟を書く。監は聲符（藍を見よ）。

401 〔之〕シ　新　これ（六・三）　替　の（一一・七）

小篆にては㞢。草の芽が地上に伸び出るかたちをもつてユク。ススムの意をあらはしたものといふ（備・師を見よ）。卽ち下の横線は土地、その上部は草木の萌芽。コノ・コレと訓ぜられるのは此の字の音に假借せられたものである。

402 〔使〕シ　新　つかひ（六・三）　替　シ（七・二三）

人と吏との合字。人に命じて（吏）物事をなさしめること。それよりツカフ、ツカヒとなる。吏は意味のほか聲符をもかねてゐる。なほリがシとなるのは率の字が聲符として含められて蟀となり、また麗が組合はされて灑となるが如くラ行音とサ行音とは音が分化する。

403 〔毒〕トク　どく　新　ドク（六・三）

屮（草）と毒との合字。本義は毒草。故に草を書く。轉じて害毒を流すこと。

下部の毒は素行が治らなくて人としての道にもとつてゐる義といはれる。そこで人畜に害を與

へる毒といふ字に組合はせたものと解されてゐる。その字形は士と毋との合字である。即ち品性の悪い士人の行爲を禁止するの意にてこの二字を組合はせたといふ。

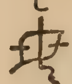
毋の字は説文によれば女と一との合字にて女を姦するものを禁止する意。即ち一に禁抑の意を含めたものである。ナカレと禁止のことばに用ゐられ、また無の音に通じてナシの意にも使はれる。

他の説では士と毋との合字といひ、士人が婦女子（毋）と相姦する義だともいはれてゐる。小篆ではとなり毋に從つてゐる。

毋の字に類似したものに次のやうな文字がある。

(1) 毋（ブ・む）＝小篆にて＝（女）に一（棒）

(2) 毌（クワン）＝小篆にて＝（貝貨二箇）に一（錢緡（ぜにさし）貫を見よ）

(3) 母（ボウ・も）＝小篆にて＝（女）に・・（乳房）

404〔折〕セツ せち　新　を・る（六・四）　晢　セツ（一一・一四）

手と斤（おの）（斷を見よ）との合字。ものを斷つこと。轉義してヲル（析を見よ）。

405〔意〕イ　新 イ（六・四）

音と心との合字。本義はココロバセ。それよりオモフともなる。心中にあることは音聲となつて外にあらはれるといふ會意である。

406〔初〕ショ　新 はつ（六・四）　舊 はじめ（八・一三）　そ・む（一一・七）
シ　ヨ（九・二五）

本義は着物を縫ひはじめること。そこで衣といふ字へ、布を裁斷する意をあらはすための刀とを組合はせたもの。轉義してハジメとなる。

407〔茸〕ジョウ　にゅ　新 たけ（六・四）

草冠と聰の省畫との合字。本義は草が密生してゐること。故に草冠。聰は聲符。なほ聰は聰明の聰にて耳さとくして物事をよく察知すること。故に耳扁。悤は聲符（總を見よ）。

茸の字をタケ・キノコのことに使用するのは我が國の特訓である。キノコの類は多く耳の形に似てゐるから、我が國では草の耳といふ會意に見立てたものであらう。

408 〔紅〕コウ　新　べに(六・四)　替　アカ(七・五)　くれなゐ(一〇・二二)
紅葉(九・一六)　コ　ウ(一〇・二三)

糸と工との合字。赤白色の帛のこと。故に糸扁。工は聲符。それよりクレナヰ・ベニ・ベニ草・アカシ等に轉義した(糸の條を參照)。

409 〔落〕ラク　新　おち(六・四)　替　おとし(六・一〇)　假　落葉松(六・二四)
ラ　ク(一一・一五)

草と洛との合字。木の葉が衰へてオチルこと。故に草冠。洛は聲符であるが各の字よりバラ〳〵に落ちるの意を見出さしめやうとしたかも知れない。またラクなる音は各から見出すべきもの。即ち各は閣・格の如きカ行より略・路の如くラ行へ音が分化するものである。僉なる聲符字が險・驗となり、また斂となり、京が涼、東が蘭・練となるのと同様である。

落は轉義して廣くヲチル・脱スル・成就スル等となる。

洛

なほ洛の字は川の名として作られた文字。故に江や河と同様に、水に加ふるにその川の呼び名と同音なる各をもつてしたのである。洛水(水とは河のこと。橘水・泥水の如く用ゐる。)は黄河の一支流にてこの北沿岸に周公がはじめて都をおいた。現在の河南省河南府洛陽縣の東北に當る。その後、後漢、西晉、後魏、隋もここに都をおいた。かうしたわけで洛陽又は洛京などいへば帝都のある土地の稱とな

つた。我が國においても鴨川を洛水になぞらへ京都を洛陽といつた。落の字が聚落・村落と熟用されるのはこれから來たものである。

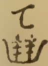
410〔住〕ヂユウ チユ ぢゆ　新 すむ（六・四）　替 ヂユウ（九・二三）

人と主との合字。人がスマフこと。故に人扁。主は聲符。主にはまたその家の主人となるの會意も含まれてゐる。

411〔列〕レツ れち　新 レツ（六・四）

歹と刀との合字。本義はサクこと。故に立刀。左扁は小篆にてと書く。水の流れが二つに分かれるといふ意の文字である。即ち上部は川。下部は別の字の省畫である。列において左扁は聲符になつてゐるがまた會意も含まれてゐる。

412〔禮〕レイ らい　新 レイ（六・四）

示と豊との合字。示はその條下に説明したやうに祭壇の象形。豊（れい）は小篆にて。豆の字と同系統のもので祭器の象形である。内部のは供へものが祭器に盛つてある形。合して供へ物を

神に捧げることとなる。禮儀の禮として用ゐられるのは、人が神を祭るのは眞心のあらはれであり、自然に行義も正しくなるからである。

413〔鉛〕 エン　新　なまり（六・五）　替　エン（一一・二二）

金と㕣との合字。ナマリ。故に金扁。㕣は聲符（沿を見よ）。

414〔濱〕 ヒン　新　はま（六・五）

この字はもと瀕と書いた。卽ち渉（わたる）と頁（かほ）（顔を見よ）との合字。ミヅキハは人が水を渉るところであり、濱に立つと顔をさしのべて水の深さを眺めるからこの兩字を組合して會意したのである。現形では水と賓との合字となり賓が聲符となつてゐるが、これは先づ瀕の字から賓が出來、更にその字が逆もどりして濱なる文字の聲符となつたのではなからうか。なほ賓はこちらの家をたづねてくれた客人のことであるから家の意味でウ冠を書き、聲符として瀕の省畫を用ゐたのであらう。ところで客を遇する場合には會見の際に主客の間をとりもつため主人側から贈物（贄（にへ））をするので

賓

頁の部分を貝としたものであらう。貝は古代の通貨である。

415 〔波〕ハ　新　なみ（六・五）　替　ハ　（九・七）

浪

濤

水と皮との合字。ナミ。故に三水。皮は聲符。ナミと訓ぜられる字に浪。濤がある。良・壽とも聲符である。波は一般的にナミの總稱。浪は水が風にあつたり石にさへぎられて立つサザナミのこと。濤は壽なる聲符の如く海などでドウ〳〵と音を立てて大きくウネルナミ。だから濤は大波、浪は小波。波は總稱である。波浪・波濤と熟すれば大小に通じた波ではあるが波濤の方だけは小さなものには使用しない。

416 〔岩〕ガン　新　いは（六・五）　替　ガン（一〇・七）

巖

山と石との合字。イハのこと。山には石が澤山あるから、山と石とで會意したものである。巖も同義の文字である。山の字の下へ聲符として嚴を加へたもの。特にイハホと訓じ大きな石、また巖窟（いはや）と熟用する。花の條下を見よ。

417 〔沖〕チュウ　ちゆ　新　おき（六・五）

水と中との合字。本義は水が湧くこと。故に三水。中は聲符。

我が國では特にオキと讀んでゐる。オキとは陸よりはるか彼方の海の眞ん中をいふのであるがこれは「水の中」なる會意文字に見立てたのである。

418〔義〕ギ　新　よし（六・六）

羊と我との合字。羊に善美の意が含められてゐることはその字の條下に説明した通りである。そこで我を善美にする會意。本義は自分の威儀を正して立派にすること。轉じて制裁宜しきを得ること・理にかなふこと・人の履むべき道・法則・ワケ・ヘダテ・ミチスヂ等の意となる。

419〔討〕タウ　新　うち（六・六）　替　タウ（一二・一八）

言と寸との合字。法律に違犯したものを罰すること。そこで法なる觀念をあらはすため、規則正しい尺度の意をあらはす寸法の寸（寸・寺・時を見よ。）の字と、更に辯難審理の意味で言語の言とを組合はせたのである。轉じて敵をウツこと。物事をキハメル（討究）こととなる。

420〔騎〕キ　ぎ　新　キ　（六・六）

馬と奇との合字。馬に乘ること。故に馬扁。奇は聲符。それより馬に飛る人をもいふ。奇に含

まれた大の字を人に見立てたものかも知れない。大は人を正面から見たかたちである。

421〔敵〕テキ ぢやく　新 テキ（六・六）

商と攴との合字。カタキのこと。旁の攴は手に棒をもつてゐる形の字にて相手をウツ意をあらはす（敎を見よ）。商は聲符（適を見よ）。

422〔不〕フウ ブ ふ　新 フ（六・六）

古形はである。小篆ではとなりそれが現形の前身である。古形の上部の亠は上の字の古形の上部、（雨）（天）等における一と同じく天の方角を意味し、下部は鳥の飛ぶ形である。本義は鳥が空へ飛んで行つて下りて來ないこと。疑問の意味に用ゐられるのは飛び去つた鳥は一體どこへ行つたものだらうかと考へるからである。また打消の意に使用せられるのは弗（ふつ）（拂・費を見よ）の音に通じたものである。またイヤシキ意ともなるがこれは卑（婢を見よ）の音に假借されたものである。

423〔暗〕アン おん　新 くら・し（六・六）　[illegible] アン（一一・一四）

日と音との合字。日の光りが無いこと。即ちクラシ。故に日扁。音は聲符。オンがアンとなるのは同行の變化である。

424〔深〕シン　新　ふか・し（六・六）　替　シン（八・一三）

もと水と㝅との合字。現形は旁が變形してゐる。桂陽の南平より發して營道に注ぐ川の名。故に三水。㝅は聲符でもあるが、もと〳〵この川の名は深いといふ意味から出來た言葉であるから特にフカイといふ意味の㝅の字を加へたものである。そこで深はフカシの意に使はれる。探の條を參照せよ。

425〔埋〕バイ　まい　新　うづ・む（六・六）

土と里との合字。本義は土中にものをウメルこと。轉じて廣くウヅム。故に土扁。里は聲符。リとマイとの音は甚だ遠いやうであるが、萬が邁（まい）・勵（れい）となり翏が寥（りよう）・謬（しゆう（びゆう））となるやうにラ行とマ行とは音が相轉ずる。更に語尾のaiがiとなるのは鬼（き）が塊（くあい）、未（み）が味（まい）となるのと同様である。

426〔命〕メイ　ベイ　みやう　新　いのち（六・六）　替　メイ（七・二三）　假　みこと（一二・二）

この字の本義は命令のこと。古形はで人（）が廟堂（上部は家の字のウ冠の源をなすもの。ここでは朝廷の意をあらはす）において上司の命令（口）を恭しく聽いてゐる會意である。小篆ではとなり令と口との合字とされてゐる。そして口と法令の令の合字と見、更にを符節の節の本字たる卩に解釋し天子より受ける任命のシルシとされてゐるが、令及び鄕の條下で述べたやうに人と卩との古形が類似してゐるところより次第に内容を深めて解釋もし、また書きもするやうになつたものである。なほ命における令は聲符といはれてゐるが、これは命を令と口との合字と見たからであるが（ラ行の音がマ行の音に通ずることは第一編第四章及び埋の字の條下を見よ。）、もと〳〵メイとレイとは同一の意味の言葉で單に音の變化に過ぎない。命と令とが同字であることはいふまでもないことと思ふ。令の條を見よ。

命がイノチの意に使はれるのは人が此の世に生を受けるのは天の命令によるものと見たからである。

427 〔霜〕サウ しやう　新　しも（六・七）

雨と相との合字。シモのこと。シモは空より降るものと見て雨冠を書き、相は聲符である。

428 〔菊〕キク　新　キク（六・七）

草と匊との合字。キクのこと。故に草冠。匊は聲符。なほ匊の字は勹（包を見よ）と米との合字にて

掬

兩手で米をすくふこと。手扁が加はつて掬となれば手をむすんで水を飲むこととなる。

429 〔元〕ゲン ぐわん　新 ゲン（六・七）　舊 グワン（一一・一二）　假 且元かつも（一一・七）

古形は[illegible]にて二（上の字の古形）と人との合字。人民の上に位する者の意。即ち元首・人君のこと。轉じて元年・元旦の如く年の初、もののハジメの意にも使用せられる。

430 〔弱〕ジヤク にやく　新 よわ・し（六・八）

小篆にて[illegible]。鳥のハネを二つならべたかたちの羽の字によく似てゐる。ただ上部の曲げられてゐる所がちがふだけである。鳥のかよわい羽がまがつてゐることにてヨワキ意をあらはしたものである。轉じて若の音に通じワカキ意ともなる。

431 〔笑〕セウ　新 わらひ（六・八）　舊 セウ（八・一九） ゑみ（一〇・二七）

芺といふ字から變化したもので古くは笑の字はなかつたものである。芺は草と夭との合字にて

妖

オニアザミのこと。故に草冠。夭は聲符。この字に女扁が加はると小篆の[illegible]で女がたくみに笑

ふこと。そこで女と聲符たる芺とを加へたもの。のちに媄が妖婦の妖として用ゐられるやうになつたので、ワラフといふ場合の文字として笑の字を作つた。花の咲くことを人が笑ふことに聯想した結果である（咲を見よ）。草冠が竹冠となつたのは漢の時代には竹も艸（草）も、ともに艸と書いたからである。なほ夭は人が頭を垂れ下げてゐるかたちであるから、咲きほころびた花が花萼を垂れるやうに、美しい女がシナを作つて笑ふことにも會意したものであらう（夭・咲を見よ）。

432

〔程〕テイ　じやう　新　ほど（六・八）　替　テイ（一二・六）

秒の省畫と呈との合字。物の品等をつまびらかに定めること。故に秒を書いたもの。呈は聲符。それよりホドとなつたものである。なほ呈は口と𡈼との合字にて公平なること。𡈼は正直の意であるから公平に言ひ定めること。即ち程における呈は會意をも兼ねてゐる。

433

〔鼻〕ヒ　び　新　はな（六・八）

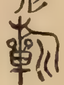
自と畀との合字にて本義はハナイキのこと。自はハナの象形。畀は聲符であるが、アタフルといふ意の文字であるから、鼻は呼氣を肺臟へ與へる機關といふ會意をも兼ねさせたものであらうと思ふ。

なほ畀の字の小篆はにて、臺の上にものを載せてゐるかたちといふ。特に臺の上のものを鬼の字の上部と同形にしてキなる聲符の役目をも果たさしめてゐる。

434
〔食〕ショク じき　新 く・ひ（六・八）　替 ショク（八・一二） た・ぶ（九・一二）　ジキ（一一・七）　假 晝食（ひるげ）（九・一〇）

古形は。上部の亼は集合の集の本字（合を見よ）。下部の皀（即・既・郷を見よ。）は米粒が籾の中に入つてゐる象形のと、變化の化の字の本字、（化を見よ）とを組合はせて米を炊くの會意としたもの。そこで食の字は穀物を集めて炊いたもの、即ちメシがその本義で、更にクフといふ意味にも轉義するのである。

435
〔戰〕セン　新 セン（六・一〇）　替 たたかひ（六・一〇）

單と戈との合字。タタカフこと。故に戈を書く。單は聲符ともなつてゐるが、もと戰爭の際に用ゐる旂旗の象形。即ち旂の古形からハタアシと斤（おの）（斷を見よ）との部分を省略したものであるから單なる聲符ではない。

436
〔源〕ゲン ぐわん　新 ゲン（六・一〇）　假 みなもと（六・一五）

水と原との合字である。本義はミナモト。もと單に原と書いたものである。原の條を見よ。後に原がハラの意に假借されるやうになつたので、本義の場合には、水のわき出るミナモトといふ意を明らかにするため、後に三水を加へて源とした。轉じて廣くもののオコリ。

437 〔氏〕シ　じ　新　シ（六・一〇）　舊　うぢ（八・三）

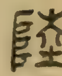
蜀の國に大きく出張つた崖のある名高い山があつた。はその崖の崩れかかつてゐる象形。それにてその山の名をあらはす文字としたものといはれてゐる。

後に轉用されてウヂの字となつたものである（底・訴を見よ）。

438 〔捨〕シャ　新　す・つ（六・一〇）　舊　シャ（一一・二八）

手と舍との合字。ステルこと。故に手扁。舍は聲符。

439 〔陸〕リク　ろく　新　リク（六・一〇）　舊　陸奥（むつ）（九・一六）

小篆にて。この字の右旁はと土との合字にて大陸の意味の文字。上部は草の生えてゐる形で、下部の土は天地の地。即ち廣々たる平地へ草木の生えてゐることをもつて陸地の陸とし

たものである。陸地の萬物を生ずる性能を特に草木をもつて代表的にあらはしたのは、㞢（七）の字において草木が組合はされてゐるのと同意匠である。阜（郷を見よ）は後に組合はされたもの。

440 〔惜〕セキ しやく　新　を・し（六・一〇）

心と昔との合字。痛みをしむこと。故に立心扁（情を見よ）。昔は聲符である。

441 〔服〕フク ぶく　新　フク（六・一一）

古形はにて舟と卩と又との合字。本義はモチキルことである。

舟は運輸上最も必要なものにて常に人々から用ゐられるもの。

𠬝は卩と又との合字。職務に從事すること。節度（節・郷卩を見よ）によつて人民を治めるのだから任命のしるしたる卩と右手の象形たる又とを組合はせたもの。

そこで上記の二つを組合はせてものをモチキルこととしたのである。轉じて調度・衣服ともなる。𠬝はまた聲符ともなつてゐる。

442 〔營〕エイ やう　新　エイ（六・一一）　替　いとなみ（一〇・二五）

熒の省畫と宮の省畫との合字。本義は住居を作ること。故に家屋の象形から出來た宮を書く。熒(けい)は聲符（勞を見よ）。轉じて廣くイトナム意となりまた軍營の意ともなる。

443 〔兵〕ヘイ ひやう　新 ヘイ（六・一一）　替 ヒヤウ（七・一四）

この字の古形はにて左右の手（）に武器を持つてゐる形。上部のは斤(おの)の象形。本義はツハモノ。卽ち武器を手にしてゐる人の會意である。またの如く中に線の加へられた古形もある。この線は特に武器を執る人の指事である。長の條を參照せよ。

444 〔砲〕ハウ へう　新 ハウ（六・一一）　假 つゝ（八・二四）

本義は石をはじき飛ばす弓のこと。故に石扁。包は聲符である。砲の字はもとは礮と書いたといはれてゐる。旁の駮(はく)は聲符。駮は馬と交との合字にて虎に似た爪牙を有しその形狀が馬に似てゐる一種の獸。そこで馬扁に聲符として交の字を組合はせたもの。また駁の字と同字にて馬の毛色の純一でないものともいはれてゐる。この說にしたがへば、爻(かう)（交を見よ）は毛色の交はつてゐることをあらはし、かねて聲符ともなつてゐる。

砲の字において礮の聲符の部分が包におきかへられたのは複雑なる畫をいとつたのでもあらうが、この場合には弓の弦が石をツツムといふやうな聯想作用もあつたのであらう。一度は繁畫を尊んでもやがて複雑な畫をもつてゐる聲符字が簡單なものにかへられる場合が澤山ある。膽　擔（胆　担）、糧（粮）、襟（衿）、濱（浜）、鬢（鬂）、棲（栖）の如きはその例である。これは實用上の必要から起ることで略字の作られるのは主としてかかる方法が多い（曜の條を對照せよ）。

砲の字は大砲と熟用しオホヅツの意に使用せられる。

445 〔舎〕シャ　新　シャ（六・一二）　替　田舎（いなか）（一一・一〇）

この字の古形はにてイへの象形から出來たものである。高・亭・宮等と同系の文字である。田舎と使はれるが所謂バラック式の簡單な家かも知れない。

446 〔各〕カク　新　カク（六・一二）　替　おのおの（八・三）

夂と口との合字。本義は人々のいふことがマチマチで合はないこと。そこで口を書く。上部は人が歩いてゐるのを後から引き止める（夂を見よ）ことで、ここでは足どりの合はないことをあらはしたものである（止を見よ）。轉義してオノオノ・メイメイとなる。

447 〔隊〕タイ で　新 タイ（六・一一）
墜

阜と㒸との合字。高いところ（阜）からオチルこと。㒸は聲符（遂を見よ）。後に音の假借によりもつぱら隊伍とか軍隊の意に、また陣、組などの意に用ゐられるやうになつた。そこで本義の場合には更に土を加へて墜の字を作つた。

448 〔倍〕ハイ ばい　新 バイ（六・一一）　假 安倍（あべ）（五・二〇）

人と音との合字。人へ祿（月給年俸）を增してやること。故に人偏。音は聲符（部を見よ）。增し加ふることより轉じて二が四になり、四が八となり、八が十六となるやうに或數にそれと同じ數を加へる義となつた。

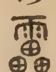
449 〔沈〕チン ちん　新 しづ・む（六・一二）

水と冘との合字。雨水がたまつて濁ること。故に三水。冘（いん）は聲符。轉義して汚泥　シヅム。なほ冘は冂と人との合字。人が境（冂）を越えて行くこと。

450〔理〕リ　新　リ（六・一二）

玉と里との合字。王は玉と同字である。寶玉となるべき石へ磨きをかけること。故に玉扁。里は聲符。轉義してすべて物事を整理(をさめる)こと。定め正すこと。更にミチスヂとかコトワリ（道理）となるのは磨いた玉には美しい紋理(すぢ)があるからである。

451〔雷〕ライ れ　新　かみなり（六・一一）　替　ライ（九・五）　假　建御雷(たけみかづち)（一二・二）

この字の古文は等で第一形には雷鳴に伴ふイナヅマが含められてゐる。⊕は雷がゴロゴロ鳴るのを車輪でも轉んでゐるかの如くに見立ててかかる形であらはしたもの。現形の雷の字の前身は小篆ので、その下部にある車輪様のものが一箇に省略せられたのである。雨冠が加へられるやうになつたのは雷電にはとかく雨を伴ふからである（申・電・神を見よ。）。

452〔同〕トウ どう　新　おなじ（六・一三）　替　ドウ（七・一四）

壘

畾の字が一部聲符の役目を持たせられて加へられた文字に壘の字がある。土を高く築くことでトリデの意味となる。

古形はにて凡と口との合字である。本義はオナジ。凡の字形は左のものと右のものとが同じだといふことをあらはすにとするやうな心理作用から作られたもの。卽ち 4＋2＝6 の＝(Eaqual) に類したものである。

同の字は合同と熟用されるが、その合の字の成因ともよほど似通つたところがある。ともに口が加へられてゐるのは衆人の言ふところ卽ち衆口一致すといふ會意といはれてゐる。しかしこれは品や員の字の條にて說明したやうに單にモノをあらはすシルシとも解釋される。卽ち同は同じモノ、合はモノが集まると見て口をモノをあらはす一種のマークだと見るのである。ただクチにせよ、シルシにせよ、字形が甚だ酷似してゐるので、最初はどちらか一方の意味で作られたものが、後になつて或人はクチの考へで書き、また或人はシルシの氣持で書くといふやうになつたものであらうと思はれる。

453〔鮭〕ケイ かい　新　さけ（六・一三）

魚と圭との合字。本義は一種の魚の名ともいひ、或ひは海豚(ふぐ)のことともいひ、更に魚菜の總稱ともいはれてゐる。いづれにしても魚に關係してゐるので魚扁を書き、聲符として圭（街を見よ）を加へたものである。我が國ではサケと訓じてゐる。

454 〔魚〕ギョ ご　新 さかな（六・一三）　舊 ギョ（七・一九）

象形文字の例としてよく擧げられるもので、ウヲの形を象つた等の古形より變化して現形となつたものである。

455 〔淺〕セン　新 あさ・い（六・一三）

水と戔との合字。水のアサイこと。故に三水。戔（さん）は聲符（殘を見よ）。

456 〔産〕サン せん　新 う・む（六・一三）　舊 サン（六・一三）

彥の省畫と生との合字。ウムこと。故に生を書く。彥は聲符（第一篇第四章を見よ。）。

彥

彥の字は立派な男子の義にて、彣（紋の條下を見よ。）と厂との合字。彣は文と彡（形を見よ）とを組合はせたもの。文も彡もともにものにアヤがあつて美しいこと。厂（がん）（岸を見よ）は聲符である。美しい男子は語るところの言語に深みやうるほひがあつて、言葉にもアヤがあり、動作も洗練されてゐるといふ意からこの兩字を組合はせたものといはれてゐる。

産・彥等の上部を立に書くのは筆書の便宜上より來た略字である。

457〔穴〕ケツ げち　新　あな（六・一三）

宀と八との合字。上部は家の字の上部と同じく左右葺き落しの簡單なる家の象形から來たものである。八は反撥の撥と同意（同音）にてキリヒラク、即ち穴をホルの意をあらはしたものと言はれるが、むしろ簡單な家屋の柱の象形ともいふべきであらう。アナなる文字に家屋の象形たる宀冠を組合はせたのは、ごく原始時代は穴居生活をしてゐたからである。そのことは庭・室・屋・屆の條下でも述べたが、現に支那では今もなほ穴居生活をしてゐるところがある。

我が國においてもまた古くは穴居生活をしてゐたものである。我が國最古の建築樣式として殘つてゐる出雲大社の本殿である大社造は、天地根元造といふごく幼稚な建築から發達したものでその間の事情をよく物語つてゐる。

天地根元造の骨組は先づ地上に三本の柱を立て、次に一本の棟木をわたしてしばり、更にその連結點に左右から斜に二本づつ丸太を立てかけて各交叉點のところを繩でしばれば出來上る。そして左右兩側の斜面へ縦に七八本、横に四五本の細い木を結びつけ、その上に茅などをのせてこれをからげ、棟には風押への横木をおく。葺き落してない方の兩側は薦を垂下げて雨露をしのぐことにするのであるが（たつこもといふ言葉はこれから出來たもの。）、出入りをするにはこの薦をおしやればよいのだから

至極手つ取り早いけれども、何分出入口の中央に大黒柱があるので、這ふやうにしなければならぬ。「這入」るといふ言葉はこれから來たものといはれてゐるが、漢字においても屋・居等の上部に身體を屈した形が加へられてゐるのは、日本、支那ともに昔は穴居生活をしたからである。要するに掘立小屋式のもので恐らく地を掘り下げて縱穴とし、上部は茅などで掩うたものであらう。後にやゝ進化すると、中央の二本の柱を延長して屋根をもちあげ、左右の軒にもそれぞれ二本づつの柱を立てて屋根を支へ、床を張り床下を高くし、出入口を右に定めて階段を設けて多少とも住宅らしくしたものである。太社造はこの建築から發達し美化されたものである。かくの如く我が國の太古においても穴居的生活をしてゐたことがあるやうに、支那においても穴の字が家屋の象形たるウ冠から出來てゐるのは理由なきことではない。

458
〔粒〕リフ　新　つぶ（六・一三）

米と立との合字。コメツブ。故に米扁。立は聲符。

459
〔我〕ガ　新　わ・が（六・一三）　替　われ（六・二三）　假　曾我（四・二四）

手と戈との合字。戈を持つてわが身を守るの會意にてワレの意としたものともいはれ、また私と

いふ字が禾扁であるやうにこの字もまた禾と戈との合字だといふ說もある（私の條を見よ）。字形の類似せるところより兩者の考へで双方とも使はれたかも知れない。卽ち禾となる場合には穀物の所有權の客體となるべき自己をあらはすこととなる。またその所有權の擁護をもつてワレなる意をあらはしたとも解釋せられぬでもない。

ワレといふ義をもつ字に吾・余　予等のあることは自の條下に說明した通りであるが、我といふ字は彼我・物我と使はれるやうに相手を豫想してゐる。自我、または「我が强い」の如くかたく自說を固執して相手にゆづらないやうな場合に用ゐられる。また一旦緩急のあつた場合には戈を持つて我が團體のために立つといふ場合のワレとなり、やや公的の氣持ちを含んで使はれるのは、この字に含まれる戈から來たものであらう。

なほ說文によれば、左邊は垂の字（華を見よ）卽ちが聲符として加へられたもののやうに解かれてゐるが說明を省略する。

460〔樂〕ガク―ラク　新　たの・し（六・一四）　替　ラク（七・二二）ガク（一〇・二六）

古形はで古代の樂器の象形である。上部は大小の太鼓やうのものであり、下部はそれをのせる臺足である。現形では木となつてゐるが實は木とはちがふ。

本義は音樂のことで音はガク。なほラクと讀んでタノシムとなるのは音樂は人の心を樂しましめるものだからである。更に樂しみは萬人の望むところであるから、ゲウと讀んでコヒネガフの意にも轉用せられてゐる。

461
〔勇〕ヨウ ゆう　新　いさ・む（六・一四）　替　ユウ（七・一二）

甬と力との合字。勇氣と熟する字で元氣が身體中にみなぎつてゐること。故に力。甬は聲符。轉じてツヨシ・イサマシ。

甬の成因については通の字の條下にある通りに勇の字はマと男との合字でないことがわかる。

462
〔繩〕ショウ じよう　新　なは（六・一四）

糸と黽との合字。ナハのこと。故に糸を書いたもの。黽は聲符。

繩の字の旁は龜の字に類似した象形文字でカヘルの類。なほ規矩準繩と熟し法度の意に使用せられるのは、大工の用ゐるスミナハが正しい線を引くからである。

463
〔語〕ギョ ご　新　かた・る（六・一四）　替　ゴ　（八・一八）

言と吾との合字。物事をカタルこと。故に言扁。吾は聲符にもなつてゐるが自分の意見を述べるといふ會意も含まれてゐる。

464 〔忘〕バウ まう　新　わす・れ（六・一四）

亡と心との合字。ワスレルこと。故に心を書く。亡は死亡の亡にてナクナルこと。心の中に記憶してゐたものがなくなるの會意。亡はまた聲符をもかねてゐる。

465 〔磁〕シ じ　新　ジ（六・一六）

石と玆との合字。滋石（じしやく）のこと。故に石扁。玆（じ）は聲符（慈を見よ）。

466 〔鉢〕ハツ はち　新　はち（六・一六）

金と本との合字。食器のハチのこと。金屬で作つたものの意で金扁。右旁は聲符。ホンがハンとなりハツとなつたのであらう（第一篇第四章を見よ。）。

この字は以前にはなかつた文字である。盋といふ字の俗字で、盤が本字であらうといはれてゐる。盤の字の聲符たる般にはハチ・ハツの音もある。

467
〔灰〕クワイ け　新 はひ（六・一六）　替 クワイ（一一・二七）

小篆では。手（又を見よ）と火との合字。手に持つことの出來る火なる會意であつて、本義はモエサシ。轉じてハヒとなる。

現形は炭の字の下部と酷似してゐるがその成因のちがふことに注意しなければならぬ。

468
〔果〕クワ　新 はた・して（六・一六）　替 はて（九・一六） クワ（一一・一三）　假 果物（くだもの）（八・一八）

古形は。栗の字の古形におけるが如く木に果實がなつてゐる象形。本義はクダモノ。結果の果となるのは花が咲いて最後に果實が實るからである。そこでハテ・ハタシテともなり、また原因の後に來る結果卽ちムクイともなる。

この字は後に草冠がつけられて菓となつた。果・菓ともに同義である。菓の條を見よ。

469
〔殘〕サン ざん　新 のこり（六・一六）　替 ザン（七・一六）　假 名殘（なごり）（一〇・五）

歺と戔との合字。人を傷つけいためること。故に歺（死の字を見よ）を書く。戔は聲符ともなつてゐるが、この字は戈（ほこ）を二つ重ねたもので、人をそこなひ傷つくる意が含められてゐる。切りさいなむ意が

あるので他の字に組合はされて單に聲符たるのほかイトチヒサキモノの意をもあらはしてゐる。

慘

無慘、慘忍のザンはもと殘の字を使つたのだが、今では一般に殘はノコルの意に用ゐ、その代りに慘の字を使つてゐる。慘は心と參との合字。心（立心扁。）に意があり參は聲符。

殘の字が專らノコルといふ意に使用されるやうになつたのは、禽獸が食ひあました肉の殘りのことを殘（ざん）といつたので同音なるがため假借されたのである。

470 〔捐〕エン　新　エン（六・一七）

手と肙との合字。ステルこと。故に手扁。肙（けん）は聲符。

この字は損と誤られる場合が多い。卽ち義捐金と書くべきところを、義損金とするのがそれである。注意すべきことである。

471 〔籾〕國字 もみ　新　もみ（六・一七）

米と刃との合字。モミのこと。モミにはケン（芒）があるので、刃（やいば）の字をもつてそれをあらはし、米扁へ組合はせたのである。

472
〔豆〕トウ づ　新　まめ(六・一七)、　替　小豆(あづき)(八・一四)　假　豆腐(とうふ)(六・九)



(第二三圖)

古形は豆豆等で第二三圖に見る如く肉を盛つて神前に具へる禮器の象形である。俎豆と熟する字。第一形の圓形の内部の點樣のものは肉が入つてゐることの指事。一番上の線は蓋をあらはしたものである。

マメの意に使用せられるやうになつたのは、豆が菽(まめ)の字の音に通じるので假借せられたのである。

473
〔全〕セン ぜん　新　まつた・く(六・一七)　替　ゼン(七・二)

入と玉との合字。本義は缺けたところもなくまた不純なところもない最上のタマ。それよりマツタキ意となる。入が組合はされてゐるのは、完全なる域に入つてゐる玉の會意であるといふ。

或る説には入と工との合字ともいふ。これに從へば工は巧(たくみ)にて、巧みに磨き上げて完成の域に入つてゐる玉なる會意に解するのである。なほ王と玉とは同字。王・玉の條を見よ。

474
〔姫〕キ イ　新　ひめ(六・一八)

女と𦣝との合字。本義は黄帝の姓。よつて女扁にしたのである（姓を見よ）。轉じて王妃の別稱となつた。貴い人の女子（ヒメ）のことに使はれるのは、姫の字が黄帝のあとをうけた周室の姓となり、周は他のどの國よりも勢力がありまた美人揃ひでもあつたからといふ。

なほ𦣝(い)の字はオトガヒの象形である。小篆では。頤の本字である（顊・頭を見よ）。

475 〔姿〕シ　新 すがた（六・一八）　替 シ（九・五）

次と女との合字。ナリ・スガタ・カタチ。好の字における女の如く女性の姿態の美しいところより代表的に女を書いたもの。次は聲符。

476 〔武〕ブ む　新 ブ（六・一八）　替 ム（一一・七）　假 武田(たけだ)（七・一四）

古形はにて戈(ほこ)（伐を見よ）と止との合字。戰亂（戈）を未然に防止する（止）といふ會意にてそれが武勇の武の本義といはれてゐる。しかし、これは戈をもつて戰場へ出かける（止にてあらはす。止は足趾の象形。）の會意であつて止の字に正義の觀念（正を見よ）を含めて解釋するのはいかがであらうかと思ふ。轉じてタケシとなる。

477〔士〕シ じ　新　シ（六・一八）

十と一との合字。サムラヒのこと。この字の成因には二つの説がある。澤山な說（十）を聞いてその中から疑はしきもの（一）を除くといふ會意ともいはれ、また一を聞いて十をさとるだけの人といふ會意ともいはれてゐる。兩者ともに士たる者として、まさに具ふべきの見識をもつて會意してゐることとなる。

現形は土と區別するために下方の横線を短くするが、古形には土の字と同じ形のものもある。或ひは士と土とは音の分化に過ぎなくて、もと地（土）をもつて士と見たものではなからうかと思はれる。卽ち士人は一般人とちがひ「地に封ぜられる者」または土地を所有してゐる者といふ思想からではなからうか。

478〔淸〕セイ しやう　新　きよ・く（六・一八）　替　淸水（八・一）

水と靑との合字。水のキヨイこと。故に三水。靑は聲符でもあるが、またきよらかといふ會意もあるにちがひない。といふのは澄んだ水、澄んだ空は靑々してゐるものであり、いかにも淸らかに感じられるからである。白布を洗濯した後に靑粉を溶いた水に浸すのもそのためである。

479 〔致〕チ　新　いた・し（六・一八）　音　チ（一一・二五）

至と夊との合字。本義は人をおくつて先方に行くこと。故に至。至はまた音をもかねてゐる。夊は復。夌等に含まれてゐるものと同形にて古形はである。ここでは人の後からついて行くの意が含められてゐる（止を見よ）。

致の字の現形は旁が攵。敎と同じく攴（うつ）の系統に屬してゐるので、人をうつて行かしめるの會意ともいはれてゐる。前説によれば旁は夊に書かねばならぬし、後説によれば攵と書くことになる。いづれにても致。效、攻。敎の旁は文の字ではないといふことを心得ておくべきである。

致の字は我が國では「爲ス」の敬語として使用せられてゐる。

480 〔染〕セン　ゼン　ねん　新　そめ（六・一八）

絹布等をソメルこと。故に三水を書く。その際幾度も染料の液に浸すから、基本數の最高ともいふべき九の字を組合はせたもの。下部に木があるのは染料は草木から取るためである。藍の字に草冠があるのもそのためである。現在では化學工業の發達により鑛物質の如き無機物から種々の染料を取ることが發明されたが、以前は主として草木の如き有機物からとつたものである。

481 〔湖〕コ ご　新　みづうみ（六・二〇）　替　コ（一〇・七）、假　ウミ（一一・七）

水と胡との合字。ミヅウミ。故に三水。胡は聲符。

胡　胡の字は古と肉（肉月）との合字。本義は牛のあごに垂れてゐる肉のこと。古は聲符。假借してエビスとなる（賊の字を參照せよ）。

432 〔氷〕ヒヨウ　新　こほり（六・二〇）　替　ヒヨウ（一一・一九）

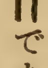
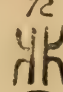
もと冰と書いたものが變化して現形となつたのである。この字の古形は仌で冰が結晶してコホリとなつてゐるところを象つたものである（寒を見よ）。現形の氷の字は水が加へられ冰となり、更に左扁が省略されたものである。なほ冰の字に見ゆる「冫」は筆書にあたつて古形が變化されたものである。

三水（氵）と區別するために二水（冫）といつてゐるが、同じ二水でも次の字の如く氷から來てゐないものもあることを忘れてはならない。

483 〔靴〕クワ　新　くつ（六・二〇）

革と化との合字。革(かは)でつくつたクツの類。故に革。化は聲符たると同時に、皮に加工をして形を變化させる會意もある。皮及び革の條を見よ。

484
〔片〕ヘン　新　かた(六・二〇)　替　ヘン(一〇・二六)

古形はである。木の字の條下に述べたやうにを左右二つにさきわつた(分析の析の本字。)の右の一片である。そこで片の字にはカタワレとかカタカタとかキレとかの意がある。左片もさうにはちがひなからうが右片の方が筆書上便利なるため、この方が專らカタワレとかヒラの意として用ゐられる。即ち版(わかつ ふだ いた)。牌(しるし ふだ)。牒(しるし ふだ)。牘(しるし ふだ)の如く用ゐられてゐる。

なほ爿の方は壯。將・狀、藏の如く他の字に組合はされても木の札といふ意味をあらはさないで、武勇の意か、さもなくばショウなる聲符となつてゐる。これはホコの象形と字形が類似してゐるのでその意味に用ゐたのである。

485
〔曲〕キョク こく　新　キョク(六・二〇)　替　まがり(八・一三)　ま・ぐ(一一・二〇)

古形に等がある。第一形は去の字の古形の下部とよく似てゐる。やはり去の字のやうに物を入れる行李の如きものの象形。マガルの意の文字として作られたのは特に柳行李などの周

圓がまがつてゐるところに觀點をおいたものであらう。第二形は柳や籐を糸で編んで行李としたものの象形である。現形はこの方に近い。

486 〔州〕 ス シウ しゆ　新　シウ（六・二一）

小篆にてである。本義は川の中にあるシマのこと。川の中にある陸地をあらはす工夫として、川の字の中程を上掲の如くしたものが現形となつたのである（災を見よ）。

我が國で周防國・長門國の如く藩名をあらはす際に防州・長州と使ふ。これはシマは水のためにはつきり區畫がついてゐるので周の時代から行政上の區域の稱として使用したことに始まるのである。周では二十五戸のことを社又は里といふ。州はその百倍の二千五百戸の稱であつた。我が國の府縣に相當するものである。そののち漢の武帝は天下を十二州にわけて其の下に郡をおいた。隋は郡を廢止して州にした。唐は州の上に更に道をおき州の下には縣をおいた。宋は州のほかに府と軍とを設けてこの三つを路に屬せしめた。そして縣を州・府・軍に統轄せしめた。元は縣の大きなものを州とした。明は州を縣と府に屬せしめた。そして府の小さなものを直隷州として直轄した。清は明の制度をそのまゝ踏襲した。

我が國の制度は唐宋の制度、特に唐にならつてゐる。といふのは唐の道―州―縣は我が國で、も

と全國を東海道，東山道，北陸道。山陰道。山陽道。南海道，西海道。北海道の八つにわけ（朝鮮もまた我が國と合併しない以前から京畿道・江原道・咸鏡道・平安道・黄海道・忠淸道・慶尙道・全羅道の八道にわけ、更にこれらを京畿南道・京畿北道の如く南北にわけてゐる。）、そして各道がまた、それぞれ州に分けられてゐたのを見ればわかるであらう。遠州とか甲州とかの如く州と呼んだのはそれである。

州。洲の區別は洲の條下にゆづることにするが、州の字を行や草で𠆢と書く場合がある。古い墓碑などを見れば隨所に使はれてゐる。これは州を立刀三つに見立てたものである。

487 〔垣〕エン をん　新　かき（六・二一）

土と亘との合字。カキネのこと。そこで土扁。亘(せん)は聲符。ごく古い字には單にと書いてカキネの意をあらはしたものもある。

柦　土扁が木扁になると、むかし宿場に立てた目標のこと。故に木扁。亘は聲符（第一篇第四章を見よ。）。勇武の意味に用ゐられるのは音の假借である。

亘　なほ亘の字の本義はものをモトメルこと。小篆にて。內部のウヅマキ形は回の字の本字でメグル意。卽ち上から下まで（一　一）メグッテ探スの意。

亙　亘の字形に類似したものにワタルといふ意味の亙(こう)の字がある。これは古文では。小篆では

亙にて兩岸（二）の中に舟を書いたものである。舟にて此方の岸から向うの岸へワタルといふ意匠である。亙の字は筆書の際、簡易な方におもむくといふ人々の習性から亘と書かれる。人名の亙理(わたり)などがそれである。立心扁の加はつた恆(つね)の字も亙が正しい。恆の字の立心扁はいつも變りのない心の意を現はしたもの。亙は聲符であるが、永くツラナルの會意をも含めたものである。

恆

488 〔守〕 ス シウ しゆ　新　まも・つた（六・二二）　替　もり（六・二二）　シユ（八・二三）　留守(るす)（一〇・一二）　假　越前守(ゑちぜんのかみ)（八・一一）

ウ冠と寸との合字。役人が職務に從事してゐること。ウ冠は家の象形にて役所の意をあらはしたもの。官・寮・房・廳　府に組合はされたウ。戸・广はみな家(やかた)の象形である。寸は寸法の寸、尺や丈とともに尺度は正確なものであるから、それをもつて嚴格なるべき役人の意をあらはしたものである。復興局　郵便局の如く使はれる局にある月が尺の變形であるのと同樣である。日本では使はれないが、役所の意たる寺の字や、諸侯を任命する意の封の字にも寸が含められてゐること等は見逃してはならぬ。

守の字は轉義して廣くマモル意となり、更にツトメ・ツナヘ等となつた。この字は留守(るす)の如く稀にスと讀まれる場合もある。

我が國で上野守とか越前守の如く國守のことに使用するのは、秦が天下を統一して郡縣の制を

布き、その長官を郡守と稱したのに始まる。後に漢の景帝はこれを太守と改めたが何れにしても

官名＼四等官	長官（かみ）	次官（すけ）	判官（ぜう）	主典（さくわん）
神祇官	伯	大副 少副	大佑 少佑	大史 少史
太政官	太政大臣 右大臣 左大臣	大納言 中納言	少納言 左大中少辨 右大中少辨	大史 少史 大外記 少外記
省	卿	大輔 少輔	大丞 少丞	大錄 少錄
職・坊	太夫	亮	大進 少進	大屬 少屬
寮	頭	助	大允 少允	大屬 少屬
司・監	正 奉膳 尚侍	典侍	佑 典膳 掌侍	令史
彈正臺	尹	大弼 少弼	大忠 少忠	大疏 少疏
兵衞府		佐	尉	志
地方官	守	介	椽（掾）	目

「守」の字を用ゐた。大寶令では官等を四等に分けてあらゆる役目を「カミ」「スケ」「ゼウ」「サクワン」とし、諸國の長官を「守（かみ）」としてその下に「介（すけ）」「掾（ぜう）」「目（さくわん）」をおいた。守は地方長官であるから今でいへば縣知事に相當する。「かみ・すけ・ぜう・さくわん」の官名に當てられた文字は官署によつて異つてゐるから上にその一部を掲げておかう。

なほ稀に人の姓に「目」「屬」といふのを見受ける。訛つてサッカと呼んでゐるがその人の祖先の誰かが何かの役目について第四等に當る屬官だつたものであらう。現在の判任官に相當する。今でも官廳では判任官のことを屬（ぞく）といつてゐるのは昔の名殘りをとどめてゐるものであ

る。今でも太夫・主馬頭・侍從・典侍・局（つぼね）の如くもとのまゝが用ゐられてゐるものが澤山ある。
また陸海軍の佐官・尉官もこれから出たものであり、軍法會議の書記を錄事といふのもさうである。

さきに目や屬が人の姓になつてゐることを述べたが德右衛門・吉左衛門・善左衛門・武兵衛の如き名前は何となく古臭い感じがする。これは時代が遠ざかつたためである。水戶黄門・水野越前守・仁木彈正などの黄門　彈正・越前守が直ちにその人の名前でもあるかの如く考へられるのは、その昔のことを知らないからである。

今でも人の名前に助・輔・介・丞はザラに使はれてゐる。この助・輔・介や丞はよく權之丞・林之助　龍之介の如く「之」の字が入れられてゐる。これは役柄から來たがためで、その起りは林之助といへば「寮の次官たる林」といふ意味にほかならなかつたものであらう。

489 〔攻〕コウ く　新　せ・む（六・一二）　替　コウ（九・二四）

工と攴との合字。ウツこと。故に攴を書く（敎を見よ）。工は聲符。轉義してセメル（攻擊）・ヲサム（攻究）等となる。

490 〔如〕ジョ にょ　新　ごと・し（六・二一）　舊　如何いか（八・三）　ジョ（一一・一四）

女と口との合字。本義はシタガフ。婦人の性質は從順だから家長たる男子の命（口）に逆らふことがないといふ會意といふ。ゴトシとなるのは婦人は家長の言葉のゴトクになるからである。ゴトシ（如）のかはりに若の字が使はれるのは如の字と同音なるがための假借である。

491 〔射〕シャ じや　新　い・る（六・二一）

古形はである。弓に矢をつがへたものに手（又）が加へられてゐる。現形では手が寸になつてゐるが、これは現形の前身ともいふべき小篆が古形の（又）をすべて（寸）としたからである（手を見よ）。尊の字の下部が小篆においてに變形したのと同樣とも見られる。しかし射の字の場合において又が寸とされたことについては單に字形を飾るといふ考へだけによるものではない。むかし支那では禮、樂、射、御。書。數を六藝といつて、射は尊ばれたものである。即ち射法には一定の正しい形式的法則もあり（謝を見よ）、また内面的に考へれば心の正中を失へば絕對に命中することがないのでそこを一種精神的に解釋したものである。よつて寸や守の條下に述べたやうに、寺・封・時等に規律正しき意味で寸の字が加へられてゐるやうに、射禮におけ

る内心外形はともに規律あるべきものとの考へが聯想されて、やがて叉が寸に書き換へられたものだと想像せられる。

現形の射は古形の弓矢の部分が身になつてゐるが、これは人間のカラダが「弓なり」になつてゐる聯想から變化したもの。このことについては身の條下を參照せよ。更にこれらの考へが輻輳してミヅカラといふ字に躬とも書く。この場合の弓は聲符ともなつてゐる。

躬

492 〔味〕ビ み　新 ミ（六・二一）　替 あぢ（八・一六）

口と未との合字にて果實のアヂ。もとは單に未と書き口は後に加へられたもの。轉じて廣くアヂ・アヂハフと使はれる。

493 〔屈〕クツ くち　新 クツ（六・二一）

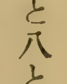
小篆では。説文によれば尾と出との合字。そこで或る説ではこの字の本義は着物に飾り（飾尾）のないこととされてゐる（尾を見よ）。卽ち尾を飾尾と解釋し出を聲符と見たのである。この字が屈する意になるのは着物に飾りをつけないことは自己を謙遜することで、やがてそれが屈するの意になつたのだといふのである。

また或る說では「尾なきなり」とは動物がシャガンデゐて尾の見えないこと、そこで屈する意となるのだとも說かれてゐる。更にまた他の說では尸（しかばね かむり）と出の字との合字とされてゐる。穴の條下で說明したやうに、また屋　層の字などで想像されるやうに、古代人は穴居や、乃至は、また山間に掛小屋・堀立小屋を建てて生活をしてゐた。したがつて部屋が非常に狹く、出入するにはどうしても身體をかがめなければならぬ。そこで人が身をかがめてゐる形から出來たシカバネカムリと出の字とを組合はせたものといふ。面白い見方である。

494 〔難〕ダン なん　新 ナン（六・二一）　舊 かた・し（九・二三）

𦰩と隹との合字。一種の鳥の名。故に隹（ふるとり）を書く（鳥を見よ）。𦰩は聲符。カタシ・ムツカシとなつたのは艱に通用されたのである。艱（カン けん）の字の本義は土の治めがたきこと。小篆にて。左扁は黃の字の省畫と土との合字にて粘土のこと。良は聲符。

495 〔必〕ヒツ ひち　新 ヒツ（六・二一）　舊 かなら・ず（八・二八）

古形はで弋と八との合字である。本義はものの分かれ目のサカヒのこと。境域には標識となるべき棒杙を立てるから弋の字（國の字を見よ）を書き、又ものの分かれる意にて八を組合はせたのであ

る。八はまた聲符をもかねてゐる。カナラズの意となるのは、境ひ目にシルシを立てれば決して
間違ひが起らないからである。

496 〔暴〕バウ まう―ハク ばく　新　バウ（六・二一）

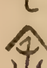
小篆にて。日と出と（兩手）と米との合字。兩手で米を出して日にさらすことをあらはした會意文字である。この字がニハカの意となるのは音が假借されたものである。それよりアバレル・アラシ等となる。

瀑　爆　曝

暴の字に三水がつけば瀑布となりタキのこと。火扁がつけば爆發の爆、日扁となれば曝書期の曝となる。この場合暴はみな聲符となつてゐるが多少とも會意をかねてゐる。

497 〔餘〕ヨ　新　ヨ（六・二一）　替　あま・す（六・二三）

食と余との合字。食物があまること。故に食。余は聲符。轉じて廣くアマリ。

餘の字は略して旁の余だけを用ゐる。この字は小篆にて。八の字と舍の字の省畫との合字。演説などの際次の言葉を導くためにアーとかエーとかいひ、また途中で言ひよどんでウウとかイイとかいふ發聲のことで語氣のノビアマルことが本義である。そこで八にて言葉の分散すること

をあらはし、含を聲符として加へたものである。ワレの意に用ゐられるのは吾の音に通じるのである。ヨとゴとは音の分化したものである（自を見よ）。

498
〔象〕シャウ ざう　新 ザウ（六・二二）

古形は等にて象の形をかたどつたものである。この字が動物の象（Elephant）の意味より象徴（Symbol）・現象。象形の如くカタドルとか、意想する意に使用せられるやうになつたのは、象は支那ではあまりゐないので殆んど繪畫などで見るばかりであつた。そこで「生きものの中にもこんなに圖體の大きなものもゐるのかナ」と必らず考へさせられる。その考へさせられることが深刻なのでオモフの意となり、更にその動物の有様を心中に描くので畫像の意ともなるのである。像を見よ。

499
〔丈〕チャウ ぢやう　新 ヂャウ（六・二二）

古形はにて十と又との合字。又は右手の象形。太古はモノの長さを計るに親指と中指とをもつて尺取り虫のやうな恰好をさせて手を用ゐたものである。これ寸や丈に又の字が含められてゐる所以である。一丈は指掌の十倍であるから十と又（手）とを組合はせたのである。

現形では支線・支店の如く使はれる支の字の方が却つて十と又とになつてゐる。支の條を見よ。

500〔由〕イウ ゆ　新 イウ（六・二二）　替 よし（九・二二）　假 由比（一二・七）

小篆はである。この字は（テウ でう）と同字といはれてゐる。草木の實が垂れ下つてゐる象形である。結果のよつて起る所以のものといふ意味でヨシ・チナミ・イハレとなるのは音の假借であらう。

501〔牙〕ガ げ　新 きば（六・二二）

説文に「牡齒なり、上下相ひ錯る形に象る」とある。動物の上齶と下齶との鬼齒が喰ひちがつてゐる象形。卽ち古文はにてその象形なることがわかる。小篆ではこの位置が變つてとなり現形の牙の字の源をなしてゐる（斜の字を見よ）。

502〔繪〕クワイ ゑ　新 エ（六・二二）　替 クワイ（一二・四）

糸と會との合字。本義は諸種の色糸（糸）をあはせて（會）ヌヒトリをすること。それよりイロドルとかエとなつたものである。會はまた聲符をもかねてゐる。

繪の字をヱとよむのは我が國の訓で、從つて日本語なるかの如く思ひ、支那での音はクワイに限られてゐると考へてゐる人があるが、繪なる文字のヱは聲符たる會に求むべきで、この字もまた大營會涅槃會の如くヱなる音をもつてゐる。そこでゑ（繪）なる言葉は支那語から來た言葉であつて、もと〳〵純粹の日本語ではないことがわかる。恰度洲・死の如きものである。梅・馬もさうでウメ・ウマからウの發聲を取れば原音をとどめることとなる。また蟬・錢等もセミ・ゼニとなつてゐるがこれまた支那語から來た日本語である。

503 〔桶〕トウ（つ）—ヨウ（ゆ）　新　をけ（六・二二）

木と甬との合字。六升を計る方形のマス。故に木扁。甬は聲符（通を見よ）。

ヲケの意に轉義したのは米を計る時に容れ物とするからである。

この字に湯の字をつけると湯桶となつて飲料にする湯を入れる桶のこととなる。最初の字を「湯」と訓で讀み二字目を「桶」と音で讀むから「訓と音」とのまぜよみのことを湯桶讀みといつてゐる。小僧・身分・敷地の如きもの。また反對に音と訓の順序にまぜ讀みすることを重箱讀みといつてゐる。即ち第一字は「重」と音で讀み第二字を「箱」と訓で讀むからである。團子・出立・役場などがその例。かかる讀み方をすべて「百姓讀み」といつてきらふが、しかし役場や

敷地を正しく讀んだらもはや一般には通用しない。慣用の久しきものは百姓讀みで結構である。文字や言語は思想を通ずるもの。第一義は通ずることにある。改めて役立たないことはなさざるに如かずである。

斛　斗

我が國では一升の上に十斗といつて一斗計りのものがあり、これが一番大きな桝(ます)であるが、支那には斛といつて十斗をはかる桝もある。角は聲符にて意は斗の方にある。十斗は百升であるから斛のかはりに百と斗とを組合はせた[百+斗](こく)といふ會意文字も作られてゐる。我が國で作つた粨(ヘクトメートル)。瓸(ヘクトグラム)に類した文字である。但し粨や瓸はそれぞれ一メートル、一グラムの百倍といふ會意で字面にもそのことが正確にあらはされてゐるが、[百+斗]の方は字面から見れば百斗である。

そこでさかのぼつて斗といふ字について説明を加へておかなければならないが、この字は新出文字となつてゐない。しかしこの字は我々の日常生活に密接な關係があるし、また字畫も比較的少いから兒童に教へておいてもさして重荷とはならないだらう。もつとも先年からメートル法が實施されたので不要だといへばそれまでだが、算術では常に用ゐられてゐる。

さて斗であるがこの字の古形はで挿圖にある十升桝(とます)の象形から出來たものである。北斗七星といふのも七つの星をこのトマスに見たてての名稱なのである（第一六圖北斗七星を見よ）。ところがこのトマスは後に量器の代表とされ、マスといへば何升のものでも又何斗のものでも「斗」の字であら

はされるやうになつたのである。恰度モノサシのことをサシといひこれを漢字に書くとき「尺」の字をもつてするのと同様で、この場合の「尺」の中には鯨尺もあらうし曲尺もあらうし、それも必らず一尺とは限らないで二尺のものでもよいのである。代表的に見られた場合は凡て實數とは關係がない。例せば汎稱としてのヒトといふ場合に西洋では(man)(男)をもつて代表させてゐるが、この中には勿論女(woman)をも含めてゐるのと同様である。

斗



（第二四圖）

しかしここに疑問となるのは斗(ます)が何故にマスの代表とせられたかといふことである。さきにも言つたやうに北斗七星をトマスの形に見立ててゐるが、北斗七星といへば支那人が非常に尊んだもので(星の項を參照せよ)、現在でも航路の指針となり我等の實生活に役立つてゐる。この大切な星とトマスとを結びつけてゐるのだからトマスは器としても非常に尊ばれたことが解る。關白といへば道長と思はれ大師といへば弘法となり、太閤といへば秀吉に獨占されるやうにハカリといへば「斗」があらゆる他のものをさしおいてひとり優越な立場に立つてその御株を奪つてしまつたのである。して見れば斛が一石卽ち十斗たるに何等の不思議はない。ただ忘れてならないことはこの字の百は升を單位としても作られて居ることである。卽ち十斗は百升でその百の字が組合はされてゐることである。これは我が國で作つた文字のマスといふ字が木と升と

の合字にて升を標準にしてゐるのと同じく、實際生活の點からいへば米を計るには一升桝が一番多く使はれるからである。そこで㪷に含まれた百の方はハカルといふ實用上の問題から升を標準としたものであり、斗の方は「斗」なる衡器の代表としたものなることが知られるのである。

504〔腕〕ワン　新　うで（六・二二）　替　かひな（一一・一九）

捥

肉と宛との合字。本義は手頸のこと。故に肉月。宛は聲符。後に手頸と肘との間卽ちウデの義に轉じた。肉月を手扁にして捥とするのも同字である。

着手下手といふやうに物事を實行するには手が必要であり、また腕は手の力をささへるところであるから腕（うで）または手腕といひ、人間の能力 (man of ability) をあらはす意にもなる（又・手・右を見よ。）。

505〔印〕イン　新　イン（六・二二）　替　しるし（一〇・一五）

小篆にて。爪と卩との合字。本義は政を行ふ者が持つてゐる（爪）シルシバンのこと。印形は間違ひのないことをあらはすものだから符節の節の本字たる卩を組合はせたものである。後一般にハン卽ち印判のこととなる。

御璽　玉璽と使はれる璽の字に玉が加へられてゐるのは印臺に玉と同じ材料をつかつたからで

あらう。

506 〔腹〕フク　新 はら（六・二二）　替 フク（七・二三）

肉と复との合字。ハラのこと。故に肉月。腹は人間に大切な五臟六腑のあるところだから心もここにあるとの意味にて意志。思考。膽力等の意に轉義する。

なほ腹の字の旁の复は畐（フク/ぶく）の省畫と夂との合字。この字は往復の復の本字にて一度歩いた道を再び引きかへす意から後に行人扁を加へ復（復）としたものであるが、腹の字へ加へられてゐるのは單に聲符たるばかりでなく、畐の字は富と同意で腹部のふくれてゐることをあらはしたものだらうといはれてゐる。詳しくは復の條を見よ。

507 〔顏〕ガン/げん　新 かほ（六・二二）　替 ガン（一〇・二七）

彥と頁との合字。カホ。故に頁（頭を見よ）を書く。彥は聲符。

508 〔誰〕スヰ/ずゐ　新 たれ（六・二二）

言と隹との合字。人の名がわからないときタレかと問ふこと。故に言扁。隹は聲符。誰何と熟

してトガメル意ともなる。

509〔城〕セイ じやう　新 ジャウ（六・二三）　訓 しろ（六・二三）

土と成との合字。シロのこと。城は國土を防備し人民を保護するものだから土を書く。成には防備して國土を成就する意が含められてゐる。なほ成は聲符にもなつてゐる。

510〔賊〕ソク ぞく　新 ゾク（六・二三）

貝と戎との合字。本義はゾク。貝は古代の通貨。戎は戎器と熟する字にて兇器のこと。兇器をもつて人の財物を强奪する會意。轉義してソコナフとなる。

他の説では則戎の合文ともいふ。この説にしたがへば貝は則の字の省略されたもので暴力（戎）をもつて國家の法則をみだし、社會に害毒を流すことでソコナフが本義となる。そして則は聲符ともなつてゐるわけ。前者にしたがへば會意であり後者では形聲も含まれてゐることになつて來る。ところが會意文字と形聲文字とを發生的に較べると、大抵の場合に會意の方が先きであるから、この字の如きも前説にしたがふべきであらうと思ふ。

戎

戎（じゆう）の字は小篆ではである。この字は甲兵の甲（かぶと）と戈（ほこ）との合字といはれてゐる。しかしまた十

は聲符ともいはれる。甲の字の古形は十と同形であるから、或ひは兩方にきかしたものかも知れない。

夷狄蠻

戎の字はエビスといふ意味がある。支那では自分の國以外は化外の民とし自國を中心として四方の民を東夷西戎北狄南蠻といつた。そこで此の字は兵器を持つてゐる西の方の民族のことになる。夷の字は人（大）が武器（弓）をもつてゐる會意にて昔もやはり殺伐なことをもつて未開野蕃と心得てゐたものであらう。北方の民族たる狄の字はケモノ扁（左扁は犬。右旁は亦の省聲を聲符として組合はせたもの。）になつてゐる。又南方は暖かなるため蛇が多いので蛇種族と見た。卽ち蠻の字にはヘビ（虫は蛇の字。䜌は聲符。）が加へられてゐる。この四字は武器か、さもなければ獸蛇が加へられてゐるのである。

511 〔投〕トウ つ　新 なぐ（六・二三）　審 トウ（一〇・二）

手と殳との合字。ナゲルこと。故に手扁。殳は聲符（殺を見よ）。

512 〔坂〕ハン はん　新 さか（六・二三）

土と反との合字。本義はサカ。故に土を書く。反は聲符。もと阜扁（こざと）の阪を使つたものである。

[歹反] 地名として用ゐられる場合に大阪はコザトヘンである。坂の字を「土に反へる」の會意と見て死

を忌んだのである。しかし東京では赤坂區　團子坂　坂下町の如くすべてツチヘンである。また碓氷峠・足柄山以東を坂東といひ、利根川のことを坂東太郎といふがやはり土扁を用ゐる。

513 〔汲〕キフ　新　く・む（六・二三）

水と及との合字。井戸から水をクムこと。故に三水。及は聲符。

514 〔旗〕キ ぎ　新　はた（六・二三）　替　キ（九・一五）

小篆にて。㫃と其との合字。㫃の古形はで旗足がヒラヒラと風に翻つてゐるハタアシの象形。其は聲符である。旗の字の本義は五筋の旗。戰爭などの時に使つたものである。轉義して廣くハタとなつた。游・旅。乾等にはすべて㫃が含まれてゐる。

515 〔聲〕セイ しやう　新　こえ（六・二三）　替　ジヤウ（一一・七）　セイ（一二・九）

磬の字の石を取除いてかはりに耳を持つて來たもの。コエの義。磬は玉で作つたへの字なりの樂器であるから音を出すもの。而して音は耳をもつて聞くものだからこの二字を組合はせたのである。また殸は聲符をもかねてゐる。

磬

なほ磬といふ樂器は玉または石で作つたへの字なりの打樂器である。もと声の字がその本字でその樂器の象形である。だから声は聲の略字ではない。後にうつ意味から殳（殺を見よ）の字が組合はされ更にその樂器の材料たる石がついたものである。

516 〔**堀**〕コツ こち　新 ほり（六・二三）

土と屈との合字。土地をホルこと。故に土扁。屈は聲符でもあるが、土地を堀る時に身をかがめるといふ會意もあるだらう。或る說では土のつき出てゐることともいふ。さうするとこの字がホルの意になるのは土地の突き出てゐるところがあれば必らずヒッコンでゐるところもあるといふ聯想から來たことになる。

慣習上手扁の掘はホルといふ動詞の場合に、土扁の堀はホリといふ名詞の場合に多く用ゐられてゐる。

517 〔**油**〕イウ ゆ　新 あぶら（六・二三）　普 ユ （九・二）

もと川の名として作られた文字。だから江や河の如く旁の由は聲符。三水は川を現はしたものである。油々と熟し徐々に水の流れるかたち。それよりアブラ。更に油然となつて雲のわき起る

かたちにも用ゐられる。

518
〔傷〕シヤウ　新　シヤウ（六・二三）　替　きず（一一・一二）

人と𥏻との合字。矢でキズツクこと。それより廣くキズツクとなり更にイタム・ウレフ・ソコナフ・ナゲクなどとなる。𥏻は聲符（陽を見よ）。

この字はまた偒とも書かれるが傷の字の旁の上部は矢の字の上部を加へたものである。

519
〔官〕クワン　新　クワン（六・二三）

ウ冠と𠂤との合字。本義は多くの役人が君につかへること。宀は役所（守を見よ）を示したもの。𠂤は堆（うづたかし）の本字にてこれにより多くの役人の意をあらはしたものであるが、全體が家屋の象形から出來たものではなからうかと思はれる。轉じて官廳役人となり機官ともなる。

520
〔減〕カン げん　新　ゲン（六・二三）

水と咸との合字。水がヘルこと。故に三水。咸は聲符（感を見よ）。轉じて廣く物事のヘルことともなる。

521〔退〕タイ　新　しりぞ・く（六・二三）　替　タイ（一〇・五）

古形はにて日と夂と之遶との合字。本義はシリゾク。夂は人の足を後から引くかたち（足を見よ）。之遶はアルクこと（行を見よ）。太陽（日）が夂々として西の山に向つて進む（之遶）ことの會意。

522〔暖〕ダン なん　新　あたゝか（六・二五）　替　あたゝ・め（一〇・一九）

日と爰との合字。アタタカなること。故に日扁。爰(けん)は聲符（第一篇第四章を見よ。）。火扁の煖も同字である

煖が、この方は木炭や石炭乃至ストーブなどすべて火力又は火力をもととしたもののアタタカサに使用せられる。暖は氣候溫暖の如く太陽の光熱によるアタタカサの方に用ゐられてゐる。

523〔芽〕ガ げ　新　め（六・二五）

草と牙との合字。草木のメが牙(きば)のやうに萌え出る會意。牙はまた聲符をもかねてゐる。芽は草木のハジメであるから轉じてハジメの義ともなる。

524〔參〕サン―シン　新　サン（六・二六）　替　まゐ・る（六・二六）　假　曾參(ソウシン)（一一・二）

古形はにて上部は星の字の古文である。この字の本義はホシの名。冬の季節になると日沒直後東の方に行儀よくならんだ三つ星が出る。この星が參である。支那ではこの星が見え始める時を冬の眞中として十一月の標準としたことは星の條にて説明した通りである。下部の彡は聲符にもなつてゐるが、しかしこれは三つ星が行儀よくならんでゐるので特にこの字を組合はせたものであらう（珍を見よ）。

參詣、參拜と熟してマヰルの意となり。また紀數文字の三の代用とするのはいづれも音の假借である。

525 〔拜〕ハイ へ　新　ハイ（六・二六）　舊　をが・む（一〇・二三）

小篆ではである。左扁は手、右旁の上部も手、下部は丅にて下の字といはれる。そこで兩手を下げ、身を屈めてヲガムことといはれてゐるが、しかし丅は示の字の條にて説明したやうに祭壇を示したもので、その上部も手ではなく豐の字の上部に見受けるの如きもりものの象形ではなからうか。卽ち神をヲガムに當つて先づ手をもつて祭壇に供へ物をするの會意であらうと解釋されるのである。

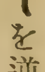
526 〔午〕ゴ　新　ゴ（六・二六）

杵　舂　揷

杵の字の本字で字義はキネといはれてゐる。古形はでウスヅクといふ字の中に加へられてゐる。舂の古文はで兩手でキネを臼にあてがつたものである。またの字もウスヅクといふ字。これに手扁が加はれば揷(さしはさ)むとなる。

しかし午の字の古文を見ると左右對象的（Symmetry）になつてゐるが或ひは古代において時間を測定するために用ゐた機械、例へば日時計の如きものにかゝる形のものがあつたのではなからうか。そこで午の字に就いては杵の象形とは別派に地中にさしはさんで時の推移をはかる機械からも來て居り、それが午前午後の如く使はれるやうになつたものではなからうか。

527 〔老〕ラウ　新　ラウ（六・二六）　替　おい（一一・二）

古形はで考の字とよく似た文字である。毛と人と匕との合字。匕は變化の化の本字で人の象形たるを逆さにしたもの。即ちカハルの意。そこで漆黑だつた頭の毛が白くかわつて來た人といふ會意にてトショリのこと。

後に老は七十歳以上をいひ、轉じて大老・家老の如く公卿や家臣の長。「何々老」といふのは

すべて年長者は經驗や知識の多いものだといふ尊敬の意味からである。我が國の「オヤ」といふ言葉も「オユ」から來たものであるといはれてゐる。自ら稱して「老生」といふのは「このオイボレ親爺」といふ氣持ちから謙遜した言葉である。

528 〔棟〕トウ つ　新　むね（六・二六）

木と東との合字。家のムナギ。故に木扁。東は聲符。轉じてムネ。

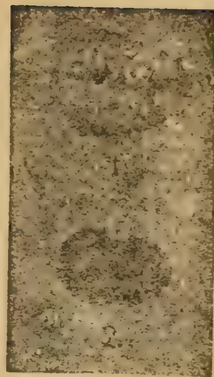
529 〔貝〕バイ―ハイ　新　かい（六・二六）

寶貝または子安貝といはれるものの象形で、現形は古形のから來たものである。

貝はもと貨幣（貝貨）として使用せられたので、この字の組合はされた文字は貧・貨・買・賣・價・貿・購の如くすべて金錢卽ち經濟的方面に關係した文字が多い。

貴重なものを財寶といふがこの二字にはともに貝の字が含まれてゐる。寶の字は略して宝とも書くが、これによつて見ても如何に古代の支那人が貝や玉を尊んだものかがわかる。東京の婦人語で通貨のことを「おたから」といふやうに、支那においては貝や玉は實におたからの代表的なものだつたのである（玉の條を參照）。

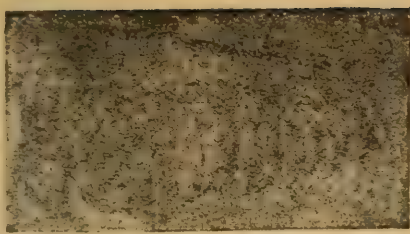
貝が貨幣として使はれるやうになつたのはこれに適當な加工を施せば服飾品として實に見事なものになるからである。玉にしても素質のよい石を適當に磨いたもので、やはり服飾品となるから珍重されるわけ。そのもとはすべて飾りになつて人々の尚美心を滿足させる點に價値の中心を認めたものであらう。貝貨に使用せられた貝は寶貝または子安貝といはれる


（第二五圖）

もので第二五圖の(1)が普通の貝貨、(2)は蟻鼻錢で、これらによつても容易にそのことがうなづけるであらう。

貫

貝貨はそれに穴をあけ紐でゆはへて携帶したものであるが貝貨をゼニサシでゆわへた意味の文字が貫といふ字の上部の毌。古文ではとなつてゐる。即ち二箇の貝貨をつらねた象形である。それが縱に位置を換へるととなり現形の串の字になる。毌・串ともに本義はゼニサシで結んで所有してゐることである。毌に貝を組合はせた貫の字はズット後に出來た文字で毌と同義である。


（第二六圖）

貝貨に使用せられた子安貝は五六分の小さなものが賞美せられた。それは

串

貨幣は運搬の便といふことも考へなければならぬからである。小さな貝貨をゼニサシにゆはへて

瑣　歩く際に貝と貝とが相觸れて音を立てる。その意に作られた文字が貟の字で小と貝との合字である。後に玉扁が加へられて瑣となつた。瑣細と使はれるのは小さな貝が觸れあつてサヽ、サラサラとかすかな音をたてるその音に起因するものである。貟の字に金扁がつけば鎖となるが、これは金屬を連續せしめたことをあらはしたものである。

鎖　貝の字は今では貝類の總稱のカイとなつてゐるが、面白いのは貝類をあらはす文字には貝が含まれず、その大部分が虫をもつてあらはされてゐることである。そのことに就いては蛤の條を見よ。

第七章　卷七の新出漢字

530〔形〕ケイ　ぎやう　新　かたち（七・一）　替　かた（九・六）　ケイ（一〇・七）　ギヤウ（一一・一二）

幵と彡との合字。もののカタチのこと。彡は說文に「毛飾の畫文なり」とあるが、物の形態を表現するには、繪書にせよ、文字にせよ、すべて毛筆をもつて種々なる線を交錯させてその目的を達するのだから、カタチといふ字を作るに當つて彡なる文字を持ち來り、カタチなる概念をあらはす手段としたものである。彩色の彩の字に彡が含められてゐるのもそのためであり、文彰・顯彰と熟する彰の字に彡が含められてゐるのもまた同樣である。修飾の修も、ものにアヤメのあることだから彡が加へられてゐるのである。その形式こそちがへ文字の文の古形はで、人が足を交錯させたやうな形から出來てゐる。これ文字は線の交錯によるからである。說文に文の字を解いて「錯畫なり」としてゐる所以で、すべてもののアヤメ即ち形態は線の交錯排列によつてこれを表現してゐる。

形體をあらはすには單に毛筆のみとは限られてゐない。たとへば彫刻の如きものは刀痕によつてものの形態美醜を表現するものであるから、彫の字の旁は刀痕をあらはしてゐる。

契

契約・書契と熟する契の字に含まれる彡は刀痕から來たものである。卽ち契の本字はもと丯と書いたもので彡と|との合字である。今日證書などに用ゐる割り印の如きものである。卽ち一本の木片|に彡なるシルシをつけてこれを二つに割き、後日の間違ひを防ぐ證據として當事者同志が所持し合ふことをあらはしたものであるが、彡はそのシルシ卽ち文字を意味してゐる。もと刀にて刻んだのでそのシルシをつける道具たる刀と材料たる木とが加へられ栔の字が出來、更に二人が分けて所持するので木の部分が兩手の象形たるとなり、現形の契となつたものである。

以上によつても彡がすべてもののカタチなる概念をあらはすことに應用される理由がわかつたことと思ふ。

栞

次に形の左邊は聲符といはれてゐるが、實は干を二つ並べたものが現形となつたので栞といふ字の本字である。栞の本義はシヲリ。シヲリは人を導くシルシのもの。シルシとすればミチシルべにしても何か特に形をもつてゐるものを立てなければならないわけである。そこで木片で十字型のものを作り、更にその上に横木をつけて干の如き形のものとし、それを二つ並べて標識なる概念をあらはしたものである。だから形の字は左偏からもカタチなる概念を見出すことが出來る

のである。幵についてはまだ言ひたいこともあるが省略しておく（開を見よ）。

型

形の字に似た文字に型がある。形はカタチの如く形容詞的名詞に用ゐられるのに反し、型はカタの如く專ら名詞に用ゐられてゐる。しかしもと形は型の本字といはれてゐる。現形の型は刑と土との合字で本義は土で作つた鑄式のこと。故に土を書くのだが刑は聲符たるとともに更に意をも兼ねさせてゐる（刑を見よ）。小篆では⿱⿰井刀土となつて居り、その左上部の井字型は恐らく彫刻の刀痕をあらはしたものだらうと思はれる。かく考へて行くと形の字の幵が單なる聲符でないことは自ら明らかになるだらう（研を見よ）。

531〔球〕キウ　ぐ

新　たま（七・一）　舊　キウ（七・一）

玉と求との合字。磬といふ樂器のこと。この樂器は質のよい石、卽ち玉で作つたものであるから玉扁としたのである。求は聲符。轉じて圓形のものとなるのは毬の音に通じたのである。毬は毛と求との合字。マリはもと毛をまろめて作つたので、毛の字と求なる聲符とを組合はせたといはれてゐる。

なほ磬については聲の條を見よ。

本字は州にて三水は後に加へられたもの。州の本義は川の中のシマ。轉じて國土、國等の意となるが、三水の方は大陸（Continent）を意味する場合に用ゐられてゐる。アジア洲・ヨーロッパ洲（歐洲）・アフリカ洲・北アメリカ洲・南アメリカ洲を五大洲といひ、これらにはすべて洲の字を用ゐる。オーストラリヤ洲（濠洲）も勿論洲である。濠洲は印度洋と太平洋とによつて完全に圍繞されてゐるが、アジア洲やヨーロッパ洲の如きは、一部陸地によつて連續してゐるが必らずしも水によつて圍まれてゐることを必要の條件とはしない。滿洲の如きはその好例である。滿洲に洲を用ゐるのは、同じ支那にしても、もと滿洲朝廷なるものがあつて、特別な事情の下におかれた一大地域だつたからである。

洲はまた主權を同じうしてゐる一國家とも限られてはゐない。たとへばヨーロッパ洲の中にもイギリス・フランス・ドイツ・イタリーその他の國が含まれてゐるが如きである。要するに地勢的の關係が主となつて、これに政治上、人種上の關係が加味せられて地域を大別したものに與へた名稱である。

州は國土即ち本土・本島を意味し、從つて本州・神州の如く使はれ、主權のある一國家の意味

となる。然し州が大陸を意味して使用せられるのに反し、一國家の中を行政上等の關係から地方的に區別した場合にも使はれる。十二州　九州。關八州、薩州　長州の如きがそれである。アメリカ合衆國を形成するニューヨーク州　カリフォルニア州は三水のない方である。ただし合衆國の衆は、洲でもなければ州でもないことに注意しなければならぬ。

洲は我が國ではスと訓み中洲（なかす）。白洲（しらす）の如く用ゐる。すべて川の中の島のやうに或る限られた一畫である。なほスなる音は、繪にヱの音があるのと同様、もと〳〵支那の音から來た言葉である。

533〔及〕キフ ぎふ　新　およ・び（七・一）　替　およぼ・す（一一・二）

小篆にて。人と又との合字。又は右手の象形。後から追つかけて人をつかまへる會意によつてオヨブといふ意の文字としたものである。

534〔部〕ホウ ぶ　新　ブ（七・一）　替　ベ（一一・五）

音と邑との合字。陝西省の鞏省府にある丘の名として作られた文字。故に邑（ひら）を書く（郷の條を見よ）。音は聲符。統の字に假借されてスブ。ツカサとなり、剖に假借されてワカツ・クミワケとなる。なほ剖は音と刀（立刀）との合字。サキワカツこと。故に刀を書く。剖における音もまた聲符であ

るが、この字は小篆にて。即ち丶と否との合字である。口角泡を飛ばして論爭することがその本義。故に相手の言論を否定するの意にて否を書く。上部の丶は口論の際の唾の意だといはれてゐるが、この字はシルスといふ意の場合にシュなる音をもつてゐるので、聲符としても利用せられてゐるのだらう。即ちシユ・ブ・ホウと音が轉化したものである。

535 〔衆〕シュウ しゆ　新　シュウ（七・一）

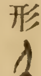
古形はにて目の象形ととの合字。下部は人を三つ書いて多人數なる意をあらはしたもの。衆目の會意にてモロ／＼なる意の文字としたのである。

現形の衆は上部が血となつてゐるが實は目を誤つたものである。

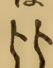
536 〔望〕バウ まう　新　のぞみ（七・二）　舊　バウ（一一・一）

亡と朢の省畫との合字といふ。逃亡した人が再び歸つて來るのをマチノゾムことがその本義といはれてゐる。そこで亡の字と聲符たる朢とを組合はせたもの。

なほ朢は臣と月と壬との合字。本義は滿月のことであるから、望の字に於ては單に聲符たるのみに止まらずノゾムといふ會意もある。この字が滿月の意となるのは、十五夜の月と太陽とを對

照し若し太陽を君とせば月は臣、あたかも地上において君臣が朝廷に相見えるに似てゐるので臣と月と朝廷の廷の省畫とを組合はせたものといはれてゐる。しかしこの字はかかる複雜な考へから出來た會意文字ではなく、人が地上に立つて月を眺めるといふ會意に過ぎまい。即ち臣といふ字は人體の象形から出來た文字で、ここでは單にヒトの意をあらはしたものである。恰度賢者の賢に含まれてゐる臣と同樣なもの。また王は朝廷の意ではなくその古形が人と土との合字なるが如く、單に人が地上に立つて皓々たる十五夜の月を仰ぎ見てゐる形をあらはしたものである。むしろ坐の意にも近きものといふべきである。

537
〔比〕ヒ　新 ヒ（七・二）　替 くらべ（八・二六）

古形はにて人の字を反對にして二つ組合はせたものである。本義は比從、即ちオモネルこと。等しく人が二人並んだものにがある。從の字の右上部にある从がそれである。從はシタガフといふ意であるから、シタガヒススムといふことが聯想されて後に彳止（行を見よ）が加へられた。從は普通にシタガフ意を有して居り、比はその度合が過ぎて媚びへつらふ意がある。そこで正位における人即ちを反對にして組合はせたものである。

もつともといふ字も人間を左側面から見た形をもつてヒトなる意の文字としたのであるか

ら、單にのみを見ては何れが正位とも決定しかねるが、もとヒトといふ字を作るに當つて、左側面よりの形をもつてしたのだからをもつて正位とするのは當然である。

比は轉義して比較の比ともなる。またナラブといふ意にも用ゐられるが、人が正面を向いて地上に立つてゐる形から出來た立の字を二つ重ねたなる文字もある。比は後につき從つてナラブといふやうな氣持ちがあり、竝は對當にナラブのである。

538 〔横〕クワウ わう　新　よこ（七・三）　替　ワウ（一一・三）

木と黄との合字。門を閉めるために用ゐる横のトメギ。卽ちカンヌキ。故に木扁。黄は聲符。轉じてヨコとなるのはカンヌキが横にさしてあるからである。

閊　なほ門の字もカンヌキのこと。中の横線はカンヌキの指事。また一の部分を心とすれば閊となりサシツカヘルこと。心が門のカンヌキのあるところでヒツカカルといふ會意。これは我が國で作られた文字である。

539 〔貿〕ボウ む　新　ボウ（七・三）

卯と貝との合字。卯の古形はにて門戸を開放したかたち。貝は古代の通貨。門戸を開放し

て交易をするの會意。卯は更に聲符ともなつてゐる。

540 〔易〕 エキ やく　イ　新 エキ（七・三）　替 イ（九・五） やす・し（一二・一四）

トカゲに類する動物のことでその象形から來たもの。この動物が一日に十二回も體色をかへるといはれてゐるのは、太陽の光りを受けると、光線の工合によつて赤や紫などの種々な色に變化するからであらう。周易・易筮の意に用ゐられるのは、易は陰陽の交錯によつて、トカゲの體色の如く、種々爻卦が變易するからである。卽ち爻卦の變化をトカゲの體色の變化に聯想したものである。そこで廣くカハルといふ意にも用ゐられるのである。

易の字が易筮の意に用ゐられるやうになつたので、本義の場合には、後に虫扁が加へられて蜴の字が使はれるやうになつた。蜥蜴と書きトカゲ又はイモリのことに用ゐる。

蜴

易がヤスシとなるのは音が假借されたものである。

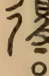
541 〔港〕 カウ　新 カウ（七・三）　替 みなと（七・三）

水と巷との合字。ミナト。故に三水。巷は聲符ともなつてゐるが、實はこの字にはチマタといふ意があるので、水中の道なる會意もあるのだらう。なほ巷は共と邑の省畫との合字。邑里にあ

巷

る共用の小道。故に邑を書く（郷を見よ）。共は意と聲とを兼ねたもの。

542 〔得〕トク　新う（七・三）　替え（七・一〇）トク（八・一五）

古形にて。行人扁に貝と又との合字。行人扁は行の條下に説明したやうに行步を意味したもの。貝は古代の通貨。又は右手の象形。そこで金（貝）をもつて出掛けて（行人扁。）、品物を手にして（又）、かへる（行人扁。）の會意となり、ウルなる意の文字としたのである。

543 〔輸〕ユ シュ　新ユ（七・三）

車と俞との合字。貨物を運搬すること。故に車扁。俞は聲符である。

なほ俞は亼とと巜との合字にて獨木舟(まるきぶね)のこと。上部は合・令・會等の上部と同じく、ものが三方から集まることをあらはしたものでアツマルの意。左下部は舟の象形。右下部は流・災等に含まれる巛を省略したもので水の流れるかたち。舟は水中を渉るのであり、又物貨を集めて運搬するものであるから、舟の象形に更にこの二字を組合はせたのである。そこで輸の字における俞は單なる聲符でなく踰(こえる)の字にあるものと同樣聲と意とをかねたものといふべきである。なほ運搬する意の文字に車と舟とを組合はせたのは、古代における交通は陸は車、河は舟をもつ

踰

て唯一の機關としてゐたからである。卽ち「孔傳」に「載する所のもの四、水には舟に乘り、陸には車に乘り、泥には輴に乘り、山には樏に乘るを謂ふ」の語があるのはそれを物語るものである。

544 〔等〕トウ　**新**　トウ（七・三）　**舊**　ら　（七・一六）　ひと・し（七・二四）

竹と寺との合字。役人が書類を整理すること。竹は竹簡のことにて書類をあらはしたもの。卽ち古代は紙が發明されてゐなかつたので竹片を用ゐたからである。竹帛の語はこれから來たもの。寺は役所のこと。ヒトシの意に用ゐられるのは書類を整理するに當つては同一性質の書類をトトノヘルからである。また等級・差等の如く使用されるのは、書類を部類わけにするからである。ナド・ナンドとなるのは種々の書類が輻輳してゐるからである。

545 〔岸〕ガン　**新**　きし（七・四）　**舊**　ガン（七・一六）

屵と干との合字。水際の高いところ。干は聲符であるが、上部は崖の字の上部と同じくガケの意を表はしたもの。屵は崖の象形厂と山との合字であるが、もと厂がその本字である。ガケは山際のソソリタツところであるからその聯想作用によつて後に山が加へられたもの。崖の字の圭は聲符として後に加へられたものであるから、實は厂→屵→崖─岸の順に出來たものである。

546 〔潮〕テウ でう　新　しほ（七・四）

本義は川が海に注ぐこと。故に水とアツマルといふ意の朝とを組合はせたもの。朝はまた聲符ともなつてゐる。轉義してウシホ。また汐のユフシホ（ヒキシホ）に對してアサシホ（サシホ）ともなる。

547 干　カン　新　ひ・る（七・四）

古形はにてヲカスこと。は二股になつてゐるホコの象形、一は國境。卽ちホコをもつて敵地に侵入すること。そこで干戈と熟し兵器・戰爭の意となる。
また他の說では入の字を逆にしたものと一との合字にて、國境（一）を逆に進み入るの會意にてヲカスともいはれてゐる。
この字が潮汐の干滿に使用されるのは乾の音に通じたのである

548 〔狩〕シウ しゆ　新　かり（七・四）

犬と守との合字。カリのこと。故に獸扁。犬はその字の條下に說明したやうに古くから狩獵に用ゐられた。守は聲符である。

狩の本義は獸類をとることであるが、我が國では廣く魚類や茸(きのこ)の類を探して取ることにも用ゐ更に紅葉狩・櫻狩の如く野山に分け入つて花などを觀賞することにも用ゐる。

549〔唱〕シヤウ　新　シヤウ（七・四）

口と昌との合字。音頭にあはせてウタフこと。故に口扁。昌は聲符（昌を見よ）。獨唱・合唱に限らず廣くウタフ意となり、また音頭をとることより導く意ともなる。

550〔織〕ショク しき　新　おり（七・四）　シ　キ（一一・六）

糸と戠との合字。布類をオルこと。故に糸扁。戠は聲符である（職を見よ）。

551〔妹〕バイ まい　新　いもうと（七・四）

妺

女と未との合字。イモウト。故に女扁。未は聲符。この字は「末の女」なる會意文字に誤解され易いが女と未との形聲文字である。なほ女と末との合字は、夏の傑王の后の名である。妺嬉(ばつき)の妺がそれ。后だから女扁。末は聲符。この字もまた形聲文字である。

552〔蛤〕カフ　新　はまぐり（七・四）

虫と合との合字。合は聲符でもあるが、ハマグリの甲殼が兩方から合はさるので、その會意もあるのだらう。貝扁にしなくて虫扁としたのは、貝の條下に說明したやうに、貝の字はもと通貨として使用せられた子安貝の象形から出來た文字であるから、すべて貝を財寶または經濟に關係のあることをあらはすために他の文字に組合はしたからである。

そこで介虫類の如き甲羅のある小動物はすべて虫の字を組合はせ蜃(おほはまぐり)・蠣(かき)・螺(にな)の如く虫扁が加へられて作られたのである。

553〔珍〕チン　新　めづら・し（七・四）　替　チン（一二・一〇）

王と㐱との合字。類の少ないタカラ。それよりメヅラシ。玉が加へられてゐるのは玉・王・貝・寶等の條下で說明したやうに、玉は貝とともに非常に尊重せられたからである。弄(もてあそぶ)といふ字の古形がで、小篆がとなり、玉と兩手で出來てゐるのを見ても、いかに玉が珍重されたかの一端がわかるであらう。

なほ㐱は聲符であるがこの字は人と彡との合字。本義はフサノヽとした毛髮のことで彡は毛髮

をあらはしたものである。髮・鬚・髯等に含まれる彡はすべて㐱の字における彡と同意のもの。彡については形の字の條下にも說明した通りであるが、彩色の彩の旁は形態をあらはすための意ばかりでなく、毛筆又は刷毛の毛なみをもかねあらはしてゐるのである。なほ㐱の字における人は聲符である。

診察の診の旁も聲符である。この字はシンと讀んでゐる。シン・チンは音の分化である。

554
〔總〕ソウ す　新 ソウ（七・六）　舊 すべて（七・一六）　假 上總（かづさ）（九・三）

糸と悤との合字。アツメツカネルこと。故に糸扁。悤は聲符。轉じてスベテ・スベル・ヒキキル・オホヨソとなる。

なほ悤は囱と心との合字にて氣ゼハシナイとか繁忙の意。故に心を書く。囱は聲符であるが窓の象形から來たものである。れんじ窓の如く窓には目の細かいものもあるから、或ひは煩瑣なる會意があるのではないかともいはれてゐる。して見れば總における悤は聲符たる以外に、コマゴマしたものを集め束ねるの會意も含まれてゐることとなる。

555
〔鎌〕ケン　新 かま（七・六）

金と兼との合字。カマのこと。故に金扁。兼は聲符。

秉

なほ兼は秉の字を二つ重ねたものでその小篆は〓となつてゐる。そこで秉の字であるが、この字の古形は〓で禾（稲を見よ）とヨとの合字。ヨは又と同じく右手の象形であるから手に禾穀をもつてゐるかたち。それによつてトルといふ意の文字としたのである。

兼

兼は禾穀の束を二つ手に持つてゐることにてカネルといふ意をあらはしたのである。かくの如く手に持つとか、手に取るといふ場合に禾穀を應用したのは、もと穀物が人々の重大なる財産であり、常にそのものについて人々の關心があつたからである。あたかも貨幣として使用せられた貝の上部にシルシをつけて貝の字とし、ものを數へる文字としたのと同様である。

鎌の字の兼は聲符でもあるが、カマは稲や麥を刈り取る道具であるから、稲束を手にしてゐる兼の字を特に選んで組合はせたものであらう。

556〔**倉**〕サウ　新　くら（六・七）　替　サウ（一一・二八）

古形は〓にて第二七圖の如く穀物を入れる建物の形から出來たものである。高・京・亭などと同系統の文字であるが、その古形はとりわけ高の字によく似てゐる。この字に禾穀の禾（稲を見よ）の字が加はり〓となれば天稟の稟となる。食は天から受けるところのものといふ考へから出來たも

稟

のであらう。そこで禾の部分を祭壇の象形から出來た示の字にかへた稟の字も後に出來た。示はその字の條下に說明したやうに神なる概念をあらはしたものである。或ひはまた禾穀を神に捧げて神より福祿を得るの會意かも知れない。



（第二七圖）

享

ウケルといふ字に享獻と熟する享の字がある。古形はで、高の字の下部をいささか變化させて禮器の形のやうにしたものである。飪物を神に獻げて神を饗すること。そこで神がその饗應をウケルといふ意。享の音は高に近く、字形も高に酷似してゐるが、しかし稟の字が米倉から出來た文字なるに徵し、享が單に高のみから出來たものとは考へられない。恐らくこれらの概念が錯綜して享なる文字が作られたものであらう。

嗇

またの如く上部に麥の象形から出來た來の字に似たもの、或ひは禾穀をあらはす禾を重ねたものがつけば客嗇の嗇の字となる。これは澤山の穀物を後生大事に倉の中にしまひ込み、一切他へは出さないといふ貪慾なことをあらはしたものかも知れない。

557 〔臣〕シン　じん　新　シン（七・六）

古形はにて人臣たる者が身を屈して王者に仕へてゐるかたちである。身の字の古形を

反對にしたやうな字形である。詳しくは身の條を見よ。

558 〔開〕カイ―ケン　新 ひらき（七・六）　替 カイ（九・六）

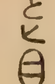
闓

古形はにて門をヒラクこと。故に門と兩手と、開くべきものの指事一とを組合はせたものである。なほヒラクの意を更に字面の上にあらはして、手の甲を背中合はせにしたものもある。卽ちの字がそれで、開闓の闓の古形である。闓は後に出來た形聲文字である。

559 〔滿〕バン まん　新 み・つ（七・六）　替 マン（七・一〇）

水がミチアフレルこと。故に三水。㒼は聲符。㒼は廿と㒳との合字にてタヒラカなること。廿は二十と同じく物の多いこと。㒳はものがナラブこと（兩を見よ）である。水の如きものが多く滿ちれば漫々として平らかとなるのでかくの如き文字を組合はせたのである。

560 〔眞〕シン　新 ま（七・六）

この字はもとと書いたもので本義はイカルこと。嗔恚(しんい)の嗔の本字である。變化の化の本字と目とを組合はせたもの。目をむき出しておこるの會意としたもの。呉の字の條下に述べた

仄（側の本字）の字が後に加へられて眞となつた。身をそらしてイカルの會意である。或る說では仙人が昇天する會意をもつて眞理の眞の字としたものといはれてゐる。それによれば修業中の人が仙人に變化し（匕）、乘り物に乘つて（六）昇天し、人目から（目）かくれる（乚は亡の本字）と稱するのであるが、これは誤りである。嗔恚の嗔が眞理の眞として使はれるやうになつたのはいづれ音の假借だらうと思はれる。眞理の意味に使はれるやうになつてから自然とか妙理とか乃至神氣・正氣等の意にもなつた。これは老子一派の哲學思想の影響を受けたものである。

561〔忽〕コツ こち　新　たちまち（七・六）

勿と心との合字。物事を忘れてかへりみないこと。故に心を書く。勿は聲符である。

562〔防〕ハウ ばう　新　ふせ・ぎ（七・六）　替　バウ（九・七）

阜と方との合字。隄のこと。故に阜扁を書く（鄕を見よ）。方は聲符。轉義してフセグ。

563〔傘〕サン　新　からかさ（七・七）

小篆にて傘。カラカサのこと。傘を廣げた場合の象形。カラカサは紙製のものであるが布製

のものを現はす文字に織、幟の字がある。散はカサなる言葉の音を寫した聲符字。故に巾及び糸によつてそのカサが如何なる材料で作られたものかがわかるのである。このやうに殆んど同様な意を持つ文字は、發生的に見て先づ傘の如き象形文字が先きに出來、次に繖幟の如き形聲文字が出來たものであることを忘れてはならない。我が國でいふ同訓異義も文字の成因を知れば傘は唐傘に相當し、繖幟が洋傘に相當することが容易に理解せられるのである。かうした例は漢字にはいくらもある（第一篇第一章を見よ。）。たとへば聞と聽、見と視の如き、我々は一と口にキクとかミルとか訓じてゐるが、自然的、機械的に見える（see）、聞こえる（hear）、の場合には見と聞、耳垢を取り目を見開いて意識的に物を見たり（Look）、聞いたり（Listen）する場合には視と聽を使つてゐる。卽ち聽問　視察・熟視・外聞。外見の如きがそれである。もつともこれらは既に音卽ち支那での言葉がちがつてゐるので、その言葉を輸入して我々現在の言葉としてゐるのでさしたる間違ひも起らないが、傘・織の如き場合は同音であつて、しかも音のままでは我が國の通常語として普段に使はれてゐないからその區別がはつきりしない。しかし文字にあらはして傘　織の如く書けば同音といへどもその區別がはつきりするのである。これは支那人にもさうであつて、かかることがらは漢字の有する一つの特徴である。卽ち漢字はローマ字の如く音のみを忠實にうつす綴音文字でないからである。ローマ字にしても漢字にしても、およそ文字なるものは目に訴へて

その意味を會得させるのが原則であるが（盲人の點字は例外）、ローマ字と漢字との間には『目に訴へる程度』において非常な差がある。卽ち傘の字と繖の字を見た時、前者が紙製のカサの象形から來た文字といふことがわかれば、後者は糸と散とに分解して糸扁より布製のものであることをまづ頭に入れ、更に散の字の音よりカサ（傘）なる意を導き出すのである。卽ちカサなる既成の概念（散。此の場合サンなる音からカサなる概念を構成することが出來る。）と布製のもの（糸）といふ概念とを結合させて、新らしい第三の概念（繖）を作るのである。だから漢字は言葉の音韻を忠實に寫し出したのではない。これローマ字などの表音文字に對して表意文字といはれる所以である。卽ち漢字は紙上に書かれた文字を「よく目で視て」その眞意を「頭の中でまとめ」そして後に初めてその文字の意味を知り得るものなのである。漢字はかうした過程を通過するのであるから、同じ目の感覺に訴へるにしてもローマ字などとはその程度がちがふ。この點思想發表の手段物たる文字として、漢字全廢などの唱へられる一因ともなるのであるが、またこの「目に訴へる程度の差」はやがて支那や日本に於いてのみ見受けられる特殊な藝術たる「書道」の發達ともなつたものである。單に忠實なる表音字母の組合せによる文字を使用してゐる西洋人に、「書」の風韻を味ふことの出來ないのもそれがためである。

次に唐傘（からかさ）といひ洋傘（やうがさ）といひ、すべてカサなる言葉の上に我が國で「唐」や「洋」をつけるのは、

もと我が國には「みのがさ」や「すげがさ」しかなかつたからである。この字に相當するものは笠（笠を見よ）であるが、洋の字の項でも說明したやうに、西洋文明を盛んに取り入れてゐた明治の初期中期には凡て外國から輸入された新奇なものには洋燈・洋杖、洋服・洋裝の如く洋の字を冠せたやうに、以前は日本の文明は支那に刺戟されて發達したのであるから、當時の先進國たる支那から來た物珍らしいものにはすべて唐の字を音又は訓で被せた。カラカサもまたその一つである。これに類した言葉には唐縮緬（メリンス）・唐瓜（唐茄に同じ。カボチャの異名。カボチャは地名コシエンシーヌの訛音。）・唐布・唐木（黒檀・白檀・紫檀等。）唐紙・唐紙・唐紅などがそれである。また西洋人を罵つて毛唐・唐人などいふのは、支那の文化のお蔭をよほど長年に涉つて蒙つてゐたので、外國といへば直ちに唐を聯想して使用するやうになつたのである（呉を參照せよ。）。

564 〔茶〕チャ さ　新　チャ（七・七）

茶

もと荼と書いたものが省略せられて、現形の茶となつたものである。チャの木のこと。故に草冠。余は聲符（餘を見よ）。なほ余の字の下部が木に換へられたのは、茶の木が草木に屬するものだからであらう。火葬にすることを荼毘といふのは、單に梵語の音に假借したもので、意味上には何等の關係もない。

565 〔菓〕クワ　新　クワ（七・七）

本字は果にてクダモノのこと。そこで草木になるものといふ聯想作用により後に草冠が加へられた。そして現在ではクダモノ（Fruits）の場合には果を、クワシ（Cake）の場合には菓を用ゐてゐるが、しかし我が國でも古くは菓子と書き專らクダモノの意に用ゐたものである。今ではケイキと區別するために水菓子の如き言葉も出來てゐる。

566 〔笠〕リツ リフ　新　かさ（七・七）

竹と立との合字。スゲガサ。故に竹冠。立は聲符である。

567 〔走〕ソウ す　新　はしり（七・八）　替　ソウ（八・三）

小篆にて夭止。夭と止との合字。止は足趾の象形。夭は人が頭部を曲げてゐるかたち（大の條を見よ）。走れば（止）、身體が曲がる（夭）のでこの二字を組合はせてハシルといふ意の文字としたものである。夭はまた聲符ともなつてゐる。

走の字は赴・起・超・越の如く他の文字に組合はされて走遶といはれてゐる。進退の如き字に

見ゆる之遶とよく似てゐるが躍動的の氣持が含められてゐる。

568〔荷〕カ が　新　に（七・八）

草と何との合字。本義は蓮(はす)の葉。故に草冠。何は聲符。ニナフといふ意に使はれるのは聲符として組合はされた何の字の意をとるやうになつたものである。そして上部の草冠から薪や草などを聯想したものであらう。

569〔耕〕カウ きやう　新　カウ（七・八）　替　たがやし（八・八）

田をタガヤスこと。故に耒(すき)（來を見よ）と井との合字。井は井田の井にて田の意をあらはしたものといはれてゐるが、むしろ田畑を縱横に耕やして行くことの指事と見た方がおだやかではなからうか。

570〔爭〕サウ しやう　新　サウ（七・八）　替　あらそひ（八・四）

爪とと｜との合字。は又の變形にて右手の象形。一つのもの（｜）を上からは爪で下からは手でつかみあつてゐることにてアラソフ意の文字としたものである。爪はまた聲符をも

かねてゐる。

571
〔愛〕エ アイ　新　アイ（七・八）

小篆にて。もと旡（あい）と夊との合字であつたのが變形して現形となつたもの。本義はユックリアユムこと。そこで足へものがからんでゐるかたちのから出來たにてその意をあらはしたのである（足を見よ）。愛の字がメグムの意として使用されるのは、聲符として加へられた旡の字にメグムといふ意があつたからである。

旡の古文はで吹・歌等の旁を反對にしたものにて人が口をあけてゐるかたちである。鄕の條下で說明した旣の字を見ればわかるやうにこれをもつて食事を終へたことをあらはしたものではなからうか。卽ち食が足つてこそ始めて心の落ちつきも出來、他人にメグム氣持ちも出て來るの會意かも知れない。或ひはまた民を食に餓えしめないやうにするの會意とも見られる。

572
〔養〕ヤウ　新　ヤウ（七・八）　替　やしなひ（八・二五）

羊と食との合字。食物を供してヤシナフこと。故に食を書く。羊は聲符ともなつてゐるが、羊の條に說明したやうに、古代から羊は食料中でも主要なものだつたからである（暴を見よ）。

573 〔乃〕ダイ ない　新　の（七・八）

小篆にて。本義は言葉がスラ〳〵と口から出て來ないこと。線を曲げて語氣がひつかかる意の指事としたものといはれてゐる。スナハチとかソコデとかの如く上の文句を受けて次の文句を呼び起す語となる。

574 〔寸〕スン ソン　新　スン（七・八）　假　十寸（き）（七・八）

古形はにて右手の象形から出來たと點との合字。掌から脈どころまでが一寸あるので掌から脈どころまでの長さだといふ意匠で出來たもの。丈にせよ、尺の字にせよ、寸法をはかる文字が人體の一部から出來てゐるのは、人體を標準にしてものの長さをはかつたからであらう。尺度は正確なるべきものだからその意をあらはすために寺（役所）、封（役人を任命する）、時（時間）の如き文字に組合はされてゐる。

なほ尊の字の如く現形では寸となつてゐて、もとは兩手だつたものもある。これは小篆でをと書き、現形がそれから來たからである。詳しくは手の條を見よ。

575 〔諸〕シヨ　新　シヨ（七・八）

もとは單に者と書いた。甲と乙との區別をすること。卽ちこの者は此の者とし、彼の者は彼の者とすることである。區別をするには言葉をもつてするから後に言扁が加へられたもの。モロ〳〵の意となるのは區別をするには澤山なものがあつての上だからである。

576 〔良〕リヤウ　新　リヤウ（七・八）　假　奈良（なら）（五・一五）

古形はにて畐の省畫と亾（亡）との合字。畐は富・福に含まれてゐるものと同形にて財貨を澤山持つてゐること。亡は聲符。或ひは深く藏してゐる會意があるかも知れない。財貨を所持してゐることをヨシと見たのは貞・賢・貴・賤等の文字に古代の貨幣たる貝の字が組合はされてゐるのをもつてしてもわかるだらう。

577 〔阪〕ハン　ばん　替　さか（七・九）

阜と反との合字。サカのこと。故に土の高い意味の阜を書く（鄕を見よ）。反は聲符ともなつてゐるが、阪道を歩けばひつくりかへるやうなことがあるので、さうした會意も含まれてゐる。なほ坂

の字の條を見よ。

578 〔煙〕エン―イン　新　けむり（七・九）　替　煙草（たばこ）（九・一五）　エン（一一・一三）

火と垔との合字。ケムリ。故に火扁。垔（いん）は聲符である。なほ垔は襾と土との合字。土にて隙間（すきま）を埋めること。故に土を書く。襾は聲符。もと襾にはセンの音があつた。なほ烟と書くのは因と垔との古音が通じたからである。

579 〔業〕ゲフ ごふ　新　ゲウ（七・九）　替　わざ、九・一）

小篆にてと書く。本義は釣鐘に類した樂器をかける大きな板のこと。業板といひ黑白のギザ／＼模様がある横の板。この裝飾が草が生えて亂れてゐるのに似てゐるのでその意をあらはすと、樂器をかける臺足とを組合はせたものといはれてゐる。

轉義して文章を書きつける大板のこととなる。もと文字を書くのに板を用ゐたからである。それより文章を筆記すること。師について講義を聽くこと、更に學業、事業の如きワザともなつたのである。

580 〔市〕シ じ　新　シ（七・九）　舊　いち（一〇・四）

小篆にて[篆字]。冂（ケイ）と㇂と㞢（之）の省畫との合字。冂は城市より遠く離れた土地の境界といふ字。ここでは單に一定の區域をあらはしたもの（央を見よ）。㇂は今の字の下部と同様にオヨブの意。之は行く意。そこで物品を賣買するために人々が次ぎ〳〵に行く一定の場所といふ意をあらはしたもの。即ち市場のこと。轉義して商賣・町等の意となる。

581 〔往〕ワウ　新　ワウ（七・九）　舊　ゆ・く（九・一八）　い・く（一〇・一四）

現形は行人扁と主との合字となつてゐるが、この字の旁はもと㞷と書いたもの。之と士との合字。說文に「之の土上に在るに從ふ、會意、草木妄生するなり」とあるやうに草木が盛んにのびあがることと。そこで行人扁へこの字を組合はせてユクといふ意の文字としたのである。

582 〔復〕フク ぶく　新　フク（七・九）

古形は[篆字]にて後の字[篆字]の右上部へ一線を加へて一度行つた道を再び引き返へすの指事としたものであらう。轉義してカヘル・フタタビ・ムクユとなる。

複。この字によく似たものに複がある。本義はアワセギモノ。故に衣扁。轉じて同一のことを繰返へすこと。單複・複製・複寫の如く使用せられる。往復。拜復の如く一度行つたところを再び引返へす。卽ち折り返へす意の場合には行人扁を用ゐる。

583 〔交〕カウ けう　新 カウ（七・九）　替 まじは・れり（一〇・一六）

古形は。人の象形たる大の字の足部をまじへた形によつてマジハル意の文字としたもの。この字は、ものが交錯してゐる形から出來た爻の字によく似て居り、音も同じであるところから察するに、爻。交はともに同字だつたものだと思はれる。爻の字が易の卦の爻に專用されるやうになつてから、交の字がマジハル意に專ら用ゐられるやうになつたのであらう。

584 〔利〕リ　新 リ（七・九）

和の省畫と刀との合字。本義は刀刃のスルドイこと。故に立刀。和は調和の和にて刀を鍛錬するときには燒きの工合、砥のかけ工合等にそれぐ〱調和のよろしきを得なければならぬによるといふ。轉義してヨロシ、利益。

585〔眠〕ビン みん　**新** ねむり(七・一〇)

目と民との合字。まぶたをあはせること。故に目。民は聲符。轉じて廣くネムル意となる。

586〔怒〕ド ぬ　**新** いかり(七・一〇)

奴と心との合字。非常にオコリその様が顔色にあらはれること。故に心。奴は聲符である。

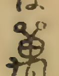
奴

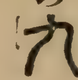
なほ奴の字は女と又との合字。ヤッコと訓ずる字にてシモベ。苦役に從事するので右手の象形から出來た又の字が組合はされたもの。女の字が組合はされてゐるのは、女子は洒掃に從事しあたかも男子の奴隷の立場にあるからである。なほハシタメの方には婢の字がある。女と卑(いやし)との合

婢

字であるがその古形はの如くチリトリと手との組合はされたもの。婦・妻等と同意匠にて掃除から出來た文字である。

587〔獸〕ジウ シウ しゆ　**新** ジウ(七・一〇)　**舊** けもの(七・一九)

嘼と犬との合字。ケモノのこと。故にケモノの代表とされてゐる犬を書く(犬の條を見よ)。嘼は家畜のこと。その古形に又はがある。は動物の顔面と耳との象形。下部のは足部

をあらはしたものといふ。なほ第二形のは聲符である。現形の獸の字は第一形へ犬を組合はせたものである。

588 〔打〕 ダ テイ ちやう　新 うち（七・一〇）

手と丁との合字。ウツ。故に手扁。丁は聲符でもあるが、また釘をウツの會意もあるのであらう。即ち丁は釘の象形。打の字はまた朾とも書かれた。

打はダースの意に用ゐられる。英語の（Dozen）音に假借せられたものである。

589 〔無〕 ブ む　新 ム（七・一〇）　替 ブ（七・二六）　な・し（一〇・四）

小篆にて。本義は木が盛んに繁つてゐること。そこで大・廿・廿・木・木を組合はせたもの。即ち大は澤山の意。廿は二十にて同じく多數。しかも木と廿とが二つまで組合はされてゐるから、それにて澤山の木がしきりに繁茂してゐることとなる。

ナシといふ意に使はれるのは亡の音に通じたのである。本義が忘れられるやうになつてから、

蕪　本義の場合には更に草冠がつけられて蕪雜の蕪の字が出來た。

590〔從〕ジユウ　ショウ　じゆ　新　ジユウ（七・一〇）　替　ショウ（一〇・一八）　したが・ふ（一一・一〇）

もと从と書いたものである（比を見よ）。人の字を二つ書いて、甲の後へ乙の人が從つてゐる意を表はしたもの。シタガヒユクといふ聯想から更に之遶（彳止）が加へられ現形の文字となつた（行を見よ）。

591〔幾〕キ　け　新　いく（七・一〇）

𢆶と戍との合字。本義はアヤフシ。𢆶は幽と同字にてカスカ（幼を見よ）なる意。戍は人と戈との合字にて人が戈をもつて邊境をマモルこと。この二字を組合はせてアヤフシといふ意の文字としたのは、邊境の敵を防ぐ（戍）には敵の機微（幽）を察して攻防に當ることが必要だからである。しかもこのことたるや實に生命がけのことであるから、アヤフシといふ文字を作るに際して以上の文字を組合はせたのである。それよりホトンド・チカシ等となる。

592〔底〕テイ　たい　新　そこ（七・一〇）　替　テイ（九・二）

广と氐との合字。穴とも小屋ともつかぬ山住まひのこと。故に厂垂を書く（庭を見よ）。氐は聲符。ソコといふ意に轉じたのは山住まひは多く崖の下などにするからである。

なほ氐は低の字の本字である。氏と一との合字にて意味はヒクシ。成因については低及氏の條を見よ。

593 〔若〕ジャク にやく　新わか・し(七・一一)　替も・し(八・二五)　假有若いうじやく(一一・二)

草と右との合字にて本義は野菜(草冠)を擇び取る(右の字にてあらはす。)ことといはれてゐる。他の說では桑の字の古形に口の加はつたから來たもので「諾」の本字といはれてゐる。後者に從へば桑は聲符にて口に意があるわけである。若の字がゴトシ(如)、ヨワシ(弱)、ナンヂ(汝)等の意に用ゐられるのは音の假借である。

594 〔涼〕リヤウ　新すず・し(七・一二)

現形では氷(二水)と京との合字であるが、もとは涼と書いた。本義はスズシ。故に三水。京(りやう)は聲符である。

595 〔蛙〕ア ワ ゑ　新かへる(七・一一)

虫と圭との合字。もと⿱圭虫と書いた。本義はサソリ。故に虫。圭は聲符。後に鼃に通じてカ

ヘルの意となつたものである。

596〔窓〕サウ　新 まど（七・一一）　替 サウ（一一・二四）

古形は。マドの象形。窓は家屋にあるものゆゑ小篆では穴が加へられてとなり（穴を見よ）更らに後下部に悤（總を見よ）が加へられて窻なる形聲文字となり、現形の窓に變化したものである。

597〔連〕レン　新 レン（七・一二）　替 つれ（八・三）　つらな・る（九・二〇）

車と之遶との合字。ツラナルこと。車にものを積んで後から〳〵と續いて行く會意。そこで車と之遶（行を見よ）とを組合はせたのである。

598〔露〕ロ　新 ロ（七・一二）　替 つゆ（一一・二四）

雨と路との合字。ツユ。故に雨冠。路は聲符。アラハルルの意に用ゐられるのは裸體の裸の音に通じたものである。

599〔並〕ヘイ びやう　新 なみ（七・一二）　替 なら・ぶ（七・一六）

竝と同字である。古形はにて立を二つ並べたもの。立の字は人が地上に正面向きに立つてゐるかたちである。

600
〔建〕ケン こん　新 たて（七・一二）　替 ケン（一〇・二）　假 建御雷命（たけみかづち）（一二・二）

律の省畫と廷の省畫との合字。朝廷に於て法律をタテルこと。故に律と廷。この場合の廴は廣く法律を天下に布くの會意もある（行を見よ）。轉義して廣くタテル。

601
〔會〕クワイ ゑ　新 クワイ（七・一二）　替 あ・ふ（九・一三）

本義は集合すること。亼と增の省畫との合字。亼は合の本字にてものが集まること（命・令を見よ）。增はマス。よつてアツマルとなる。

602
〔似〕シ じ　新 に・る（七・一二）

この字は以と同義にて、似。以ともに本義はニセルといふ意。ニセルといふことは人爲のことであるから後に人扁を加へて似としたものである。今ではニルの方には專ら似を用ゐ、以はモッテの如く助辭として使用されてゐる。

603
〔那〕ダ な　新 ナ（七・一二）

古形は。西方の夷の國名。故に邑（郷を見よ）。は聲符。この字は毛の字を逆にして二つ組合はせたものといはれてゐる。鬚髯の髯の字の下部にある文字にて毛髮がフサ〳〵と垂れてゐることをあらはしたもの。現形では變化して冄となつてゐる。我が國にて毛むくぢやらの人間を熊襲の子孫とあざけるやうに、また毛唐などの語もあるやうに、或ひは毛色のちがつたことをもつて蠻族の意をあらはしたものかも知れない。

604
〔綿〕ベン めん　新 メン（七・一二）　替 わた（八・五）

古形は。帛と系との合字。もと緜と書いたものが現形の綿となつたもの。本義は絲（きぬいと）が細くつらなつてゐること。故に帛（ねりぎぬ）と系（つらなる）とを組合はせたのである。轉義して糸（ほそいと）を作る材料のこととなり、更に棉の字と同樣に木綿ワタとなつた。

帛　なほ帛は白と巾との合字にてネリギヌ。故に巾を書く。白は聲符である。布帛と熟し廣く織物の生地のこととなる。

605〔布〕ふ ＊　新　フ（七・一二）　書　し・く（一一・三）　ぬの（一一・一八）　假　布袋（ほてい）（九・一八）

もと斧と書く。父と巾との合字。それが現形となつたもの。本義は麻、葛等の織物。故に巾を書く。父は聲符である。

布令・布告と使はれシクの意となるのは尃（敷・博を見よ）の假借である。支那の通貨に布貨といふのがあるが（第二八圖の2）布なる名稱のある所以は、貨幣は普く天下に通用する、卽ちシカレルからである。我が國で「お足」といふのもこれに似た言葉である。なほ貨幣と熟する幣に巾といふ字が含まれてゐるところより察するに、布帛が貨幣として用ゐられた時代もあつただらうと想像することが出來る。このことについては幣の條を見よ。


（第二八圖）

606〔箇〕コ カ　新　カ（七・一二）

竹と固との合字。本字は个にて、もと竹の葉の象形。現在ケと書くのは古形から來たものである。一つ二つと物を數へることであるが、往古は竹ぎれをもつて計算に使用したものかも知れ

ない。後に聲符字として固が竹冠に組合はされたのである。

箇　個ともに同義であるが、竹冠の方は一箇二箇の如く物の箇數、又は箇條　箇所の如く使用せられ、人扁の方は個人とか個性とかの如く人（Personal; Indiuidual）に關係したものに用ゐられてゐる。

なほ「一介の武辨」といふ言葉があるが、正しくは「一ヶの武辨」である。ヶと介との字形が類似してゐたのでかくの如く誤用されるに至つたものである。

607〔候〕コウ く　新　コウ（七・一二）　替　さぶら・ふ（九・二三）

もと侯の字へ更に人扁を加へたものが現形となつた。即ち古形はで上部のは人の象形。下部はマトといふ字。即ちは的の後へ引廻らした幕、内部は矢の象形。矢を射るとき、的をウカガヒミルさまが、あだかも諸侯が天子の御機嫌を伺ふのによく似てゐるので、諸侯の侯の意となり、後さらに人扁をつけて君側に伺候すること、即ちサムラフの意の文字とされた。

608〔快〕クワイ　新　クワイ（七・一二）　替　こころよ・く（一二・二）

心と夬との合字。物事が思ひ通りになつてよろこばしいこと。故に立心扁。夬は聲符（決を見よ）。

609〔旅〕リョ ろ　新 リョ（七・一二）　替 たび（九・六）

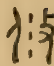
本義は軍旅の旅にて旅團の意味。古形はで旗と人と戰車との合字。後に戰車が省略されてとなり、小篆ではとなつてゐる。即ち㫃と人二つにて、現形の旅の字はこれから來たものである。即ち㫃（遊を見よ）は旗足が風になびいてゐる形にて、從つて旅の字は旗の下に澤山の人が集まつてゐる形である。轉義してタビの意となるのは食糧や武器を積んで一團の者が諸方を歩くことから來たものである。

610〔順〕シュン じゆん　新 ジュン（七・一二）

川と頁との合字。本義は顏の筋目。故に頁を書く（顏を見よ）。川は聲符である。從順の意に轉じたのは顏の筋目は、おだやかに、しかも順序よくあらはれてゐるものだからといふ。

611〔修〕シウ しゆ　新 シウ（七・一二）　新 をさ・む（九・六）

攸と彡との合字。本義はカザル。ヲサメル。故に彡を書く（形を見よ）。攸は聲符。なほ攸の古形は

にて人と水と攴（敎・敲等の旁と同じ。）との合字。水がスラ〲と長く流れることである。

612〔忠〕チュウ ちゆ　新 チュウ（七・一二）　假 重忠（しげただ）（七・八）

中と心との合字。眞心をつくすこと。故に心と中とを書く。なほ中は聲符にもなつてゐる。

613〔塔〕タフ とふ　新 タフ（七・一二）

土と荅との合字。土石を重ねて高く築いた墳。故に土扁。荅は聲符である（答を見よ）。

614〔陣〕チン ぢん　新 ヂン（七・一四）

古形はである。陳と攴との合字。本義はウチツラネル（布列）こと。故に右手の象形から出來た又と棒との合字たる攴を書く（敎・敲を見よ）。陳は聲符にて意味の上には何等の關係もない。即ち陳は地名にて、阜と木と申との合字。地名なるゆゑ阜を書き（郷を見よ）、更に木を加へたもの。申が聲符となつてゐる。後に陳が陳列の意に用ゐられるやうになり、轉義して軍隊の陳列ともなつたのである。小篆ではとなり現形の陣の源をなしてゐるが、これは往古の戰爭には車戰が多かつたのでその聯想觀念よりかく變形して來たものであらう。

615 〔受〕 シウ じゆ　新 う・く（七・一四）　替 ジユ（九・一〇）

古形は。現形の受は中間の舟の字が略されて冖となり、爪と冖と又との合字である。又は右手の象形。上からモノを手（爪）にて渡すのを、下から他の手（又）が受けとつてゐる形によつてこの字を作つたもの。內部の舟は聲符である。

616 〔肩〕 ケン　新 かた（七・一四）

小篆にて。上部はカタの象形。現形では戶となつてゐるが戶ではない。下部は肉月。卽ち肉體に關係した文字だからこの字を組合はせたのである。

617 〔回〕 クワイ ゑ　新 クワイ（七・一四）　替 めぐり（一二・二〇）

古形は。小篆では。渦巻き様の形をもつてメグルといふ意をあらはしたもの。轉じてマハル・カヘルともなり、また一回二回の如くにも使はれる。廻を見よ。

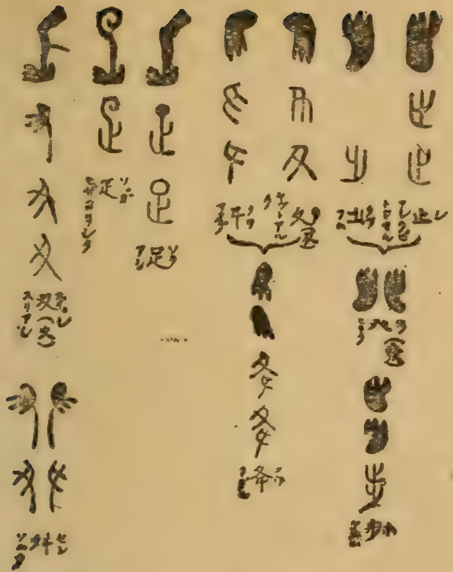
618 〔組〕 ソ ショ そ　新 くみ（七・一四）　替 ソ（一一・六）

糸と且との合字。クミヒモ。故に糸扁。且は聲符である。

619〔具〕ぐク　新 グ（七・一四）　替 そな・ふ（一二・一〇）

小篆にて。上部は貝の省略。下部は兩手の象形。資本を供給することをあらはしたものといはれるが、上部は「其」の字の如く器具の象形ではなからうか。即ち常に備へおくべき器具。

620〔止〕シ　新 とめ（七・一四）　替 や・む（七・二一）とま・る（八・一三）　とどま・る（九・九）　假 波止場（七・一二）



（第二九圖）

右足の足趾の象形から來たもので本義はトドマル。しかしこの字は步・歲・涉や之遶（行を見よ）等に組合はされて行步の意をもあらはしてゐる。これもと〳〵足は步行を司るものであるから當然なことといふべきである。また止の字は正・是等に組合はされ正義の觀念をあらはしてゐるのは正の條下に說明した通りである。なほこの字は第二九圖の如く他の文字を作る上に種々應用されてゐる。

621
〔鬼〕キ　新 キ（七・一四）　舊 おに（一一・二二）

小篆にて。本義は死人の靈魂。と（人）とムとの合字。上部は思の字の上部と同じく頭蓋骨の象形。は人の象形。卽ち人間が死んでシャレカウベとなつてゐる會意。ムは說文によれば私の本字。死人の靈魂は陰氣であり、人を損ふゆえにワタクシゴトの意の文字（私を見よ）を組合はせたとせられてゐる。しかしこれは朱駿聲のいふが如く單にムなる聲符として加へられたものであらう。

鬼の字は魂。魄の如く靈魂に關する文字や、魃（ばつ）（ひでりのかみ）、魑（ち）（すだま。鬼の屬。）、魔（ま）（まもの。）の如く妖怪變化、その他神祕的のことがらをあらはす文字に組合はされてゐる。

622
〔約〕ヤク　新 ヤク（七・一四）

糸と勺との合字。タバネツカネルこと。故に糸扁。勺は聲符である。轉じてムスブ・ツヅム・ハブク・チカフ等となる。

なほ勺の古形はにてヒシャクの形を象つたもの。內部の點はヒシャクの中に物が入つてゐることをあらはしたものである（桶の條下斗を見よ）。

623 〔束〕ショク そく　新 ソク(七・一四)　替 たば(九・一四)

小篆にて。木と○との合字。木の幹を縛つた形によつてタバヌといふ意の文字としたものである。

624 〔直〕チョク ぢき　新 ヂキ(七・一五)　新 なほ・し(七・二三)　ね　(一〇・四)　すぐ(一一・一四)
チョク　(九・一五)　ただち・に(一一・七)

本義はものを正しく見ること。十と目とㄴとの合字。ㄴは亡の條下にて説明した通りカクレルこと。そこで十目の見るところ、いかに隱せどもあらはるといふ會意。轉じてタダシ・スナホ・スグとなる。

625 〔休〕キウ く　新 やす・み(七・一五)　替 キウ(九・一五)

人と木との合字。本義はヤスム。人が木影に立つてヤスムの會意である。

626 〔鍬〕シウ セウ　新 くは(七・一五)

金と秋との合字。スキ・クハ。故に金扁。秋は聲符である。特に秋が聲符として選ばれてゐる

のは、禾穀の成熟するのが秋だからであらう。

鋤

なほ鋤の字は金と助との合字。苗の生長を助けるために雜草を取除く農具。故に助を書く。助はまた聲符をも兼ねてゐる。

627 〔輪〕リン　新　わ（七・一五）　替　リン（一〇・六）

車と侖との合字。本義は車のワ。故に車扁。侖は聲符（論を見よ）である。

628 〔暑〕ショ　新　あつさ（七・一五）

日と者との合字。陽氣がアツイこと。故に日を書く。者は聲符である。

629 〔働〕國字　はたらく　ドウ　新　はたら・く（七・一五）

人と動との合字。人がハタラクには身體を動かすので人扁に動の字を組合はせたのである。國字には所謂字音なるもののないのが原則であるが、この字は動の字音になぞらへて勞働（らうどう）の如く讀まれてゐる。

動と働との使用上の區別は、働は勞働者・勞働組合の如くハタラク意味の場合に用ゐることは

當然だが、その他自働電話・自働車。自働自轉車の如く人力によらず、機械の力にて自然的に、タラキをするものにも使はれる。英語の接頭語（Auto）に相當する場合は全部働である。但し自動的・活動寫眞等には動を用ゐる。

630 〔奉〕ホウ ぶ　　新 ホウ（七・一五）　替 たてまつ・る（一〇・一）　假 奉納（ほうなう）（六・一五）

小篆にて奉。丰と廾（兩手の象形。）と手（手）との合字。兩手にてものを捧げること。丰は聲符であるが捧げるもの、にも利かせてゐる。この字は承の字によく似た文字である。奉がタテマツルの意に專用されるやうになり、ササゲル意味の場合には、更に手扁が加へられて捧の字が出來るやうになつた。

捧

なほ丰は草がボウ〳〵と盛に生えしこつてゐるかたちといはれてゐる（害を見よ）。

631 〔公〕コウ く ショウ し ゆ　　新 コウ（七・一五）

八とムとの合字。八はノと乀との合字にて、左方は右から左へ、右方は左から右へ、ともに相戻つて合致しないから背くの意がある。ムは私の本字にて鼻を横から見た象形。即ちワタクシゴト。そこでワタクシゴトにソムクとなりオホヤケ。轉じて官府・天子・更に父・長者等の敬稱。

また五等爵たる公侯伯子男の第一位である。
公が聲符として加へられたものに松・訟・頌等がある。いづれもショウ・ジュ等の音になつてゐるのは音の變遷を物語るものである。

632
〔航〕カウ がう　新　カウ（七・一六）

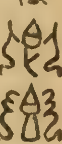
舟と亢との合字。本義は舟を並べること。故に舟扁。亢は聲符。轉じて舟にて水をわたることである。更に航空の如く空を大海になぞらへても使用する。

なほ亢は人のクビスヂのこと。即ち小篆にてと書く。上部は人を正面から見た大の字の省畫。下部は頸をあらはしたものであるといはれてゐる。

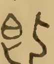
633
〔終〕シユウ しゆ　新　を・へ（七・一六）　替　シユウ（八・一八）　つ ひ（九・六）　をはり（一〇・二）

古形は。糸卷の象形。現形では糸と冬との合字。糸を卷き終へてシメククル意。そこで糸扁に四季の終たる冬を組合はせたものである。冬はまた聲符をもかねてゐる。

634
〔鄉〕キヤウ がう　新　キヤウ（七・一六）　替　ガウ（一〇・一二）

この字の古形はにて内部は食の條下に説明したやうに炊いた米のこと。左右は一見してその字形から察せられるやうに人が跪いて向き合つてゐるかたち。これによつて見れば主客が食卓を中に挾んで會食するの意とも見られ、或ひはまた家族が團欒して食事を樂しんでゐるかたちとも解せられる。

この字に他の文字が加はれば饗應の饗となり、また嚮導の嚮ともなる。饗。嚮は鄕より派成された文字にて、鄕がその本字であるから、鄕の字そのものが食事と關係を有する文字なることは明らかである。

しかも鄕の字の古形から左扁を取去つた形のは現形の卽の字で食事にツクの意、その音は食と同樣である。また人が食卓に背をむければとなり現形の旣の字。スデニ食事を終つたことをあらはしてゐる文字。そこでスデニの意に用ゐられるのである。いづれにしても上述のやうに鄕の字が食事と深い關係のある文字なることは明らかである。

この字が鄕土の鄕として用ゐられるのは如何なる理由からであらうか。それについて先づ思ひ浮ぶのは支那人は昔から非常に祭祀を重んじた民族であるから、恐らくこの文字は土地の神、五穀の神を祭るその重大なる祭祀に淵源するものではなからうかといふことである。

たとへば左傳の僖公十九年の條に、土地の神を祭る社祭において宋の襄公が人を社にしたとい

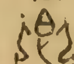
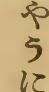
ふことがあるが、これは社祭を重んずるの餘り生きた人間をそのまゝ犧牲として「人身御供」としたものである。こんなこともあるほどだから、その昔から地方地方で春とか秋とか、又は春秋の二回とか、定期的に土地や五穀の神を祭るすばらしい祭典のあつたことが想像される。その際郷土の人々は土地で出來た穀物や山野で取つた動物などを神前へ供へたにちがひない。恐らく郷の字はこの風習をあらはした文字であらうと思はれる。

それが郷土の郷として用ゐられるのは國家のことを社稷（社は土地の神稷は五穀の神）といふ言葉があるやうに土地と穀物（即ち食物）とは人間の生活上の根本となるものであり、しかも穀物の醸床は土地であるから食物と土地について同時的に考へられたものであらう。これ神を饗應するかたちの文字をもつて郷土の郷の字とした所以である。穀物が土地とは分離して考へられない立場にあるのは、上のやうに土地は一切を生ずる場所となるからであつて、我が國においても御即位（この即の字にも注意して欲しい）の際における大嘗會があり、しかも由基田。主基田が選ばれるのを見てもわかる。大名の知行。石高にしても土地と穀物とが合體して居り、また支那においても「食邑五百戸の臣」などといふ言葉があり、食といへば土がつきもの、土といへば食が想像せられるのである。

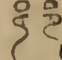
卿

後に郷の字からその兩側がやや變形されて卿の字が作られた。公卿。卿太夫などと熟する字で地方を治める爲政者のことである。後に說くやうに卿の本字も郷なのであるが、さて郷が公卿の

意に用ゐられるやうになつたのは、一國における重大なる祭典は天子自らが直接當るやうに、鄕においては卿がこの主宰者となつたからであらう。しかも卿は地方の食邑の實權者であるから、まさに神を祭つて土地や五穀の豐穰を求めるのと同樣に、卿に對しても一般民衆はその善政をこひねがつたにちがひない。卽ち大きく見れば社稷の神は人民の生活權をつかさどつてゐるのであるが、これを小さく解すれば卿は士民の生活權を掌握してゐるのである。これらの考へも加はつて鄕の字がやがてその鄕士を治める支配者の意に用ゐられるやうになつたのである。豈んや祭祀そのものも、その初めは極めて現實的なもので、食住の如き直接的な幸福を神に願ふ心が重大なる原因となつてゐるのであるから尙更のことである。

さて古形で見れば鄕はに、卿はに近いが、天子が諸侯を任命する時に與へるいはば今日の辭令書に相當するものに節といふものがあり、その形が節の條下で說明したやうにとなつてゐるところより、鄕の古形の第一形の外側と相似てゐるから、そこを取り換へて卿の字が作られたのである。

次に鄕の小篆はで說文によれば畿內の邑里とされてゐる。畿內とは天子の居所たる京城よりやや離れた土地であるが、畿內を六つにわけて各鄕にそれ一人の卿をおいたので、鄕の字は卿の兩側を省き、代りに邑（まち）の字を向かひ合はせたを組合はせたものといふ。卽ち卿の省聲

をもつて各郷に長官たる卿のあることを現はし、をもつて六郷を意味したもののやうに解釋され、やがてそれがサトなる意となるのであるが、この考へ方は後になつてこそ適合すれども、もと〳〵郷と卿とが同一文字であつたことは先きに述べたところによつてわかるであらう。

邑

なほここで邑について述べておかう。この字は口と卩との合字とせられクニ・ムラ・サト等の意味を持つてゐる。上部の口は四方の境域をあらはしたものにて土地の意。下部の卩は節の本字にて大名が國土に封ぜられる時に與へられる符節である。周禮の大司徒に諸公の封ぜられる領地は方五百里、諸侯は四百里、諸伯は三百里、諸子は二百里、諸男は百里といふやうにキチンとした規則（節）があるからその會意も含まれてゐる。しかし邑の字の下部も恐らく節の本字たる卩から來たものではなく、その初めは人民の意にて人の字が加へられたのではなからうかと思はれる。即ち國土と人とにてムラとかクニとかいふ意味をあらはしたものであらう。

邑の字は他の文字の右に組合はされて阝なる形をとりオホザトの稱がある。次に述べる阜の變形阝のコザトに對して區別するための名稱であるが、邑の字の組合はされたものは邦・都・郡・部の如くすべて國土の意味が含められてゐる。

阜

次に阝なる形で左扁に加へられるものは阜の字の變形したものであるが、この字の古形は等であり、小篆ではとなつてゐる。小篆は內部が塗りつぶされてゐないが、これは刀の

字の條下に述べたやうに筆書上の手間を省く便宜から出たまでに過ぎない。本義は小高いところにある見晴らしのよい平地のことである。三段になつてゐるのはその丘にのぼるダンダラ道をあらはしたものでもあらうか。小篆では縦の捧がとなつてゐるが、これは崖の象形に利かせたものとも見るべく、家などを建てるにふさはしい高燥なる土地の意をあらはしたものかも知れない。階。陛。陵。阪。陸等にこの字が含ませられてゐるのはそのためであらう。また降の字の古形の左邊は單に段々を示したものである。

現形の阜の字の下部の十は高い丘の意味をあらはしたものである。なほ阜の字の古文の段々のところが二つに省略されてとなれば堆の字の本字となる。說文に「小阜なり」とあるやうに土が小高くもり上つてゐることである。

635〔講〕カウ　新　カウ（七・一六）

言と冓との合字。本義は和解すること。故に言扁。冓は聲符にもなつてゐるが、しかしこの字は構造の構の本字であるから、和解にあたつて種々な條理を盡した辯論をカマヘルの會意が含まれてゐる。轉じて說く、究める等となる。

我が國ではコウといひ、氣持ちを同じうするものが一つの團體を組んでゐることに用ゐる。大

師講　頼母子講等がそれである。

636 〔堂〕タウ だう　新　ダウ（七・一六）

尙と土との合字。宮殿のこと。もと位階によつて建物の土臺の高さをきめたので土を書いたもの。即ち天子は九尺、諸侯は七尺、大夫は五尺、士は三尺にしたものである。尙は聲符。

堂は主として人と會見したり集合の場所としたので、威風堂々の如く威儀の盛んなる形容の言葉に用ゐられるやうになつた。また神佛を祀る場所にも使はれ、家號にも用ゐられる。

637 〔存〕ソン ぞん　新　ゾン（七・一六）　替　ソン（一一・一）

小篆にて。在の省畫と子との合字。現形は變化してゐるが在の字とともに上部は才である。存の本義は心にかけてアハレミトフこと。故に幼少なる子を書き、更に健在の在を書く。

轉じてイキテヲルこととなる。

638 〔員〕ヰン エン　新　キン（七・一六）

古形はにて〇と貝との合字。〇は圓形の象形にて圓の字の本字。金員と熟するやうに貝貨

を一つ二つと數へて行くこと。故に貝の字を書く、即ち貝は古代の通貨。上部の〇は數へたことのシルシ。後さらに外廓へ〇が加へられて圓の字が出來た。のちに筆書の都合上〇が□となるやうになつたものである。圓はお金を計算する單位に使用せられ、員は廣く人の頭數（人貝）や物の數（貝數）を數へる場合に使用せられる。

639〔鯨〕ゲイ ケイ きやう　新 くぢら（七・一六）　替 ゲイ（一〇・二二）

魚と京との合字。クヂラ。故に魚扁。京は聲符である。鯨は今日の動物學上では魚類ではないが却つて昔の支那では鯨をもつて魚の王としてゐたものである。

640〔甲〕カン カフ　新 カン（七・一六）　替 カフ（八・三）　假 甲斐（かひ）（六・二）

古形は  等にて草木が地上に萌え出づること。即ち第二形は草木の芽が破つた皮殼を頭に頂いて出てゐる形。そこで物の外廓とかカラの意に轉義する。カブトとなるもそのためである。
また音が假借されて十干の第一位となる。

641〔恐〕キョウ　新 おそろ・し（七・一六）　替 おそ・る（一一・一四）

巩と心との合字。オソレルこと。故に心。巩は聲符。なほ巩は工と丮(げき)との合字にて、ものを抱き持つこと。工は聲符。丮の古文は[illegible]にて、人が兩手を出してゐる形である（鬪を見よ）。

642 〔瀨〕ライ　新　せ（七・一六）

水と賴との合字。アサセのこと。故に三水。賴は聲符である。

643 〔笛〕テキ ぢやく　新　テキ（七・一六）　替　ふえ（一〇・六）

竹と由との合字。本義はフエ。故に竹冠（竹を見よ）。由は聲符。笛はもと七孔のフエ。笙(しやう)・筒(こ)・管(くわん)・簫(せう)等はすべて竹で作つた樂器であるから、笛とともに竹冠にしたものである。

644 〔角〕カク　新　カク（七・一六）　替　かど（八・一五）　假　鹿角(かづの)（一二・一一）

小篆にて[illegible]。獸類のツノの象形。ツノは突出してゐるので轉じてカド・スミ・サハル等の意となる。また角取る義より敵を制することとなり、勝負を爭ふことにもなる。

645 〔燈〕トウ　新　トウ（七・一六）　替　ともしび（一一・一六）　假　行燈(あんどん)（八・一六）

火と登との合字。本義はトモシビ。故に火扁。登は聲符である。

646 〔臺〕タイ だい　新 ダイ（七・一六）　假 臺灣（タイワン）（六・二）

樓臺と熟するやうに高く築いた櫓（ものみ）のこと。高の字の系統に屬する文字にて、古形に[illegible][illegible]等がある。現形の士字形になつてゐるところは屋根の上の飾りをあらはしたものであり、また至は飾り窓をあらはしたものであらう。屋・室等にも至が含まれてゐるやうに建物のあるところへは人が至るといふ考へからつひに窓飾りが至の字となつたものであらうと思はれる。

臺の略字として台を書くが台はもと別箇な文字として作れたものである。怠の條を見よ。

647 〔他〕タ　新 タ（七・一六）

人と也との合字。此と區別して彼のこと。故に人扁。也は聲符。他の字の旁は蛇の字の旁と同じく、もと它と書いたものである。蛇・地の條を見よ。

648 〔漁〕ギョ ご　新 ギョ（七・一六）

水と魚との合字。水中の魚を取ること。故に水と魚とを組合はせたものである。小篆では旁に

魚を二つ重ねて書いてゐる。

649〔寫〕シャ　新　シャ（七・一六）　替　うつし（一一・二三）

宀冠と舄との合字。家の中で物品を移すこと。故に家の象形から出來た宀冠を書く。舄は聲符。轉じて寫眞、寫字の如くすべて物の形狀等をウツスこと。なほ舄は鵲（かささぎ）の本字にてその古形はカササギの象形から來たものでである。

650〔帖〕デフ テフ　新　デフ（七・一六）

巾と占との合字。きれに字を書きしるしたもの。故に布巾の巾。占は聲符。轉じてトバリ・付箋等の意となる。

我が國ではデフといへば折手本の如きもの。また紙を數へる單位の名稱ともなる。

651〔藤〕トウ どう　新　トウ（七・一八）

現形は草と滕との合字であるがもと滕の字をフジの意に用ゐた。この字の本義は糸でものをユハヘルこと。そこで糸を書き朕は聲符。ツルフジやツタカヅラの類はものをゆはへるものに使用

されるのでこの字がフジといふ意味の文字に用ゐられるやうになつた。そこで後に草冠が加へられたのであるが、糸の部分が水となつたのは藤の花が水の流れのやうに垂れ下つてゐるからではなからうかとも思はれる。

朕は聲符で戸籍謄本・物價騰貴等の謄・騰にも加へられてゐる。この字はチンといふ音もあり天子の自稱とされてゐるが、これは秦の始皇帝が定めたもので、その以前の夏殷周の古き昔から一般にワレなる意に用ゐられてゐた。單に音の假借でこの字の本義とは關係がない朕の字の本義は舟のハギアハセメのこと。その小篆はと書いた。卽ち舟の象形と灷との合字。なほ灷は朕において聲符となつて居る。古形は等でそれが變化して小篆の如くなつたのである。兩手でものをもつことがその本義ではなからうか。

652〔信〕シン　新 のぶ（七・一八）　替 シン（七・二三）　假 信濃（七・一四）

人と言との合字。マコト。人の言葉をそのままに受け入れるの會意。たとへば道を尋ねた場合の如きを例とすれば、その敎へられたままに歩いて行くが如きである。人から聞いた話にしても時には虚言もあるかも知れないが、先づ眞實と思ふのが順序であるから、人と言とをもつてマコトとしたものである。人の言葉にはうそやいつはりはないといふ會意。

653 〔驚〕ケイ きやう　新　おどろき（七・一八）

敬と馬との合字。オドロクこと。馬はその性質がおくびやうにて、よくものにおどろくものだから馬の字を書いたもの。敬は聲符である。

654 〔泳〕エイ いやう　新　およぎ（七・一九）　替　エイ（一一・二〇）

水と永との合字。水中をオヨグこと。故に三水。永は聲符。游泳と熟し游の字も泳と同意に用ゐられる。詳しくは遊の條を見よ。

655 〔藻〕サウ　新　サウ（七・一九）

草と澡との合字。水中に浮んでゐるモ。故に草冠。澡は聲符である。なほ澡は手を洗ふこと。故に三水を書く。喿は聲符（操を見よ）。

藻の字におけるサウなる聲符は喿でもよいわけであるが特に三水のある澡を加へたのは、モは水に關係があるからであらう。文藻と熟し文章のアヤの意に轉義するのは、水中の藻は織物を織つたやうにアヤをなしてゐるからである。

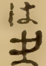
656
〔泥〕デイ ない　新　どろ（七・一九）

濔水と稱せられる川の別名として作られた文字。故に三水。尼は聲符（江・河を見よ。）。ドロの意に用ゐられるのは濘の字の音に假借したものである。

濘 寧

なほ濘は水と寧との合字。寧は聲符。更に寧の字は安寧と熟する文字。ウ冠と心と皿と丁との合字。家（宀）の中に飯臺（丁はその象形。）があり、その上に飲食物（皿）が載せられて居るから食住が滿ち足りてゐるわけ。そこで心がヤスラカといふ會意になる。なほ下部の丁は後に加へられたものので聲符ともいはれてゐる。丁は草木が盛んに繁茂する意の文字だから、物の豐富な會意も含まれてゐるといはれてゐるが、むしろ單純にチャブ臺の象形と見た方が作字の意圖に近いものではなからうかと思はれる。

657
〔決〕ケツ けち　新　ケツ（七・一九）

本義は地を切り開いて水を導き流すこと。故に三水。夬は聲符であるがその古形はにて、手でものを引き離すこと。そこで下部に右手の象形たる又を加へ、その上部へものを引き割いた形を組合はせたのである。だから聲符といつても多少の會意がある。なほこの字を二水に書くの

は成因の旨に合はない。

658〔珠〕ジユ シユ　新　ジユ(七・一九)

玉と朱との合字。眞珠のこと。故に玉扁。玉と王とはもと同字。朱は聲符。轉じて廣くタマ。

659〔集〕シフ じふ　新　あつまり(七・一九)　替　あつ・む(八・二五)　シフ(一一・二)

小篆では。もと木の上へフルトリ(鳥を見よ)三つを書いて澤山の鳥が木の上に集つてゐる會意としたもの。後隹が一つとなり現形となつたもの。靁が雷となるが如き類である。

660〔蟲〕チユウ ちゆ　新　むし(七・一九)　替　チユウ(一二・三)

マムシの象形から出來た虫の字を三つ重ねたもの。形の小さな數の多いウジ〳〵したムシのことに使用する。ヘビの類をもつてムシの字を作つたことについては蛇の字の條に說明した通りである。

661〔骨〕コツ こち　新　ほね(七・一九)

冎と肉(月肉)との合字。上部は肉を取除いた人骨一片の象形にて骨をわかつといふ意味の文字。これに肉を組合はせて人體の支柱となるべきホネの意の文字としたのである。

662 〔甚〕シン じん　新　はなはだ(七・一九)

甘と匹との合字。甘は味のウマイこと。匹は匹耦と熟し夫婦のこと。即ち二反のことを一匹といふやうにすべてツレのあること。ここでは夫婦のことを意味したもの。夫婦水入らずのさし向かひで食前に坐るのが、樂しみの最高のものといふ會意にてハナハダシキ意の文字となる。

甘

なほ甘は聲符をもかねてゐる。甘の字は、小篆にて 。口の中へ食物を入れその味のオイシイことの指事として口中へ一點を加へたものである。

663 〔肥〕ヒ び　新　ヒ(七・一九)　替　こえ(八・一八)

肉と卩との合字。からだの肉づきが豐滿で、しかも適度に肥えてゐること。故に卩(節を見よ)と肉とを組合はせたのである。現形では卩が巴となつてゐるが、色の字の下部が巴となつてゐるのと同様に卩が變形したものである。

664 〔料〕レウ　新　レウ（七・一九）

米と斗との合字。斗(ます)にて米をはかるの會意にて本義はハカル。轉じてオシハカル・カゾフ。

665 〔體〕テイ たい　新　タイ（七・一九）　替　からだ（八・二八）　テイ（一一・五）

骨と豊との合字。カラダ。故に骨を書く。豊は聲符（禮・豊を見よ。）。體の字はまた軆とも書き、骵・躰とも書く。更に略して体とも書くが、体は肉體は靈魂のよるモトとなるものだから本の字を加へたものであらう。

666 〔綠〕リヨク ろく　新　みどり（七・一九）　替　リヨク（一一・一四）

青黄色に染めた帛(きれぢ)のこと。故に糸扁。彔は聲符。轉じてミドリ。色彩に關した文字には糸の加はつた文字が多い。糸の條を見よ。

なほこの字の旁は緣の字の旁とは成因がちがふ。緣の條を見よ。

667 〔咲〕セウ　新　さき（七・一九）

笑の字の本字の芖が後世关と誤記せられるやうになり、更に口が加へられたもの。本義はワラフことであるが花の咲くことは人の笑ふのと同じやうなものといふ考へから出來たものである。

668〔吸〕キフ ぎふ　新 す・ふ（七・一九）　舊 キフ（一一・一四）

口と及との合字。息をスヒコムこと。故に口扁。及は聲符でもあるが、次ぎ〳〵に息を吸ふといふ會意も含まれてゐる。

669〔仰〕カウ ギヤウ がう　新 あふ・ぐ（七・二二）　舊 おほせ（一一・一〇）　カウ（一二・一三）

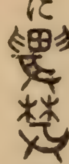
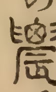
卬（ギヤウ がう）の字へ後に人扁を加へたもの。首をあげてアフギノゾムこと。卽ち卬は小篆にて  と書く。匕と卩との合字。節（卩）をもつてゐる長上者になびいてゐる（匕にてあらはす比を見よ。）會意。

仰は轉義して上の者から下の者へ命ずるオホセとなる。

670〔厄〕ヤク グワ　新 ヤク（七・二二）

厂と卩との合字。本義は木のフシコブ。故に節の本字たる卩を書く。節は竹のふし。厂は聲符（岸を見よ）。セマキこと、困厄。厄介等となるのは音の假借である。

〔農〕ノウ ドウ ぬ　新　ノウ（七・二一）

古形に等がある。現形の農の前身は小篆のである。古形小篆ともに下部は辰であるが、この字は星の條下で述べたやうにサソリの象形から來たものではなからうか。卽ち天體のサソリ座をあらはしてゐるもので、もと大火といはれ標準星として長く殷の時代を通じて用ゐられてゐた。

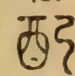
何が故にかゝる標準の星が必要になるかといへば、これ專ら農事の關係によつて起るものである。卽ち星の運行を見て季節の早晩を判定しその時々の耕作や播種を誤らないやうにしたものである。支那には「食は天なり」といふ言葉があり、いかに農業が重要視せられたかがわかるが、古の帝王は常に農事に頭を使つたものである。卽ち堯は帝位に卽くや先づ第一に暦を正し、舜もまた、天文觀察上の機械を整理したと傳へられてゐる。これらはその一端を物語るものであるが、民をして農事に時を失はしめないやうにとの考へから、いかに天文が仔細に觀察せられたものかがわかるであらう。卽ち辰の字は日月星辰と熟し、吉辰とも熟するやうに星よりひいて暦にうつり、更に農にも加へられるので、農業の農に辰の字が加へられてゐるのはそのためである。禹王が作つたとして傳へられる洪範九疇にも五紀として歲・日・月・星辰・暦數を擧げてゐるのもい

はれなきことではない。

なほ古形の第一形の上部と小篆の上部とはよほどよく似てゐる。ともに兩手が含められてゐるところより見るに、田野の耕作に從事してゐる會意かも知れない。古形の第二は上部が林となつてゐる。山野を開拓するの意をあらはしたものであらう。

なほ或る説では辰を二本足の動物卽ち雞に見たものもあるが如何であらうか。

672 〔配〕ハイ　新　ハイ（七・二一）　替　くばり（八・一四）

古形は。小篆ではとなつてゐる。現形は酉と己との合字。本義は酒の色。故に酉を書く。酉の古形はにて酒を盛る德利の象形。古形の右旁は節の本字であるが、色といふ字が人と卩との合字なるが如くやはり適當に配合した色とふい會意もあらう。この字が配遇と熟しツレアヒの意となるのは、小篆の旁が己となつてゐるので、妃の字に假借されたものである。卽ちキとハイとの音はもと通用したものである。のち轉義してクバル。

673 〔倒〕タウ　新　たふれ（七・二一）

人と到との合字。人がたふれること。たふれるのは地上に到るのであるから人と到とを組合は

せたもの。到はまた聲符ともなつてゐる。

なほ顚倒の場合には人扁のあるもの、到着の場合には人扁のないものを用ゐる習慣がある。

674〔困〕コン　新　こま・る（七・二一）　替　コン（一〇・九）

囗の中に木を入れたもの。生長しようとする樹木が狹く仕切られた場所にあるので思ふやうに伸びることが出來ないとの意をあらはしたもの。本義はクルシム。說文には古きかりずまひの家とされてゐる。荒れるがままにまかせてあるので屋敷の中へ草木が亂生する意をあらはしたものと見たのであらう。

675〔棒〕ボウ　ハウ　ばう　新　ボウ（七・二一）

木と奉との合字。木のボウ。故に木扁。奉は聲符である。

676〔重〕ヂユウ　チヨウ　ぢゆ　トウ　ぢゆ　新　おも（七・二二）　替　チヨウ（八・一〇）　へ　（一〇・一五）　假　重忠（しげただ）（七・八）
かさね（九・三）　ヂユウ（一一・一）

壬と東との合字。小篆にて。說文では壬の字の中間に聲符として東を組合はせたものとされてゐる。壬の古形はにて人と土との合字。卽ち人が地上に拔んでて立つてゐることである

から聲符の音と相まつてオモシの意をあらしはたものと見たのであらう。
　しかしこの字は人が重いものを持つて地上に立つてゐるかたちで、說文に東の字といはれてゐる部分はものを容れる器ではなからうかと思はれる。

677 〔掛〕クワイ け　新　かけ（七・二二）　替　かか・る（九・五）

　もと挂と書く。カケルこと。故に手扁。圭・卦はともに聲符（街を見よ）。また卦は八卦の卦。故に卜を

卦

書く（占を見よ）。卜はウラナヒに當つて使用した龜甲の割れ目の象形である。

678 〔勤〕キン ごん　新　つとめ（七・二二）　替　キン（一〇・二五）

　菫と力との合字。ツトメハゲムこと。故に力を書く。菫は聲符（僅を見よ）である。轉じてその勞をイタハルこと。

679 〔共〕キョウ ぐ　新　キョウ（七・二二）　替　とも・に（七・二二）

　小篆にて。上部は廿にて多數の意をあらはしたもの。下部は兩手の象形。多數の人々が手に手をあはせてともに一つの仕事へ力を出しあふこと。

680 〔加〕カ け　新　カ（七・二三）　替　くははる（八・二一）

力と口との合字。本義は言葉數が増しクハハルこと。故に口。力は勸め加へる意をあらはしたもの。轉じて廣くクハヘル。

681 〔功〕コウ　新　コウ（七・二三）

力を盡して國内を平定すること。故に力。工は聲符でもあるが治めるといふ會意も含まれてゐる。轉じてイサヲ・テガラとなる。

682 〔賴〕ライ　新　たの・む（七・二三）　替　ライ（一〇・二）　假　賴朝（よりとも）（六・一五）

剌と貝との合字。商業上の利益が多いこと。故に貝を書く。貝は古代の通貨。剌は聲符。タノムと轉義するのは金力に賴るからである。

683 〔禁〕キン ごん　新　キン（七・二三）

林と示との合字。神のイマシメ。故に示。林は聲符。轉義して廣くイマシメ・オキテ。オキテ

は積極的にかく〳〵の行爲を爲すべしといふのでなく、爲すべからずと規定するものだからサシトドメル意ともなる。また禁裡　禁中の如く熟して天子の居所となるのは待臣にあらざればみだりに出入することが出來ないからである。

684〔震〕シン　新　シン(七・二三)

雨と辰との合字。本義は雷鳴によつて物がユレウゴクこと。雷鳴には風雨を伴ふので雨冠を加へたもの。地震の如く地の動くことに使はれるが、星の條下で説明したやうに既に辰の字にウゴクといふ意がある。

685〔叫〕ケウ　新　さけび(七・二三)

口と斗との合字。サケブこと。故に口扁。斗は聲符である。

なほ斗の古形は丩で、藤や薯などのツルがこんがらかつてはびこつてゐる象形にてマトフといふ意味の文字である。

686〔幕〕バク まく　新　マク(七・二三)　舊　バク(一一・二八)

帷幄

莫と巾との合字。本義は上部に覆ふトバリ。故に巾（布を見よ）を書く。莫は聲符（莫を見よ）。籌（はかりごと）を帷幄（あく）の中に運らすといふ言葉があるが、帷・幄ともにトバリといふ字である。故に巾扁。隹・屋はともに聲符。帷は四方に引くトバリ、幄は四方上下に引く大トバリである。戰國時代には轉々として野戰をしたので大將軍の居る本營も隨時變更されたものである。そこで幕營といへば假に設けた陣屋となり、幕府・幕下・幕僚などいふ言葉も出來たのである。

687 〔登〕トトウ　新　のぼり（七・二三）　替　ト（九・二〇）　トウ（一〇・一六）

發の上部と豆との合字。本義は車に乘ること。故に兩足を踏み出した象形を書いたもの。豆は聲符でもあるが、この字は祭器の象形から來たものでその形が脚立を聯想されるので、車に乘る時の踏み臺を想起して特にこの字を組合はせたものであらう。

この字によく似たものに登の字がある。上部は祭の字の上部と同形にて、祭器の一種たるタカツキの象形である。

688 〔涙〕ルキ　新　なみだ（七・二三）

水と戾との合字。ナミダ。故に三水。戾は聲符である。

戾　なほ戾は戶と犬との合字。犬が戶の下から出る會意にて身のマガルことをあらはしたもの。轉じてモトルとなる。

689〔**某**〕ボウ むバイ まい　新　それがし（七・二三）

甘と木との合字。本義はウメの實。故に木を書く。甘は味のよいことをあらはしたもの。よつて支那では古くから梅の實を賞美したことがわかる。この字は今では本義が忘れられてソレガシとか又は不明な事柄をあらはす場合に用ゐられてゐる。亡の音に通じたものだらうといはれてゐる。時にはまた某事件の如く特に內容をかくす場合にも用ゐられる。英語の Certain に相當する。

楳　某の字の本義が忘れられ後に木扁をつけて楳（うめ）といふ字も出來た。

690〔**固**〕コ　新　かた・し（七・二三）　替　コ（一〇・二七）

囗と古との合字。本義は國の四方に築いた要塞のこと。囗は四方をあらはし古は聲符。轉じてカタシ。また頑固と熟して融通のきかぬこと。

691〔**故**〕コ く　新　ゆえ（七・二三）　替　コ（一〇・二七）

古と攴との合字。本義は鞭韃して物事をなさしめること。故に攴。攴は敎・牧の字などの旁と同じく手（又）に棒をもつてゐるかたち。古は聲符である。轉じてなすべき事柄ともなりコトワケ・ユヱ等となる。故人の如く古の意味に使はれるのは聲符として加へられた古の意義をとるやうになつたのである。

692〔召〕セウ テウ でう　新 めし（七・二三）

刀と口との合字。目上の者が目下の者をヨビヨセルこと。故に口を書く。刀は聲符。後更に手扁の加へられた招の字も出來た。

693〔別〕ベツ ヘツ べち　新 べツ（七・二三）　替 わかれ（九・六）

小篆にて。左扁は骨の字の條にて説明した冎と同字にて骨と肉とを別々に分けること。更に立刀を組合はせてワカツといふ意をあらはしたのである。

694〔勢〕セイ　新 セイ（七・二三）　替 いきほひ（七・二三）　假 伊勢（いせ）（六・二六）

埶と力との合字。種子がイキホヒヨク生長すること。故に力を書く。埶は藝術の藝の本字にて

種を植えること。また埶(セイ)は音をもかねてゐる。

なほ勢・褺・熱等は執(シフ)の字の組合はされたものでないことに注意しなければならない。詳しくは執及び爇を見よ。

695 〔威〕キ　新キ（七・二三）

戌と女との合字。本義は姑。故に女を書く。戌は聲符であるがこの字には盛んなる意がある。姑の威光は嫁から見れば畏敬すべきものがあるとの會意があるかも知れない。轉じて威力・權威等の如く使はれ本義が忘れられるやうになつた。

696 〔案〕アン　新アン（七・二三）

安と木との合字。身體をよせかける机。そこで安息の安と木とを組合はせたもの。安はまた聲符ともなつてゐる。

按　思案・腹案の如くカンガヘル意に用ゐられるのは按の字に假借されたものである。按の本義は手にておさへトドメルこと。よつて手扁。安は聲符。

697 〔姓〕セイ しやう　新 セイ（七・二三）　替 ショウ（一〇・一四）

女と生との合字。甲の祖先から生まれたもの、乙の祖先から生れたもの等につける一族のヨビナ。故に女と生とを組合はせたもの。生はまた聲符ともなつてゐる。

698 〔借〕シャ しや―セキ しやく　新 かり（七・二三）　替 シャク（一一・六）

人と昔との合字。カリルこと。しかし以前はカスことにも用ゐた。貸借關係は人間同志の間に起ることだから人偏としたもの。昔は聲符である。

699 〔感〕カン　新 カン（七・二三）

咸と心との合字。外界の事物が心に觸れて心意がウゴクこと。故に心を書く。咸は聲符。

咸

なほ咸は戌と口との合字。多くの人が悉く口を揃へること。故に口。戌は悉くの意を含んでゐる（威を見よ）。

700 〔習〕シフ じふ　新 ならひ（七・二三）　替 シフ（一一・一四）

羽と白との合字。白は自を略したもので鼻のこと。鶵鳥が親鳥にならつて息の切れるまで（鼻にてあらはす。）飛ばうとする會意にてナラフの意。

701
〔差〕サ しや ―シ　新　さ・す（七・二三）　替　サ　（一〇・一〇）

古形はにて垂の字によく似た文字である。華の字の條にて説明したやうに上部は花が咲き亂れてゐる象形。下部は左の字。咲き亂れてゐる花は不揃ひだからソロハズとかタガフの意の文字としたもの。左は聲符である。

差の字は我が國ではサスと訓じ「水を差す」「差し出す」「鯨差」の如く使用する。

702
〔賞〕シヤウ　新　シヤウ（七・二三）

尙と貝との合字。功勞のある者へ褒美をやること。故に貝。貝は古代の通貨。尙は聲符。轉じてハウビ・ホム。

償

人扁の加はつた償の字は損害賠償の償である。賞は聲符となつてゐるが、損害のツグナヒもすべて金をもつてするといふ會意も含まれてゐる。

703
〔彼〕ヒ　新　ヒ（七・二四）　替　かれ（八・一三）　か（八・一六）

後から追つかけて着物などを着せてやること。故に行人扁（行を見よ）。皮は聲符であるがカハのことであるから多少の會意もあらう。三人稱のカレとなるのは假借されたものである。

704
〔過〕クワ　新　す・ぐ（七・二四）　替　クワ（九・一六）　すご・す（一一・一一）

咼と之遶との合字。ワタリコエルこと。故に之遶（行を見よ）。咼は聲符。轉じてスグ・アヤマチ・トガ等となる。

なほ咼の字は冎（骨を見よ）と口との合字。口がゆがんでゐること。故に口を書く。冎は聲符でもあるが、肉體に關するものだから特にこの字を選んで組合はせたものであらう。

705
〔季〕キ　新　キ（七・二四）

稚の省畫と子との合字。本義はスヱノコ。故に幼稚の稚の省畫と子とを組合はせたもの。稚は幼稚と訓ぜられる字にて、人には季を使ひ禾穀には稚を使つたものであるが、後には幼稚園の如く稚も人に使はれるやうになつた。

季節・時季の如く使用せられるのは時候のヲハリ〳〵の意からである。なほ禾穀をもつて一年の終りの意としたことも忘れてはならない。

706〔定〕チイ ぢやう　新　さだめ（七・二四）　替　テイ（九・一五）　チヤウ（一二・二四）

宀冠と正との合字。正はその字の條下に説明したやうに足趾の象形たる止から出來たもの。家（宀）の中に正しく坐つてゐる會意にてサダマル。

707〔縞〕カウ　新　しま（七・二六）

糸と高との合字。シロギヌのこと。故に糸扁。高は聲符。我が國ではシマと訓じカスリと區別してゐる。

708〔至〕シ　新　シ（七・二六）　替　いたり（八・五）

小篆にて。不の字と反對に鳥が高いところから地上へ飛び降りて來ること。そこで鳥が天から飛んで降りる形と土の字とを組合はせたもの。それよりイタル・トドク。

709〔末〕マツ
ま

新　すゑ（七・二六）　替　マツ（一〇・一二）

木の字の上部へシルシをつけてコズヱの方だといふ指事としてスヱなる意の文字としたものである。

第八章　巻八の新出漢字

710〔櫻〕エイ やう　新　さくら（八・一）

我が國ではサクラと訓じてゐるが本義はユスラウメ。故に木扁。嬰は聲符である。なほ嬰は賏と女との合字。女の頸飾りのこと。故に女を書く。賏は貝を二つ組合はせたものであるが、貝は玉とともに裝飾品として使用せられたので幾つもの貝を貫ねてその意をあらはしたものである。もとは、女といふ字がなくても頸飾りといふ意に用ゐられた。玉扁がつけられた瓔（やう）の字も嬰と同意で瓔珞の如く熟し佛像などの頸や胸にかけた珠玉の飾りのこと。

櫻の字の聲符に特に嬰を選んだわけは、圓らなユスラウメがほんのり色づいて枝頭になつてゐるさまが、珠玉や貝をつらねた首飾りの形狀に似通つてゐるからであらう。

711〔炭〕タン　新　すみ（八・一）　替　タン（一〇・一四）

この字は岸といふ字に含まれてゐる干の部分を火とした形である。屵は聲符となつてゐるものである。キズミのことゆゑ火を組合はせたのである。卽ち炭は木を火で燒いて作るからである。山と灰との合字と誤解しないやうにしなければならぬ。

712 〔燒〕 セウ　新　ヤ・く（八・一）

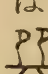
火と堯との合字。ヤクこと。故に火扁。堯は聲符。なほ堯の字はタカシといふ意味の文字。垚(けう)と兀との合字にて、上部は土を三つ重ねて土の高く盛り上つたことをあらはしたもの。下部は上方が平らかでしかも高くそびへてゐるかたち。この二字を組合はせたものである。

713 〔競〕 キヤウ ケイ ぎやう　新　キヤウ（八・三）　替　きそひ（九・二〇）　ケイ（一一・三）　假　競馬(くらべうま)（八・三）

現形は立と兄との合字を二つ並べたもののやうになつてゐるが、古形はで、上部は言を二つ、下部は人を二つである。本義はキソヒアラソウこと。既に誩(けい)の字にその意があるのであるが更に人を加へて二人の者が共に相讓らず自己の意見を主張してゐることをあらはしたのである。競の字は時に竸と誤記される場合がある。畢竟の竟の字が競と同音なるがためであらう。

714

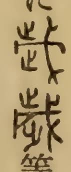
〔選〕セン—サン　新　えらび（八・三）　替　セン（九・二五）

巽と之遶との合字。禮を厚うして人へ物品を送ること。オクリヤル意をあらはすために、之遶（行を見よ）を書く。巽（せん）は神を祭るに當つて諸種の禮式が具備してゐること。小篆ではと書く。下部の丌は「丌」の字の條下に述べた通り物を載せる臺足の象形。上部は臺の上に載せたものをあらはしたのであるが、特に節の本字たる卩を組合はせたのは、神を祭るに當つては禮節を必要とするので、その聯想作用が働いたものである。

一説に選の本義はエラブともいはれてゐる。選擇、選擧の如く用ゐられる。また手扁の撰は著撰の如く文章を述作することに用ゐる。「何某撰」といへば何某の著述にかかはるものといふ意となる。

715

〔歲〕サイ—セイ　新　サイ（八・三）

古文に等がある。足趾の象形から出來た止の字を二つ（歩と同じ）と戉（ほこ）（伐を見よ）との合字。載の字の條下に説明したやうに支那の古代においては部落民が團體的に移動して生活をしたものであるから移動の意味で歩行の歩の字を書いたもの。戉はその際に自己の團體を衞るための用意に

持つ武器をあらはしたものである。移動してゐた時代には他部落との衝突がかなり激しかつたにちがひない。トシの意としてかかる文字が作られたのは、諸方を經廻つてゐるうちに、冬が來れば激しい風雪のために移動行進も出來ず、やむなく冬籠りをしなければならないが、この冬籠りは周期的に一定の期間をおいて來るので、去年の冬籠りからまた今年の冬籠りへと一廻はりしたことが知られる。そこでこの期間を一年とし、これをトシとしたのである。

說文には歲を木星として星の名としてゐる。歲の字に對する說文の見方は木星は十二ヶ月でもとの位置にかへるから、木星を中心として十二ヶ月を定めるので、木星の意たる歲の字がトシに轉義したのだといふことになる。即ちこの字に組合はされた步は木星の規則正しい運行をあらはし、戌（茂を見よ）を聲符と見たのである。しかしながらこの解釋は天文が發達して後に加へられた解釋法であつて、最初においての作字の意圖は先きに述べたやうなものであらう。

716 〔境〕ケイ きやう　新 ケイ（八・三）　替 キヤウ（九・七）　さかひ（九・一六）

土と竟との合字。國土のハテ即ちサカヒのこと。そこで國土の土と、畢竟の竟とを組合はせたもの。竟はまた聲符をもかねてゐる（鏡を見よ）。

サヒカの義を有する文字に境、域、界等がある。この三字はサカヒといふ場合には大した區別もなく使はれてゐるが、他の文字と熟用される場合に、境と域とは境內。邦域の如くサカヒのナカの國土を意味する場合が多い。これは國、域の條に說明したやうにそれらの文字が國土を意味して作られたからである。界は田と田とのサカヒにて分界、境界の如く一つのシキリをあらはしたものである。

717〔始〕シ　新　はじむ（八・三）　替　はじま・る（八・四）　シ（八・一八）

女と台との合字。もののハジメ。女性は子供を產むのでそれをもつてハジメなる概念をあらはしたもの。台は聲符である。

718〔乙〕ヲツ　新　オツ（八・三）

草木が伸出でようとして伸び出ることが出來ず、まがりくねつてゐるかたちを象つたものといはれてゐる。そこで乙々といへば伸びようとして伸びることが出來ずちぢこまつてゐること。この字は汽の字の條下で說明した气卽ちと同系統のものであらう。本義はものが伸び切らず屈曲してゐることと。十干の第二たるキノトとして使用せられるのは音の假借である。それより等次

をきめる場合、第二位のものとなる。我が國ではヲッと訓じ甲(カン)に對して優美なる聲色。またキャシャなこととなる。

719 〔點〕テン—セン　新　テン（八・三）

黑と占との合字。小さな黑いよごれのこと。故に黑。占は聲符。轉義してシルシとか採點とかに用ゐられる。現形では黑の下部の點が占の方へ行つてゐるものもあるが、漢字には往々かくの如く筆畫の位置が變つて來るものがある。

720 〔醫〕イ　新　イ（八・三）

医と殳と酉との合字にてイシャのこと。身體の中へ入り込んだ矢を器具で拔き出し、傷口へ藥液を塗るの會意から出來た文字であらう。即ち左上部の医は身體の中へ矢が入り込んでゐることを示したもの。外廓の匚は匿・區・筐に含まれてゐる匚の如きものである。右上部の殳は殺・投などの旁と同形であるが、ここでは手（又）に外科的手術を行ふ際の道具をもつてゐること。下部の酉は酒の本字にて酒器の象形から出來た文字である。酒は「百藥の長」といはれてゐるやうに古來から藥品の一種と見做されたものである。今日でも葡萄酒を强壯劑として用ゐたり、アルコー

ルが殺菌消毒劑として用ゐられたり、またチンキ類の製造にアルコールを必要とするが如く、往時酒をもつて藥なる概念をあらはしたことは理由なきことではない。

なほ說文によれば殹は病床に伸吟する病者のウメキ聲を聲符的に加へたものと解釋され、殹の字を「擊ちあてる聲」としてゐるが、これは医を容れものの中に矢が入れてあり、その矢をとつて物を殳（うつ）（殺を見よ）の會意と見たのであらう。その際エイとかイとか掛け聲を發するので、その聲を病者のウメキ聲に應用したものと見たのかも知れない。

また他の說では殹をもつて「惡姿なり」と解釋したものもある。これは弓矢をふりかざして人を擊ち殺すの會意と見立て、その心構への醜さを言つたものであらう。この說によれば病者が病にやつれてゐる姿をあらはすことになるのである。

以上の二つは何れも殳を殺の字の旁と同じやうに解釋したのであるが、むしろ最初に說明したやうに外科道具をもつてゐることに解釋する方が、最初の作意に近くはないかと思はれる。

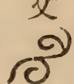
毉

なほ醫の字は毉とも書かれる。巫は巫女（みこ）のことにて神に仕へる女のこと。太古は醫者の仕事は巫が司つたからであるが、藥物的療法で治らないものは、祈禱によるといふ人間の心理を如實にあらはした文字である。

721 〔幼〕 エウ イウ ゆう　新　エウ（八・四）

玄

小篆ではとなり、幺と力との合字。說文によれば左扁は胎内にゐる子供の象形とされてゐる。力はヲサナイ時代のかよわい力をあらはすために組合はされたものである。

この字の左扁は幽幻と熟す幻の左邊と同形で、現形の玄の字と同字といはれてゐる。玄の字はもとと書いたもので、糸を束ねた象形の内部に點を打つて黒く染めた糸の指事としたものと解釋されてゐる。後略して點を省いたものが玄の字の成り立ちといはれてゐる。黒色はハッキリとせぬ色ゆゑ、奥底の知れないこととなり玄妙、幽玄、玄黄の如く使はれるのだといふ。そこで幼の字をカスカとか微妙とかの意と解したのであらうが、しかし幻や玄の字は申の條下で說明したやうに、恐らくは雷電の象形から來たものと思はれる。卽ち申の古文等と比較すればよくわかるだらう。しかも雷電の來るや何處ともなく忽然として來り、また何處へともなく去るので、申の字をもつてカミなる意の文字としてゐる。說文に幼を「小なり」としてゐるのは、幼が申の系統を引いた文字であるから神祕となり、幽玄となり、カスカとなり更に「小なり」となつたものと思はれる。そこで幼兒の幼となるのである。

なほ幻の字は幼の字に酷似してゐるが、この字の旁は乙气などに類似したもので、電氣などの

流れてゐることを示したものではなからうか。

722〔雀〕ジヤク　シヤク　さく　新　すゞめ（八・四）　假　四十雀（から）（八・一）　朱雀（すざく）（一二・二〇）

小と隹（鳥を見よ）との合字。スズメのこと。小さな鳥（隹）といふ會意。なほ小はチユウ〳〵と鳴くその擬聲をもかねてあらはしたものである。鳩、鴿、鵞等における九（クークー）、合（ポッポッ）、我（ガアガア）の如きものと同一である。

723〔巢〕サウ　ぜう　新　す（八・四）

古形は。鳥（巛）が梢（木）にスを作つてゐるかたちをもつてスなる意の文字としたもの。

724〔暮〕ボ　む　新　くれ（八・四）　替　くらし（八・二五）

小篆は（莫）にて、草原の中に太陽が沒した形によつてクレルといふ意の文字としたのである。後になつて更に日の字が加へられて現形となつたもの。そのため莫はその本義を失ひ、太陽がなくなる意より轉じてナシ、ムナシ等の意に使用せられるやうになつた。

なほ暮の字は日の沒することより、我が國では日々のクラシ（生計・活計）の意や、年の暮の如く歳月

の終り等の意に用ゐられてゐる。

725〔屆〕カイ　新　とゞ・く(八・四)

尸と凷との合字。本義は行くに不便なことともいはれ、また極め至るともいはれてゐる。轉じてトドク・トドケ。屋の條下に説明したやうに上部は人が身をかがめてゐる象形。凷は聲符。なほ凷は土塊の塊の本字にて土と凵との合字。凵は土を掘つたあとのヒッコンだかたち。陷落の陷の古形によく似てゐる。中の土はそこから掘り出したツチクレの意である。

726〔袋〕タイ　だい　新　ふくろ(八・四)　替　足袋(たび)(八・一六)　假　布袋(ホテイ)(九・一八)

代と衣との合字。フクロのこと。故に衣を書く。衣の代りに巾を書いて帒としたものもある。帒、袋における代は共に聲符である。

727〔柱〕チユウ　チユ　ちゆ　新　はしら(八・四)　替　チユウ(一二・一〇)

木と主との合字。ハシラ。故に木扁。主は聲符。大黒柱の語の如く、柱は家屋を支へるもので

あるから多少ともその會意が含まれてゐるだらう。

728〔最〕サイ—サッ さう　新　サイ（八・五）　替　もつと・も（八・一三）

現形では日と取との合字となつてゐるが實は日と取との合字である。即ち上部は帽子を眼深に被つてゐる冃から來たもの。感冒・侵冒の冒の本字にてヲカスといふ意味の文字、即ち鐵兜の如きもので、頭部や顏面を保護して敵陣へ乘り入ることから來たものである（帽を見よ）。取は說文に「捕取するなり、又と耳とに從ふ。周禮に獲者は左耳を取る。司馬法に曰はく、載せて聝を獻ず。聝は耳なり」とあるが如く、眞つ先きに敵陣へ乘り込み敵の左の耳を切り取ることにて、我が國の武士が敵の首を取るのと同樣である。そこでこの文字はサキガケといふ意味の文字となる。それより轉じて第一、極上、モットモ。この字に手扁が加へられて撮(さつ)となれば撮影・撮要の如く熟してトルこととなる。

撮

729〔端〕タン—セン　新　タン（八・五）　替　はた（八・二八）　はし（九・五）

立と耑との合字。立つてゐる姿勢が正しいこと。故に立。耑は聲符。轉じてタダシ。更に轉じてハジメとかハシとかの意となつたのは、聲符として組合はされた耑の意をとつたものである。耑

は小篆にてとなつて居る。草木の萌芽が僅かばかり地上に現はれた形といはれてゐる。そこでキザシとかハジメとかの意となる。字形においては上部が草木の萌芽で下部がその根である。

730 〔材〕 サイ ざい　新　ザイ（八・五）

木と才との合字。建築用の丸太。轉じて材料。故に木扁。才は聲符でもあるが草木が地上に出ようとするかたちから出來た文字であるから、特にこの字を組合はせたものであらう（才の條を見よ）。人材の如く使はれるのは材はものを構成する要素をなすものだからである。

731 〔菜〕 サイ　新　サイ（八・五）　審　な（九・五）

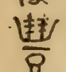
草と采との合字。食用となるべき草の總名、卽ちナのこと。故に草冠。采は採取の採の本字にてナはツミトルものだから特にこの聲符を組合はせたものであらう。採を見よ。我が國では副食物の意たるサイの意味にこの字をあてる。

732 〔量〕 リヤウ　新　リヤウ（八・五）

重の省畫と鼂の省畫との合字といふ。物の輕重をハカルこと。故に重を書く。鼂は聲符。なほ

この字は日と鄕との合字にてアキラカなる意。故に日を書く鄕は聲符である。

733 〔豐〕ホウ ぶ ― フウ ふ　新 ゆたか（八・五）　舊 ホウ（九・二四）　とよ（一一・二三）　假 豐前（ぶぜん）（一二・二一）

古文に等がある。小篆では。神前に供へ物をする禮器の象形。豆（その條を見よ）よりも大きく澤山の盛り物の出來るもの。この字の丰は盛り物の象形であるが聲符をもかねさせてゐる（害を見よ）。ユタカ、サカンの意となるのは澤山の供へ物がしてある有樣から來たものである。なほ禮の字の旁に見ゆる豊の古形はにて、殆んど豐と同樣であるが、ただ盛り物の多少がちがふのみである。

734 〔增〕ゾウ ソウ　新 ゾウ（八・五）　舊 まし（一〇・二五）

土と曾との合字。カサナリマスこと。堯（燒を見よ）や重の字に土が含まれてゐる如く、この場合も土によつて壘々とカサナル意をあらはしたものである。堆の古文がにて、土の層をなしてゐることをあらはしてゐることも注目すべきである（鄕の條を見よ）。なほ曾は聲符であるが曾孫・曾祖の如くソウなる音（言葉）にカサナルの意がある。字形については層の條を見よ。

735 〔濁〕 ダク タク ぢよく　新　ダク（八・五）

水と蜀との合字。本義は河の名。故に三水（江・河を見よ）。蜀は聲符（獨を見よ）。この字がニゴルとなるのは濁水の水がにごつてゐるからであらう。しかしまた一說には、もと〳〵ニゴッタミヅの意として作つた文字といはれてゐる。さすればこの河の水が濁つてゐるので、濁水なる名稱が與へられたこととなるが、いづれにしても蜀の聲符たることには變りはない。

736 〔域〕 ヨク ゐき　新　キキ（八・五）

土と或との合字。國及び或の條にて說明したやうに、もと或がクニといふ意の文字であつたいだが、後に土が加へられて領土內とかサカヒの意に用ゐられるやうになつたものである。

737 〔沿〕 エン　新　エン（八・五）　替　そ・ふ（一一・七）

水と㕣との合字。流れにしたがつて下ること。故に三水。　は聲符である。なほ㕣は山間の窪地にてぬかるんでゐる場所。この字形は、上部は谷の古文の上部と同じく水の字を省略したものである。

738 〔盛〕セイ じやう　新 さかん(八・五)　舊 も・る(九・七)

成と皿との合字。黍稷を捧げて神を祭ること。故に皿。成は聲符。モルといふ意よりサカン・シゲシとなるのは豐の條下で説明したやうに、盛り物の澤山供へてあるサカンな有樣から來たものであらう。

739 〔灣〕ワン　新 ワン(八・六)

水と彎との合字。水が陸地の方へ彎入してゐること。故にこの兩字を組合はせたものである。

彎

なほ彎は䜌と弓との合字。本義は弓を引くこと。故に弓を書く。轉じてマガル。䜌(れん)は聲符。なほ䜌については變を見よ。

740 〔供〕グ く キョウ　新 そなへ(八・六)　舊 とも(九・二)　キョウ(九・一二)　假 節供(せつく)(六・二五)

人と共との合字。神へそなへものをすること。故に人扁。共は聲符ともなつてゐるが、共の字の古形がだから恭しく兩手で供へ物を捧げた形を取り入れたものであらう。轉義してタテマツル　ススメル意となる。

我が國ではトモと訓じ從者の意に用ゐてゐる。共(とも)をする人といふ會意に見たてたものである。

741〔許〕キョ こ　新 ゆるし(八・六)　替 ばかり(一〇・五)　もと(一二・一四)　キョ(一二・二二)

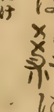
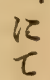
言と午との合字。承諾をすること、即ちユルス。故に言扁。午は聲符である。

742〔爲〕キ　新 ため(八・六)　替 爲替(かはせ)(八・一二)　キ(一〇・五)　な・す(一二・六)

古文のより小篆のとなり更に現形となつたもので、爪と象との合字。爪は受、爭の條下で說明したやうにその本義はツカムことであるが、殆んど手と同樣な概念をあらはすために他の文字へ組合はされてゐる。象は物象・象形・肖像と熟する如くカタドルとかカタチの意がある。土器などを作る時土をこねて何かの形に象つて作るので、ニセルとかマネルとかの意の文字として作られたものである。ニセルこと、マネルことは人爲的、意識的のことであるからナスの意ともなり、タメにするのタメともなつたのである。そこでニセルこと、マネルことは人をいつはるものだから人扁がつけば僞作の僞となり、言扁がつくと譌にていつはりごととなる。

僞　譌

743〔殺〕セツ サツ さち　サイ　新 ころし(八・六)　替 サツ(一〇・二)

古形はにて杀と殳との合字。コロスこと。殳の古形はにて几と又との合字。說文に「殳は積竹(よせたけ)を以てす。八觚(かく)。長さ丈二尺。兵庫に立つ。旅賁(やくにん)を以て先驅す」とあるやうに兵庫の先頭に立てて威勢をつける武器の一種。我が國の大名行列の先頭に立つて「下に〳〵」のかけ聲と共に投げて行く槍にも類するものであらう。そこでこの字は擊、投、毀、段等に含まれてスベテウチノメスの意があらはされてゐる。字形は殳(ほこ)のことだから手に持つので右手の象形から出來た又の字へ聲符字たる几(しゅ)を組合はせたものである。

左邊の杀は爻と求との合字。爻はもののマジハルかたちにて交と同義といはれて幾度も幾度もたたくの意を含めたものといふ。また他の說では爻は刅(刀の條を見よ)卽ち傷づくといふ字の古文の略されたものでそれによつて人を殺傷するの意をあらはしたものといふ。杀における、求は聲符(術を見よ)である。

なほ殺全體においては左邊が聲符となり更に會意を含めたものとなる。

更に殺の字の旁の几は聲符といふことを述べたが、この字は鳥の生えたての短い毛の象形といはれてゐる。飛べばその羽毛がシュッ〳〵と音をたてるのでシユなる聲符とされたのである。

殳は俗にルマタと稱せられてコマタ(假・霞等の叚。假の條を見よ。)と區別せられる。また殳(没を見よ)とも別字である。ルマタにやや似てゐる字は敎。處。政　鼓　敲等に含まれる攴や支である。古形はともに

卜又で扑の本字である。意義は注意をひかしめるために輕くうつこと。また人を支配するやうな概念もあらはされる文字である。

殺はコロス意味の場合には殺戮(さつりく)、暗殺(あんさつ)の如くサッと讀み、ヘラス、削グ、差引キスル、甚ダシといふやうな意味の場合にはサイと讀んでゐる。相殺、減殺、笑殺、間殺、忙殺の如き語がそれである。しかし忙殺、笑殺の如きはサッと讀む人が多いやうである。また殺生(せつしやう)の如くセッと讀む場合もありすべて習慣にしたがふべきが無難である。

744 〔說〕セツ せち ― ゼイ　新　と・く(八・六)　替　セッ(九・一九)

この字は悅と同字にてよろこんで人に說く義といはれてゐる。故に言偏。兌は聲符。なほ兌は悅の本字にて八と口と人との合字。ヨロコブこと。人が悅ぶ時には口をあけて笑ふので口と人とを書き、更に上部へ口を開け嬉々として言葉を發する意をあらはすため、分散の意をもつてゐる八を加へたのである。

745 〔帽〕バウ まう　新　バウ(八・六)

もとは冒と書いたもの。カブリモノのことであるから後に巾が加へられた。冒の古形は冃目に

て目の上に冃を加へて帽子を被つてゐる形をあらはしたもの。なほ目の字がもと／＼帽子の意であつたのだが、帽子を目深かに被つて敵陣に乗り込む意にて更に目が加へられたものである。（最を見よ）目をもつて頭部や顔面を代表させたことは首の條下に述べた通りである。

746 〔握〕アク ヲク　新 にぎり（八・八）　替 あく（九・九）

手と屋との合字。ニギルこと。故に手扁。屋は聲符である。

747 〔箸〕チョ ど　新 はし（八・八）

竹と者との合字。ハシのこと。故に竹冠。者は聲符。着の條下で說明したやうに著・着の二字はいづれもこの字が誤記されて出來たのである。

748 〔結〕ケツ けち　新 むすび（八・八）　替 ケツ（一〇・七）

糸と吉との合字。ムスブこと。故に糸扁。吉は聲符。轉じてマトム・ナル。

749 〔塗〕ト づ　新 ぬり（八・八）

もとは單に涂と書き氵と余との合字。本義は河の名。故に三水。余は聲符(江・河・餘を見よ)。この字がヌルといふ意の文字になつたのはコテといふ字(杇)の音に假借されたものである。コテは土を塗るものだから後に土が加へられたのである。

750〔畑〕國字 はた　新　はた(八・八)

火と田との合字。熟田とするには雜草を燒いて開墾するのでこの二字を組合はせたものであらう。或ひはまた水田に對して火を加へたのかも知れない。畠とともに我が國で作つた文字。畠の條を見よ。

751〔藥〕ヤク　新　ヤク(八・一〇)　舊　くすり(八・二六)

草と樂との合字。クスリのこと。もと草根木皮を藥としたので草冠。樂は病苦が取除かれてラクになるの會意。更に聲符をもかねてゐる。

752〔貴〕キ　新　キ(八・一〇)　舊　たふと・ぶ(一一・二)

古形は[illegible]にて下部は貝である。貝は古代の通貨。貴賤と熟する文字にて物質に富めるものを

社界上の地位が高いと見たものである。賢者の賢、貞節の貞に貝の字が含まれてゐるのもそのためである。貴の字の上部は聲符といはれてゐるが或ひは貝貨を容れる器の蓋の象形ではなからうかともいはれてゐる。そこで物を容れて運搬する蕢(もつこ)といふ字の本字といはれてゐる所以である。

蕢

蕢の字の小篆は古形のから來たものであらうがはすべて兩手の象形（手を見よ）で、重いもの丨丫をエンヤラサと捧げてゐることをあらはしたものであらう。

753 〔鮮〕セン　新　セン（八・一〇）　替　あざやか（九・五）

魚と羴の省畫との合字。もと魚の名として作られた文字。故に魚扁。旁は聲符。この字が新しい生魚の義に轉じたのは鱻(せん)の音に假借されたものである。轉じて廣く魚に限らず新鮮の鮮として用ゐられる。ヨシとかアザヤカとなるのは善の音に、スクナイとなるのは尠の音に通じたもの。なほ羴はクサイといふ文字。羊扁に臭の字を書くのも同字である。これは羊が多數集合すれば一種の臭氣を發散するからである。

754 〔栽〕サイ　新　サイ（八・一〇）

𢦏と木との合字。土堤を築くとき、盛り上げた土の落ちないやうにするため地中に打ち込む木

のこと。故に木を書く。轉じて木をウヱル（栽培）こととなる。

この字の上部は聲符として加へられたものであるが俗にサイカムリといはれ𢦏　載・截　哉等の上部に組合はされ聲符を主として多少の會意を含ましむる役をしてゐる。現形ではサイの音が見出されないがもとは𢦏と書いたもの。卽ち才と戈との合字にて才が聲符の基本となつてゐる本義は人を害ふこと。そこで戈（伐を見よ）を書いたもの。

755〔培〕ハイ ばい―ホウ ぶ　新　バイ（八・一〇）

土と音との合字。ツカのこと。故に土扁。音は聲符（部を見よ）。轉じて土を重ねて高く盛ることとなり、更に草木をツチカヒヤシナフこととなる。

756〔婦〕フウ ぶ―フ ぶ　新　フ（八・一〇）

女と帚との合字。本義は一家の主婦、卽ちツマ。家事に服してハキフキをする女といふ會意から出來たもの。右旁の帚は箒の本字にて ヨ と冖 と巾との合字。ヨ は 又（又）と同様右手の象形。冖は掃除をする一畫を示したもの。巾は布巾の巾にて雜巾の意。卽ち 冂 と丨とに分解さ

れる。冂は物を拭ふキレ、丨は拭ふた筋目。かかる文字を組合はせてハウキといふ文字を作つたのである。

婦・妻等がすべて掃除に關係して出來てゐるのは、女權が認められなくなり社會上の實權が男子の掌中に移つた結果によるものである（女・父・母・等を見よ）。

757〔違〕キ　新　ちがひ（八・一〇）　替　キ（一二・四）

韋と之遶との合字。ものごとがタガフことと。轉じてヨコシマ。この字のごく古い形はで囗の周圍に足趾の象形が書かれてゐる。その足先きの方向がいづれもちがつてゐるのでいくら進んで行つても永久に出逢ふことがない。かくしてものごとがチグハグになる意をあらはしたものである。この字は後に變形してとなり更にとなつた。現形違の字は最後のものへ之遶（行を見よ）が加へられたのである。これは歩行を聯想したためである。なほ古文の最後の形の囗の上下にあなるものもやはり足趾の象形であるが、これは止の條下に説明したやうに足趾を太く書くのが面倒ので、塗りつぶすところを簡單にすませたものである。

758〔育〕イク　新　そだち（八・一〇）　替　イク（一〇・三）

古形は。子の字を逆にしたものと肉（月はニクヅキ。肉の條を見よ。）との合字。說文に「子を養ふに善をなさしむ」とあつて品性のよくない子供を導く會意と見られてゐる。卽ち子の字を逆にして性質のよくない會意をあらはしたものと見たのである。しかし子の字が逆になつてゐるのはかかる意味ではなく、胎兒が母胎を離れる際に頭の方から生まれて來るのでそれを現はしたものと思はれる。卽ちこれが正常分娩である。卽ち流の旁はで育の上部と（川）との合字で母胎から胎兒が難なく產まれるのを、淀みなく川が流れてゐることに思ひ合せて作つたのを見てもうなづくところがあるだらう。親が子供をソダテル第一步は分娩時であるから、親が子供を哺育する最初の時をあらはし、更に食餌の意味で肉を組合はせたものである。轉じて精神的方面の敎育のことに使はれるやうになつた。

759
〔乳〕 ニユウ ジユ にゆ　新 ちち（八・一一）　替 ニユウ（一一・一二）

古形はにて孚ととの合字。左扁は爪と子との合字にて鳥が卵をまんべんなく溫める爲に爪でころがして孵化すること（浮の條を見よ）。右旁は燕の象形。それより子供を育てること。チブサ・チチ等の意となる。特に燕が選ばれたのはこの鳥が卵を孵化するに巧みだからである。支那古代の習慣に燕が初めて飛んで來た日にはお祭りをして婦人は子寳の授かるやうにと祈つたのもその

ためであらう。

760〔訴〕ソ セキ しやく　新　うつた・へ(八・一二)　替　ソ(一〇・一二)

言と斥との合字。ウッタヘルこと。故に言扁。斥は聲符である。斥の字については氏の條に說明した通りである。

761〔調〕テウ でふ　新　しらべ(八・一二)　替　チウ(一〇・二)

言と周との合字。聲や音がよく和合すること。故に聲音に關係のある言を書く。周は聲符でもあるが偏頗なき意卽ちアマネシの會意も含まれてゐる。

「租・庸・調」の如く賦課の意に用ゐられるのは徵集の徵の音に假借されたものである。我が國でシラベル意に用ゐるのは樂器の律呂をあはせることをシラブといつたからである。そこで調査の意より審問審理等に用ゐられるやうになつた。

762〔放〕ハウ　新　はな・し(八・一二)　替　ハウ(一一・一四)

方と攴との合字。追ひハナツこと。故に攴。攴は敎の字の旁と同じく手(又)に一本の鞭をも

つてゐるかたち。鞭でたたく意をあらはしたもの。方は聲符。

763〔情〕セイ じやう　新 なさけ（八・一二）　替 ジヤウ（九・九）　假 風情（ふぜい）（一二・二〇）

心と青との合字。マゴコロ・ココロ・ココロモチ・ナサケ。故に立心扁。青は聲符である。眞情といへば眞實なる心の有樣。そこで情況の如く熟しアリサマの意となる。

764〔吳〕ゴ　新 ゴ（八・一二）

仄

小篆にて。本義は大言壯語すること。上部は口であるが下部は夭折の夭の字を反對にした仄（そく）といふ字の本形である。後に形聲文字の側といふ字が出來たがこれと同義。夭については大の字の條下で人が頭をかしげてゐる形から出來た文字なることを述べたが、吳の字の下部はそれを反對にして、人が反り身（そりみ）になつてゐることをあらはしたものといはれてゐる。恐らく人が反り身になつて大口を開けるの會意であらう。

娛　虞

かく解釋すれば誤・娛・虞等に含まれる吳は單なる聲符でないことにも氣がつくであらう。即ち大言壯語をする者の言葉にはとかくいい加減なことがあるので誤の字となり。女子供は他愛なくキヤツ／＼とはしやいで喜こんでゐるものだから娛となり、また虎の如き蠻聲をあげて大聲に

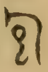
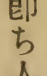
叫ぶから虞の字が作られる所以である。

なほ呉の字が支那の南方、會稽郡の地名として用ゐられてゐるのはこの字の意味の上とは何等の關係がなく、單に音の假借に過ぎない。

織物類のことを我が國で呉服といふのはむかし呉の國から織物の方法を習つたからである。この字をクレと訓むのは我が國人が高麗の久禮波・久禮志の二人に導かれて始めて呉の國に行つたといふ應神紀によるのである。それより「唐」とともに支那から來た品物の名に冠せられて用ゐられ呉藍（くれなゐは音便）・呉竹・呉織・呉橋の語が出來た。呉藍の如き更に唐をつけて唐呉藍ともいつてゐる（傘・洋の條を見よ）。

なほ漢字の音の呉音といふ名稱は實は呉の國の音といふ意味ではなく、隋唐以前における支那南方の音を傳へたものである（漢の條を參照せよ）。

765 〔包〕ハウ へう　新　つつみ（八・一一）

孕　古形はにて人間の腹へ子供がゐるかたち。ハラムといふのが本義。孕と同字にて孕の上部の乃は即ち人が變形したものである。說文には乃を聲符としてゐるが實はさうではない。包は轉義してツツムの意となり苞・抱等に組合はされてその義と聲とを持たされてゐる。

姙娠

なほハラムといふ字には姙・娠等がある。ともに女扁にて壬 辰は聲符となつてゐる。しかし姙の本字はもと壬にて女扁は後に加へられたものである（任を見よ）。

娠の字の辰は星の條下で説明したやうにウゴクの意が含められてゐるのである。

766 〔荒〕 クワウ　新 あらし（八・一二）　替 あれ（九・三）　假 二荒（ふたら）（一〇・二一）

草と巟との合字。草が生え繁つてアレハテルこと。故に草冠。下部は聲符。轉じてヤブル・アレチ・アレノ等となる。

我が國でアバレル、アラブ・アラシ　スサブ・サワグ等の意に用ゐられるのは本義から延轉したものである。

767 〔積〕 セキ しやく　新 つみ（八・一二）　替 セキ（一一・一）

禾と責との合字、穀物をツミカサネルこと。故に禾。責は聲符。轉じて廣くツム。

768 〔速〕 ソク　新 ソク（八・一二）　替 セキ（一一・一）

束と之遶との合字。ハヤクユクこと。故に之遶（行を見よ）。束は聲符。轉じてスミヤカ。

769〔亂〕ラン―ロン　新　ラン（八・一一）　替　みだれ（九・二〇）

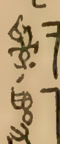
小篆にてと書く。左邊は上下に手（爪・又・爭・受を見よ）がありその中間は糸巻に糸が卷かれてあるかたちであらう。その糸がどうしたことか非常にもつれてゐるのでしきりに糸口を見出さんとして兩手を働かしてゐるもの。旁は糸口を見出して糸を引きたぐるしるしであらう。

或る說では垣根の境（）の內外で二人の子供（）が喧嘩をしてゐるのを仲裁者が兩方から手を出して（）引きわける會意とされてゐる。そして右旁は乙で爭ひをかく治めたといふシルシをつけることで、もともとヲサメルといふ意の文字だといふのである。

左邊のを子供の象形と見るのは幼の字の左邊を子供と見たからの誤りで、この字は最初に逃べたのがその本義で次第にを樂器と見、その樂器の亂れた糸を治めて調子をシラベルの意にも轉義した。

とにかくにも𤔔はヲサメル意であるから亂の字もその意味でなければならない筈だのに、反對にミダレルといふ意に用ゐられるやうになつたのは、𢿨といふ字があつてそれに假借されたと

いはれてゐる。即ちこの字の旁は攴にて棒を手に持つてゐるかたちであるから、折角圓滿に治まつてゐるところを、またぞろ暴力でかき亂すとの會意だといはれてゐる。

論語に「舜に臣五人ありて而して天下治まる。武王曰く予に亂臣十人有りと」とあるが亂臣では天下の治まる道理はない。そこでこの亂は反語的に用ゐたものと說明されてゐるが實はさうではなくもとと書いたものが次第に略されてとなりつひに亂と誤るやうになつたのである。𤔔は司の假借にて、有司と同樣な意に用ゐたものである。𤔔は樂器の亂れた糸を治めて、即ち調子を合はせてそれから詞歌を歌ふといふ意味の文字である。即ち「師摯の始(治に通じ理の假借)、關雎の亂、洋々乎として耳に滿てる哉」がそれである。

亂に似た字に辭の字がある。この字は辠(辛)をしらべる(𤔔)の會意である。コトバの意となるのは法廷で互に相爭ふからである。

なほ亂の字を略して乱とするのは、辭の字の言葉に關係することなどから來たものであらうと思はれるが、然しもと〳〵𤔔が琴瑟の調子を合はせて歌ふことであるから繁畫の部分を舌に取換へたものである。

770〔札〕サツ さち　新　ふだ(八・一一)

木と乚との合字。薄い木のフダ。故に木扁。乚(いつ)は聲符。カキモノの意となるのは、もと紙のなかつた時代に木を薄く削つて札として、これにものを書いたからである。我が國ではサツといひ神社佛閣の御守や紙幣のことにいふ。

771 〔盜〕 タウ だう　新 ぬす・む（八・一一）

次(よだれ)と皿との合字。皿の上にのせてある食物を見てヨダレを出すの會意。同じものを盜むにしても空腹を滿たすための盜みは必須的なものともいふべきであるからかかる會意文字を作つたのである。上部の次は次の字とはちがつて三水。羨望の羨の下部と同形である。この字の旁は吹の條下に說明したやうに歌等の旁と同じく人が口をあけてゐるかたち。卽ち口の一部をあけたものと人とを組合はせたものである。

盜は廣くヌスム意に用ゐられてゐるが賊は武器（戎）をもつておびやかし財物（貝にてあらはす・貝は古代の通貨）を强奪するの會意。

772 〔罪〕 サイ ざい　新 ザイ、八・一一）　替 つみ（一一・六）

网と非との合字。上部は俗にアミガシラといはれるもので網の象形から出來た文字。網の條

に説明した通りである。本義は魚を取る竹のアミ。非は聲符。

この字が本義とは何等の關係もないツミといふ文字として使はれるやうになつたのは、秦の始皇帝の時からである。始皇帝は當時の支那を統一し自分の德は古への三皇五帝に勝るとも決して劣らないとして自らを皇帝と稱した。ところが皇の字が「辠」といふ字に酷似してゐるので辠の字の使用を禁止して罪といふ字をもつてしたのである。だからザイの音は罔や非とは何等の關係がないのである。

辠

なほ辠（サイ ゼ）の字は自と辛との合字であるが、もと辛がその本字であつたことはその字の條下に說明した通りである。鼻の象形から出來た自の字が加へられたのは、もと罪人を處罰するに當つて鼻を切る刑罰があつたからである。

辠の字に代へるに特に罪の字をもつてしたのは、この字を非違ある者を羅網する會意に見立てたものであらう。卽ち罵・詈・罰・置等の上部が網の象形で罪人を捕へるの意が含められてゐるのと同樣である。次に網頭の文字で日常使用されるものを擧げておかう。

詈

詈は罵詈と熟してノノシルこと。罪の輕いものはひどく叱責してそれを刑罰とするので言葉の言を組合はせたのである。

羅

羅は網と維との合字。鳥を捕へるアミ。轉じてウスモノとなる。維は車の蓋のヒモ。故に糸扁

隹は聲符。羅の字においては維が聲符となつてゐるが鳥を捕へる網のことであるから特に隹の字（鳥を見よ）と糸の字とを含んだこの文字を組合はせたものであらう。

署

署は役割をきめてそれ〴〵の部面を擔任させること。網の目の如くその配置に缺けることなき意をあらはしたのである。者は聲符。なほ署名の如く使はれるのは書の音に假借されたものである。

773〔再〕サイ　新 ふたたび（八・一二）　替 サイ（一〇・五）

小篆にて。一と冓の省畫との合字。冓は構造と熟する構の本字にて材木を積み重ねてものを作ることをあらはしたもの。かかる同樣のことを繰返へすといふ意味で上部に一を加へてフタタビなる意の文字としたのである。そこで再は再拜・再三と熟し同一のことを繰返へすこと。兩は兩者・兩人・兩端・兩輪の如く同一の物が二つのこと。

774〔納〕タフ―ダフ　なふ　新 をさ・む（八・一二）　替 ナフ（一一・一〇）

糸と內との合字。本義は絲が水にうるほひシト〳〵すること。故に糸扁。內は聲符。ヲサメル意に用ゐられるのは聲符字の內の意から義が延轉したものである。

ダシイレの際には出納(すいたふ)の如くタフと讀まれてゐる。また大納言(だいなごん)・納屋(なや)はナ、納得(なつとく)　納豆(なつとう)は促音に讀んでゐる。

775 〔謹〕キン　新　つゝしみ（八・一二）

言と堇との合字。言葉をツツシムこと。故に言偏。堇は聲符。なほ堇の字の小篆は[illegible]にて黄と土との合字である。ネバツチのこと。故に黄と土とを書く。

堇

この聲符字に類似したものに菫(すみれ)の字がある。これは謹の旁へ更に草冠をつけたものから現形となつたものであるから、その成因はちがふ。

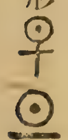
776 〔週〕シウ しゆ　新　シウ（八・一二）

もとは單に周と書いたものであるが周が、メグルといふ意の文字として用ゐられるやうになつたので、心理的聯想作用により後に之遶が加へられたのである（行を見よ）。あたかも韋に之遶、回に廴が加はつたのと同樣である。周。週は後に別字なるかの如く考へられその使用法にも一種の習慣が出來た。一とまわりするといふやうな場合には週を用ゐる。即ち週間（Week）の如きは七曜を一と廻りするからである。週給は一週間毎に支拂ふ給料。周給はあまねく人に惠むこと。但し週忌・

週遊等は週の字をも用ゐる。

777 〔祖〕ソ　新　ソ（八・一二）

示と且との合字。祖先の祖の字であるから祭壇の象形から出來た示の字を組合はせたのである。且は聲符といはれてゐるが、古い字形にの如きものがありその下に祖先の名などが書いてあつたりするところを見るに、墓標の象形なることは明らかである。恰度エヂプトのピラミットに類した形である。また古形にの如きものもあるが左邊はともに墓標で右は人がその前に跪づいてゐる形である。第二形には死んだ人をあらはすためにの如き人の形が書き加へられてゐるのは面白い。

且の字がカツ・シバラクと使用せられるのは音の假借である。俎豆と熟して祭器となる俎の古形から來たもので單に音の假借である。俎の字の左邊は犧牲の肉を切つた形をあらはしたものである。且の字と紛らはしいが旦は古形にて丘の上に太陽が出てゐることをあらはしたもので日と一との合字である。

778〔熱〕ネツ ゼツ ねち　新　ネツ、八・一二）　替　あつし（八・二八）

埶と火との合字。火氣の甚だしいこと。ネツ。轉じて心が或る一つのことに向ふこと。埶は聲符（藝を見よ）。

779〔願〕ゲン ぐわん　新　ねがひ　八・一二）　替　グワン（九・二四）

原と頁との合字。本義は大きな頭のこと、故に頁を書く（顔を見よ）原は聲符。オモフ　ネガフの意になつたのは念の音に通じたのであるが、頁は思考の中樞機關であるから特にこの字が組合はされてゐる願の字を、オモフといふ意の文字に假借したものであらう。

780〔寢〕シン　新　ね・る（八・一二）　替　シン（九・六）　いぬ（一一・一一）

寢の省畫と侵の省畫との合字。病氣で床につくことが本義。轉じてネムル。故に寢を書く。侵は聲符でもあるが病におかされるの會意も含められてゐる。なほ寢もネムルといふ文字であるが病氣でやすむ意ではない。この字は家の象形たる宀冠に共

の意があり侵は聲符と更に多少の會意とをかねたもの。卽ち侵の字は人と帚（掃・婦を見よ）といふ字の巾の部分が右手の象形から出來た又に取換へられたもので、人が箒をもつて掃きながら進んで行くといふ會意にてヲカスことゝなるのである。だから寢においては眠りが段々におかして來るといふ會意があるのであらう。

寢の字によく似たものに寐・寤がある。いづれも㝱の字の夢の部分を聲符字たる未又は吾に取りかへたもの。寐はイネヤヌムこと。寤は寢てゐたものがふとメザメてまたもとの眠りに入ること。悟の音に通じてサメルとかサトルといふ字に用ゐられる。

781 〔看〕カン　新　カン（八・一二）

手と目との合字。目の上へ手をかざして遠くを見るの會意。そこでミツメル・ミマモル等の意となる。人相と熟する相もミルといふ字であるが、これは視線をさへぎるものをさけるために高い木の上に登つて遠くを見るの會意である。

782 〔好〕カウ　新　すき（八・一二）　替　このみ（一〇・一）　カウ（一〇・二〇）

女と子との合字。本義はウツクシキことゝいはれてゐる。美は誰しも好むところだから轉じて

コノムとなる。女と子とを組合はせたわけは、豐麗なる肉體、その描く構造上の曲線美は女性獨特のものであり、美の最上なるものと見たのであらう。また子供の天眞爛漫なる純情は精神美の極致だからである。或ひはまた女性は子供を愛するの會意にてコノムとなるのかも知れない。

783

〔王〕ワウ　新　ワウ（八・一三）

說文によれば「天下の歸往する所なり。孔子曰はく一が三を貫くを王とす。董仲舒曰く古の文を作るもの三畫して其の中を連ぬ。三は天地人なり。之を參通するものは王なり」と說いて天地人の三德三を兼ね備ふ（丨）の考へから出來た文字としてゐる。そこで王と玉（王）との區別は王は紀數文字の三であるから二と一との合字と解し「中畫は上畫に近し」と補ひ王なる形としてゐる。玉は「三玉の連に象どるなり」とし三線の間隔を均齊だとしてゐる。しかし王者が天地人の三德を兼ね備へるなどいふやうな深い考へがこの字の作られた當初にあたつて起つたとも考へられない。豈んや紀數文字の三は必らずしも二と一との會意文字でないことはその字の條下で述べた通りである。では何から出來たかといふに古代においては王と玉とは同一のものであつたらうといはれてゐる說に贊成したい。卽ち玉をもつて王者のシンボルとしたことは玉の條下に述べた通りである。

この字はまた工の字の系統を引いたものともいはれてゐる。その說によれば工の字の古形は上の一線が天で下の一線が地、中の丨が人の意といふのである。而してこの工の字の內部に一線を加へて王（王）とし、中正不偏の德をもつて天地人を統一し通貫してゐるのだといふのである。要するに說文の考に一歩を進めたもので首肯し難いものである。もつともこの考への基礎には、說文に工の字を解して「人の規矩あるに象どるなり」とあるやうに、物を作るに規矩が要るやうに人を治めるにも法則があるので、その法則卽ち規矩を王たる者が具備してゐると見たのであらう。

784 〔飼〕シ じ　新　かひ（八・一三）　稽　シ（一〇・一一）

食と司との合字。糧食のこと。故に食。司は聲符。轉じて家畜をカフこと。

785 〔爪〕サウ せう　新　つめ（八・一三）

古形はにて手の甲とツメとの象形である。本義は上からものをツカムこと。受・爭・采等の上部がそれである。爪の字は轉義してヒツカク。ツメ等となつた。字形が瓜（うり）に似てゐるので俗に「爪にツメなく瓜にツメあり」といふ言葉でその區別を記憶する便法とされてゐる。他

の字に組合はされてツメカンムリといはれる。また爬の如く組合はされるものを爪遶（さうねう）といふ。

786 〔在〕サイ ざい　新　ザイ（八・一三）　替　ある（一一・二三）

古形にて扗と書く。即ら才と土との合字。現にものが目の前に存在してゐるといふことを、あらはすために土の字を書いたもので才は聲符である。

我が國ではザイと訓じ在郷。在所のごとくヰナカの意に使用する。

787 〔求〕キウ ぐ　新　もとめ（八・一三）

古形は[illegible]。毛皮の外套の象形。音の假借により專らモトメル意に使用せられるやうになつた

裘

ので、本義の場合には更に衣が加へられて裘の字が出來た。

788 〔絶〕セツ ぜち　新　ゼツ（八・一三）　替　たえ（一一・三）

糸と刀と卩との合字。絲をキルこと。故に糸と刀とを書く。卩は聲符（節を見よ）。轉じて廣くタツ。

なほこの字の旁は色とは異つてゐる。色は人と卩との合字。その條を見よ。

789
〔畜〕チク―キク―キウ／ク　新　チク（八・一三）

玆の省畫と田との合字。蓄の本字にて農作物をタクハヘルこと。故に田を書く。玆は殖えること。現在はタクハヘル意の場合には專ら草冠のある方を用ひ畜は家畜の意に使用されてゐる。これは嘼の音に假借されたものといはれてゐるが、田の字の條にて說明したやうに田は畋獵牧畜等に關係してゐるから、その方面から家畜の意となつたものかも知れない。

790
〔餅〕ヘイ／ひやう　新　もち（八・一四）

食と并との合字。麥の紛をこねて作つたモチ。故に食扁。并は聲符であるがコネルの會意もあるのだらう。

791
〔釜〕フ　新　かま（八・一四）

もと父と金との合字。現形はそれが省略されたもの。足のないカマのこと。故に金を書く。父は聲符である。

792 〔粉〕 フン 新 こ(八・一四) 替 フン(一一・三)

米と分との合字。オシロイ。古くは美顏料として米のコナを使用したからである。故に米と分とを組合はせたもの。分はまた聲符ともなつてゐる。轉じて廣くコナ。

この字はデシメートルの意に假借されてゐる。我が國でメートルに米の字をあて、これを中心に粉・糎・粍・粁・粨・籵なる文字を作つたからである。

793 〔奥〕 アウ おく 新 オク(八・一四) 假 陸奥(むつ)(九・一六) 奥羽(あうう)(一二・一〇)

小篆では。宀と釆との合字。室の西南隅のこと。故に家の象形から出來た宀を書く。向の字の上部と同じである。ここは家の中で一番奥まつたところで休息所にあてられるものである。それ故轉義して深く遠い處、隱れて現はれない場所、事柄等になる。我が國で奥といひ婦人の尊稱とするのは多く婦女がこの深窓に起居してゐるからである。

なほ釆は聲符であるが、この字の意味は米を握り飯にすることである。故に兩手が組合はされてゐる。卷・拳等に含まれる上部はこの字形が省變したものである。この字において釆(べん)は聲符となつてゐるが、この字は糞の字の古形の上部と近似してゐるので米に聯想して特にこの字を選

んだのであらう。糞の字の上部は腐つた米即ち形をかへた米だからである。米の上部が曲げられてゐるのは大の字の頭部を曲げて夭折の夭の字を作つたのに類するものである（大の條を見よ）。

更に釆は番の字の上部と同形で、獸類の足跡の象形。審・釋・悉等に含まれるものと同形である。但し採・彩等に含まれる采は爪と木との合字である。

794
〔臼〕キウ ぐ　新　うす（八・一四）

古形は。小篆では。いづれもウスの中に米粒があるかたちをもつてあらはされてゐる。

現在の臼は木や石で作つてあるが古くは直接地中に穴を掘つたものである。

この字に類似したものに臼（きよく）といふ字がある。これは兩手を相對した形であるから最下部の線も連續してゐない。

795
〔杖〕チヤウ ぢやう　新　つゑ（八・一五）

木と丈との合字。ツヱのこと。故に木扁。丈は聲符。ツヱは年長者のつくものであり、丈の字は丈夫・丈人と熟する字であるからやはりその會意も含まれてゐる。

796〔婆〕ハ・ば　新 バ（八・一五）

波と女との合字。老婆の婆にて年とつた婦人のこと。故に女を書く。波は聲符である。

797〔轉〕テン　新 テン（八・一五）　舊 まろぶ（一一・七）

車と專との合字。車がまはること。故に車扁。專は聲符である。それよりウッス・ゴロブ等と轉義した。

我が國ではウタタと訓じ移り進みの甚だしいことに用ゐる。

798〔駄〕タ・だ―タイ・だい　新 ダ（八・一五）

現形は馬と太との合字であるが、もとは馬と大との合字。馬が荷物を荷つてゐること。故に馬扁。大は聲符。

駄馬と熟し勞役に使用する馬。駄辯　駄菓子の如く粗惡なる意にも用ゐる。我が國で足駄・雪駄の如く使用するのは足をのせる意からであらう。

799
〔悔〕クワイ　け　新　くい（八・一五）　舊　クワイ（一〇・一七）　くやみ（一〇・二〇）

心と毎との合字。クユルこと。故に立心扁。毎は聲符。
我が國ではクヤミと訓じ人の死をトムラフこと。

800
〔帳〕チャウ　新　チャウ（八・一六）

巾と長との合字。トバリ。故に巾を書く（布・幕を見よ）。長は聲符。蚊帳・緞帳の如く使用する。また手帳・帳簿の如く用ゐるのは牒の音に假借されたのである。
なほ牒は片と枼との合字。字をしるす札。故に片を書く。枼は葉と同じく木ギレの意をあらはしたもので聲符をもかねてゐる。

801
〔墨〕ボク　もく　新　すみ（八・一六）

黒と土との合字。スミのこと。黒い土礦をもつて作るの意からこの二字を組合はせたもの。黒はまた聲符をもかねてゐる。

802〔履〕リ　新　リ（八・一六）

小篆にて。尸と彳と舟と夂との合字。古文は單にと書きクツの象形である。現形の舟は履物の象形。クツは足に履いて歩くものだから行の字の一方と足の象形から出來た夂（止を見よ）とを組合はせたものである。尸は聲符。

なほ現形の下部は復の字になつてゐるが履をはいて往復することを聯想したものであらう。

803〔職〕ショク しき　新　ショク（八・一六）

耳と戠との合字。微細な事柄までも書きしるすこと。故に物事を聞きわける意にて耳を書いたもの。戠は聲符。轉義してツカサドル。ヤクメ。ツトメ。家業等となる。

なほ戠は識の本字。もと戠 試と書いたもの。弋は國の字の條下に説明したやうに標識とする棒杙の象形から來たもの。その標識に忘れぬために言葉（言又は音）をしるしておくといふ會意から出來た文字である。のち更に言扁が加はり識となり轉じて知識の意となつた。

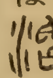
804〔號〕カウ がう　新　ガウ（八・一六）

大聲にてサケブこと。もとは單に号と書いたのであるが猛獸の泣き聲を聯想して虎の字を加へたものであらう。呼の字へ虎の省畫を加へたものに嘑の字もあるが、特に虎が加へられたのは虎の字の音が号や呼に近いからでもあらう。かくの如く他の文字が組合はされたのは文字は繁畫を尊ぶやうになつたので一種の意匠をもかねたのである。

号の字は口と丂との合字にて下部は口氣が動いてゐるかたち、上部の一線は語氣が上へ伸びて行くといふ指事である。

號の字が名號。稱號と熟用されるのは自己の姓は名乘ることによつてわかるからである。また徽號の號となるのは名乘りをあげれば甲乙誰なるかの區別がつくからである。それよりまた番號などとも使はれるのである。

805
〔活〕クワツ ぐわつ　新　クワツ（八・一六）

小篆はにて水と𠯑との合字。現形では右旁が舌となつてゐるがもとは𠯑だつたのである。本義は水がクワツ〳〵と流れること。故に三水。旁は聲符。水が絕えず流れることより活動の活となり更にイキル・ナリハヒ等となつた。

なほ𠯑の古形は𠯑で、舌の小篆は𠯑であるから字形の類似せるところよりすべて𠯑が舌と書かれるやうになつたのである。括・闊・話等はすべて𠯑から來たものである。詳しくは氏の條を見よ。

806 〔古〕コ　新　コ(八・一六)　替　ふる(九・一)　いにしへ(一一・八)

十と口との合字。十は多數を意味したもの。即ち多數の人々の口に話題とされたことの會意にてフルシとなる。

807 〔治〕チ　ぢ—タイ—イ　新　ヂ(八・一八)　替　チ(一〇・一八)　をさめ(一一・二)

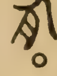
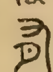
水と台との合字。本義は川の名。故に三水。台は聲符(怠を見よ)。轉じてヲサムとなるのは理の音に假借したものである。

808 〔富〕フウ　ふ　新　とみ(八・一八)　替　フ(九・六)　フウ(一〇・一八)

宀冠と畐との合字。家の中に財貨が澤山あるの會意にてトミ。宀冠は家の象形(穴を見よ)。畐は[illegible]

(禍を見よ)にて更に聲符ともなつてゐる。

809 〔有〕イウ う　新　イウ(八・一八)　替　あり(九・二三)

古文は。小篆では。小篆では又と月との合字となつて居りしたがつて本義は月色のことだともいはれてゐるが、しかしこの字の古文は又と肉との合字で手に肉をしかと持つてゐるといふ會意にて占有。保有等の有の字としたものではなからうか。「食は天なり」といふ言葉もあり食べることは非常に重要視せられものであるから禾と又との合字が秉といふ字になつてゐるのと同様なものであらう(秉を見よ)。

西洋で家畜のことをペクス(pecus)といひ pecuriary は財産を意味してゐるのは、家畜をもつて所有の對象物と見たからである。有における肉は食料となるべき家畜を意味したものだらうと思はれる。詳しくは占の條を見よ。

810 〔英〕エイ やう　新　エイ(八・一八)

草と央との合字。美しく咲いた花のこと。故に草冠。央は聲符。轉じて美しく勝れたこと。

イギリスの假借として英吉利と書き、それがやがて英國・英語の如く使用せられるやうになつ

たもの。

811 〔勉〕ベン めん　新　ベン（八・一八）

免と力との合字。ツトメハゲム。故に力を書く。免は聲符。
なほ免の字は兎といふ字から出來たものである。兎はその象形から來たもので現形の點は尾に相當する部分である。そこで免は兎が足早やに逃げて尻ッ毛が見えなくなつたことよりマヌガルの意とせられたもので、尾に相當する點が省かれてゐる。のち更に之遶（行を見よ）が加へられて逸の字も出來た。また免の上にものの覆ひかぶさつてゐるかたちの冖がつけば冤罪の冤となる。

812 〔園〕エン をん　新　エン（八・一八）

囗と袁との合字。果樹を植えた四方に垣をめぐらした土地のこと。外廓は四方の垣をあらはしたもの。袁は聲符。轉義して花園の如くソノの意となり植物園・動物園・公園・幼稚園・學園の如く使用せられる。

813 〔健〕ケン ごん　新　ケン（八・一八）

人と建との合字。人がイサカヒすること。故に人偏。建は聲符。轉じてタケシ・スコヤカ。

814 〔康〕カウ　新　カウ（八・一八）　假　家康（八・四）

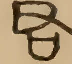
糠　穅　庚

庚と米との合字。本義はヌカのこと。故に米を書く。後にヤスラカといふ意に假借せられるやうになつたので、更に米又は禾を加へて糠・穅の字を作りヌカとして用ひられるやうになつた。
庚は聲符として加へられたものであるが、古形はとなつて居り樂器の鐘や太鼓をかける樹の象形である。即ち下部の三脚が足、上部は裝飾を施したものである。

815 〔害〕カイ　がい　新　ガイ（八・一八）

宀冠と丰と口との合字。本義は密かに惡口を言つて人をソコナフこと。故に口を書く。宀冠は密の字にも加へられてゐるやうにコツソリしたことは奥まつた家の中でするといふ心持ちからである。なほ丰は聲符であるが形の條下にも述べたやうに、この字は彡と丨との合字にて竹木に物をしるしたかたちで契の本字である。

816 〔牧〕ボク もく　新 まき（八・一八）　舊 ボク（一一・一四）

牛と攵との合字。牛を養ふこと。故に牛扁。轉じて廣く動物を飼育すること。この字の旁は敎や鼓の旁と同じく攴から來たもので手に一本の鞭をもつてゐるかたち。卽ち上部は棒、下部は右手の象形で、君王の君の字の上部や、役人の意の尹の字と同じく一種の支配權を意味したものである。そこで支那の昔十二州の長官を十二牧といひまた群牧。牧民などの言葉があるのも、これは一團の長たる者が團體を治める狀態があたかも牧者が迷へる羊などの群を導いて飼育するのに似てゐるからである。キリスト敎において牧師 (pastor) といふのもかくの如き心理作用によるものである。

817 〔滞〕タイ テイ だい　新 タイ（八・一八）

水と帶との合字。水がたまつて流れないこと。故に三水。帶は聲符。轉じて廣くトドコホル。

818 〔哩〕り　新 マイル（八・一八）

口と里との合字。語の末に附けて感歎の意をあらはす助詞。故に口扁。里は聲符。我が國の

「何々するワイ」に相當するもの。この字が我國でマイルの意に用ひられるのはワイの音がマイルに近く更にこの字に里程の里が含まれてゐるからであらう。呎・吋等に口があるのはこの哩に準じて作つたのである。浬（ノット）即ち海里は海の里程をはかる文字として作られたもの。そこで三水。

819〔勿〕コツ ブツ もち　新 モチ（八・一八）

古形から來たもので三本のタレのある旗の象形。人民を至急に集める際にそのしるしとして立てたものである。そこでニハカ・タチマチの意となる。ナカレと打消しになるのは音の假借によるものである。

820〔論〕ロン　新 ロン（八・一八）

言と侖との合字。道理をトクこと。故に言扁。侖は聲符。それより辯明とか議論の意となる。

典 なほ侖は思慮分別することで竹に書いた書きもの即ち書物の象形から來たものである。即ち典

册 籍の典の古形や、書冊の冊の古形と系統を同じうするもの。上古の書籍は竹木を編んで作つたから上記の如き文字が出來たのである。典の字の下部の丌は机の如き臺にて書籍を

大切にしてゐるかたちである。詳細は編の條を見よ。

821
〔狀〕サウ じやう 新 ジヤウ（八・一八）

爿扁に犬を組合はせたもの。本義は犬のスガタ。故に犬を書く。それより廣くスガタ・カタチ。なほ爿は聲符（木及び片を見よ）。

この字は更に轉義してスガタ・カタチをノベルことにもなる。我が國では年始狀・書狀の如く手紙のことに用ゐる。ノベルといふ意から延轉したものである。

822
〔非〕ヒ 新 ヒ（八・一九） 替 あら・ず（一一・二）

飛の字の古形𩙿を省略して左右にさきわかつたもの。飛はその字の條下に說明したやうに鳥が飛んでゐるかたちから出來たものである。ヒラ〳〵するといふ場合に用ゐられる文字。即ち雪などがヒラ〳〵と降るやうな場合である。後に非是の非に假借せられるやうになつたので霏の字なども出來たのである。扉の字に組合はされてゐるのは單に聲符たるばかりでなくヒラ〳〵あけるの會意がある。

823 〔常〕シヤウ じやう　音 ジャウ（八・一六）　訓 つね（九・一八）

尙と巾との合字。モスソのこと。裳と同義にて下部が巾と衣とのちがひだけである。モスソのことだから巾（布を見よ）または衣を書いたもの。尙は聲符である。現在ではモスソの場合には裳を使用し、常は恆（つね）とか久（ひさし）の意に用ゐられてゐる。

824 〔賀〕カ が　新 ガ（八・一九）

加と貝との合字。喜びの意を表するため祝ひの品を贈ること。故に貝を書く。貝は古代の通貨。加は聲符であるが相手の者へ金品を加へる卽ち與へるの會意もある。

慶賀と熟する慶の字の上部は鹿に類似した動物であるから贈答品としてもと動物や貨幣が使用せられたことが想像せられる。贈の字の貝もそのためである。これによつて見るに家畜や貨幣が財産とせられ、これらのものに對して人々が深い所有權の觀念を抱いてゐたことも察せられる。

825 〔席〕セキ じやく　新 セキ（八・一九）

庶の省畫と巾との合字。敷物をシクこと。故に巾を書く。轉じてシキモノ・シトネ・座席。

庶

庶は聲符でもあるがこの字はもと庻と書いたもの、家の象形なる麻垂(まだれ)（庭を見よ）と炗（光）との合字。昔は普通の家には燈火がなかつたので夜になると、どこかの燈火のある家へ澤山の人が集まつたものである。そこでモロ〳〵といふ字を作るに當つて家と光とを組合はせたのである。席の字に特に庶を組合はせたのは敷物は多くの人々が坐るもの。また人が安坐するのは家の中であるからそれらの概念を呼び起さすためのものであらう。

826
〔冷〕レイ りやう　新　レイ（八・一九）　訓　つめたい（一〇・二）　ひや・さん（一一・七）

氷と令との合字。サムイこと。故に二水（氷を見よ）。令は聲符。轉じてヒヤヤカ・スズシ。

827
〔卓〕タク　新　タク（八・一九）

トと早との合字。トは比の變形にてナビク意。早は日が山の上に登つたかたち。そこでこの二字を合はせて、衆人がなびき從ふほど高くすぐれてゐる義の文字としたものといふ。一説にはトは聲符ともいはれてゐる。

828
〔稅〕ゼイ セイ　新　ゼイ（八・二〇）

禾と兊との合字。ミツギを課すること。故に財産として最高の地位を占めた禾穀の禾を書いたもの。兊は聲符（説を見よ）。

ミツギに關する文字に租・賦・貢等がある。これらの文字には禾又は貝が組合はされてゐるのを見るに、古代においては貨幣のほかに禾穀をもつて租税を納入したことがわかる。

829〔是〕ぜ シ じ　新　ぜ（八・二〇）

日と正との合字。タダシクナホキこと。故に正直の正と赫々としてかくれなき太陽（日）とを組合はせたのである。轉じてヨシ。

この字がコレ・ココとなるのは此（し）の音に假借したものである。

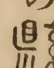
830〔限〕ゲン　新　かぎり（八・二〇）　替　ゲン（一〇・一〇）

阜と良との合字。良は眼の條に説明した通り眼を見開いてよく見ること。阝は高い丘であるから、丘に登つて見渡すカギリを見るの會意によつてこの文字を作つたものである。

831〔費〕ヒ フツ ふち　新　ヒ（八・二〇）　替　つひや・す（一〇・七）　つひえ（一一・一一）

弗と貝との合字。財産を散じへらすこと。故に貝。貝は古代の通貨。弗は拂の條下にある如く塵取りの象形であるから貝貨を塵や芥の如く掃き捨てる會意もある。弗はまた聲符でもある。轉じてツヒエ・イリヤウ。

832〔縣〕ケン　新　ケン（八・二〇）

この字は府縣郡村の如く行政區域をあらはす文字として用ゐられてゐるが本義は人の首を獄門にカケルといふ意味である。その古形に等があるが人間が逆さにされて繩で樹木にぶらさげられてゐるかたちである。この木が省かれたのが小篆ので今形縣の前身である。左扁は首といふ字を逆にしたものであるが目が顔（顔を見よ）の代表とせられるやうに、ここでは首をもつて全身なることをあらはしたのであらう。といふのはごく古へは刑罰も原始的で、たしかに古文に見えるが如く殘酷な方法を用ゐたものに違ひない。春秋戰國に帝の縣解とか孟子に倒懸を解くが如しなどあるのは、かくの如き乃至これに類した嚴罰が、ずつと以前に行はれてゐたのでそれらのことが頭にしみ込んでゐるからである。

　この字が郡縣の縣として使用せられるやうになつたのは刑罰は司法權の發動するものであり、司法權を行使するのは役人であるから、やがて役人が統治する一般的行政區域の稱となつたもの

である。

他の說では支那ではもと縣は郡の下にあつた（州の條を見よ）ので、郡に係屬しカカツテゐるからだとされてゐる。

懸

なほ縣の字に心を組合はせた懸は縣の俗字であるが、專らカケルといふ意に用ゐられてゐる。心にカケルの會意である。

833 〔院〕キン　新　キン（八・二〇）

阜と完との合字。堅固に築いた垣のこと。堂々たる建物は見晴らしのよい高いところに築くので阜を書く。完は聲符。轉じて大審院　會計檢查院の如く役所の意に用ゐられる。更に寺院と熟しテラのこととなるのは、もと役所の意味だつた寺がテラの意に用ゐられるやうになつたからである。寺の條を見よ。

834 〔路〕ロ　新　ロ（八・二〇）　替　ぢ（一〇・六）　みち（一〇・一一）

足と各との合字。ミチ。故に足偏。各は聲符であるがまた會意をもかねてゐる。各の條を見よ。

835 〔裁〕サイ ざい　新 サイ（八・二〇）

𢦏と衣との合字。着物をたつて作ること。故に衣を書く。轉じてワカツ・タダス。上部は聲符であるが栽の條下にて説いたごとく、この字が聲符として加へられた文字は裁に布帛を切る、截に鳥を切るの如き會意がある。これは戈（ほこ）から來るのである。なほ載も車戰に關係したもので戈より會意を見出すべき文字である（栽を見よ）。

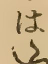
836 〔判〕ハン　新 ハン（八・二〇）　假 小判（こばん）（七・一七）

半と刀との合字。ものを半分にワカツこと。故に半と立刀とを組合はせたもの。半は聲符ともなつてゐる。轉じて可否善惡を見分けることとなり判斷・判定　裁判の如く使用せられる。

我が國ではこの字はハンとしカキバンや印行（いんぎやう）のことに用ゐる。書體を判じて眞疑を判定することや、割り判の符節を合するが如きものの意から使はれるやうになつたものであらう。また四六判・大判・小判の如く物の大きさをあらはす場合にも使用せられる。

837 〔務〕ブ む　新 つとめ（八・二〇）　替 ム（九・二四）

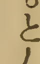
もと單に敄と書いたもの。仕事に力を盡すことであるから後に力が加へられて現形となつた。轉義してツトメ・シゴト。

なほ敄は聲符であるがその古形は矛と攴との合字にてツヨシと訓ずる字。そこで手（又）に鞭の如きものをもつてゐるタタクといふ字を書く（敎・牧を見よ）。矛は聲符であるがその古形はにて槍の象形で、兵車に立てる長さ二丈（約我が七尺八寸）のものである。そこで敄における矛は會意も含まれてゐる。

838〔財〕サイ ざい　新 ザイ（八・二〇）　假 財布（七・一七）

貝と才との合字。財産となるもの。故に貝を書く。貝は古代の通貨。才は聲符でもあるがこの字は草木が地上に出ることで材の本字だから、役に立つといふ會意も含まれてゐるのだらう。

839〔收〕シウ　新 シウ（八・二〇）

丩と攴との合字。左邊は叫の條に述べた如くもとと書いたものである。收の場合において聲符となつてゐるので義は攴より見出すべきものである。攴の古形は攴で手に一本の棒をもつて

ゐるかたち。即ち敎・牧等の旁と同じく一種の支配權を意味したものである。そこで支配者が部下を督勵して財物を持ち來たらす意をあらはしたものでヲサムとなるのである。

收の字は略して収の如く又と書かれる場合がある。又は右手の象形であるからこれでも惡くはないわけである。

840〔器〕キ、　新　うつは（八・二一）　替　キ（九・五）

口を二づつならべたものの中に犬を組合はせたもの。口は皿とかどんぶりの如きウツワモノを意味したのである。特に犬が加へられてゐるのは、犬は六畜の中でも一番卑しいものであるから一般の人が常食としたものである。そこで三度が三度皿の上にのせられる犬を組合はせてウツハモノなる意を更にはつきりさせたのである。

841〔歌〕カ　新　うた（八・二一）　替　カ（一〇・三）

現形では哥と欠との合字であるがもとは單に哥と書いた。ウタフことであるから人が口をあけてゐるかたちの欠を後に加へたのである（吹を見よ）。

哥は可を重ねたもの。可の字はヨロシといふ意でカカの如くよい言葉をいくつも重ねると歌に

なるとの意で作られたものである。

842 〔圓〕イン ゑん　新 まるし（八・二一）　響 エン（一〇・四）　假 高圓（たかまど）（一二・二〇）

もとは單に圓形○をもつてあらはした。あだかも方の字の最古形が□であるのと同樣である。○はものを數へあげる際のシルシとして用ゐられるので○と貝とを組合はせて員數の員の字を作つた。貝は古代の通貨であるが貝貨を數へることをその代表としたものである。後さらに員の字の外廓へ○をつけマルなる意の文字としたのであるが、重複の甚だしいものである。國の字が或に□を組合はせたやうに○や□は文字として幼稚に見えるので次第に繁畫にされるやうになつたものである。なほ員の上部、圓の外廓はともに現形では方形となつてゐるが、圓形から次第に變化したのである。普通に圓の字の如き外廓を「國構へ」といつてゐるが、國の字においては方形をもつて國土をあらはしたものだから一と口に國構へといはれるものの中にも方圓二種のあつたことを忘れてはならない。

圓の字は我が國では貨幣の單位として用ゐられてゐる。

843 〔頒〕ハ　新 すこぶ・る（八・二三）

皮と頁との合字。本義は頭が一方へかたよつてゐること。故に頁（頯を見よ）。皮は聲符。轉じて廣くカタムク・カタヨル。そこで一方へ偏してゐるところよりスコブルともなつた。

844
〔閣〕カク　新　カク（八・二三）

門と各との合字。扉をとめるカンヌキのこと。故に門を書く。各は聲符。轉じて天守閣・銀閣の如くタカドノの意に用ゐられる。閣下と熟して敬避の稱となるのは高貴な人の實名をはばかりその高大なる建物をもつてあらはしたのである。陛下・殿下に類する語である。

845
〔張〕チャウ　新　はり（八・二三）　替　チャウ（一一・六）

弓と長との合字。本義は弦をハルこと。故に弓扁。長は聲符。轉じてハル。

846
〔飛〕ヒ　新　と・ぶ（八・二四）　替　ヒ（一〇・一一）

古形は[illegible]で鳥が羽をひろげて飛んでゐるかたちをあらはしたものである。羽毛が風にあふられてゐる様であらうと思ふ。ものがヒラ／＼してゐるといふ意の非もこの字から分化して作られたものである。

847
〔佐〕サ　新　サ（八・二四）

人と左との合字。補佐と熟するやうにタスケルこと。そこで左手と人とを組合はせたのである。なほ人と右とを組合はせた佑も天佑と熟しタスケルこと。左・右・手等の條下に説明した通りである。就いて參照されたい。

848
〔胃〕キ　新　キ（八・二五）

現形は田と肉月（肉を見よ）との合字であるが、小篆ではとなつてゐる。現形の上部は省略されたものであるが、小篆によれば胃の中へ咀嚼物の入つてゐることがはつきりわかる。その内部は咀嚼されるものをあらはしたのであらうが、この字を米の字の古形と解釋すれば支那人が米を主食としてゐたことがわかるのである。

849
〔坐〕サ　ざ　新　すはり（八・二五）　替　ザ（一〇・一二）

古形から來たもので上部は人が向ひ合つてゐるかたち。下部は土の字。そこでスワル。我が國では坐ることをオハスといふので居るとか在るとかの敬語として用ゐる。但し「御座候」は

麻垂のある方を用ゐてゐる。

なほ麻垂（疒を見よ）は後に加へられたもので坐の方はスワルといふ動詞の場合に用ゐ、座は坐る場所・敷物・居所等の名詞に用ゐてゐる。

850 〔給〕キフ―ケフ ごふ　新　たま・ふ（八・二五）　替　キフ（九・一一）

糸と合との合字。ものを絶やさずあてがふこと。即ち供給の給がその本義。絶やさない意味にて細く長くつらなる糸を書いたもの。合は聲符。

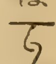
我が國にてはタマフと訓じ動作の動詞に添えて敬語とする。「思召し給ふ」「下し給ふ」がそれである。

851 〔招〕セウ　新　まねく（八・二五）

召の字へ後に手扁が加へられたもの。召はその字の條下に説明したやうに口で呼び寄せること。手にてサシマネクの意にて手扁を加へたのである。

招は招待と熟し禮を盡して客などをマネクことに使用するが、召はメスと訓じやや命令的の場合に用ゐてゐる。即ち召集の如き場合がそれである。

852〔互〕ゴ　新　たがひ（八・二五）　舊　ゴ（一一・六）

この字は縄を巻きつける道具のことである。卽ちその古形はで工字形の縄巻きに縄が巻いてあるかたちをもつてそれをあらはしたもの。卽ち内部のは叫の條にて説明したやうにものがコンガラガルかたちをあらはしてゐる。それより互の字は轉義してヨヂレル・タガヒニ等となのである。

853〔損〕ソン　新　ソン（八・二六）

手と員との合字。ものを減らすこと。そこで手中にある財物（員にてあらはす。その條を見よ。）をなくするの會意。員はまた聲符をもかねてゐる。

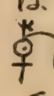
854〔機〕キ け　新　キ（八・二六）

木と幾との合字。カラクリのこと。轉じて機械の機。そこで木扁。幾は聲符でもあるがその字の條下に説明したやうに精巧緻密の會意を含ましめたものであらう。

855 〔械〕カイ げ　新　カイ（八・二六）

木と戒との合字。罪人を戒しめるために作つた木のカセ。故に木と戒。戒は聲符をもかねてゐる。轉じて器具の總稱。

856 〔乾〕ケン かん　新　かはき（八・二六）

倝と乙との合字。本義はノボルこと。轉じてカハク。乙は气（汽の本字）と同系統のもので空氣などの上昇する意をあらはしたもの。倝は聲符であるがその古形はで朝日が山の端から登る際にギラ〴〵と輝くこと。故に旦（朝を見よ）と㫃とを組合はせたもの。但しこの場合の㫃は聲符である。■は旗・遊の條下に述べたやうに旗が風に飜へること。

857 〔温〕ヲン　新　ヲン（八・二六）

水と𥁕との合字。本義は川の名ともいはれまた酒をあたためることともいはれてゐる。いづれにしても水に關係してゐるところより三水。𥁕は聲符でもあるがこの字は囚と皿との合字。囚は檻

囚　中に人が入れられてゐるかたちでトラハレビトのこと。罪人へもなほ食物を與へてやるといふ會意によつて人情のアタタカキ意の文字としたのである。溫の字の三水が女になると媼となり老婆

媼　のこと。老婆は孫を偏愛するのでかかる會意文字が出來たのである。

溫の字の成因は以上のやうなわけで出來たものであるから、旁の上部は日でなくて囚が原形に近い。

858 〔誕〕タン だん　新　タン（八・二七）

言と延との合字。本義は大言壯語をして人をあざむくこと。誕言(たはごと)と使はれる文字。この字が誕生と使はれるのは、赤ん坊が産まれる際のオギャアと大聲に泣くその聲から聯想されたものかも知れない。

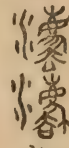
859 〔亡〕バウ ブ まう む　新　バウ（八・二七）　替　ほろぼ・す（九・三）・ほろ・ぶ（一〇・一八）

古形は亾で入とㄴとの合字。ㄴはかくれる意をあらはし隱の古字（區・匿・眞・直を見よ。）。そこで亡は人がニゲカクレルこと。轉じてウシナフ。ホロブ。

860〔忌〕キ　新　キ（八・二七）

己と心との合字。キラヒニクムこと。故に心を書く。己は聲符。轉じてイム　死者の命日。

861〔法〕ハウ ほう　新　ホウ（八・二七）

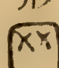
古形はにてもと灋と書いたものが省略されて現形となつたものである。オキテ。テホン。ノリ。道理などいふ意味の文字。古形は水と廌と去との合字である。水はいかなる器に入れても水平を保つので公平の概念をあらはしたもの。廌は鹿に似て頭部に一本の角のある神獸。君王の刑罰が常によろしきを得れば、朝廷に出現するといはれる。人間の罪惡をさとるに甚だ敏感で、若し罪のあるものがこれに觸れれば直ちに角をもつてその人を傷つけるので、皐陶は罪があるか、ないかを判定しかねるやうな場合には、この神獸を用ゐたといはれてゐる傳說中の假想動物である。

去の字は罪惡を除去する意味。卽ち法の字は罪惡を除去して、刑罰を公平にするの考へから來た文字である。勿論廌といふ動物は現實のものではないが、かくの如く傳說が文字の中に織り込まれて作字される場合は稀にある。麥や來の字の如きものも、その一例である。

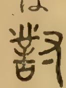
862 〔澤〕タク ぢやく　新 さは（八・二七）　替 タク（一二・一〇）

水と睪との合字。ものが水にうるほつてツヤのあること。故に三水。睪は聲符。轉義してウルホフ・メグミとなり、また物が豊富にあること。

略字として沢と書くのは尺が睪の音に近いからである。

なほ睪の字は罒と㚔との合字にて目くばせして罪人を捕へること。㚔は報の條下で説明したやうに罪を犯した者のこと。上部の罒は目といはれてゐるが罪　罰等の上部と同じく綱の古形ではなからうか（非を見よ）。

863 〔對〕タイ つゐ　新 タイ（八・二八）

古形はにて小篆はである。草木が盛んに發生する意のと士と又（右手の象形）とが古形であるが、小篆では土が士となり、又が寸となり更に口が加へられてゐる。人に應對するには紳士的で、しかも要領を得さしめるために言葉を豊富にし、その間自ら法則（寸）のある會意として應對の對としたものといふ。轉じてコタヘまた一對の對となる。

864 〔墓〕ボ む　新 はか（八・二八）　替 ボ（一〇・二三）

莫と土との合字。死人を葬る丘のこと。轉じてハカ。ツカ。故に土を書く。莫は聲符であるがこの字は暮の字の條下に說明したやうに暮の本字。卽ち太陽が草原の中に沒する意匠から出來た文字であるから、一は人の死を日の暮れることになぞらへ、また一は死人を草中に葬るの會意もあるのである。葬の字を參照せよ。

865 〔詣〕ケイ ゲイ がい　新 ケイ（八・二八）

言と旨との合字。伺ひ至ること。故に言扁。旨は聲符。造詣と熟し學識の深いことに使はれるのはイタルといふ意から來たものである。我が國ではマウヅと訓じ神社佛閣へ參拜することに用ゐてゐる。

866 〔浴〕ヨク　新 あ・ぶ（八・二八）　替 ヨク（九・一六）　ゆあみ（一一・一九）　假 浴衣（ゆかた）（五・七）

一 水と谷との合字。身を洗ふこと、卽ちユアミ。そこで三水を書く。谷は聲符であるが、水の流れる源であるから洗ふの會意も含まれてゐる。

867
〔馴〕シュン じゆん　新　なれ（八・二八）

馬と川との合字。馬が從順なこと。故に馬扁。川は聲符。巡の字の巛が川から來たことを思ひ合はすれば自ら諒解されるであらう。轉じて廣くナレル・シタガフ。

868
〔疊〕テフ　新　デフ（八・二八）

もと曡と書いたもの。上部は日を三つ組合はせたものであるが、下部は現在の宜の字である。昔の裁判官が罪を裁定するには三日間も評議をこらし、最も宜しきを得るといふ意。三日といふのは「我日に三たびわが身を省りむ」の如く數の多いことをあらはしたのであるが、それより轉義して日數を重ねることとなり更にカサナル・タタム・タタミとなつたものである。

現形で日が田となつてゐるのは、王莽が漢の天下を乘り取らうと企てたとき、刑罰を課するにかくの如く裁判が鄭重になされては民心が朝廷から離反しないので、そのことをにくらしく思ひ三日を三田としたものだと傳へられてゐる。

869
〔魂〕コン ごん　新　たましひ（八・二八）

云と鬼との合字。タマシヒのこと。目に見えない幽冥界に屬するものだから鬼を組合はせたもの。鬼の條を見よ。云は聲符。

870
〔誠〕セイ じやう 新 セイ（八・二八） 替 まこと（九・二一）

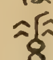
言と成との合字。イツハリナキこと。卽ちマコト。一度口にしたことは必ず成し遂げるとか完成した言葉とかの會意。成はまた聲符ともなつてゐる。

871
〔質〕シツ しち 新 シツ（八・二八）

斤を二つと貝との合字。斤は斵の旁と同字にてものを斵ち切るナタ。貝は古代の通貨。この字の本義は信を約することであるが、お互ひに心を許し合ふ證據として大切なもの（貝）を互ひにあづけあふの會意である。斤を二つ書くのは、一つのものを切つて預けあふの意をあらはしたものである。我が國の戰國時代に妻や母を交換して預けあつたやうなことを思ひ合はすればわかるであらう。そこで質物の質ともなるのである。質素の質となるのは信を約することは二心のないことだからである。

872〔素〕ソ す　新 ソ（八・二八）

染めない色のこと。故にシロ。質素の素となるのは手數をかけてゐないからである。また素材の如く生地のままの材料。

素の字は古形はで、上部のは垂の古形である。垂の字は花びらが、ふさ〳〵と垂れ下つてゐるかたちから出來たものである（花の條を見よ）。卽ち馬醉木（ねむのき）や藤の花などを見ればうなづけるであらう。糸の字が色彩をあらはす文字に應用されてゐることは、その字の條下で說明した通りであるが、垂れ下つてゐる花、必らずしも白地とは限られてゐない。寧ろ何かの色を持つてゐるものの方が多いのであるが、花房がムキダシのまま白日にさらされてゐることを聯想して組合はせたものかも知れない。

第九章　巻九の新出漢字

873 〔雞〕ケイ かい　新 にはとり(九・一)　替 ケイ(九・四) とり(一〇・九)

奚と隹との合字。ニハトリのこと。故に隹を書く。隹は鳥の條下で説明したやうに尾の短い鳥の象形。そこで雞は鷄とも書く。奚は聲符であるが支那でニハトリといふ言葉のケイは、雞の鳴き聲の擬聲から出來てゐるのでその音をもつ奚を隹に加へたものである(腹を見よ)。我が國においても古語では雞のことをカケといふがこれもコケッコーと鳴くその鳴き聲の擬聲から出來た言葉である。漢字における鵞(がてう)・鳩(はと)・鴉(からす)等の我・九・牙等はすべてそれらの鳥の鳴き聲を組合はせていかなる鳥かをあらはしたものである。

874 〔廻〕クワイ ゑ　新 まはり(九・二)　替 めぐり(一一・八) クワイ(一二・二〇)

回と廴との合字であるがもとは單に回と書いたものである。メグルといふ意に用ゐられるの

で、後に足步の象形から出來た夊が加へられたのである。夊は行の條下に說明したやうに之遶と同義である。古形は乀で之遶の辵の畫を省略したものに過ぎない。

なほ回と廻との使用上の慣習については回の條を見よ。

875 〔邊〕ヘン　新　ヘン（九・二）　替　ベ（一二・一）

臱（ベン）と之遶との合字。斷崖のほとりを步くこと。故に之遶（行を見よ）を書く。臱は音符として組合はされたもので、本義はものが見えないことであるが、その成因については未だ適確なる說がない。

邊の字は略して辺と書く。なほホトリ・サカヒ・カギリ等の意となるのは轉義したものである。

876 〔屬〕ショク ぞく　新　ゾク（九・二）

尾の省畫と蜀との合字。本義はものが連續すること。故に身體の後へ垂れてゐる尾を書いてそれをあらはしたもの。蜀は聲符。轉じてツキシタガフ・テシタ・親族・同類・下役人（守の條を見よ）等となる。

なほ蜀は桑につく虫のこと。故に虫を書く。上部はその虫の象形である。

877 〔移〕イ—シ　新　うつり（九・二）　替　イ（一〇・一一）

禾と多との合字。苗床に植えた稻の種を田へウツシテウヱルこと。そこで禾扁。禾は稻の條下に説明したやうに穀物が實つてゐるかたちから出來た文字。

多は聲符であるがイとタとは甚だ遠いやうに思へる。これはタがシとなり更にシがイに分化したものである。奢侈（シャシ）の侈における多も聲符である。

878 〔殊〕シュ じゆ　新　こと（九・二）　替　シュ（一二・四）

歹と朱との合字。人を殺すこと。そこで死の條下に説明したやうにガツヘンを加へたもの。朱は聲符。コトニスとなるのは切り殺された人の首足がその處を異にすることに聯想したものである。それよりまたトリワケテとなる。

誅

ガツヘンを言扁にかへれば誅の字となる。これは言葉をもつて人を抹殺するの意である。天に代はりて誅すといふのは天に口（言葉）なけれども人がこれに代つて社會的の制裁を加へるの意である。

879
〔幹〕カン　新　みき（九・二）

この字はもと榦と書いたものといふ。即ち榦と木との合字にて土をもつて牆(かき)を築く時、土が崩れ落ちないやうに兩端にたてる井桁のこと。故に木。榦は聲符（乾を見よ）。轉じて主要部の義となるのは牆を築くにはこの井桁を標準とするからである。また樹木のミキともなる。

880
〔肉〕ジク　にく　新　ニク（九・二）

古形は。小篆では。いづれも肉の一片を取り肉の筋をえがいてニクなる意の文字としたのである。他の文字に組合はされて肉又は身體に關するものの意があらはされる。腐の字の如く現在我々の用ゐる肉の字そのままのものもあるが多くの場合、腦・臟・腑・肺・胞・胎・背の如く月(つき)の字に似た形をとる。そこで月(つき)と區別するために肉月(にくづき)といはれてゐる。

肉月の組合はされた文字には我が國で作られた文字がかなりある。文學博士井上哲次郎氏の「康熙字典にもない新字――明治初年の譯語譯文」（漫談明治初年に掲載）によれば

今日では西洋の書物を翻譯することが大分容易になり、亦種々の便宜もある。字引のやうなものも多くなり又疑はしい所は夫々專門家に就いて意味を質すことが出來る。固より翻譯事業は維新前から始まつてを

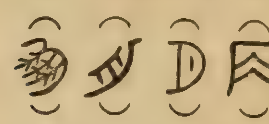
る。蘭書の翻譯などから始まつて來たのであるが、明治の初年迄は非常に困難な事業であつた。

眞先に日本で開けたのは醫學、兵學のやうに覺えてゐる。醫學の方は初めは蘭書の翻譯であり、そして其頃の學者（多くは醫者）は大抵文章も能く練れてをり、譯語にも中々工夫を凝らしたもので、餘程良い書物があつた。餘程苦心したものと見えて、日本にない言葉や、又支那人の迚も使はない言葉が解つたのである。それで譯語にしても譯字にしても我國に出來たものが隨分ある。其頃の譯語を今でも使つてゐるのであるが、中々立派な譯語がある。神經などと言ふ醫者の言葉は永く使はれてゐるし、又字にしても迚も漢字で表すことの出來ぬものがある。今の青年は漢字と思つてゐるかも知れない。其二三を擧げると、一は膵(Puncreas）と讀ましてゐるが、是は全く拵へた字で、幾ら康熙字典を開いて探してもない。日本で其頃拵へた斯樣な字は支那にはないが、斯樣な字で飜譯しないと工合が惡いから拵へたのである。

膣（Vagina）と言ふ字は字典には「肉生也」とある。其字を借りて新しい意味に使つたのである。それから腺（Cland）、是も其頃拵へた字で字典にはない。當時使つた字は中々旨い。

膵にしても腺にしても何だか漢字にありさうな字である。斯樣に字も蘭學者が新に拵へて、種々の原語を飜譯したのである。醫學の言葉で其頃出來た譯語が今に至つて澤山使はれてゐる。永久日本語として使はれるに違ひない。併し乍ら明治初年からして色々外の學問が攻究されて來た。哲學關係の諸學科を攻究することになつたのは明治以後である。初め日本語で哲學を講ずるは中々困難で、英語で講じたのである。哲學上の術語等は日本で言へなかつたが、其後次第に工夫して今日では日本語でも哲學の講演が出來る樣になつた。

なほ肉の字に酷似したもので成因のちがふものを掲げると、



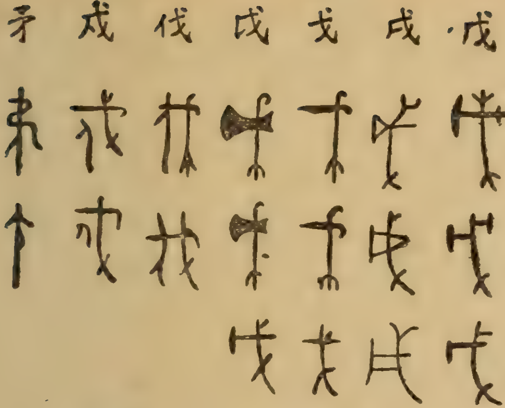
（1）肉（にく）　月　古文に右端の離れてゐるものもあるが、肉の筋をえがいたものだから二線の兩端を接續すれば他と區別が出來る。

月（つき）　月　内部の點は月面の班紋であるから右端を離して區別する。明・期等の傍。

舟（ふね）　月　獨木舟の象形から來たもの。兩端を離して區別する。朕・服等の左扁。

（2）朋　朋　鳳皇といふ鳥の飛んでゐるかたち。舟月（ふなづき）に近いものをやや斜にすれば區別が出來る。鵬・崩に含まれてゐる。

881〔茂〕ホウ　も　新　しげし（九・二）　替　モ（一一・二三）



（第三〇圖）

もと戊がシゲル・サカヘル等の意をもつた字であるが、後に草木が盛んに繁るの意で草冠がつけられたものである。

戊の字は第三〇圖（一）にあるが如くその古形から見るにたしかに武器の象形にちがひない。その音も矛に近い。この字に酷似してゐる戌の字もやはり武器の象形で意味はナルとかックスといふ文字である。成の字、威の字、滅の字に含まれてゐるのは武器をもつて敵を打ち滅ろぼし、平らげ盡し、味方の功を成し遂げるからであらう。第三〇圖の古形を比較して見れば、このことは直ちに了解されやう。

武器の象形よりなれる文字をあげると干・戈・殳・矛・弓・矢等少くない。そしてその性能を應用してコロス・ウツ・キル・マモル等の意の文字に廣く用ゐられてゐる。

882 〔靜〕セイ じやう 新 しづか（九・二） 巷 セイ（一二・一九）

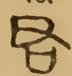
青と爭との合字。物を描いた場合の色彩がいかにも濃やかに、しかもクッキリとあらはれてゐること。そこで靑の字を書くのであるが、この字は丹靑と熟し彩色の代表とせられ又繪畫のこともなるから、この二字の中特に言葉の音にも近い靑の字を選んで組合はせたのである。なほ爭は聲符であるがこの字は上下に手が組合はされてゐるので、その字面から丹靑をこらす有様を想ひ浮ばさしめる意圖が含まれてゐるのであらう。

シヅカとなるのは音の假借である。

883 〔紫〕シ　新　むらさき(九・二)

此と糸との合字。ムラサキのキギヌ。故に糸を書く。此は聲符。色彩をあらはす文字に糸が組合はされてゐることについては糸の條を見よ。

834 〔群〕クン　ぐん　新　むれ(九・二)　替　グン　(九・一九)　むらがる(一〇・一九)

君と羊との合字。ムラガリアツマルこと。羊はおだやかな性質をもつてゐるので同類でいつもムレをなすからその習性を應用して羊の字を組合はせたものである。君は聲符であるがこの字の古形はで牧の字の旁と同じく手に鞭をもつてゐる形が含まれてゐるので牧者がもつ鞭を聯想して特にこの字を選んだものであらう。しかも人民を統治する人を牧者といひ牧民・十二牧（十二州の長官）といふ語もあるやうに君卽ち統治者を牧者と見たのは明らかである。だから群における君にはともすれば迷ひ勝ちになる羊の群をムレアツメルヒトの會意も含ませられてゐる。

なほ羊と反對の動物の性狀を應用したものに犬から出來た狐獨の獨、疑獄の獄がある。犬の條を見よ。

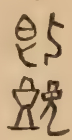
885 〔性〕セイ しやう 新 セイ（九・二） 呉 シヤウ（一二・一四）

心と生との合字。生れながらに持つてゐる心の素質。故に生と立心扁とを書く。生はまた聲符ともなつてゐる。轉じて情欲・男女の別・才能等の意となる。

886 〔勅〕チヨク ちき 新 チヨク（九・三）

本義はイマシムルこと。束と力との合字。もと敕と書いたもので旁は敎の字の旁と同じく手に鞭をもつてゐるかたち。注意を喚起せしめるために輕くたたくといふ意があらはされてゐる。力となつたのは努力させる意。左邊の束は結束の束にて氣持ちをひきしまらす會意で更に聲符をもかねてゐる。ミコトノリとなるのは轉義したものである。

887 〔既〕キ け 新 すで・に（九・三）

古文のから來たもので本義は食事を終へたこと。スデニとなるのはその爲である。鄉の條下で述べたやうに第一形では左邊は食の字の下部と同形で炊いた飯のこと。それに背をむけて食事がすんだことをあらはしたもの。第二形の左扁は食器となつてゐる。上部に蓋をして食事

の終つたことをあらはしたものでもあらうか。

888 〔俄〕ガ　新　にはか（九・三）

人と我との合字。人がニハカに立ちどまること。故に人扁。我は聲符。一説には首をかたむけて歩くことともいふ。いづれにしても形聲文字である。

889 〔危〕キ ギ　新　あやふし（九・三）　替　キ　（一〇・四）

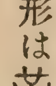
小篆にて。上部は人の象形たる。厂は崖の本字にてその象形。即ち崖の上に人が立つてゐるかたちをもつてアヤフキ意の文字としたものである。下部のは節の本字にてツツシム即ち危險なことをツツシム意で組合はせたものといはれてゐるが、卩は人と字形が類似してゐる（郷の條下を見よ）のでもと下部も人ではなかつたらうか。即ち斷崖の上に立つてゐる人を下から見てアヤフシと感ずる會意かも知れない。もつとも危の字には正しいといふ意もあり未だ速斷するわけにも行かない。

890 〔敷〕フ　新　しき（九・三）

本義は政治をとり行ふこと。古文では單に現形左扁ののみであつた。右旁は政・敎などと同じく支配權を意味するもので施行の義を深めるため後に加へられたのである。

そこで古形であるが、これは甫の省畫と又と寸との合字。政治を取り行ふことを寸と又とにてあらはし、甫を聲符（補を見よ）としたものである。現形では筆書の關係から寸が方に變形してゐる。敷物・坐敷の如くシクの意になつたのは政治を天下に施行卽ちシクの意からである。布の字が布令・布告などと使はれるのと同樣である。

891 〔皮〕ヒ び　新 かは（九・三）　替 ヒ（一一・三）

古形はにて獸の皮を手（）ではぎ取つてゐるかたち。はがしたばかりのもので、更に手數を加へて毛を去り膏をぬき取れば革となる。卽ち革の古形はで手數をかけて加工を施したものの意をあらはすため手が一つ餘計に加へられてゐる。

皮は獸皮より轉義して一般にものの上皮となる。

892 〔保〕ホ ハウ ほう　新 ホ（九・五）　替 たもつ（一二・三）　假 享（きやう） 保（ほう）（一二・一二）

人と呆の合字。呆は孚と同字にて鳥が卵を孵化すること。乳の條下で說明した通りである。本

義はソダテルこと。そこで人とこの字とを組合はせたのである。孚はまた聲符とを兼ねてゐる。保は轉義してタモツ・マモルともなる。

823 〔護〕ゴ　新　ゴ（九・五）　替　まもり（一一・一九）

言と蒦との合字。親切に見舞つてやること、故に言扁。

蒦は聲符であるが、この字は隺と又との合字でものをハカルこと。寸や丈が手から來てゐるやうにもとはものの長さを手尺といつて親指と中指とではかつたので右手の象形から出來た又の字を書いたもの。そこで護においては人の氣持ちをオシハカルの會意もある。

蒦において隺は聲符である。ヅクの一種であるがこの字の古形はと書き下部は隹（鳥を見よ）。上部は毛角をあらはしたもの。この鳥は人間の吉凶禍福を豫知すると傳へられてゐるから護においてはこの字からもまたオシハカルの會意が見出される。

824 〔容〕ヨウ　新　ヨウ（九・五）　替　い・る（一二・二七）

ウ冠と谷との合字。ものをイレルこと。家は（ウ冠）人をイレルところであるからウ冠を書き谷は聲符。容貌・寛容などと熟してカタチ・ユルヤカとなるのは音の假借である。

895〔例〕レイ　レツ れち　新　レイ（九・五）　替　たとへば（九・五）

人と列との合字。本義は人がナラブこと。故に人と列。列は聲符ともなつてゐる。轉じてクラベル（比例）、ナラハシ（習例）、オキテ（前例）となる。

896〔蝶〕テフ でふ　新　テフ（九・五）

虫と枼との合字。テフ〱のこと。故に虫扁。枼は聲符であるが葉と同じく羽のヒラ〱することの會意もあるだらう。

897〔枯〕コ く　新　かれ（九・五）

木と古との合字。カレキのこと。故に木扁に古の字を書く。古はまた聲符をもかねてゐる。

898〔裏〕り　新　うら（九・五）　替　り（一二・二〇）

古形は⿴衣里にて衣の析文（一字の字形を二箇に析いたもの）と里との合字。着物のウラのこと。故に衣。里は聲符。この字と對をなす表の字も衣から出來た文字である。裏は着物のウラより轉義して一般にモノの

ウラのこととなる。またウチともなる。

なほ裡の字も裏と同字であるがこの方は衣と里との兩字がそのまゝで組合はされてゐる。

8·9 〔警〕ケイ きやう　新　ケイ（九・五）

敬と言との合字。人をいましめつつしましむる言葉。故にこの兩字を組合はせたもの。敬は聲符にもなつてゐる。

900 〔戒〕カイ　新　カイ（九・五）

小篆にて𢦔。人が兩手で入念に戈を持つてゐる會意で卽ち兵器を持つてサアコイと待ち構へてゐることである。警戒の警も大體に同じ意味であるが一方は武器、他方は言葉によつてイマシメマモルのである。

904 〔蜂〕ホウ ふ　新　はち（九・五）

虫と夆との合字。ハチのこと。故に虫扁。夆は聲符であるがホウといふ言葉はもののとがつてゐること。故に峯・鋒等に加へられてゐる。蜂は劔をもつてゐるからであらう。或ひはまた羽音

のブン〳〵といふ擬聲ともいはれてゐる。蚊における文はたしかに擬聲からであらうが蜂の場合はどうであらうか。

902〔臭〕シウ　新　シウ（九・五）

自と犬との合字。鼻（自は鼻の本字）はニホヒをカグ所、犬は又動物中最も臭覺の鋭敏なるもの。そこでこの兩字を組合はせて、ニホヒ・カグ・クサシなどの字としたものである。

903〔福〕フク　新　フク（九・六）

示と畐との合字。フクは神より授けられるものゆえ示扁（祖・示を見よ）。畐は聲符でもあるがこの字の古形はで富の本字。神に熟穀を捧げる意の（享）の字によく似たもの（熟を見よ）で、ともに祭器の形にして下部に物の充實してゐるしるしが加へられてゐる。享は神がウケルこと、福は人が神からウケルことゝなつてゐる。

904〔志〕シ　新　こころざし（九・六）　替　シ（一一・二八）

小篆にて。現形では士と心とになつてゐるが實は小篆の如くもとは之と心との合字。之は

聲符でもあるがユクといふ意味の文字であるから心のオモムクところといふ會意も含まれてゐる。卽ちココロザシ。

905 〔研〕ケン ゲン　新　ケン（九・六）

石と幵との合字。玉をミガクこと。故に石扁。旁は聲符であるが、開の字開の內部と同樣に兩手に利かせてゐることは明白である。

906 〔究〕キウ く　新　キウ（九・六）

穴と九との合字。奧深いところをキハメルこと。この字の九は聲符であるから丸と書いてはその音が出ない（染を見よ）。

穴は奧深きこと、限りなき意をあらはすために加へられたものである。

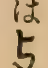
907 〔讀〕トク どく｜トウ つ　新　よみ（九・六）　替　ドク（一〇・二六）

言と賣との合字。書物をヨムこと。故に言扁。賣は聲符にして會意をかねたもの。この字は續・犢等に含まれるものと同形であるが、商賣の賣の字とは成因がちがふ。賣買の賣はその古形

にて、出と网(絹の象形)と貝(古代の通貨)との合字であるが、讀の旁は親睦の睦の古形と貝との合字である。睦の字の古形の下部は目の變形であるが、目を和げてムツマジクするの意をもつて組合はされたもの。そこで讀の旁の四字型のものは目の象形のから來たものといふことがわかる。なほ讀の旁は呼賣の行商といふ意である。そこで貝を[illegible]へ上部は聲符である。

更に讀においてその旁は呼賣りする際に聲を出すのでその會意も含められてゐるであらう。

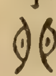
903〔政〕セイ しやう　新　セイ(九・六)

正と攴との合字。人々を鞭撻して正しき道に向はしめること。即ちマツリゴト。故に正の字と攴といふ字を加へたもの。攴は現形では夂となつてゐるが教・牧・敕等の旁と同じく古形はにて手(又)に一本の鞭をもつてゐるかたち。支配者が人民に指揮命令することをあらはしたもの。なほ正は聲符をもかねてゐる。

909〔關〕クワン けん　新　クワン(九・六)　替　せき(一一・八)

門と丱との合字。門の扉を閉ざすカンヌキのこと。故に門を書く。内部は關聯の聯の字の旁とは異りもと丱と書き絹を織る際に糸を杼に通すことで上部が糸をあらはし下部はその有様をかた

ちにあらはしたものとされてゐる。しかしこの字は關の字の古形の内部に見受けられるやう門扉にカンヌキをさし込んだかたちではなからうか。そして糸はシバルやうな意味で加へられたのであらう。しかも聯の字の旁がレンなる聲符をもつてゐるので、この字形に類似したものとしケンなる聲符にも利かしたのである。ケン・レンの音の分化については第一篇第三章に述べた通りである。

なほ關の字の古形は卯の字と同義でランなる聲符となり、それがクワンに分化したものといはれてゐるが、これを卯と見るのは如何であらうか。

關は本義より轉じてフセグ・セキショ・カラクリ・カカハル等となる

910〔係〕ケイ かい　新　ケイ（九・六）

人と系との合字。カカハリツナガルこと。故に系を書く。この字は恐らく系が本字で人は後に加へられたものであらう。人扁の加へられたわけは、物事が種々の關係を生ずるのは人事に多いので、人と人との間における關係の意味からである。系を見よ。

911〔精〕セイ しやう　新　セイ（九・六）

米と青との合字。米をシラゲルこと。故に米扁。靑は聲符。なほシラゲルことに特にこの聲符文字を選んだのは、淸の字の條下に說明したやうに靑色をもつて潔白なる色と見たからである。轉義して純粹、緻密、精神等の意となる。

912 〔葬〕サウ 新 サウ（九・六）

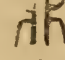
死人をハウムルこと。昔は死者を草原に埋めたものである。そこでこの字の古形[illegible]を見ると茻の如く上下に草があり草莽の莽の本字にて草の多いことにもなるが、ここでは死者を臺に載せて草原に持つて行き、更にその上から草を被せてゐる形である。現形では草と草との中へ死の字を組合はせてゐる。

913 〔瀧〕ロウ る リヨウ りゆ 新 たき（九・七）

水と龍との合字。本義は雨がしきりに降ること。故に三水。龍は雨が激しくリユウ〳〵と降る音を聲符としたものかも知れない。蕭々、蕭條がショボ〳〵とかジワ〳〵なる擬聲を基とする言葉から出來たものと同樣であらう。我が國の「そぼつ」もショボ〳〵から來たものである。なほ龍が天に昇るときは雨を呼ぶと傳へられてゐるのでその聯想作用も働いてゐるかも知れな

い。我が國では瀑布即ちタキのことに使用してゐる。

914 〔壯〕サウ しやう　新　サウ（九・七）

爿と士との合字。男盛りのこと。故に男子の意をあらはすために士を書く。爿は聲符であるがこの字は（木）を縦に二分して（分析の析の本字）としたものの左邊、即ち片のカタワレと同形である。ホコの象形に似てゐるので將の字などに含まれて單に聲符たるにとどまらず武勇の意をもあらはしてゐるので、壯においてもホコを持つべき人即ち男子の意が含められてゐる。そこで轉義してツヨシ・サカンとなる。

915 〔觀〕クワン　新　クワン（九・七）

雚と見との合字。物を大局からヨクミルこと。故に見を書く。雚は聲符。轉じてミハラス・ヤウス・サトル。なほこの字の左扁は萑と口二つとの合字。字義はコウノトリのこと。そこで萑の字を書いたもの（護の條を見よ）吅は聲符にて字義はカマビスシ。故に口を二つ書いたのである。哭、喪に含まれる二口は泣き悲しむ聲をあらはしてゐる。

916

〔紋〕ブン もん　新　モン（九・七）

糸と文との合字。織物や刺繡等にあるアヤ即ち紋様。そこで糸と文（あや）とを書く。文はまた聲符。

紋はまた彣とも書く。彡は形の條下に述べたやうにもののアヤを表現したものである。

我が國でモンといへば家々のシルシとした徽章の如きもの。

なほ糸と文との合字に紊亂の紊の字がある。この字の意味はミダレルこと。糸のアヤメの錯綜してゐることから來たもので文はやはり聲符ともなつてゐる。紋・紊兩字は組合はされた位置によつて意味を異にして使用せられてゐる。衾（ふすま）と衿（えり）、怠（なまける）と怡（よろこぶ）の如きはその例である。

ところが周の時代の古文には頗る奔放なものがあつて同一文字でも種々に組合はされてゐる。現に我々の用ゐるものの中にも雜—襍、胸—胷、群—羣、棋—棊等の如く位置が變つても意味の變化しないものがある。しかもこの方が數において極めて多いのである。

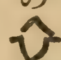
917

〔覽〕ラン　新　ラン（九・七）

監督の監と見との合字。本義はものをツマビラカニミルこと。故にこの二字を組合はせたのである。監は更に聲符をもかねてゐる（藍を見よ）。カンがランとなるのは各の聲符が闌・洛となり、僉

に劍・鐸があるやうにヵ行とラ行は音の分化である。

918
〔卒〕ソツ そち　新　ソツ（九・九）

古形はで衣といふ字のに一線を加へたものである。兵卒の卒といふ字であるが、もと甲部隊の兵卒と乙部隊の兵卒とを區別するために着衣にシルシをつけてゐたので、そのシルシの指事として衣の字へ一線を加へたのである。ニハカ・シヌルとなるのは音の假借である。

919
〔破〕ハ　新　ハ（九・九）　替　やぶる（九・一五）

石と皮との合字。本義は石がクダケルこと。轉じて廣くヤブル。石扁にて意をあらはし皮は聲符。ただし風化作用などで石がくだけるのは表皮の方からであるから多少の會意もあるだらう。

920
〔歎〕タン　新　タン（九・九）

難の省畫と欠との合字。ウメクこと。そこで歌や吹の字の旁と同じく欠を書く。欠の古形はで人が口をあけてゐるかたち。轉義してナゲクとなる。ホメタタフの意となるのは嘆の字に假借されたものである。

難は聲符であるが喜びにせよ悲しみにせよ情の極まるものであるから容易ならぬ會意もあるだらう。なほナンとタンとは音が轉通する。男にダン・ナンの音があるのもそれである。

921〔譽〕ヨ　新　ヨ（九・九）

與と言との合字。ホマレのこと。ホマレは人々の口にのる名聲であるから言の字を書く。與は聲符でもあるがこの字は兩手でものを捧げてゐるかたちの文字であるから兩手でものをさしあげるが如く、人をほめ上げるの考へを浮ばしむるやうにしたものである。與はまた名聲をその主人公へ與へるの會意もある。

922〔胸〕キョウ く　新　むね（九・九）

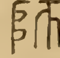
古形は匈でもと現形の右旁だけでムネといふ字。卽ち人體の胸部を强調させたもの（包・人・凶を見よ）人體に關係してゐるので肉月は後に加へられたものである（肉を見よ）。

923〔劍〕ケン　新　ケン（九・九）　替　つるぎ（一二・七）

僉と刃との合字。ツルギのこと。故に刀より出來た刃を書く（刀の條を見よ）。刃のところを立刀にして

劍とも書く。立刀は刀の字の古形から變形したものである。

924〔師〕シ　新　シ(九・一〇)

小篆はにて𠂤と帀との合字。𠂤は鄕の字の條下で説明したやうに堆の本字。ものが澤山集まつてゐる意をもつ。帀は之の字()を倒さにしたもので行くところまで行つてまたもとの所へ戻つて來ること、即ち一回はりするといふ意の字である(衞を見よ)。この兩字にて兵隊の二千五百人集つた軍團の意の字とした。モロ〳〵と轉義したのも多數の人の集まつたことより來たもので、ミヤコを京師などといふのもこの爲めである。師範・師匠など熟してカシラの意となるのは音の假借である。

925〔彈〕タン だん　新　ダン(九・一〇)

弓と單との合字。弓にてタマをハジクこと。故に弓扁。單は聲符。轉じてタマ(彈丸)・攻擊スル(糺彈)・タダス(彈正)となる。

926〔謝〕シャ じや　新　シャ(九・一〇)

言と射との合字。ていねいにあいさつの言葉をのべて去ること。故に言扁。射は聲符、轉義して退ク、禮ヲ述ベル、罪ヲワビル等となる。
なほ謝の字の聲符として特に射が組合はされたのは、射禮といつて弓を射る場合には規則正しい一定の禮儀があつたからである。

927 〔**備**〕ビ　新　ビ（九・一〇）　舊　そなへ（一〇・一四）

用意を整へ警戒することがその本義。右旁の𤰈も同意義の字でこれを分解すると苟の省畫と用となる。苟は敬の左扁にて愼しむ意であるから用意周倒なること。これに人扁がついて備となつたものである。轉じて廣くソナヘル。

928 〔**厚**〕コウ　新　コウ（九・一〇）　舊　あつさ（一二・二）

土層のアツイことが本義である。それ故崖の字の厂を書き、㫗は聲符となる。この字は享獻の享の字から變形したもので（熟・倉の條を見よ）、もともと㫗の字そのものが厚薄の場合のアツイ意の文字であるのだから聲符ばかりでなく充分意味ももつてゐる。

929 〔領〕レイ りやう　新　リヤウ（九・一〇）

令と頁との合字。ウナジのこと。轉じてエリ。故に頁を書く。頁は顏の字の旁と同じく頭のこと。令は聲符。この字が管領・領事・領收の如くスブとかヲサムの意になるのは、聲符字たる令の本義から延轉したものである。

930 〔然〕ゼン ねん　新　しかり（九・一二）　替　ゼン（一〇・二） ねん（一二・二七）

肉と犬と火との合字にて、犬の肉を火の上にのせてあぶることが本義である。それより轉義してヤク・モス等となる。

犬の條下で說明したやうに、支那人は古くから、犬の肉を常食としてゐたのでかかる文字が出來たのである。日常使用する器具食器の語の器の字に犬が含まれてゐるのも、犬の肉が他の羊や牛などの肉よりは劣つたものであるから、一般人の口へ絕えずのせられるところよりかく組合はされたものである。

然・祭・炙等に含まれてゐる⺼はいづれも肉の字なることを忘れてはならない。

なほ人々に膾炙するといふ言葉があるが、その炙の字の上部へ肉が組合はされてゐるのを見て

も、いかに支那人が肉食を好んだ民族かがわかる。この字は然の字から犬を取つただけであるから然と炙とは兄弟のやうな文字で、常に親しまれてゐる肉は犬の肉であつたにちがひない。また焦の字に鳥が含められて居り、炮の字が鳥の毛をむしらずに土で包んで燒くことがその本義であるところより察するに、鳥の肉もかなり食用とせられたものである。

然の字がシカリといふ意に假借せられるやうになつてから、本義の場合には更に火偏が加へられて燃の字となつた。

931 〔需〕ジュ シュ　新 ジュ（九・一一）

雨と而との合字。雨宿りをして雨の晴れるのをまつこと。故に雨冠。而は聲符。それよりマツモトメル。

而の字はその古形にて鼻の下のヒゲのこと。字形はそれをあらはしたもので上部の中程の三角様になつてゐるところは鼻の下のくぼみの線をあらはしたものである。シカシテとなるのは音の假借である。

932 〔要〕エウ　新 エウ（九・一一）

この字の本義はコシのことで小篆はとなり人がコシのあたりへ兩手をたれ下げてゐるかたちである。卽ち第一形のは兩手をあらはし（手を見よ）、內部は交や文や大の字と同系統のもので人を正面から見たものである。この手は恐らく兩手の垂れ下つてゐるこのあたりといふ考へでコシを指事したものであらうと思ふ。腰は坐る際に肢體を支へるものであるから主要の要卽ちもののオホボネなる意に用ゐられるやうになつた。肝腎カナメの要、要約の要となるのもそのためである。

要の字が專ら轉義の場合に用ゐられるやうになつたのでコシの時には後に肉月が加へられて腰の字が作られた。

933〔照〕セウ　新　てり（九・一三）　替　セウ（一二・二二）

昭と火との合字。灬は火の變形。本義はアキラカ。故に昭と火とを組合せたもの。轉じてテラスとなる。

なほ昭は太陽のアキラカなること。故に日を書く。召は聲符。

934〔貯〕チョ　と　新　チョ（九・一三）

佇

もと單に宁と書いたものである。この字の小篆はでモノをタクハヘルこと。タクハヘルモノは財物であるから後にその聯想作用によつて貝が加へられたのである。貝は古代の通貨。卽ち貝をもつて財物の代表としたもの。なほ宁の字の小篆の左右はシキリをあらはしたもので門の扉だらうといはれてゐる。上下のシルシもやはりシキリで、ものが貯へられてゐる或る一定の區畫をあらはしたものである。そこでニハとかトドマルとかの意にも用ゐられるやうになり、後に人扁が加へられて佇（とどまる）といふ文字も出來た。勿論佇における宁は聲符であるが財物の畜へられてあるところへ人がタチドマルの會意があるだらう。

935 〔資〕シ　新　シ（九・一三）

次と貝との合字。財物のこと。そこで貝を書く。貝は古代の通貨。次は聲符。財物は商賣のモトデとなるから資本と使はれまた資性の如く人の性質ともなる。更に財物のことであるからタスケル意にも轉義した。

936 〔繁〕ハン ぼん　新　ハン（九・一三）

小篆では。もと緐と書いたのが後に敏と糸の合字になつたものである。本義は糸で作つた

馬の鬣(たてがみ)の飾りのこと。そこで糸をつらねる意で系の字を書いたもの。毎は聲符（第一篇第四章を見よ）であるがこの字は草が盛んに繁茂することであるから鬣の飾りがふさ〳〵してゐることに聯想して特にこの文字を組合はせたものであらう。轉義してシゲル・サカンとなるのは鬣の飾りが馬を一層堂々たるものに見せるからである。更に轉義して繁雜の如くワヅラハシとなる。後に毎が敏の字となつたのは駿馬の敏(と)く走ることが聯想されたからではなからうか。

937 〔昌〕シヤウ　新　シヤウ（九・一三）

小篆では［小篆字形］となり日と曰との合字とされてゐる。そこで說文では本義をヨイ言葉と解釋してゐる。即ち下部を曰(いはく)と見たのである。唱歌の唱の字などに組合はすにはまことに都合がよからうが、しかし昌の字は單に日を二つ重ねてアキラカなる意をあらはしたものである。轉義してサカンとなる。

938 〔推〕タイ　て—スヰ　新　おす（九・一三）　替　スヰ（一二・二六）

手と隹との合字。オシヒラクこと。故に手扁。隹は聲符（鳥を見よ）。轉じて廣くオス・オシハカルとなる。

939 〔擔〕タン―セン ぜん　新　タン（九・一三）

手と詹との合字。ニナフこと。故に手扁。詹は聲符。轉じてウケモツとなる。略字としては担と書く。詹と旦とが同音なので畫の少い文字を聲符として取換へたものである。

なほ詹は危の字の上部と同形のものへ八と言とを組合はせたもの。よくシヤベルこと。故に言を書く。八は分散の意味で言葉數が多いことをあらはしてゐる。上部は厓に人がゐるかたちで、仄の字から出來た吳の字の下部などと同じく身をそらしてものをいふの會意かも知れない。

940 〔輕〕ケイ きやう　新　かろ・し（九・一三）

車と巠との合字。戰爭に使ふカルイクルマ。故に車扁。巠は聲符（徑を見よ）。轉じて廣くカロシ。

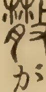
941 〔莖〕ケイ カウ ぎやう　新　くき（九・一四）

草と巠との合字。草木のミキ。故に草冠。巠は聲符（徑を見よ）。

942 〔穗〕スヰ ずゐ　新　ほ（九・一四）

禾と惠との合字。五穀のホ。故に禾穀の禾を書く。惠は天より惠まれたるものの會意。更に聲符をもかねてゐる。惠の條を見よ。

943 〔散〕サン　新　ちり（九・一四）　替　サン（九・二〇）

小篆のが變形して現形の散となつたもの。㪚と肉との合字。本義はキレ〳〵になつてゐる肉。故に肉月（にくづき）（肉を見よ）を書く。㪚（さん）は聲符でもあるがこの字にもワカツといふ意がある。即ち左扁は麻の皮をはいだかたち。右旁の攴は手（又）に棒をもつてゐるかたち。故に亂麻を打ちわかつの會意である。

なほ麻といふ字は广と𣏟との合字。𣏟は麻の莖と皮とをはいだかたち。二つ組合はせて澤山あることを示したもの。广は家の形から來たもの（庭を見よ）で屋根の下で麻糸を作るの會意である。散がチルといふ意に用ゐられるやうになつたのは聲符字の意をとつたものである。後に手扁が加へられて撒布の撒の字も出來た。

撒

944 〔汗〕カン　新　あせ（九・一四）

水と干との合字。アセのこと。故に三水。干は聲符。

945 〔續〕ショク ぞく　新 つづ・く(九・一四)　替 ヅク(一〇・二五)

糸と賣との合字。ツラナリツヅクこと。故に糸扁。賣は聲符(讀を見よ)。

946 〔逃〕タウ だう　新 にげ(九・一四)　替 にが・す(一二・三)

兆と之遶との合字。ニゲルこと。故に之遶(行を見よ)。兆は聲符。
兆は亀卜にあたつて焼いた亀の甲の割れ目を象つたもの。そこでキザシ。音の假借によつて億兆の兆として用ゐられる。

947 〔銃〕ジユウ シユウ しゆ　新 ジユウ(九・一五)　假 棒銃(九・一五)

金と充との合字。本義は斧の柄にあるアナ。斧は金屬性のものだから金扁を書いたもの。充は聲符。我が國ではツツと訓じ小銃のこと。

充　なほ充の字は育の省畫と人との合字にて人が成長して大きくなること。轉じてミツルとなる。

948 〔床〕シヤウ サウ じやう　新 シヤウ(九・一五)　替 とこ(九・一五) ゆか(一〇・二四)

广と木との合字。身體をおちつけて安坐するための座。故に座席を作る材料たる木と家の象形から出來た厤垂とを組合はせたもの（庭を見よ）。
我が國では座の意味のユカよりユカシと使用する。また床の間の如くトコとも用ゐる。

949 〔傳〕テン でん　新　デン（九・一五）　替　つたへ（九・一六）

人と專との合字。驛傳・傳馬と熟しフミオクリが本義である。現在の我々が用ゐる郵送に相當する。專は文書の意をあらはしたもので書類を委託されて驛より驛へ送りとどける人の會意である。專はまた聲符にもなつてゐる。轉義してツタヘル。

950 〔令〕レイ りやう　新　レイ（九・一五）

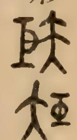
この字は命の條下にも述べたやうに廟堂において家來が恭しく君命を拜受してゐる形の文字である。即ち上部は堂字の象形。下部は人。
それが次第に字形の類似により次のやうに解釋されるやうになつた。即ちこの字の古形  を亼と卩との合字と見るのである。亼は集合の集の本字。卩は符節の節の本字。そこで随時天子が諸侯を集めて、任命のしるしとして既に與へておいた卩を點檢したり、或ひは更めてこれを

與へて命令を下すと見たのである。この字の本義は命令と熟用する令。また命令を司どるものは上長官であるから縣令などと轉用され、良の音に通じて良夫人良孃といふ場合に令夫人・令孃と假借されて使はれる。

951

〔規〕キ　新　キ（九・一五）

夫と見との合字。規矩と熟する文字にて方圓をはかる器のこと。規をブンマハシ、矩をサシガネとして區別するのは後のことで、ごく以前にはその區別はなかつたといふ。

規の字は矩の字の古形（人がサシガネをもつてゐるかたち）から分派して作られたものであらう。即ちこの古形の夫又は大を保存し、カネザシのところへ見の字を組合はせてタメツスガメツする意をあらはしたものである。

轉じて規則・テモンの如く用ゐられる。

952

〔律〕リツ りち　新　リツ（九・一五）

行人扁と聿との合字。オキテのこと。故に筆の本字たる聿を書く。即ち法律の條文や布令等は筆をもつて書きしるすものだからである。行人扁の加へられるわけは朝廷で立てた法律命令はあ

まねく天下に行はれるの意からである。この字は建の字と殆んど同じもので廴は廷の字などに含まれる廴と同じく行歩を意味したものである。建の條を見よ。なほ律における聿は聲符をもかねてゐる。

953 〔特〕トク　新　トク（九・一五）

牛と寺との合字。本義は牡牛（をうし）のこと。故に牛。寺は聲符。コトニ・コトサラ（特別）の意に用ゐられるのは、牛の體軀の大きいことから聯想して物や件の字が作られたのと同じやうな心理作用からの轉義ではなからうか。

954 〔衞〕エイ ヱ　新　エイ（九・一五）　假　右衞門（ウヱモン）（一〇・九）

行と韋との合字。宮殿とか兵營とかをトノヰしてマモルこと。卽ち護衞するには圍（かこひ）（韋）の廻りをたへづ巡行（行）するからである。韋の字が現形では𠦒と書かれてゐるが、それは小篆に韋の下に帀が加へられてからで、帀は師の字の條下で説明した如く一めぐりすること。この場合巡行の意を一層强めたものである。

955
〔敬〕ケイ きやう　新　ケイ（九・一五）　舊　うやまひ（一一・二）

苟と攴との合字にて自らイマシメツツシムこと。故に我が身を謹しむ意にて鞭と右手の合字になる攴を加へたもの（敎・救を見よ）。轉じてウヤマフとなるが實は左扁の苟（きよく）の字が既にツツシム意味の文字。即ちこの字の古形は（羊）羊と勹と口との合字。勹はツツシムこと（包を見よ）。羊はその條下にも述べたやうにすべて善美の意があらはされてゐる。そこで口をつつしみ羊の如く溫和にするの會意。

現形の敬の字の左扁は草冠となつてゐるが、實は羊の古形の角に相當する部分から來たものである。

草冠の苟は一種の草の名稱である。故に草を書く。句（コウ）は聲符である。イヤシクモとなるのは音の假借である。

956
〔驛〕エキ やく　新　エキ（九・一六）

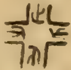
馬と睪との合字。宿場にある交代の馬。そこで馬扁とした。轉じて宿場のこと。現在のエキに相當する。

睪は聲符であるが宿場が次から次へ續くの會意もある（澤を見よ）。」

957〔泉〕セン ぜん　新 セン（九・一六）　假 泉イヅミ（五・一四）

小篆にて。水の出るミナモト。水が谷間から流れ出るさまを象つたものである。

958〔街〕ガイ カイ け　新 カイ（九・一六）　替 ガイ（一〇・一三）

古形はにて四辻の道路のこと。現形の街は行と圭との合字で意は行にあり、圭は聲符となつてゐる。轉義してチマタとなる。

なほ圭は天子が諸侯を封ずる時に符節として與へる一種の瑞玉で、上方は尖り下方は四角をしたものである。これは現今の辭令書にも類するものであるから、これによつて諸侯は國土を治めたのである。そこで土の字を二つ重ねてこの瑞玉の名としたものである。

959〔辨〕ハン べん　新 ベン（九・一六）　替 わきまへ（一一・二五）

辡と刀との合字。ワカツこと。故に刀を書き辡は聲符。轉義してワキマヘ知ルこととなる。

なほ辛の字はその條下に述べたやうにツミといふ文字。しかも言の字がその中に含まれてゐる

る。そこで辨の字における辛は裁判所において原告と被告とが相爭つてゐるのを辨別裁斷するの會意がある。

辯

辯の字は互に相ゆづらず自分の意見を主張するの會意。そこで辯舌、辯論の如く用ゐられる。

960〔越〕エツ をち　新　こし（九・一六）　替　エツ（一〇・二七）　假　越後（エチゴ）（七・一四）

走と戉との合字。本義はワタリコユル。故に走を書く。戉は聲符。なほ戉については茂の條下を見よ。

961〔沼〕セウ　新　ぬま（九・一六）　替　セウ（一二・一一）

水と召との合字。イケのこと。故に三水。召は聲符。我が國ではヌマと訓じ池などの泥深いところをいふ。

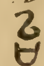
962〔帆〕ハン ばん　新　ほ（九・一六）

巾と凡との合字。舟のホ。故に巾扁（布を見よ）。凡は聲符。この字は說文に載つてゐない文字である。

963〔飾〕ショク しき　新　かざり（九・一八）　替　ショク（一〇・二六）

食と人と巾との合字。本義はヌグフこと。故に布巾の巾を書く（布を見よ）。食は聲符。それより轉じてキヨメル・カザル。

964〔怠〕タイ だい ―イ　新　おこたり（九・一八）

台と心との合字。本義は心に慢つてオコタルこと。故に心を書く。台は聲符。台は古形にて言葉のやみ盡きること。故に口を書く。上部は以の字の古形と同じく聲符となつてゐる。

965〔寶〕ハウ　新　ハウ（九・一九）　替　たから（一一・二一）

宀冠と玉と缶と貝との合字。タカラのこと。宀は家の象形。王は玉と同字にて珠玉。貝は古代の通貨。金銀財寶中の主なるものを組合はせてタカラの意としたものである。玉と貝とがいかに尊重せられたかはそれ〴〵その字の條下で説明した通りである。

なほ寶の字における缶は聲符として組合はされたもの。その小篆はで口が小さく腹部の大

きな一種の瓦器の象形。酒を盛るもの。秦の時代にはこれをたたいて歌の調子を合はせたといはれてゐる。或ひは寶の字において宀と共に食住の滿ち足りてゐる會意もあらう。

966 〔位〕キ　新　キ（九・一九）　替　くらゐ（一〇・二）

人と立との合字。人の立つところ即ちクラヰ。

967 〔變〕ヘン　新　かはり（九・一九）　替　ヘン（九・一九）　かへ・る（九・一九）

䜌と攵との合字。改めカヘルこと。故にアラタメル意をあらはすために攵を加へたもの。攵は攴・敎・敲等の旁と同形にて、手（又）に一本の棒をもたせてウチタタクことをあらはしたものそれより轉義してウゴク・フシギ・ワザハヒ・定まりなきこと等となる。

なほ䜌は聲符である。字義は綿々と口說いて納得させること。そこで絲と言とを組合はせたのである。

968 〔線〕セン　新　セン（九・一九）

糸と泉との合字。イトスヂのこと。故に糸扁。泉は聲符であるが泉の水がコン／＼と流れて

きないことをスヂの長く引くに聯想したものかも知れない。轉じて廣くスヂ、また糸の如く細長く連なるもの。

なほ肉月がついて腺となれば體內の淋巴腺の如きもの。肉の條を見よ。

969 〔迷〕ベイ めい　新　まよひ（九・一九）

米と之遶との合字。マヨフこと。故に道をあらはすために之遶を書く（行を見よ）。米は聲符。

970 〔熊〕ユウ キウ ぐ　新　くま（九・一九）

能と炎の省畫との合字。クマのこと。能の古形はにて動物の象形。クマはこの獸に以てゐるところより能を書き聲符として炎を組合はせたものである。

971 〔想〕シヤウ さう　新　サウ（九・一九）

相と心との合字。コヒネガヒオモフこと。故に心を書く。相は聲符であるがミルといふ意の文字であるから心にオモヒミルの會意も含まれてゐる。

972
〔像〕シャウ ざう　新　ザウ（九・一九）

人と象との合字。カタチのこと。もと象にその意があるが、カタチは人がものに似せて作るのだといふ考へから後に人扁を加へたもの。

想像・肖像・銅像等には像を用ゐザウと發音し、現象・事象・抽象等には象を用ゐてシヤウと發音するのが習慣となつてゐる。

973
〔座〕サ ざ　新　ザ（九・一九）

广と坐との合字。スワルトコロ。故に坐と麻垂（まだれ）とを書く。麻垂は家の象形から出來た文字。庭の條を見よ。なほ座と坐との使用上の習慣については坐の條を見よ。

974
〔傍〕ハウ ばう　新　かたはら（九・一九）

人と旁との合字。人のソバ近く侍べること。故に人と旁。轉じてソバ・カタハラ・ワキ。

旁は二と冂と方との合字。二は上の字の古形。冂は四方を意味し、上下四方へものが充滿するの意。方は聲符。

975 〔姉〕シ　新　あね（九・一九）

もとは姉と書いた。それが筆書の便宜上現形になつたもの。アネのこと。故に女扁。𠂔は聲符である。

なほ𠂔はトドムといふ字であるが、草木がむやみにはびこつてゐるかたちの朩の字に抑制の意味で線を加へたものである。

976 〔脈〕バク みやく　新　ミヤク（九・二〇）

この字はもと衇と書かれたもので血液の運行する徑路のこと。故に血と水の流れるスヂの意の𠂢とを組合はせたもの（永・派を見よ）。血が肉月（肉を見よ）となつたのは後のことであるが血行は肉體に關係するものだからである。轉じて心臟の鼓動によつてうつミヤクのこととなる。また血行の如く一つの大元から諸方へ系統だつて分派してゐることからの意となる。

977 〔頂〕テイ ちやう　新　チヤウ（九・二〇）　替　いただき（九・二三）

丁と頁との合字。頭のイタダキ。故に頁を書く。頁は頭のこと（頭・顏を見よ）。丁は聲符。

我が國ではイタダキより轉じてモラフ（戴頂）の意に用ゐてゐる。

978 〔霧〕ブ む　新　きり（九・二〇）

雨と務との合字。キリのこと。故に雨冠。務は聲符。

979 〔付〕フ　新　つ・く（九・二〇）　假　納付（ナフフ）（八・二〇）

人と寸との合字。他人へものを與へること。故に人扁。寸の古形はにて右手の象形たる又と一との合字。そこで手にものをもつて他人へ渡すの會意である。

なほ付と附の使用上の慣習は附の條を見よ。

980 〔雄〕ユウ キュウ ぐ　新　ユウ（九・二〇）　替　を（九・二五）

厷と隹との合字。鳥のヲスのこと。故に隹。隹は鳥の象形から出來た文字（鳥を見よ）。轉じて廣く動物のヲス。また英雄の如くタケキ意となる。

左扁の厷は肉月がつけば股肱の肱となるが如くヒヂの本字。故に左右等の上部と同じく手の象形から出來た文字へ、腕の曲つてゐる部分の形を組合はせたのである。そこで雄における厷は單

なる聲符ではなく腕の力卽ち實行力の會意がある。

981 〔眼〕ガン げん　新　ガン（九・二〇）　替　まなこ（一〇・二）　假　鐵眼テツゲン（一一・二八）

目と艮との合字。マナコ。故に目を書く。

艮は聲符であるが特にこの字が加へられたのは、この字は目と匕との合字が現形となつたもので目と關係のある文字だからである。この字は目をひらかせてよくものを見る意。字形は兩方の眼を比（ならべ）（匕）て見据えるの會意から來たもの。轉義してトドム。

982 〔熟〕シュク じゆく　新　ジュク（九・二一）

孰と火との合字。本義は食物がニエルこと。故に火。轉じて果實が熟すること。廣くものが成熟することに用ゐる。

實は熟の字は孰が本字であるが、孰がイヅクンゾとかイヅレカの如く疑問詞として假借せられるやうになつたので、その區別をするために火が加へられたのである。

さて孰の古形はで享献の享の古形と（羊）との合字である。卽ち神へ煮た肉を捧げるの會意である。旁の丸はマルではなく古形から來たもので人が兩手で供へ物を捧げる形

である。
なほ享の古形は穀倉の象形から出來た倉の字や高の字の系統のものであるが、ここでは神前に捧げる禮器としたのである。

983 〔延〕エン　新 のべ（九・二一）　替 エン（一一・三）　ひ・く（一一・二六）

ノと㢟との合字。㢟は止(あし)と廴との合字で廴は彳の字をのばした形で長く歩くことを意味する（行を見よ）。ノは系の字の上部と同じくノビルとか引キノバス意を持つ故にこの兩字で長くヒクとかノブの意の字としたのである。

984 〔隣〕リン　新 となり（九・二一）　替 リン（一二・二）

阝と粦との合字。周代の行政區劃の稱で、五家を鄰といひ、五鄰を里とした。故に邑（阝）を書く。鄰も隣も同字である。粦は聲符。轉義してトナリ。
なほ粦は現形では上部が米となつてゐるが古形は炎と書いたものである。下部は足趾の象形（止を見よ）を二つ書いたもので歩くことを意味したものである。歩くところのホノホにて鬼火のこと。即ち燐の字の本字である。

985 〔込〕國字 こむ　新 こみ（九・二一）

入と之遶との合字。ものをツキコムこと。故に入の字と進む意味の之遶とを組合はせたのである（行を見よ）。

986 〔甘〕カン　新 あまし（九・二一）　替 カン（一一・二三）

食物の味がウマイこと。その古形はにて口の中へものを入れてその味のウマき指事としたものである。それよりアマシ・タノシ。

987 〔伯〕ハク　新 をぢ（九・二三）

人と白との合字。一家の長たる人のこと。故に人。白は聲符。轉義して父の兄卽ちヲヂとなる。五等爵公侯伯子男の第三位になるのは音の假借である。

988 〔猫〕ベウ めう　新 ねこ（九・二三）

ケモノヘンと苗との合字。ネコのこと。故にケモノヘン（犬を見よ）。苗(ベウ)はメウ〱と鳴くその鳴き

聲を聲符として加へたものである。

989〔啓〕ケイ かい 新 ケイ(九・二三)

启と攵との合字。本義は知識を開發すること。轉じてマウス。故に敎の字の旁と同様に鞭韃する意味で手(又)に鞭をもつてゐる攵の字を組合はせたもの。

启は聲符でもあるが、この字は戸と口との合字にて合してヒラクの概念をあらはしたもの。

990〔任〕ジン にん 新 ニン(九・二三)

人と壬との合字。人が自分の責務をタモチニナフこと。故に人扁。壬は聲符。轉じて責任・官職・マカス等となる。

壬は妊の本字にてハラム。古形から來たもので工の字の中間に點又は線をもつて子を孕んでゐる指事としたものである。工はタクミのことで物を作るものだからこの字が用ゐられたのであらう。なほ妊娠は女子の大任であるから任における壬にはその會意もあるだらう。

991〔恥〕チ 新 はぢ(九・二四) 替 チ(一二・二七)

耳と心との合字。ハヅルこと。故に心を書く。耳は聲符であるがはづかしめの言葉を聞き耳朶を赤くするの會意もある。耻と書くのは恥の草書より誤つたものである。それに止にチなる音もあるからである。

992 〔鋭〕エイ―タイ/で―エツ/えち　新　するど・し（九・二四）

金と兌との合字。鋒の先きのとがつところ。そこで金扁。兌は聲符（說を見よ）。轉じてスルドシ・トシとなる。

993 〔擊〕ゲキ/ケキ/きやく　新　ゲキ（九・二四）

この字の左上部は車軸の端のこと。タタク意味の殳を（殺を見よ）加へてトン〳〵とたたく音の意の文字となる。更にそれに手を組合はせたもので本義はウツ。

994 〔恩〕オン　新　オン（九・二四）

因と心との合字。メグミ。故に心。因は聲符。

995〔察〕サツ せち　新　サツ（九・二四）

宀と祭との合字。本義はツマビラカにする意。神を祭つてわからないこと（審を見よ）の示現を乞ふ（示を見よ）の會意ではなからうか。轉じてミル・シル。我が國では更に推量とか思ひやり等の意に用ゐる。

996〔議〕ギ　新　ギ（九・二五）

言と義との合字。相談しあふこと。故に言扁。義は聲符でもあるが正しい言葉の會意もある。轉じて論爭をすること。

997〔擧〕キョ こ　新　キョ（九・二五）　舊　あ・ぐ（一〇・二七）

與と手との合字。兩手でものを捧げること。故に手を書く。與は聲符であるがこの字は兩手が二つも含まれた文字であるから特に聲符として與の字を選んだのである。轉じてホメアグ。コゾルとなるのは與の字に通じたのである。

998
〔補〕ブ ホ ふ　新 ホ（九・二五）　替 おぎなひ（一二・二七）

衣と甫との合字。着物の破れをツグラフこと。故に衣扁。甫は聲符。轉じてオギナフ・タスケ。なほ甫は小篆にて[illegible]本義は男子の美稱。父と用との合字にて父となり事を行ふ（用）者は立派な男子であるとの會意。そこで甫の字は元服して一人前の男子のことにも用ゐる。ハジメの意となるのは元服によつて初めて立派な一人前の男子となるからである。なほ甫における父は聲符をも兼ねてゐる。

996
〔豫〕ヨ　新 ヨ（九・二五）　替 あらかじめ（一〇・一一）

予と象との合字。象の一種であるキサといふ動物。そこで象を書く。予は聲符として組合はせたもの。アラカジメとなるのは音の假借によるものである。

1000
〔權〕ケン ごん　新 ケン（九・二五）

木と雚との合字。本義は木の名。卽ち黄花木。權衡と使はれるのは權の音が縣（かける）に通じたので分銅の意に用ゐられたのである。また權道の如く方便の意に用ゐられるのは、分銅は如何な

る日盛りにも持つて行かれその重みとピッタリあはせることが出來るので、あの手で行かなければこの手といふやうに融通無碍だからである。更にハカリより轉じて權利の意ともなる。なほ權は聲符（觀を見よ）。

1001 〔棄〕キ　新　す・つ（九・二五）　棄　キ（九・二五）

小篆にて。上部は育の字の上部と同じく子供が産まれる時のかたち。は塵取りの象形。は兩手。卽ち兩手に塵取りを持つて不潔物をすてるといふ會意。卽ち赤ん坊は汚物を意味したものであらう。この字によく似た字に糞の字がある。小篆ではとなり上部が米の字になつてるるだけである。

1002 〔適〕テキ セキ しやく　新　テキ（九・二五）

商と之遶との合字。ユキイタルこと。故に之遶（行を見よ）。商は聲符（敵の條を見よ）。轉じてカナフ。タマタマなどとなる。

1003 〔趣〕シユ　新　シユ（九・二五）　趣　おもむき（一一・三）

走と取との合字。トクオモムクこと。故に走を書く。取は聲符。轉じて志し向ふところ。又狀態、風致等となる。

第十章　卷十の新出漢字

1004 〔留〕リウ　る　新　リウ（一〇・一）　訓　とどまる（一〇・一三）と・む（一一・二二）　留守（一〇・二三）　假　襟留（七・一九）

小篆にて。上部は柳の字の旁と同じく聲符である（貿の上部とはちがふ）。下部は田であるが、田畑のあるところへは人が立ちとどまつて耕作をするものだとの考へから、トドマル意の文字として田の字を組合はせたもの。

1005 〔達〕タツ　だち　新　タツ（一〇・一）

小篆にて。物事が達すること。故に之遶（行を見よ）。轉じてトドク、ツラヌク。幸は聲符であるが、小篆にてわかるやう大と羊との合字。小羊が產まれること。故に羊を書く。大は聲符。なほこの字は現形では幸の字によく似てゐるがその成因はちがふ。

1006
〔后〕コウ ご　新　コウ（一〇・一）　替　きさき（一二・一四）

古形は后にて人と口との合字。天下に號令を發する人の會意にて君長のこと。後に君主の正配の義となる。後の音に假借されたものであらう。即ち妃は天子の後にあつて後胤を廣むるものだからである。午前午後の場合の後の字に代用されるのも後の音に假借したものである。

1007
〔到〕タウ　新　いた・る（一〇・一）　替　タウ（一〇・七）

至と刀との合字。先方からこちらへツクこと。故に至を書く。刀（立刀）は聲符。

1008
〔遺〕ヰ―ユヰ　新　ヰ（一〇・一）

貴と之遶との合字。逃げかくれること。故に之遶（行を見よ）。貴は聲符。轉じてノコル・オクル。

1009
〔舊〕キウ ぐ　新　キウ（一〇・一）

隺と臼との合字。本義はミミヅクともいひまたフクロフともいふ。いづれにしてもその象形から來た隺を書く。臼は聲符。久又は故の音に通じてフルシ。

隹の字をフルトリといふのは鳥と區別するために舊の字の中に含まれてゐる隹の意から來たものだらうといはれてゐる。

1010 〔坪〕ヘイ びやう　新　つぼ（一〇・一）

土と平との合字。土地の平らかなること。故に土と平とを書く。平はまた聲符ともなつてゐる平地のことより我が國ではツボと訓じ庭などのつぼまつた一區域をいふ。更に地積をはかる單位として用ゐ六尺平方のこと。段別の歩と同樣である。土砂の如き立積の場合は六尺立方、また墓地の如きものは一尺平方のこととなり、更に凸版、寫眞版等では一寸平方のこととなる。

1011 〔盡〕シン じん　新　つく・す（一〇・一）

𦘔と皿との合字。本義は皿の中のものがなくなつてゐること。即ち上部は餘燼の燼の本字でモエサシのことであるが、手（ヨ）にものをもつて火にて燒くの會意から出來た文字である。この字に皿が加はつてゐるのは然。炙　炮等の條下で説明したやうに動物や鳥類を燒いて食つたことによるのである。

盡の字は轉義してツクスの意となりまたコトゴトクともなる。

1012〔扱〕サフ―キフ 新 あつか・ふ（一〇・一）

手と及との合字。ものをヲサメトルこと。故に手扁。及は聲符。我が國ではアツカフと訓じ事を取り計ふことやアシラフこと。

1013〔團〕トン―タン―セン どん―だん―ぜん 新 ダン（一〇・一）

本義はマロキこと。圓の字と同樣に周圍の外廓は實は最初圓形だつたのが運筆の都合上四角形となつたものである。專は聲符。

1014〔征〕セイ しやう 新 セイ（一〇・二）

行人扁と正との合字。出掛けて行つてせめること。故に行人扁。正は聲符でもあるが正義のために立つとの會意もある。

1015〔設〕セツ せち 新 セツ（一〇・二） 替 もう・く（一〇・七）

言と殳との合字。指圖をして設備をなさしめること。言にも殳にも命令の意があるが、特に旁

の方にはタタクの意があるので設備をすることをあらはしてゐる。

1016〔經〕ケイ きやう　新 ケイ(一〇・二)　替 ふ(一〇・二三)　キャウ(一一・二八)　假 義經(よしつね)(六・一〇)

糸と巠との合字。織物のタテイトのこと。故に糸偏。巠は聲符ともなつてゐるが、この字は一と川と壬の省畫との合字にて本義は地下水のこと。故に地下水が流れる如く縦に條を引くの會意もある。

なほ巠の一は土地、巛は水流を意味したもので地中を流れる水、壬は聲符。經の字は轉じて事物のタテ即ち本道となり更にミチ。道義、法則等となる。經書の如く聖人の書いた書物ともなりまた佛經の如く佛陀の述べたことがらをしるしたものともなる。更に通過する、治める等の意ともなる。

1017〔密〕ミツ ビツ みち　新 ミツ(一〇・二)

宓と山との合字。本義は山の形が御堂のやうになつてゐること。故に山を書く。宓は聲符字であるが、この字の本義はシヅカ。宀冠にて家の中の奥まつたところのシヅカなる意をあらはし必は聲符である。

密の字が祕密の密として用ゐられるやうになつたのは聲符として加へられた文字の意をとつたものである。密は更に轉義して奥深くしてあらはれぬこととなりヒソカ。コマヤカともなる。

1018
〔興〕キヨウ こう　新　コウ（一〇・二）　替　キヨウ（一一・八）

同と舁との合字。共同でものをかつぎあげておこすこと。故に同と舁とを書く。舁の上部は學の字の上半の左右と同形にて兩側から手を出してゐるかたち、下部は弄の字の下部と同じく兩手をささげてゐるかたちにてカツグの意となる。

興味。興趣と使用せられるのは音の假借である。

1019
〔奮〕フン　新　フン（一〇・二）　替　ふる・ふ（一一・二八）

奞と田との合字。鳥（隹）が兩翼をひろげて（大）田野を飛ぶことである。それよりフルフの意となる。

1020
〔久〕キウ く　新　ひさ・し（一〇・四）　替　キウ（一二・一〇）　假　佐久間（一一・七）　香久（一二・二〇）

小篆にて久。人と乀との合字といはれ人を後より引く形にてヒサシキ意をあらはしたものと

いふ。或ひは止の條下に說明したやうにから來たもので、人の足趾へ連綿として續く意をもつてヒサシキことをあらはしたのではなからうか。

1021〔險〕ケン　新　ケン(一〇・四

阜と僉との合字。地形がケハシイこと。故に阜を書く(郷の條を見よ)。僉は聲符(僉を見よ)。轉じて廣くケハシ。

1022〔周〕シウ しゆ　新　シウ(一〇・四)

用と口との合字。口を用ゐること即ち言葉使ひが用意周到なこと。故に口と用とを書く。それよりユキワタル・アマネシ・マハリとなる。

1023〔圍〕キ　新　キ(一〇・四)　替　かこ・む(一〇・一二)

もとは單にと書いた。カコヒ。メグルといふ意味であるから後に口が加へられたものである。違の條を見よ。

1024〔族〕ソク ぞく　新 ゾク（一〇・四）

㫃と矢との合字。本義は矢をたばねること。故に矢を書く。上部は旗の字の上部と同じく軍旗の象形から出來たものである。矢は武器であるからその聯想作用により軍旗を組合はせたものではなからうか。金扁を加へて鏃とすればヤジりとなる。また竹冠の簇はムラガルと使はれてゐるが、本義は竹の矢のことであらう。親族。一族の如く用ゐられるのは屬の音に假借せられたものといはれてゐるが旅の字などを見てもわかるやうに、これは一族郎黨が軍旗をおし立てて、戰車を進めて敵地へ乘り込むやうな場合、弓矢の澤山あることなどが種々に聯想されたものであらうと思ふ。

鏃　簇

1025〔背〕ハイ　新 セ（一〇・四）　替 そむ・く（一一・二六）

北と肉との合字。セのこと。セは人の正面卽ち腹の反對に當るので北（そむく）の字を書いたもの（南及び北を見よ）。肉月は身體に屬してゐることを示したものである。

1026〔段〕タン だん　新 ダン（一〇・四）

耑の省畫（瑞を見よ）と殳との合字といふ。梃(てこ)にてものをうつこと。故に殳を書く（殺を見よ）耑は聲符。ものをうてばくだけるから、そこで轉義して分割・部分・シキリ等となる。我が國ではダンといひキザハシ・等級・圍碁・將棊・柔道・劍道等の巧拙の名目となる。また反別の意にも用ゐる。

1027 〔處〕ショ そ　新　ところ（一〇・四）　此處(ここ)（一〇・七）　何處(いづこ)（一一・四）　音　ショ（一一・六）

もとは処と書いたもので夂と几との合字。夂はから來たもので足をひいて歩くこと（止の條を見よ）几は机などの旁と同じく床几の象形。そこで足を引いて床几のところへとどまるの會意。故にトコロ・オル。

處の字の上部は虎の省略で聲符として加へられたものである（呼を見よ）。

1028 〔嵐〕ラン　新　あらし（一〇・五）

もと葻と書いたもので本義は草が風氣を帶びてゐること。靑嵐と熟するのがそれである。後に草冠を山としたものである。

我が國では「山の風」の會意に見たててアラシと訓じてゐる。もつとも「玉扁」には大風とあ

るから、かかる意味にも使はれたものらしい。

1029 〔附〕フ　新　つ・く（一〇・五）　舊　フ（一〇・五）

阜と付との合字。小さな土の山。故に阜を書く（郷の條を見よ）。付は聲符。

聲符たる付の意をとり寄附・附屬・附庸・附托・附著・附近の如く使用せられる。付との區別は、付は交付・付與の如くサヅケル　ワタスの意に用ゐられ、附は引き付けてソヘマスやうな意に用ゐられる。

1030 〔救〕キウ く　新　すく・ふ（一〇・五）　舊　キウ（一一・二八）

本義は惡いことをいましめて止めさせること。故に攴を書く（攷・政を見よ）。求は聲符。轉じて　クフタスケル。

1031 〔遂〕スキ ずゐ　新　つひ・に（一〇・五）　舊　と・ぐ（一二・四）

家と之遠との合字。ニゲルこと。故に之遠（行を見よ）。家は聲符であるが、この字に既に思ひをトゲルといふ意があるから、遂が遂行の遂となるのはこの聲符の意をとつたものである。字形は八、

と豕との合字で八はものの分散するかたち、即ちものごとが思ひ通りにスラ〳〵と行くことをあらはしたもの。豕は聲符である。

豕

なほ豕の古形は豕で豚の象形である。

1032
〔漕〕サウ ざう　新　こ・ぐ（一〇・五）

水と曹との合字。水上で五穀を運ぶこと。故に三水。曹は聲符。轉じて船をコグこと。

なほ曹は小篆にて曹。東の字二つと曰との合字。本義は裁判官の官舍。判事や檢事の官舍は朝廷の東の方に建てられてゐたので東の字を書いたもの。曰はイハクといふ字にて裁判のことを意味する。轉じて裁判官・役所等。軍曹　曹長・曹司の如く用ゐられるのもそのためである。

1033
〔呑〕ドン トン　新　の・む（一〇・五）

天と口との合字。ものを嚙まないで丸のみにすること。故に口を書く。天は聲符。

1034
〔浪〕ラウ　新　ラウ（一〇・五）　舊　なみ（一一・一四）

本義は川の名（滄浪水）。故に三水。良は聲符。音の假借により風によつて立つ小波のことと

なる。波を見よ。

1035〔畫〕グワ クワク ぎやく ／ クワイ ゑ　新 グワ（一〇・五）　替 クワク（一〇・七）　ゑが・く（一〇・一一）　エ（一〇・一一）

聿と田と一との合字。聿は筆の本字。筆にて田の境（一）をすること。故に下部の一線を曲げて畵とも書く。轉じてワカツ・ハカル・エ・エガクともなる。なほ筆畫の畫は文字を組立てる一點又は一線のこと。

1036〔影〕エイ やう　新 かげ（一〇・六）　替 エイ（一二・六）

景と彡との合字。もののカゲ。故に景を書く。卽ち景は日光のことであるが、ものの影は光線があつて初めて生ずるものだからである。彡は形の條下で說明したやうにカゲのアヤをあらはしたものである。なほ景は聲符をも兼ねてゐる。

1037〔寄〕キ　新 よ・る（一〇・六）　替 キ（一一・一一）

本義は身をよせてヤドルこと。故に家の象形たる宀冠を書く。奇は聲符。轉じてヨセル。

1038〔伏〕フク ふく　新　フク（一〇・七）　替　ふ・す（一一・七）

人と犬との合字。人へ屈伏すること。犬はよく人へなつき主人の命令通りになるのでこの字を組合はせたのである。轉じてフス・カクレル。

1039〔層〕ショウ そう　新　ソウ（一〇・七）

尸と曾との合字。家が二階三階の如く重なつてゐるもの。故に屋の字の上部と同形の文字へ聲符として曾を加へたもの。

曾　なほ曾はよく話すこと。即ち八と㓁と曰との合字にて曰はイハク。八は語氣の發散すること。㓁は窓の本字にて聲符として加へられたもの。轉義してカツテの如く使用せられる。

1040〔割〕カツ かち　新　わ・る（一〇・七）　替　カツ（一一・一八）

害と刀との合字。ものをハギサクこと。故に立刀。害は聲符。

我が國ではワリといひ割合の如く用ゐられる。それより八割・五割の如く十分の一の歩合をあらはす文字として語尾に組合はされる。

1041 〔浦〕ホ ふ 新 うら(一〇・七) 假 黄浦(くわうほ) 一一・三)

水と甫との合字。水にのぞんでゐる土地即ちウラ。故に三水。甫は聲符(補を見よ)。

1042 〔凡〕ハン ぼん 新 およそ(一〇・七)

二つ以上のものを總括すること。古形はにて同の字の條下に述べた通りの考へで出來た文字である。轉じてスベテ・オヨソ・普通のこととなる。

1043 〔億〕オク ヨク いく 新 オク(一〇・七)

小篆にて。本義は自分の思ひ通りになつて心が安らかなこと。故に人扁。右旁は聲符。なほ億の旁は言と中と心との合字にて言葉即ち思ひ通り(中は的中の意味)になつて心が愉快だといふ意味の文字であるから億においては勿論會意をもかねてゐる。

億が大數をあらはす文字として使用されるのは音の假借である。

1044 〔應〕イヨウ おう 新 オウ(一〇・七)

䧹と心との合字。本義は言葉をもつて相手の受け答へをすること。故に心を書く。䧹は聲符であるが、この字は鷹の本字にてタカのこと。もと雁と書いたもの。即ち隹（鳥を見よ）にてその意をあらはし疒は聲符。この字は人が病氣にかかつて椅子などにもたれてゐること。意義の上とは何等關係がない。

1045
〔緣〕エン——タン　新　エン（一〇・九）

糸と彖との合字。着物の端を飾るキレのこと。故に糸を書。彖は聲符。轉じてチナム　關係となる。なほ彖の字は豕が頭（ぶた）をあげて走ることである。

1046
〔罵〕バ め　新　ののし・る（一〇・九）

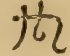
罪人のうち罪の輕いものは口で譴責したものであるが、この字は口で罰すること。そこで網の象形网から出來た文字にて罪人なることをあらはし、聲符として馬を組合はせたもの。轉じてノヽシル。罪の條を見よ。

1047
〔唯〕ユキ——キ——スキ　新　ただ（一〇・九）

口と隹との合字。我が國でハイと答へるやうな丁寧な返辭。そこで口を書く。隹は聲符。タダの意に使用されるのは音の假借である。

1048 〔離〕リ　新　はな・る(一〇・九)

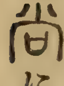
本義はウグヒスの一種。故に隹を書く。左扁は聲符。ハナスの意に使用せられるのは音の假借である。

なほ离の字の古形はにて山に住んでゐる神獸とされてゐる。卽ち上部のは角又は頭の突出してゐるかたち。は首。下部のは禸の字における如く足をあらはしたものである

1049 〔皿〕ベイ　みやう　新　さら(一〇・九)

古形は。小篆ではとなりサラの象形から出來た文字である。盟・血等はこれから出來た文字である。第一篇指事の條を見よ。

1050 〔尙〕シヤウ　じやう　新　なほ(一〇・九)　假　和尙(をしやう)(九・一八)

古形は。小篆はにて八と向との合字。コヒネガフこと。故に口を書く。上部の八は物

事を願ふ際に語氣の分散することをあらはしたものである。タツトブとなるのは上の音に假借されたもの、またムカシ、サキニとなるのは向の音に假借したものである。

1051 〔巧〕カウ けう　新　カウ（一〇・九）　巧　たくみ（一〇・二一）

工と丂との合字。ワザのこと。それよりタクミとなる。そこで工匠の工を書く。丂は聲符である（考・朽を見よ）。

1052 〔預〕ヨ　新　あづかる（一〇・一〇）　預　ヨ（一〇・一〇）

豫の字の俗字といはれてゐる。本義は大きな象のこと。假借してアラカジメ・タノシムとなる我が國ではアヅケル意に用ゐる。

1053 〔期〕ゴ キ ぎ　新　キ（一〇・一〇）

月と日とが廻轉して相出合ふこと。即ち一ヶ月のこと。滿月の時は月は太陽の如く圓滿でありその時から次の滿月までの間。故に月を書く。其は聲符。そこで月のヒトマハりからカギリ（期間）の意となりトキともなる。

1054 〔拂〕フツ　新　はら・ふ(一〇・一〇)

手は弗との合字。ものをハラフこと。故に手扁。弗は聲符でもあるが、この字は費の條下に說明したやうにチリトリの象形から來たものである。

1055 〔貸〕タイ　新　か・す(一〇・一〇)

本義はものを人へ施すこと。故に貝を書く。代は聲符。轉じてカスことになる。

1056 〔證〕ショウ　新　ショウ(一〇・一二)

言と登との合字。報告をすること。故に言扁。登は聲符。シルシの意となるのは徵に假借したものである。

1057 〔勵〕レイ　新　レイ(一〇・一二)　替　はげ・む(一一・二)

厲と力との合字。ツトメハゲムこと。故に力を書く。厲は聲符になつてゐるがこの字は厂と蠆との合字にて刀劔をみがくアラトのこと。故に勵においては單なる聲符ではなく會意も含まれて

ゐる。厲の字における厂は岩・崖等に含まれる厂にてこれより荒砥の意を見出し、蠆（たい）は聲符。

なほ蠆は萬と虫との合字にてサソリのこと。

1058 〔普〕ホ ふ　新　フ（一〇・一一）

小篆にて。竝と日との合字。本義は太陽の光りを雲がさへぎつて日の光りがないこと。故に日と、雲がナラブの意にて竝とを組合はせたのである。並はまた聲符ともなつてゐる。ヒロシ・アマネシとなるのは博の音に假借したものである。

1059 〔覺〕カク がく　新　おぼ・ゆ（一〇・一一）　替　さ・む　（一一・八）　カク（一二・七）
さま・す（一一・二二）

學の省畫と見との合字。本義はサトルこと。目で見たり學んだりして眞理を會得するの會意である。學はまた聲符ともなつてゐる。轉義して目がサメルこととなりまたオボエルともなる。先覺の如く熟し聖賢の意にも用ゐられる。

1060 〔獲〕クワク わく　新　う（一〇・一一）

犭と蒦との合字。狩獵にてエモノを得ること。故にトルともなりまたエモノともなる。故にケ

モノ扁を書く。蒦は聲符（護を見よ）でもあるが、この字には隹と又とが含まれてゐるので、特にこの字を選んで組合はせたのである。

1061 〔援〕エン　をん　新　エン（一〇・一一）

手と爰との合字。本義は手で引き合ふこと。故に手扁。爰は聲符でもあるが既にこの字がヒクといふ意味の文字である。即ちその字形は𠬪と于との合字。𠬪は受の字によく似た形で上部は爪下部は又にて右手の象形。兩手でヒキアフ義である。于はヒキノバスといふ意味の文字。

1062 〔的〕テキ　ちやく　新　テキ（一〇・一一）

もと日と勺との合字。アキラカなること。故に日を書く。勺は聲符。轉じてタダシ・マコト・マトとなる

一頭地、〇〇底の意に用ゐられる。即ち大乘的、自然的の如き使用法である。この意味は「ノ」「ナル」「モノノ」の意であるが、地・底の假借ともいはれ、また英語の接尾語 -tic の假借ともいはれてゐる。

1063 〔僧〕ソウ 新 ソウ（一〇・一三）

人と曾との合字。出家のこと。故に人扁。曾は聲符（層を見よ）。

1064 〔迎〕ゲイ ぎやう 新 むか・ふ（一〇・一三）

卬と之遶との合字。出ムカヘルこと。故に之遶。卬は仰と同じくアフグの意がある。更に聲符ともなつてゐる。

1065 〔榮〕エイ やう 假 さか・ゆ（一〇・一三） 替 エイ（一〇・二五）

熒の省畫と木との合字。本義はキリ（桐）の木のこと。故に木を書く。熒は聲符。この字は英の音に假借してハナ（花）の意となり更にサカヘルとなつたものである。なほ榮の字に組合はされた聲符は㷋と冖との合字。家の中にある燈の光りのこと。故に㷋を書き更に家の象形冖を組合はせたのである。

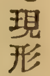
1066 〔泊〕ハク ばく 新 と・む（一〇・一三） 替 とま・る（一一・一七）

水と白との合字。水の淺いこと。故に三水。白は聲符。轉義して船舶を岸へつけること。それよりトマル・ヤドル。

1067 〔失〕シツ しち 一 イツ いち　新　うしな・ふ(一〇・一二)　舊　シツ(一〇・一二)　う・せ(一二・二〇)

小篆にて。手と乙との合字。手からものをオトスこと。故に手を書く。乙は聲符。それより廣くウシナフとなる。

1068 〔梅〕バイ まい　新　うめ(一〇・一二)　舊　バイ(一〇・二三)

木と毎との合字。本義はクスノキに類した木。故に木扁。毎は聲符。ウメの意となるのは某の音に假借されたのである。某の古形はにて木に果物のなつてゐる象形。更に字形の類似してゐるところよりとなり甘と木との合字とされて現形の某となつたものである。毎の條を參照せよ。

1069 〔奪〕ダツ　新　うば・ふ(一〇・一二)

奞と寸との合字。上部は奮の上部の如く鳥。下部は尋の字の下部と同じくもとは右手の象形。

そこで手に持つてゐた鳥が手からヌケルといふ會意にて本義はヌケルこと。それよりウバフともなる。

1070 〔暇〕カ　新　いとま（一〇・一二）　替　カ（一二・三）

日と叚との合字。ヒマ、スキマのこと。故に日扁。叚は聲符である。叚の字の古形はにてものごとをなすに人手を借りることである。即ちもも共に手の象形である（手・又を見よ）。後に人扁が加はつた假の字も出來た。叚・假は同義である。カリニの意となるのは人手を借りるといふことは自分の本當の力ではなくカリノコトだからである。

假

なほ暇の字は我が國ではイトマと訓じ主從の關係、夫婦の關係を絶つことに用ゐる。霞・假等における叚は聲符として組合はされたもので段の字とはその成因がちがふ。

1071 〔沙〕サ しや　新　サ（一〇・一二）　假　毘沙門天（びしやもんてん）（九・一八）

水と少との合字。本義はスナのこと。水が少くてスナが現はれるといふ會意ともいはれ、また少は聲符ともいはれてゐるが、この字の古形にの右旁がスナを象つたものたることは他の古形に∴なる文字のあることでも想像することが出來る。

後に砂の字が出來、沙は沙漠の如き場合に用ゐられるやうになつた。

1 72 〔汰〕タ タイ　新　タ（一〇・一二）

水と太との合字。水で洗つて善いものと惡いものとをよりわけること。故に三水。太は聲符。もと汰は汏とも書いた。それは太の條下で說明したやうにもと〳〵太の字は大から出來た同義の文字だつたからである。

1073 〔汝〕ジョ によ　新　なんぢ（一〇・一二）

水と女との合字。本義は河南省にある淮水の一支流の名。そこで三水（江・河を見よ）。女は聲符。ナンヂの意に用ゐられるのは、はじめ女をナンヂの意に假借したので、從つて後に女を含む汝を專らナンヂとして用ゐるやうになつたのである。

1074 〔授〕チュ　新　さづ・く（一〇・一二）　假　授業（じゆ）（九・一七）

手と受との合字。サヅケルこと。故に手扁。受は聲符でもあるが、やはりソケサヅケの會意を含ませたものである。受を見よ。

1075 〔侍〕シ じ　新 さむらひ（一〇・一二）　替 ジ（一二・一四）

人と寺との合字。本義は君側にハンベルケライのこと。故に人を書く。寺は聲符でもあるが臣下の集まる朝廷の會意もある。轉じてサムライ・サムラフとなる。

1076 〔訟〕ショウ じゆ　新 ショウ（一〇・一三）

言と公との合字。相ひ爭ふこと。故に言扁。公は聲符（第一篇第四章を見よ）でもあるが公平なる裁判によつて曲直を明らかにしてもらふの會意もあらう。

1077 〔斷〕ダン　新 ダン（一〇・一二）

古形はで糸を斤(おの)で切つてゐるかたちである。現形では右旁へ更に斤の字が加はり、左邊も向きをかへて㡭となつてゐる。實は㡭は、斷の字の古形を反對にして繼(つぐ)といふ意を表はした文字繼にて繼の本字であるが、斷の字の旁が繼の字と同形になつたので後に糸扁を加へたものである。

1078 〔構〕コウ　新 かま・ふ（一〇・一三）　替 コウ（一一・一〇）

木と冓との合字。家を建てる際に柱を立てその上に家根の形を作ること。故に木扁。冓は聲符でもあるが既にこの字は材木を積み重ねた形から出來た文字にてカマヘルといふ意がある（冓を見よ）。

1079
〔府〕フ　新　フ（一〇・一三）

書きものをおさめておく庫（くら）のこと。そこで家の象形から出來た麻垂（まだれ）を書く（广を見よ）。付は聲符。なほ付の字は交付の付であるから文書を交付するところの意味で府廳・官府の如く用ゐられる。この字に肉月がつけば腑の字となり五臟六腑の如く使はれる。卽ち腑は肉體の生存を續ける機關となるものであるから、府の字は單に聲符だけの意味からでなくて會意をかねて組合はされたものである。なほ肉を下に書き腐とすればクサルこと（紋の條を見よ）。

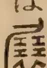
1080
〔館〕クワン　新　クワン（一〇・一三）　假　高館（たかだち）（九・一六）

食と官との合字。昔五十里毎に官設のヤドヤがあつた。この字はそのヤドヤの意味。そこで官の字と宿舍では食事を出すので食の字とを組合はせたもの。官は聲符ともなつてゐる。轉じて學校・官舍の如き大きな建物のこととなる。

1081 〔煉〕レン　新　レン(一〇・一三)

本義は火にかけて金屬をネルこと。故に火扁。柬は聲符でもあるが、この字はヨリワケルことであるから多少の會意もある。字形は柬に八がついてゐるものをわけるの會意。即ち八は分散の意を含んでゐる。

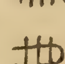
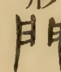
1082 〔展〕テン　新　テン(一〇・一三)

輾の本字にて本義はマロブこと。即ち小篆はにて上部のは屋　屍の上部と同じく人の古形から來たもので人がまろんでゐる意をあらはしたもの。下部はの省略されたもので聲符として組合はされたものである。

なほこの聲符は(衣)と㠭との合字にて丹穀の衣。故に衣を書いたもの。㠭は聲符である。

展覽の如くノベヒロゲル意となるのは㠭の意をとるやうになつたのである。この字は大工・工匠の工の字を四つ書いて、手藝品を澤山集めて人にみせるの意である。

1083
〔編〕ヘン　新　ヘン(一〇・一三)

糸と扁との合字。書物をとぢること。故に糸扁。左旁は戶と冊との合字にて書き物を書く編まない札。論の條下でも說明したやうに冊の古形には等がある。もと竹や木の札を作つて文字を書きこれを紐でゆはえて書物としたからかかる象形文字が出來たのである。戶の字が加へられてゐるのはこの字は門の象形の一方をとりとしたものであるからバラ〳〵の意をあらはしたものであらう。

編の字は更に書物のことにもなるが編輯の如くバラ〳〵のものをアム卽ちマトメル氣持ちで用ひられる。また書物を竹の小札で作つたので竹冠の篇の字も出來た。この方は篇什の如くマトマツタモノの氣持ちで用ゐられてゐる。

1034
〔則〕ソク　新　ソク(一〇・一三)　假　正則(まさのり)(一一・七)

貝と刀との合字。共同事業の利益とか遺産などを公平に分配すること。故に分割の意をあらはすために立刀を書く。貝は古代の通貨だからこれにて財物の意をあらはしてゐる。法則・規則の如く用ゐられるのは公平の意から轉義したものである。

接續詞のスナハチとなるのは音の假借である。

1085 〔圖〕ヅト　新ヅ（一〇・一四）　替ト（一一・三）

耕地や土地の整理をすること。故に口を書く內部は吝嗇の嗇卽ちヲシムの意があり、土地の整理には種々な困難が伴ふの意を寓したものといはれてゐるが、要するに內部は土地を種々區畫した形をあらはしてゐるものだらうと思はれる。

轉義してハカル・計畫・エガクとなる。

1086 〔崩〕ホウ　新くづ・る（一〇・一四）

山と朋との合字。本義は大きな山がくづれおちること。故に山を書く。朋は聲符。轉じて天子の死となるのは、天子は一國の君主であるからそれを大山にたとへたものである。

朋は鳳凰といふ鳥の鳳の本字にてその象形から來たものである。凮は凡と鳥との合字。凡は聲符。

朋　凮

なほ朋友の朋の字の古形は等で人が、貝貨を錢緡(ぜにさし)へさして携へてゐるかたちから出來たもので、贊成の贊の字の如く友を援助するに物質をもつてするといふ會意から來たものである

1087
〔採〕サイ　新　サイ（一〇・一四）　替　と・る（一二・五）

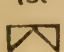
もと畢に釆と書いたもので爪と木との合字。草木を切り又は摘み取ること。故に手の意で爪を書きこれに木を組合はせたもの。手扁は後になつて加へられたものである。

なほ番・釋等の上部は釆。番の條下を見よ。

1088
〔燃〕ネン　新　も・ゆ（一〇・一四）　替　ネン（一一・一五）

火と然との合字。モスこと。故に火扁。然は聲符。然の條を見よ。

1089
〔更〕カウ きやう　新　さら・に（一〇・一四）　替　ふけ・る（一一・一一）

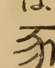
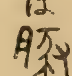
古形はにて丙と攴との合字。ものを改良する事。故に攴を書く。この字はウツ意味があり惡しきところを改正するの意を寓したもの。丙の古形にはもあり天の象形といはれてゐる。火扁の加はつた炳の本字にてアキラカなる意。卽ち暗黒より光明へ導くの會意を含めたものである。アラタメルことよりサラニと轉義する。

1090 〔羊〕ヤウ　新　ヤウ（一〇・一五）　替　ひつじ（一〇・一八）

古形から來たもので特に羊の角の部分が强調されてゐる。羊は神へ捧げる犧牲として尊ばれたものであり。しかもその性質がまことに從順なので吉祥の祥の字に含まれてゐるやうにめでたいことの代表とされてゐる。また善・美・義等の文字にも組合はされてすべて善美の觀念があらはされてゐる。文學博士松村武雄氏によれば、野蕃時代の人々にとつては食ふことが一番重要な欲望とせられ、食物が價値の中心（value Centre）をなしてゐる。例へはメキシコの言葉では食べるといふことは Gualli であり、ヘブライの言葉では Tobh となり、これらはすべて「食べること」を意味すると同時に「善い」即ち英語の Good を意味するといはれてゐる。

善・美・義等に羊の字が組合はされてゐるのは、支那においてもその昔、食ふといふことが價値の中心をなしたものであらうといはれてゐるが、たしかにそれにちがひない。なほ動物の習性を文字を作る上に應用したことは隨所に說明した通りであるが、特に牛・犬等の條下を參照せられたし。

1091 〔豚〕トン　どん　新　ぶた（一〇・一五）

肉と豕との合字。豕の古形はにてブタの象形から出來た文字である。肉月が附け加へられてゐるのは料理又は神に供へる豚肉の意を表はしたものである。そこで豚の字の古形にはの如く手（又）の加へられた文字もある。

1092 〔額〕ガク ぎやく　新　ガク（一〇・一五）

客と頁との合字。ヒタヒのこと。故に頁（かほ）を書く。客は聲符。それより搢上等の題識。また金額の如くタカ・員數として用ゐられるのは、ヒタイは顏面中にて一番目につくところであるから、ものの標識となるのと同樣紀數は標識となるからである。

1093 〔整〕セイ　新　セイ（一〇・一六）　替　ととの・ふ（一二・一四）

敕と正との合字。トトノヘルこと。故に敕と正とを組合はせたもの。敕は勅の本字であるから束にものの散漫することを防ぐの意がある。正は更に聲符をもかねたものである。

1094 〔虎〕コ　新　とら（一〇・一八）

第一二圖（九八頁）に挿入したやうにトラの象形から來た文字である。この字は號・嘑・處の如き

文字へ字形の體裁を整備さすために組合はされる。もつとも號・哮の如きは虎の咆哮する會意もあり、且つまた聲符の役目をもなしてゐる。

1095〔敗〕ハイ ベ　新　やぶ・る（一〇・一八）　替　ハイ（一〇・二七）

ものをソコナヒコボツこと。故に手に鞭をもつてゐる形より出來た攵を書いたもの（牧・敎・敵を見よ）貝は古代の通貨であるからこれにて財物の意をあらはしてゐる。轉じてヤブル・マケル。

1096〔捕〕ホ　新　とら・ふ（一〇・一八）　替　ホ（一〇・二二）

手と甫との合字。罪人をトラヘルこと。故に手扁。甫は聲符（補を見よ）。

1097〔効〕カウ げう　新　カウ（一〇・一八）

效の俗字である。恰かも敕の字を勅と書くのと同樣である。模倣の倣の本字にて本義はマネルこと。形のあるものをまねて作るには手をもつてするので、攴を手に道具をもつてゐる形に見立てて（醫を見よ）この字を組合はせたのである。交は聲符。轉じてキキメ・テガラとなる。

1098
〔香〕キヤウ かう　新 か（一〇・一九）　舊 カウ（一二・一〇）

古形はにて黍(きび)と甘との合字。現形は黍を略して禾としたもの。本義はウマイ ニホヒのこと黍などの五穀を炊けば甘(うま)い ニホヒがするといふ會意である。

1099
〔薄〕ハク ばく　新 うすし（一〇・一九）　舊 ハク（一二・一八）

草と溥との合字。木が叢がり生えてゐること。故に草冠。溥は聲符。迫に假借してセマルとなる。それよりウスシ。我が國ではススキと訓じてゐる。

簿　なほ竹冠の簿はトチブミのこと。もと書冊は竹片を組合はせたから竹冠としたのである。溥は聲符。

1100
〔絹〕ケン　新 きぬ（一〇・一九）

糸と肙との合字。加工を加へない生絹(きぎぬ)のこと。故に糸偏。肙は聲符。なほ肙はボウフラのこと即ちその古形はで上部はボウフラが躍動してゐるかたち。下部の肉は動物なる意を寓したものである。

1101 〔管〕クワン　新　くだ（一〇・一九）　替　クワン（一一・一二）

竹と官との合字。本義は竹で造つた六孔のフエ。故に竹冠。官は聲符であるが六つの孔がそれぐ＼自分の音色を司つてゐるので官司の會意もある。轉じて管弦の如く竹で作つた樂器の總稱となる（竹の條を見よ）。またクダの意ともなる。

管理・管領・管轄の如くスベルの意に用ゐられるのは官に假借せられたものであらう。

1102 〔髪〕ハツ ほち　新　かみ（一〇・一九）　替　ハツ（一一・九）

髟と犮との合字。頭のカミゲのこと。下部の犮は符聲であるが、上部は長と彡との合字にて、この字に既にカミの意がある。即ち彡は形の條下で説明したやうに髪が美しく生え揃つてゐることをあらはしたもので、頭髪が長くて美しいとの會意である。

なほ犮は拔の旁と同じくその古形は犮にて犬の字へ一線を組合はせたもの。犬の足へ邪魔物がひつかかりそれを振り拂つて走るといふ意である。

1103 〔障〕シヤウ　新　さは・る（一〇・二〇）　替　シヤウ（一一・九）

阜と章との合字。區畫をするために土砂を積んで作つた土手のこと。故にコザト扁を書く（鄕の條を見よ）。章は聲符でもあるが文章などの段落であるからシキルの會意もある。轉じてサハリ・サマタゲなどとなる。

1104
〔粗〕ソ　新　ソ（一〇・二〇）

米と且との合字。シラゲナイコメ。故に米扁。且は聲符。

1105
〔縫〕ホウ　新　ホウ（一〇・二〇）　替　ぬ・ふ（一二・九）

糸と逢との合字。針で着物をヌフこと。故に針に糸をもつて布を逢合する會意である。なほ逢は聲符にもなつてゐる。

逢

逢の字は夆と之遶との合字。アフ意。故に之遶（行を見よ）夆は歩行に際して邪魔物がありツキアタリの意。丰は聲符であるが（豐・邦・害を見よ）上部は足跡の象形がとなり更に現形となつたもの（止を見よ）で歩行を意味したものである。

1106
〔夢〕ボウ　む　新　ゆめ（一〇・二〇）　替　ム（一一・一三）

瞢の省畫と夕との合字。本義は夕方になつて物がよく見えないこと。そこで夕を書く。瞢は日がよく見えないことであるから、會意となつてゐるが聲符をもかねてゐる。

夢がユメとなるのは㝱に假借したものである（寢を見よ）。

1107

〔佛〕 ブツ ほつ　新　ブツ（一〇・二〇）

この字は彷彿（髣髴）と熟用されるのが本義の場合の使用法でサモニタリといふ意である。夕方などになると人の顏が甲か乙かまぎらはしくなるやうなことがあるので人扁。弗は聲符。ホトケの意に用ゐられるのは梵語のブッタの音に假借したものである。この字を「人に弗ず」の會意にてホトケと解するのは誤りである。

1108

〔振〕 シン　新　ふる・ふ（一〇・二一）　替　シン（一二・六）

手と辰との合字。タスケスクフこと。故に手扁。辰は聲符であるが、星の條下に説明したやうに活動の意をあらはしたものである。轉じてウゴク・フルフ。

1109

〔丹〕 タン　新　ダン（一〇・二二）

本義は紅などの材料となる丹砂のこと。古形から來たものである。地中から掘出すので外廓の井字形は井戸の井と同じともいひ、また鑛石を掘出す際に井桁を組んで坑內へ進んで行くのでその象形ともいはれてゐる。內部の點は丹砂を指事したものである。或ひは全部が鑛石の結晶をあらはしたものかも知れない。

丹砂は赤の純粹なものであるし、藥品ともなるから轉じて丹の字は藥の精練したものとなる。また人間のマゴコロ。

1110 「術」ジュツ　シュツ　じゆち　新　ジュツ（一〇・二一）

行と求との合字。本義は村里にある道のこと。故に行の字を書く。求は聲符。轉じて藝術の如くシワザの意に用ゐられるのは道は人々が常に歩行して慣れてゐるからである。そこで人のよるところ卽ちスベ、方法、事業、學問等となる。

なほ求はその古形にて、又（左篇は禾）とも書きネバリケあるキビのこと卽ち味のある意。

1111 「隻」セキ　しやく　新　セキ（一〇・二二）

隹と又との合字。一羽の鳥のこと。故に隹を書く。隹は鳥の象形。又は右手の象形にて、手に

鳥をもつてゐることによつて、一羽なることをあらはしたので、贈答品として人へ鳥を贈るときには雌雄一とつがひ卽ち二羽を贈つたので雙の字が出來てゐるやうに、隻は一羽をあらはしたのである。轉じて二つのものの片方ともなりヒトツの意ともなる。また船を數へる言葉にも用ゐられてゐる。

1112 〔裂〕レツ　新　レツ（一〇・二二）　替　さ・く（一二・一四）

列と衣との合字。布地がヤブレルこと。故に衣を書く。列は聲符。轉じて廣くヤブル・サケル

1113 〔歡〕クワン　新　クワン（一〇・二二）

雚と欠との合字。ヨロコブこと。よろこばしい時には思はず聲を出すので、人が口をあけてゐるかたちの欠を書く（吹・歌を見よ）。雚は聲符。

1114 〔卷〕ケン くわん　新　ま・く（一〇・二八）

小篆にて。𢍏（變化して𠔉となる）と卩（變化して㔾となる）との合字。本義は膝の關節のところ。そこで節の本字たる卩を書く。轉じてマガルとなり更にマキモノとなる。書籍の意となるのはもとの書物は卷物

となつてゐたからである。𢍏は聲符である（奥を見よ）。

券

巻に似た字に券がある。契約の證とするワリフのこと。もと支那では契約などした際には木の札にその要件を書いて刀で二分しこれを當事者が各一方を持つてゐたものである（質を見よ）。そこで刀を書いたもの。上部は聲符。債券・證券の如く用ゐられる。

1115 〔鏡〕キヤウ　新 キヤウ（一〇・二三）　替 かがみ（一一・八）

金と竟との合字。カガミ。もと銅の如く金屬を鑄造しその表面を磨いて作つたから金扁。竟は聲符（境を見よ）。

1116 〔尋〕シン じん　新 たづ・ぬ（一〇・二三）　替 ジン（一一・一七） ひろ（一一・一九）

左と右と寸との合字。本義は一ヒロのこと。一ヒロとは大人が左右の手をひろげた長さ。上部のヨは右手の象形から來たものであるが後に變形して左・右の上部に含まれてゐるやうに、尋の字における工と口との兩方へ利かせたものである。寸は寸法の寸。尋常と熟して普通の意となるのは、尋の二倍を常といひ、ものの寸法をはかる際に常に用ゐられたからである。またこの字がタヅネル意に用ゐられるのは、混亂したものを兩手で整理し法則（寸）を見出すの會意と見た

からである。

1117
〔跡〕セキ しやく　新　あと(一〇・二三)　音　セキ(一二・八)

足と亦との合字。人のアシアト。故に足扁。亦は聲符。轉じて事業・行爲等となる。

1118
〔詩〕シ　新　シ(一〇・二三)

古形は訨にて言と之との合字。小篆では詩となり言と寺との合字。現形は小篆から來たものである。本義はウタ。故に言扁。之・寺ともに聲符にもなつてゐるが、古形においては詩歌は我々の情緒の溢れであり、そのおもむくところといふ考へから之を組合はせたもの。小篆における寺は詩歌には、韻律に一定の法則があるといふ考へから、寺を組合はせたのである。

1119
〔歴〕レキ りやく　新　レキ(一〇・二四)

厤と止との合字。日月がスギテユクこと。故に足趾の象形から出來た止の字を書く。上部は聲符。歴史・經歷の如く用ゐられ、日月が經過してゐる間に出來た事柄を止めること。なほ止を日にかへると曆となりコヨミのこと。

なほ厤は寶石類をミガクこと。故に厤の字における厂と同様アラトといふ意をあらはす文字を書く。秝は單なる聲符にて苗を田に植えること。故に禾を二つ並べて書いたものである。

1120 〔模〕ボ も　新 モ（一〇・二五）　營 ボ（一一・一四）　假 相模さがみ（九・三）

木と莫との合字。定木のこと。故に木扁。莫は聲符。轉じてノリ・テホン。

摸 なほ摸は摸索と熟する文字にて手にてものをサグルこと。故に手扁。莫は聲符。

1121 〔範〕ハン はん　新 ハン（一〇・二五）

笵の省畫と車との合字。本義は軷範といひ戰の門出、又は旅行に際して旅行の神たる道祖神を祭る式りこと。卽ち車で性物をひき殺し、血祭りにして出發するのである。そこで車の字を書く笵は聲符。

範の字が模範と使はれ、ノリ・テホンの意となるのは聲符として組合はされた笵の字にその意があつたからである。卽ち竹と氾との合字にて、氾は聲符であるが、竹は竹簡を意味しあらゆる法規、法式が文書に書きしるされてゐるの意を寓したのである。なほ氾は氾濫の氾にて水がミダレルこと。故に三水。㔾かんは聲符（勇・通を見よ）。

1122〔益〕エキ やく　新　エキ（一〇・二五）　替　ます（一一・一）

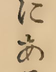
溢

小篆にて。水と皿との合字。水が皿にマシクハハルの會意にてマスとなり、また利益の意となる。更に三水が加へられて溢となればアフル。

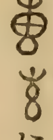
1123〔幸〕カウ ぎやう　新　カウ（一〇・二五）　替　さいはひ（一一・一〇）

小篆にて。夭と屰との合字。夭は夭折と熟しワカジニのこと。屰は逆の本字にてサカラフそこで若死にすべき筈のところが、さうでなかつたのでサイハヒとなる。現在の僥倖即ちコボレザイハヒの意の倖の本字である。

天子のミユキの意に用ゐられるのは、天子の車駕が止まればその地方の人々へ食帛を贈はり、また租税を免ずる等の恩典が與へられるからである。

執・報等の左邊も現形では幸となつてゐるが、これらは南の字の内部にあると同字にて大と辛との合字。即ち大なる罪をおかすの意である。

1124〔專〕セン―タン だん　新　セン（一〇・二五）　替　もつぱら（一一・二）

笏の一種にて長さ六寸ばかりの板の札。現在の手帖の如きもので君命などを忘れないために書きしるすため士人の常に所持したもの。そこで一定の法則がある意味にて寸の字を書く。上部は聲符でもあるがツッシムといふ意の文字であるから多少の會意も含められてゐることだらう。叀の字の古形はにて屮と幺との合字。屮は草木の萌芽。下部は幼の本字にて小心翼々として事にあたるの會意。

1125 〔課〕クワ　新 クワ（一〇・二五）

言と果との合字。トヒココロミルこと。即ち考課と熟し現在の試驗に相當する。故に言扁。果は聲符でもあるが、試驗の結果によつて地位部署等を決定するので特にこの字を組合はせたものであらう。

學課　課目の如く部分の意となるのはそのためである。なほ課は負擔・租稅・日常の仕事の意ともなる。

1126 〔基〕キ　新 キ（一〇・二五）　替 もと（一一・二五）

其と土との合字。牆の土臺のこと。そこで土を書く。其は聲符でもあるがこの字は箕の本字で

あるから土を盛るの意が寓せられ、更に字形においては、下部のは基脚のかたちから出來て居るので、土臺の意をも汲み取らせるやうにしたものである。

1127 〔和〕クワ わ　新 ワ（一〇・二五）　替 日和（ひより）（一二・五）　假 大和（やまと）（一一・一七）

もと咊と書いたもの。他の聲にあはせて發する聲。即ちコタヘ。そこで口を書いたもの。禾は聲符。轉じて樂器の音律を合はせること。シタガフ、ヤハラグ等となる。

大和（やまと）・和製　和語の如く日本の意に用ゐるのは、もと支那で我が國のことを倭と書いたのを、後に和にかへたものである。

1128 〔奏〕ソウ　新 ソウ（一〇・二六）

小篆にてと書く。奏の字と同系の文字。本義はものを捧げてススメルこと。故に兩手を書く。上部のは草木の萌芽の象形から出來た文字に似てゐるが、ここでは捧げるモノをあらはしてゐる。下部は大と十との合字にてススムといふ意の文字。即ち十は甲と同字にてもののススムこと。

轉じて臣下の者が君王に上言・上書すること。また音樂をカナデルこと。

1129
〔臨〕リン　新　リン（一〇・二六）　㬜　のぞ・む（一一・三）

臥と品との合字。上から下を見ること。そこでものに寄り臥すの意を寓するため臥の字を書く品は聲符。轉じて高いところから低いところに對すること、統治者に對すること、高貴な人が微賤な者のところへおもむくこと等になる。

臥

なほ臥は臣と人との合字。臣は人が身を屈めてゐるかたち。そこでフセル。なほ古形に左邊が盾の形になつてゐるものもある。

1130
〔揮〕キ　新　キ（一〇・二六）

手と軍との合字。フルヒオコスこと。故に手扁。軍は聲符でもあるがイクサといふ字であるから計をめぐらし、力を出すの會意も含まれてゐる。發揮と熱し勢を加へることとなる。

1131
〔秒〕ベウ　めう　新　ベウ（一〇・二六）

禾と少との合字。米や麥などの芒（のぎ）のこと。故に禾を書く。少は聲符。極めて細微なる意に用ゐられるのは芒の劔先きの細いことからではなからうか（妙を見よ）。また科・程の如くハカリに關すゐ

ものに禾の組合はされてゐることも忘れてはならない。

秒は分の六十分の一即ちセコンド（Second）の意に用ゐられる。

1132〔賤〕セン ぜん　新　セン（一〇・二七）　替　いやし（一二・六）

貝と戔との合字。値段の安い品物。故に貝を書く。貝は古代の通貨。戔は聲符（錢を見よ）。轉じてイヤシ。

1133〔遲〕チ ち　新　おそし（一〇・二七）

犀と之遶との合字。ユックリアユムこと。故に之遶。犀は聲符でもあるがこの動物の歩みのノロイことが應用されてゐるのであらう。

なほ犀（サヰ）は尾の省畫と牛との合字。水牛に似た一種の動物。故に牛を書く。

1134〔句〕ク く コウ　新　ク（一〇・二七）

古形は[illegible]にて斗と口との合字。本義は節のついた言葉。故に口を書く。斗は聲符であるが叫の條下で説明したやうに蔦（つた）。蘿（かづら）などのからんでゐる形から出來た文字であるから言葉に節がつけ

られて平坦でないとの會意もあるだらう。轉じて文章のキレメの意となる。

勾

マガル意を持つ勾配の勾の字は句の字を變化させたものである(花の條を見よ)。なほこの字は包の字の上部ともちがふことは敬の條下で說明した通りである。

第十一章　巻十一の新出漢字

1135〔陽〕ヤウ　新　ヤウ（一一・二）

阜と昜との合字。山のミナミのこと。故に小高い山の意の阜を書く。昜は聲符。山の南は日當りよく暖かなるよりヒナタ・アタタカ・日の光等に轉義した。

1136〔即〕ショク そく　新　すなは・ち（一一・一）　替　ソク（一二・一九）

鄉の條下に述べたやうに、本義は食事につくこと。即ち古形を見れば解る通り、食物に向つて人が座してゐる形である。それよりツク。スナハチとなる。

1137〔隨〕スヰ ずゐ　新　したが・つて（一一・二）

隋の省畫と之遶との合字。隨行の隨にてシタガヒユクこと。故に之遶。隋は聲符である。

1138 〔聖〕セイ しやう　新　セイ（一一・二）

耳と呈との合字。何事にもスグレタ人。智德の最も高き人。一を聞いて十を知るといふ如く聰明の意味を現はすために耳を書く。呈は聲符である。

1139 〔德〕トク　新　トク（一一・二）

本義は高い所に登ること。故に步く意味の行人扁。悳は聲符。今日では本義は忘れられて、行ひ正しき人德のトクの意に專ら使用されるのは、この字の旁に假借されたのである。卽ち悳は直と心との合字で、心の正直なるものをいふ。說文には德のことを「外は人に得られて內は己に得」と說いてゐる。

1140 〔化〕クワ け　新　クワ（一一・二）

本義は人民を敎化すること。文化の化は本義に近い。故に人を敎へ導いて（人扁）成人に化す（匕）といふ會意。匕は聲符も兼ねてゐる。

今日では化はカハルこと・バケルことに多く使はれてゐるが、匕の字がその本字である。匕は

人の字を倒さにして、人が年寄つて腰がまがり、頭髮が白く變つてしまふことを現はしたものである。

1141 〔著〕チョ チャク 新 いちじる・し（一一・一二） 暫 あらは・る（一二・一〇）

箸の字の竹冠が草冠に書き間違へられて出來た文字といふ。又着は著の略字。いひかへれば箸も著も着も同字である。ハシのこと。ツクとなるのはハシをつけるといふ處より轉義したものであらう。アラハル・イチジルシとなるのは音の假借である。

1142 〔績〕セキ しやく 新 セキ（一一・一二）

紡績の績にて絲をシムグこと。故に糸扁。責は聲符。つむいで布を作り上げることより成就する義となり、更にイサヲシとなる。

1143 〔述〕ジュツ 新 ジュツ（一一・一二） 暫 の・べ（一一・一二）

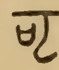
常道に循ひ行ふこと。故に之遶。求（術を見よ）は聲符。轉義してノブルとなる。

1144
〔錄〕リョク ろく　新　ロク（一一・二）

本義は銅錆の青色のこと。故に金扁。彔は聲符。

彔の字は殿堂等の彫刻のことで、木をキザム意味があるのでこの彔から假借されて、錄の字がシルス・ウツス・書籍等の意になる。

1145
〔可〕カ　新　カ（一一・二）

小篆にて。口と丁との合字。丁は丂の字の向を反對にした形である。伸び出やうとする氣が中途で邪魔されて伸びられないといふ字が丂であるから、その止つてゐた氣がパッと一時に發したことを現はす爲めに向を反對にした。ワッとかカッとか大聲を發する場合、一旦口を結んで息を溜めておいてから出すものである。可の字はこの發音を形にした文字である。本義は許可の可で、ヨシ・承知したこと。それより助動詞のベシともなる。

この字は河・何・呵・歌・阿・寄等多くの文字に聲符として組合はされてゐる。

1146
〔簡〕カン けん　新　カン（一一・二）

文字を記す竹を薄くした小札のこと。故に竹冠。間は聲符である。この字がエラブとなるのは柬の音に假借されたもので、エラブことよりスグル・ハブクとなり、簡易と熟して手輕の意ともなる。

1147 〔崎〕＊ 新 さき（一一・三）

山阪の險しきこと。故に山扁。奇は聲符。我が國でミサキの意に用ふるのはミサキがいづれも斷崖で險しいからである。

國定讀本にはこの字を﨑と書いて旁が違つてゐるが、それは崎の行書からあやまられたもので楷書は奇の旁が正しい。

1148 〔租〕ソ 新 ソ（一一・三）

田地に課するミツギのこと。昔は穀物を稅として收めた故に禾扁。且は聲符である。

1149 〔區〕ク 新 ク（一一・三）

匸と品との合字。ものを隱しておくこと。それ故品物の品と隱匿の隱の本字の匸とを組合はせ

たのである。轉義して物貨を藏す　シキリ・ワカツ・ヘヤ。更に行政上の地域をいふ。
行政上の一區域のことに使ふのは、品の字を口三つと見て、多數の人口が一ヶ所に集めてある會意に解釋した說もある。

1150〔制〕セイ　新 セイ（一一・三）

古文は。未と刀との合字。未は味の本字で果實のアジのこと。果實が熟して味がよくなつた處を刀で切りとつて食ふことが制の本義である。
それよりものを裁斷すること・制裁・制度等となる。

1151〔膚〕フ　新 フ（一一・三）

盧の省畫と肉との合字。ハダのこと。故に肉月を書く。盧は聲符。

1152〔俗〕ショク ぞく　新 ゾク（一一・三）

風習、習慣のこと。故に人扁。谷は聲符。轉義して俗人・俗化・凡俗などと使はれるやうに世間又は世間並のこととなる。

1153 〔縱〕ジュウ ショウ しゆ　新 ジュウ(一一・三)　訓 たて(一一・一三)

糸にて縛つたくくりをユルメルこと。故に糸扁。從は聲符。轉じてハナツ・ユルス・ホシイママ等となり、經の字に通じてヨコに對するタテとなる。

1154 〔博〕ハク　新 ハク(一一・三)

十と尃との合字。十にて一から十まで通じるとか、四方八方に通じてゐるとかいふ意味をもたせ、これに布く意味の尃を組合はせて、廣く通ずるの字とした。尃はまた聲符にもなつてゐる。

1155 〔狹〕ケフ カフ がふ　新 せま・く(一一・三)

この字は峽と同じく陜の字の俗字であらうといはれてゐる。それ故陜・峽・狹いづれも意味はセマシである。山と山との間のセバマッタ所をいふ。故に阜を書く。夾(大の條を見よ)は聲符。

1156 〔占〕セン　新 し・め(一一・三)

説文によれば「兆を視て問也。トロに從ふ」とあつて、トと口との合字。トは龜の甲を灼いて

現はれる縱横の割れ目の象形で、その割れ目の具合によつて未來の吉凶を判斷すること、即ちウラナフことで、この字に口の加つた占も同義であるといふ。

併し占にはウラナフ、ウラナヒの意の外にシムといふ意味があり、占領占有の占である。この方面から成因を考へると、トと口との合字でなく、口の部分は囗となるべきでその囗は國や田や圖の字等に含まれてゐる囗である。卽ち土地の一畫を現はしたものではなからうか。思ふに古代遊牧の時代に浮草を追ふて各地をさまよつてゐた頃、適當の綠地を見出した時、彼等の一隊はそこに落着くと同時に自分等の占有地としての何等かの目標をその地に立てるに違ひない。卽ち土地（囗）とその目標（卜）とを組合はせて占有　占領等の占の字が作られたと見るのである。地をトするといふ言葉もあり、ウラナヒの意になつたのは後のことであらうと思ふ。

1157〔桃〕タウ　だう　新　もも（一一・四）

モモの木のこと。故に木扁。兆は聲符である。

1158〔聽〕テイ　ちやう　新　き・いた（一一・六）

耳と悳と壬との合字。注意してよく聞くこと。それ故耳と德は得なりの意をもつ悳（德を見よ）と⋯

組合はせ、王を聲符としたのである。

1159 〔犯〕ハン ぼん　新　ハン（一一・六）

犬と㔾との合字。犬が人に逆ひかみつくこと。故にケモノ扁。㔾は聲符である。それより廣くオカスこととなる。

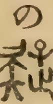
1160 〔刑〕ケイ ぎやう　新　ケイ（一一・六）

刀と幵との合字。殺することが本義。故に立刀。幵（形を見よ）は聲符。法律の制裁を加へる刑罰の刑となつたのは、その本字に𠛬の字があつてそれに通じたものであるといふ。

1161 〔罰〕バツ—ハツ バツ ばち　新　バツ（一一・六）

詈と刀との合字。罪の小なる者を刀を持つておどして叱りつける（詈）輕い刑罰のこと（罪を見よ）轉じて廣く罪を科すること。

1162 〔疑〕ギ　新　うたがひ（一一・六）　舊　ギ、（一二・一七）

小篆のより現形となりたるもの。子と止と七と矢との合字。子供の足（止）がまだしつかりしてゐないので（化の本字七にて現はす）タド〳〵しくアヤフゲなる會意。矢は聲符。そのあぶなかつしいことよりウタガハシ・ウタガフ等となる。

1163 〔檢〕ケン　新　ケン（一一・六）

木と僉との合字。書物に封印をすること。書函の祕密を保つ爲めの封印のこと。書函である故に木扁。僉は聲符である。後シラブ・タダス等と轉義した。

1164 〔件〕ケン げん　新　ケン（一一・六）

人と牛との合字。本義は見分けること。牛の體軀は大きいので、人と見分けがすぐつくといふ會意。件數と熟し物を數ふることにも使はれてゐる。

1165 〔添〕テン　新　そひ（一一・六）

霑の俗字といふ。雨が降つて濡り氣がつくこと。卽ちウルホスこと。故に雨。沾は聲符。沾はもとは川の名の字であつたが、のち霑に通じてウルホスとなり、沾の旁の占が忝に變へられて添が出來たといふ。ウルホスことより轉義してソヘ・マスとなる。

忝

なほ忝の字は天と心との合字。省みて心に愧づること。故に心を書く。天は聲符。勿體なし・カタジケナシと轉義した。

1166 〔極〕 ゴク キョク ごき 新 きは・めて（一一・六）

小篆にて極。木と亟との合字。家の棟木のこと。故に木扁。亟は聲符。棟木は家屋の一番高い所であるから極度・南極・北極等と熟して最上・無上・キハマルの意に轉義した。

なほ亟は小篆で見る如く二と人と口と又との合字である。二は天地の指事で卽ち天の時に乘じ地の理に因つて人が謀り（口）行ふ（又）會意で、敏捷に立廻る意の字といふ。

1167 〔解〕 カイ げ 新 とけ（一一・七） 舊 カイ（一二・七）

角と刀と牛との合字。刀を執つて牛の體から角を切り取ること。それよりトク・ヒラク・ホドク・ワカツ等となる。

1168 〔卒〕ソツ シュツ しゆち ｜ スキ リツ りち　新　ひき・ゐ（一一・七）

古形はである。鳥を取る網の象形といふ。卽ち上下の十は網をはる竿、眞中は糸の字でその左右は網を張り廣げた形。鳥が網にしたがひ集るのでシタガフとなる。ヒキヰル・カシラ・オホムネ・計數の名・割合・クラベル等となるのはそれ〴〵音の假借から來てゐる。

1169 〔督〕トク　新　トク（一一・七）

叔と目との合字。監督の督でよく察し見ること。故に目を書く。叔は聲符。

1170 〔際〕サイ セイ　新　ぎは（一一・七）

壁と壁との合せ目のこと。壁は土を重ねて塗りこめるので阜を書く。祭は聲符。轉じてアヒ・アヒダ・キハ等となる。

1171 〔筋〕キン こん　新　すじ（一一・七）

竹と肉と力との合字。人体のスヂのこと。筋は體力の元となるので力と肉月を組合はせ、竹は

最も線維の多いものだから竹冠を加へたのである。それより一般に細い線のことにも使ふ。

1172 〔斬〕ザン　新　きり(一一・七)

斤と車との合字。斬殺即ちキリコロスこと。斤(おの)にてキル意をあらはし、車は車裂(くるまざき)のことでコロス意をあらはしたのである。車裂とは昔罪人を車にて裂き殺した刑罰のことで、牛裂等に類する最も殘忍なる刑の一種である。

1173 〔算〕サン　新　サン(一一・七)

竹と具との合字。竹は筭(そろはん)の意で、具はその條下に説明した通り兩手でものを持つてゐる形。筭をもつて計算すること。それより廣くカゾヘルこととなる。

1174 〔旨〕シ　新　むね(一一・七)　耆　シ(一一・二五)

小篆にて。現形の下部は日になつてゐるが、小篆でみる如くもとは甘の字であつた。美味・
●甘味・ウマイこと。故に甘。匕は聲符。
この字をムネと訓ずるのは恉に通じたのである。恉の字は味ひある心といふ會意で、旨が聲符

をかねてゐる。

1175
〔況〕キヤウ　から　新　キヤウ(一一・七)

水と兄との合字。寒水といひ冷たい水のこと。故に三水。又氷の象形から來た二水をも書く。兄は聲符。

この字がイハンヤとか、狀況・市況などと熟してオモムキ・アリサマとなるのはいづれも音の假借である。

1176
〔桐〕ドウ　トウ　づ　新　ぎり(一一・七)

キリの木のこと。故に木扁。同は聲符である。なほ梧の字はアヲギリのことで梧桐ともいふ。梧もまた形聲文字である。

1177
〔突〕トツ　どち　新　トツ(一一・七)　替　つ・いて(一一・七)

穴と犬との合字。犬が突然穴から跳び出すこと。それより唐突・衝突・突飛・突兀などと熟してニハカ・ツキデルの意となる。

1178 〔押〕アフ　新　おし（一一・七）

この字はもと柙と書きのち木扁が手扁になつたものといふ。牢屋のこと。故に木扁。甲は聲符牢屋は罪人をオシ込ム所よりオス・オサエル等に轉義した。

1179 〔拔〕ハツ ばち　新　ぬ・かん（一一・七）

手と犮との合字。引きぬくこと。故に手扁。犮は聲符であるが、髮の條下で說明したやうに犬の足へ邪魔物がひつかかり、それを振り拂つて走るといふ字だから、拔に於いて會意も含まれてゐやう。

1180 〔稱〕ショウ　新　ショウ（一一・七）

禾と爯との合字。禾穀のハカリ。それより廣くハカリのこと。故に禾扁。爯は聲符であるが、その字形は爪と冓の省畫との合字にて、積みあげたものを（冓）つかみ取る（爪）字であるから稱の場合多少の會意もあらう。

アグ。ホム・トナフ等となるのは偁の假借といはれてゐるが、ハカリにかけてその數を讀みあ

げることより轉義したやうにも思へる。

1181 〔接〕セツ　新　セツ(一一・八)

手と妾との合字。手をニギリアフこと。故に手扁。妾は聲符。握手することはマジハリを意味するから接見。接待。接吻等と熟する。ツグとなるのは椄(木をツグこと。故に木扁。)の字に通じたといふ。

1182 〔未〕ビ　み　新　いま・だ(一一・八)　舊　ミ(一一・一四)

木の字の中間に一線を加へ、ここが味のある所といふ意味で、味の本字である。木の果の甘美な味ひは、樹幹の中心から供給されるのだといふ考へからであらうと思ふ。イマダと副詞になるのは非の音に假借してのことである。

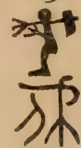
1183 〔沒〕モツ　ボツ　もち　新　ボツ(一一・八)

水と𠬛との合字。水に沈むこと。もと𠬛がその本字で三水はのちに加へられたものである。𠬛の小篆は𠬛にて回と又との合字。水にもぐつてものを取ること。取る意を又(手)にて現はし、水中をさぐり廻はることを回にて現はしたものである。他の説では回は水の波紋といひ、

また或る說は手を水中で搔き廻はすからだといふ。いづれにしても水中にはいることよりシヅムとなる。

沒の旁を殳に書くのは成因を知らぬ俗字である。

1184
〔伐〕バツ　新　バツ（一一・九）　替　きり（一一・九）

古形のの如く人がホコをかついでゐる象形。即ち戈(ほこ)をもつて敵を擊つ政伐の伐でありキリタホス・タチキルの意の文字である。

伐の字と同樣に人と戈との合字に（戍）の字がある。これは戈の下に人がゐる形で、伐のやうに武器をとつて責極的に働くのでなく、武器を側に置いて守るといふ字である。

1185
〔峯〕ボウ ブ｜ホウ ふ　新　みね（一一・九）　替　ホウ（一一・一四）

山のミネのこと。故に山を書く。夆（縫を見よ）は聲符である。

1186
〔苗〕ベウ めう　新　なへ（一一・九）

草と田との合字。田に生ずる禾穀のナヘのこと。それ故草と田とを組合はせたもの。

1187 〔斜〕シャ じや　新 シャ(一一・九)

ものを酌むこと。故に樋杓の象形である斗を書く。餘は聲符。ナ、メとなるのは音の假借。

1188 〔祈〕キ げ　新 いの・り(一一・一〇)

神に願ひごとをするイノリのこと。故に祭壇の象形たる示を書く。斤は聲符。

1189 〔宜〕ギ　新 よろ・し(一一・一〇)　替 ギ(一一・一〇)

小篆にて。宀と一と多の省畫との合字。地上(一)に家を建て(宀)安んじてゐること。多は聲符。それよりヨロシ・コノマシ等の意になる。

1190 〔衰〕スヰ　新 おとろ・へ(一一・一〇)

小篆にて。(衣)のなかに草で作つた雨具、卽ちミノの象形を書き加へたもの。ミノのことであるが、のち假借されてオトロへ弱るの意味にのみ使はれるやうになつたので、本義の場合は更に草冠を加へ蓑の字が出來た。

1191 〔肺〕ハイ　新　ハイ（一一・一〇）

肉と市との合字。肺臓のこと。故に肉月。市は聲符である。

1192 〔衣〕エイ　新　イ（一一・一〇）　替　ころも（一三・二一）

この字はもと衣服の下半裳に對する上半の着物のことで、その古形の小篆のは人が上衣を着てゐる象形である。即ち上部は首筋から兩肩を表はし、下部は袖と前の衣紋の合つてゐる形である。

この字は衿・袈・裟・袿・襯・袢・裕・袴・袢に於ける如く着物の種類をいふ場合、又襟・裾・衫・袂・袖・襞の如く仕立に關することに、或は又物の表裏（裡）、又被る・裝ふ・裕・袋等にも組合はされて、流石に廣く應用されてゐる。

1193 〔技〕ギ キ　新　ギ（一一・一一）

テワザ・タクミのこと。故に手扁。支は聲符。

1194 〔愚〕グ　新　グ(一一・一一)

禺と心との合字。禺は猿の一種。この字に心を組合せ猿智恵のこと。猿智恵は利巧のやうで結局バカだからオロカとなる。禺はまた聲符にもなつてゐる。

1195 〔妙〕ベウ めう　新　メウ(一一・一一)

年若くして纖麗なること。故に少年の少と女とを組合はせたのである。それよりタヘ・シナヤカなどとなる。

1196 〔獨〕トク どく　新　ひとり(一一・一一)　舊　ドク(一二・一三)

犬と蜀との合字。孤獨の獨にてヒトリであること。犬は寄り合ふと兎角いがみ合ひ、いつもヒトリでゐるといふ意味でケモノ扁にした。蜀は聲符。犬の條を參照せよ。

1197 〔消〕セウ　新　け・し(一一・一二)　舊　き・え(一一・一六)　セウ(一二・二三)

水のなくなることが本義。故に三水。肖は聲符。それよりキエルとなる。

肖　なほ肖の字は子供が親にニテキルこと。それ故肉月を書き。小は聲符。

1198 〔激〕ゲキ　新　ゲキ（一一・一二）　替　はげ・し（一一・一二）

水流が岩石等にさへぎられて衝突し、飛沫をあげる様をいふ。故に三水。敫は聲符。それよりハゲシ・ハゲマスとなる。

1199 〔練〕レン　新　レン（一一・一二）

製練の練でセルを煮て柔かくすること。故に糸扁。柬は聲符。それよりネリミガクこと。なほ柬は束と八との合字にて、集めつかねたものを（束）分ち擇ぶ（八）こと。それ故練において幾分會意もあらう。

1200 〔除〕チ チヨ ぢよ　新　のぞ・き（一一・一二）

本義は宮殿のキザハシのこと。ダンダンは土や石で築きあげるので阜。余は聲符。去の音に通じサル・ノゾクとなる。

1201
〔貫〕クワン　新　つら・ぬく(一一・一四)　替　クワン(一二・一五)

貝の條下にて說明した如くもとは毌とのみ書いた。これは錢サシの象形で、後貝が加へられたのである。錢サシより轉じて錢一貫文などと錢貨の單位となり、又重量の單位ともなり、倘又ツラヌク。通スの意にも使はれる。

1202
〔條〕テウ でう　新　デウ(一一・一四)

木と攸との合字。木の枝のこと。故に木を書く。攸（修を見よ）は聲符。轉じてスヂ。スヂミチ等となる。

1203
〔殆〕タイ だい　新　ほとん・ど(一一・一四)

危殆の殆にてアヤフキこと。死ぬ。歿する等凶事に關する意を含む歹扁（死を見よ）にて意味をあらはし、台は聲符である。チカシ。ホトンドとなるのは、アヤフイことは病人ならばもはや死にさうだといふ狀態。最後に近いといふ聯想感念より來たのであらう。

1204 〔僅〕キン ぎん 新 わづ・か（一一・一四）

却うじて少しばかりの仕事をするといふこと。故に人扁。菫は聲符である。

1205 〔株〕チユ―シユ 新 かぶ（一一・一四）

木の根幹のこと。故に木扁。朱は聲符。我國にてはカブと訓じ營業上、職務上の一種の權利のことや、家柄名跡のこと。又株券 株式の略稱に使ふ。

1206 〔識〕シヨク しき 新 シキ（一一・一四）

現形では言と戠との合字になつてゐるが、古形は[illegible]にて言と弋との合字であつた。弋は棒杭。この標木に忘れぬために言葉をしるしておくといふ會意文字である。それ故常識の識となる。古形の言が音に變へられ更に言扁が加へられて現形となつたものである。

1207 〔樹〕シユ じゆ 新 ジユ（一一・一五）

草木を植ゑること。故に木扁。尌は聲符である。轉義して樹木・立ッなどとなる。

1208 〔智〕チ　新　チ（一一・一五）

古形は⿱⿰知亏白にて知と亏と白との合字。知はその條下にて說明した如く矢のやうに疾くものごとをサトルこと。亏は語氣の伸び出る形。白は自の省畫でこの場合鼻息をあらはす。以上の三字にて、知り得たことはいつでも鼻息がスラ〳〵と出る如く頭から出て來るといふ會意である。卽ち智識の智。現形は古形の省畫である。

1209 〔完〕クワン ぐわん　新　クワン（一一・一五）

本義は家屋の構造が完全に出來上つたこと。故に宀冠。元は聲符である。

1210 〔閉〕ヘイ はい　新　と・ぢ（一一・一六）

門をとじること。それより廣くトジル・フサグとなる。門の中の才字形は門の合せ目に下ろした錠の形を象つたもの。それ故才と書いてもオと書いてもいゝわけである。

1211 〔訪〕ハウ　新　おとな・ふ（一一・一七）

多くの人に尋ね謀ること。故に言扁。方は聲符。それよりトフ・タヅヌ・オトヅル。

1212 〔才〕サイ ざい　新　サイ（一一・一七）

小篆にて。在・存の條下で說明した如く、草木の芽が地上に出た形を象つたもの。その芽が成長すれば立派な木になるといふ意味で、この字に木が加へられて材となり材木・材料と熟しさうした概念が才能・才幹の才、卽ちハタラキ・能力の意に轉義したのである。

1213 〔希〕キ け　新　キ（一一・一七）

爻と巾との合字。刺繡した衣のこと。故に巾を書き、爻はものの交錯したアヤを象つた字であるからこれにて刺繡を意味する。刺繡した衣服はいづれ美しく珍らしいものであるからメズラシ・マレとなり、さうした珍貴なものは誰人も欲するので、希望の希、コヒネガフと轉義したものと思ふ。

1214 〔努〕ド ぬ　新　ド（一一・一七）

力を合はせて勉めること。故に力。奴は聲符であるが合意もあらう。

1215 〔滅〕メツ べツ めち　新 メツ（一一・一七）

右旁の烕は火の消えるといふ字。これに三水を加へて水のなくなる意の字とした。のちホロビルとなる。

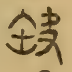
1216 〔貨〕クワ　新 クワ（一一・一八）

タカラ・カネのこと。故に貝貨の貝を書く。化は聲符。貨物と熟しシナモノの意にもなる。

1217 〔幣〕ヘイ べい　新 ヘイ（一一・一八）

神に供へ貴人へ贈る帛の類。故に巾を書く。敝は聲符である。

1218 〔缺〕ケツ けち　新 ケツ（一一・一八）　替 か・く（一二・二〇）

古形は。左扁は一種の瓦器の象形で最も毀れ易いもの。右旁は手でものをサキ分つ意の字（決を見よ）。この兩字にて器物を破損することの會意である。それよりて不完全のこと・カケル。夬は又聲符を兼ねてゐる。左扁を缶と書くのは俗字である。

1219 〔操〕サウ　新　あやつ・り(一一・一九)

手でものをトリモツこと。故に手扁。喿は聲符。一旦確と把握したものは絶對に他に渡させないといふやうな處から、志を持し變節しないミサヲの義となる。なほ喿の小篆はにて、木の上に三つの口を書いて、鳥が木に群がつて鳴きさわぐ意の字である。噪の字の本字である。

1220 〔堅〕ケン　新　かた・き(一一・一九)　替　ケン(一二・六)

臤と土との合字。臤の字は賢の本字で臣と又との合字。固く臣節を持するといふのが本義。それよりカタシの意になる。そこで堅の字は本義はカタキ土のこと。故に臤と土とを書く。のち臤の字と同様カタシとなる。

1221 〔暦〕レキ りやく　新　こよみ(一一・二二)　替　レキ(一一・二二)

コヨミのこと。故に日を書く。厤(歷を見よ)は聲符であるが、コヨミは農事に深い關係があるので禾の字の含まれた厤を特に擇んだものであらう。

1222

〔略〕リヤク　新　リヤク（一一・二一）　替　ほぼ（一一・二三）

土地を整理すること。故に田を書く。各は聲符であるが、土地を整理するのは各々分割したりすることにもなるので會意もある。轉じてヲサム・ハカリゴト・オホヨソ（ホボ）・ヲカス・ハブク等に轉義して使はれる。

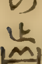
1223

〔紀〕キ　新　キ（一一・二一）

糸を亂れないやうに整理すること。故に糸扁。己は聲符。記に通じてシルスとなる。

1224

〔齡〕レイ りやう　新　レイ（一一・二一）

ヨハヒ・トシのこと。齒は年齡に應じて成長し又衰へるものだから齒を書く。令は聲符であるが、命令の令だから命の條下にて說明した如く、命は天なりといふ思想も加味されてゐやう。なほ齒の古形はにて、ワンと口をあけた際見える下齒の象形。小篆のは下部は口の字に上下のハナラビを書き、上部に聲符として止を組合はせたものである。

1225 〔陰〕 イン おん　新　イン（一一・二一）　替（一二・一二）

陽の反對の字にて山の北のこと。故に阜を書く。昜は聲符。山の北は日當り惡く、寒く陰鬱なるよりクラシ・カゲ・ヒソカ等となる。

1226 〔統〕 トウ つ　新　トウ（一一・二二）　替　す・べ（一二・四）

本義は大綱のこと。故に糸扁。充は聲符であるが、充實の充ゆゑ會意もある。大綱の性能よりヲサム・スブ・スヂ等と轉義する。

1227 〔雜〕 ザツ サフ ざふ　新　ザツ（一一・二二）

小篆にて。それ故現形は襍より變化したものである。衣と集との合字。五彩の巾地を取り合はせて衣を作ること。故に衣とあつめる字の集とを組合はせて會意したもの。それより廣くマザル意となつた。

1228 〔優〕 イウ う　新　イウ（一一・二二）

俳優の優にて役者のこと。故に人扁。憂は聲符であるが、ユックリ歩くとかシトヤカに歩くといふ字であるから會意もある。俳優の艶姿や、妙技が優秀・優美などの熟語を生み出し、それらに關聯して優がスグレル・シトヤカの意に轉義したのであらう。

なほ憂の字は𢝊と夂との合字。𢝊の小篆はにて頁と心との合字。ウレヒと訓ずる字で愁の心が内にあれば自ら外顔にあらはるといふ會意。さうして此の心樂しまぬ人の足取りは（夂）自からユックリ／＼してゐるといふ會意文字が憂である。

1229〔史〕シ　新　シ（一一・二三）

小篆にて。中と又（手）との合字。記錄係の役人のこと。公の記錄を書するにはかりそめにも私心をはさまず、中正なるを要するといふ意味より中と手とを組合はせたのである。それより文書記錄のことにもなる。

1230〔就〕シウ じゆ　新　つ・いて（一一・二三）　替　ジュ（一一・二八）

本義は人工で出來た大きな丘のこと。故に京（京を見よ）を書く。尤は聲符。その丘といふのは王城を築く丘陵で、その工事は一大土木事業であつたらう。それ故就は成就の就となつてナシトゲル

意がある。又去就・就職と熟してツクといふ意になるのは、この王城の地に人が群り集り居つくことより來てゐるといふ。

1231 〔劣〕レツ れち 新 おと・る（一一・二三）

力少く弱いこと。それ故少と力とを組合はせたものである。

1232 〔瀑〕バク バウ ばう 新 バク（一一・二三）

ニハカ雨のこと。故に三水。暴は聲符。のち瀑布と熟しタキのことにもなる。

1233 〔舌〕ゼツ セツ ぜち 新 ゼツ（一一・二三）

小篆にて𠯑。口と干との合字。シタのこと。シタは恰も口中の干（ほこ）のやうなものだといふ會意であらうと思ふ。卽ち舌はナメたりシャブつたり食べる際は勿論、言葉を出す場合も盛んに口中で活躍するからである。

1234 〔誘〕イウ ゆ 新 さそ・はれ（一一・二三） 巻 イウ（一一・二五）

言と秀との合字。善良に導きサソフこと。故に言扁に秀を書く。秀は又聲符。

1235
〔視〕シじ　新　シ(一一・二三)

詳細に見ること。故に見。示は聲符であるが、示の條下にも述べたやうに示には神の意が含まれてゐるから、神が見る如く見透しにするといふやうな考へも加へられてゐやう。

1236
〔抱〕ハウばら　新　かかへ(一一・二三)　替　いだ・き(一二・一七)

カカヘイダクこと。故に手扁。包は聲符であるがツツムといふ字だから會意もある。

1237
〔顧〕コ　新　コ(一一・二四)　替　かへり・み(一二・一七)

頭をめぐらしてカヘリミルこと。故に頁(かほ)を書く。雇は聲符である。

1238
〔漢〕カン　新　カン(一一・二四)

水と難の省畫との合字。本義は漢水といひ揚子江の一支流の名。故に三水。難は聲符。我が國では漢を呉や唐と同樣支那の代名詞に用ひ、漢字・漢語・漢文・漢方醫等と使用する。

尙漢字の吳音に對する漢音は支那北朝地方に行はれた字音の稱である（唐、吳を見よ）。

1239 〔協〕ケフ げふ 新 ケフ（一一・二五）

十と劦との合字。多勢（十）の人が共に力を合はせる（劦）こと。立心扁の恊は同志のものが共に力を合はせることであるが、今は協も恊も同樣に使つてゐる。

1240 〔般〕ハン ばん―バン 新 バン（一一・二五）

舟と殳との合字。舟の往還してめぐること。故に舟と長いホコの字の殳（殺を見よ）を掉さす意味で組合はせたのである。一般・過般と使はれるのは假借である。

1241 〔勸〕ケン くわん 新 クワン（一一・二五）

力を入れてススメルこと。故に力を書く。雚は聲符である。

1242 〔吏〕リ 新 リ（一一・二五）

一と史との合字。官吏の事。官吏たる者は公平無私事に當らねばならぬといふ意で史を書き、

更に一を守り二心なしといふやうな、正義感を强調する意味で一を加へたものである。

1243 〔尊〕ソン　新　ソン(一一・二五)　替　とふと・さ(一二・一九)

古形はにて酋と兩手との合字。酋はもつとも芳惇なる酒のことで、酉(酒壺の象形)の上に八の加はつてゐるのはその香氣が德利の口から發散してゐる指事である。この芳惇の酒を兩手にささげて神にそなへることが尊の本義である。又酒樽のことにもなる。下部が寸になつてゐるのは兩手が變形したのである。神にそなへる酒なるよりタフトシと轉義した。

1244 〔慈〕シ じ　新　シ(一一・二五)

心と茲との合字。イツクシミ愛すること。故に心を書く。茲は聲符。

1245 〔善〕セン ぜん　新　ゼン(一一・二五)

小篆にて。羊と誩との合字である。美しき言葉のこと。羊や美の條下にて說明した如く、單純なる太古人には羊の肉の美味貴重なることよりウマシ・ウツクシ・ヨシ等の感念がともなつて、美・義・善等の字が出來たものである。

1246〔依〕イ　え　新　イ（一一・二六）　巻　よ・つて（一二・一九）

人がものにヨリカカルこと、故に人扁。衣は聲符。ヨリカカルことよりタノムとなる。

1247〔紳〕シン　新　シン（一一・二六）

貴人の結ぶ大帶のこと（帶を見よ）故に糸扁。申は聲符。なほ申は申の條下にて述べたる如く、電光（神）の象形から來たものと、申束といつて兩手で腰を押へて居る形とから出來たものとあり、紳の右旁はいふまでもなく申束の申であるから會意もある。

轉じて高貴の人。立派な男子のこととなる。

1248〔勳〕クン　新　クン（一一・二六）

勳功の勳にて國家につくすイサヲシのこと。故に力。熏は聲符。

1249〔恭〕キョウ　く　新　うやうや・し（一一・二六）

心と共との合字。ウヤウヤしきこと。故に心を書く。共は聲符。

1250 〔籍〕セキ じやく　新　セキ(一一・二八)

帖薄のこと。故に竹冠(簡を見よ)耤は聲符である。

1251 〔版〕ハン へん　新　バン(一一・二八)

木を二つに判つこと。それよりイタのこと。故に片(木・片を見よ)を書く。反は聲符。板といふ字は版の片がのちに木に替へられたものである。後世版木があらはれるやうになつて版元・出版・活版等と熟して使はれるやうになつたのはイタよりの轉義である。

1252 〔忍〕ジン にん　新　しの・び(一一・二八)

能くタヘシノブこと。故に心を書く。刃は聲符。

1253 〔悉〕シツ しち　新　ことごと・く(一一・二八)

コトゴトク暗じ盡すこと。故に辨別する意の釆(奥を見よ)と心とを組合はせたものである。

1254
〔刷〕サツ さち　新　サツ（一一・二八）　替　ずり（一二・四）

刀と㕞の省畫との合字。ゲヅルこと。故に立刀を書く。㕞は聲符になつてゐるが、この字は尸と巾と又との合字で、手（又）で布巾を持つて拭ふ意味の字であるから、刷は刀を持つて拭ふが如く削るといふ會意があらう。轉義して刷毛。印刷などと熟するやうにスル意にもなつた。

1255
〔庫〕コ く　新　コ（一一・二八）

今日の所謂「車庫」である。古代、車は車戰用のものとして重要なものであつた。その出し入れの頻繁なりしことより、簡單な建築物の象形广を選んで書いたもの。廏・廚・庇に於けると同樣である。のち廣くクラの意となつた。

第十二章　卷十二の新出漢字

1256〔昇〕ショウ　新　のぼ・る（一二・一）　替　ショウ（一二・一三）

太陽のアガルこと。故に日を書く。升は聲符。轉じて昇天・昇降等と熟しノボルこと。

1257〔輝〕キ　新　かがや・き（一二・二）

光りカガヤクこと。故に光を書く。軍は聲符。

1258〔鑛〕カウ きやう　新　カウ（一二・三）

礦と同字にてアラガネのこと。故に石扁又は金扁。廣は聲符である。

1259〔叱〕シツ しち　新　しか・られ（一二・三）　替　シツ（一二・一七）

口と七との合字。シカリツケルこと。故に口扁。七は聲符である。この旁をヒや匕に書くのはあやまりである。

1260〔辛〕シン　新　から・い（一二・三）

小篆にて。二と干と一との合字。二は上の字の古形（上を見よ）にて干（ほこ）は犯す意の字であるから、この兩字にて上を犯すこと。即ち罪のことである。その罪の一層深いことを一を加へて指事したもの故辛は重罪を意味する。重罪を犯したものは極刑に處せられカラキ目に遇ふのでカラシ・ニガシ・ツラシ・カラウジテ等に延轉するのである。

1261〔吐〕ト　新　はき（一二・三）

口からハキダスこと。吐瀉の吐である。故に口扁。土は聲符である。

1262〔探〕タン どん　新　タン（一二・三）　審　さが・せ（一二・一二）　さぐ・る（一二・一七）

探險の探でサガシモトメルこと。故に取る意味をあらはす爲めに手扁。罙は聲符となつてゐるがこの字の小篆はにて穴と又と火との合字。手（又）に燭（火）を持つて穴の中に入るとい

ふ會意文字だから、探の場合は充分會意を含んでゐる。

1263 〔揚〕ヤウ　新　ヤウ（一二・三）　替　あ・げ（一二・一五）

飛びアガルこと。もと昜にその意がある。卽ち昜は旦と勿との合字にて朝日（旦）にキラメキ乍ら旗（勿）があがること。のちに手扁が加へられて揚の字が出來、又阜が加へられて陽の字が出來たのである。

1264 〔單〕タン だん　新　タン（一二・四）

古形は等にて（干[ほこ]）の字の含まれてゐることより見て、或る種の武器の象形であらうと思ふ。戰の條下にも述べたる如く戰場に持ち出す大旗の象形であるとも見られてゐる。いづれにしてもそれに近いものだといふことはわかるが、その本義は今後の研究に待つ。

ヒトヘ、單純、單獨等複に對するヒトツの意に使はれるのは音の假借である。

1265 〔純〕シュン じゅん　新　ジュン（一二・四）

本義はマジリケなき絲のこと。故に糸扁。屯（春を見よ）は聲符。轉じて純一無雜。

1266〔戲〕ギ げ　新　ギ（一二・四）

本義は「兵なり」といはれ兵隊のこと。故に戈を書く。䖒は聲符。タハムルの意に使用されるのは音の假借である。なほ䖒は豆と同じく器物の一種である。

1267〔現〕ゲン げん　新　あらは・れ（一二・四）　替　ゲン（一二・一二）

本義は玉の光のこと。故に玉扁。見は聲符。アラハルと使はれるのは、旁の見に通じたのである。

1268〔司〕ス シ　新　つかさ・どり（一二・四）

小篆にて司。人と口との合字。后の字の小篆后の上部を反對にした字形である。伺（うかがふ）の本字で、臣の字に於ける如く身を屈して君に仕へ、常に御機嫌を取る意味の字であらう。それ故人の字の變形と口とを組合はせた。ツカサドルとなるのは、君側に侍べる臣下が君に替つて政務をとることからであらう。

1269 〔販〕ハン はん　新 ハン（一二・四）

販賣の販で商賣のこと。故に金儲けの意味で貝貨の貝を書く。反は聲符。

1270 〔能〕ドウ のう　新 ノウ（一二・四）　替 あた・は（一二・二〇）

本義は熊の一種の名で古形は。その動物の象形に肉月を加へたものである。熊の足は特に勝れてゐるので、足の部分が强調されて書かれてゐる。此の動物は最も利巧でしかも强壯なる故に能力・本能等と熟しハタラキの意やヨクスル意に延轉した。

1271 〔但〕タン だん　新 ただ・し（一二・四）

本義はハダヌギのこと又は素肌のこと。故に人扁。旦は聲符。タダシと接續詞に使はれるのは音の假借である。

1272 〔隔〕カク きやく　新 カク（一二・四）

堤や土塀のやうなもので内外のヘダテをすること。故に阜扁。鬲は聲符。それより廣くヘダテ

ルとなる。なほ鬲は鼎の如き器物の象形である。

1273〔敏〕ビン みん 新 ビン（一二・六）

スバヤキこと。攴を書くのは牛馬等を疾驅させる際には、必ず鞭うつかであらう。毎は聲符。

1274〔己〕コ キ 新 コ（一二・六） 替 おのれ（一二・一七）

說文によれば萬物の避藏して屈してゐる形に象るとあつて、乙の字などと同樣に見てゐるが、その古形はにて成程乙の字とは字形が似てはゐるけれど、身の條下にて說明したる如くこれは人間の脊骨の象形である。それにて我が身、オノレのことを現はしたのである。詳しくは身の字に就いて見られよ。

この字に類字してゐる字に已、巳がある。その區別を記憶に便する爲め「己出でず、已に中ば巳は閉ず」といふ言葉がある。巳は虫の條下にて述べたる如くその古形の如くマムシの象形から出來たものでヘビのこと。已は㠯（以を見よ）と同字にて本義は用ふることといふ。スデニ・ヤムの意に使はれるのは矣に假借したものといふ。

1275〔永〕エイ　やう　新　エイ(一二・六)　𦾔　なが(一二・一四)

水派の本字𠂢の字の向きを變へてナガシ・トコシへの意としたことは、既に第一篇第一章第二節の指事のところにて說明した通りである。

1276〔個〕カ　こ　新　コ(一二・六)

一個人などと用ゐヒトリの意。故に人扁。固は聲符である。今では物を數ふる箇と同樣に用ひられてゐるが、人扁の個は個人　個性　個體等人事に關することにのみ使用するのが字源にかなつてゐる。

1277〔耐〕タイ　ダイ　ない　新　タイ(一二・六)　𦾔　たふ・る(一二・一〇)

而と寸との合字。本義は輕い罪人のヒゲを剃るといふ刑罰のこと。あたかも歐米に於いて囚人が頭髮を坊主頭に刈られてしまふのと似てゐる。故にヒゲの象形である而(需を見よ)と長さの標準となり、法度の意をもつ寸とを組合はせての會意文字である。

古代刑罰の樣式が文字の上に現はれてゐるものでは縣　斬等が見受られる。

1278 〔格〕カウ カク きやく　新　カク（一二・六）

本義はノビ〳〵と長く木の枝の張つてゐる貌。故に木扁。各は聲符。轉じて長く至り及ぶ義とし更に標準・法式の意となつた。

1279 〔誤〕ゴ　新　あやまり（一二・六）　替　ゴ（一二・二七）

吳の條下にて述べたる如く、吳の本義は大言壯語すること。大言壯言するものの言葉は兎角マチガヒがあるので、アヤマリ・アヤマチの意の文字として吳に言扁を加へて作られたものである

1280 〔憤〕フン ぷん　新　フン（一二・七）

モダエイキドホルこと。故に立心扁。賁は聲符である。

1281 〔混〕コン こん　新　コン（一二・八）

コンコンと豐に水の流れる貌。故に三水。昆は聲符である。なほ昆は日と比との合字にて、同じやうな日が毎日續いて（ならぶ意の比にて表す）あのことはいつの日であつたかわからなくなつてしまふ會意で

マジリアツテ見分けのつかぬ意。それ故混が混雜・混同・混成等と熟してマジル意に使はれるのは旁の昆に通じたのである。

1282 〔藝〕ゲイ　新　ゲイ(一二・八)

埶が本字で、のちこれに草冠と云とが加へられて現形が出來たものといふ。埶の古形はにて木と土と丮との合字。丮は宿の條下にて述べたる如く、人が兩手でものをもつてゐる形である以上の三字にて人が手で草木を土に植ゑるの會意。即ち植木屋の仕事のこと。それより技藝・藝術等と熟しワザの意となつた。

1283 〔麗〕レイ らい　新　レイ(一二・八)

說文によれば鹿の群が旅行することだといふ。故に鹿を書く。上部の丽は聲符でもあるが、又鹿皮を並べて乾してゐる形であるから會意も含まれてゐるといふ。ウルハシとなるのは鹿の皮の見事なるよりではないかと思ふ。

1284 〔側〕ソク　新　がは(一二・八)

人のカタハラのこと。故に人を書く。則は聲符である。

1285 〔眺〕テウ　新　テウ（一二・八）　替　なが・め（一二・八）

惡事の前後に恐る恐るあたりの様子を見ること。故に目扁。兆は聲符。それより單にナガメルの意に使はれるやうになつた。

1286 〔儉〕ケン げん　新　ケン（一二・八）

儉約の儉にて、節約してツツシマヤカにすることは、多くの人の守るべき道といふ會意である即ち僉の字は皆と同義にて、合の本字の亼と口二つと人二つを組合はせ、それにて多くの人の言ふことが一致するの會意である。

1287 〔演〕エン　新　エン（一二・九）

エン／＼と流れる水の長き流のこと。故に三水。寅は聲符。轉じて長く引き廣まることより、思想を引き延して述べる演説の演ともなる。

1288 〔免〕ベン めん 新 メン（一二・九）

勉の條下にて說明した如く、兎の字より生れた字でこの兎の點を省き兎が足早やに逃げてその尾つ毛（點にて表はす）が見えなくなりマヌガレタといふ會意である。

1289 〔異〕イ 新 イ（一二・九） 替 こと・なる（一二・一七）

古形はにて畀と兩手との合字。畀はものを與へる意の字であるから、兩手にてものを分けてやることが異の本義で、それより分つこと。分つことよりタガフ・コトナルとなる。

1290 〔題〕テイ だい 新 ダイ（一二・九）

ヒタヒ（）こと。故に頁(かほ)を書く。是は聲符。轉じてカシラ・書物等の表題等となる。

1291 〔奇〕キ ぎ 新 キ、（一二・九）

或る說では大と可との合字。他と異りて珍らしきこと。大なるものは他との違ひがすぐ判別できるので大を書き、可は聲符といふ。

又或る說では大と訶の省畫との合字にて、本義は奇怪の奇卽ちアヤシキこと。そのアヤシキ者を大聲で（大）叱りつける（訶）の會意と見たのである。

1292 〔怪〕クワイ け　新　クワイ（一二・九）　替　あや・し（一二・一七）

アヤシムこと。故に心を書く。圣は聲符。なほ圣は又と土との合字で田を耕すこと。

1293 〔揃〕セン　新　そろ・へて（一二・九）

按摩すること。故に手扁。前は聲符。ソロヘルとなるのは前の假借である（前を見よ）。

1294 〔殖〕ショク じき　新　ショク（一二・一〇）

本義は脂肪の腐敗すること。故に歹扁。省は聲符である。ウエル・フエルとなるのは音の假借である。

1295 〔憂〕イウ う　新　うれひ（一二・一〇）

頁と心と夂との合字。憂欝な人の進まぬ足どりのことである。詳しくは優を見よ。

1296 〔築〕 チク とく　新　チク（一二・一〇）

木と筑との合字。杵などで土手等をつきかためキヅクこと。故に木扁。筑は聲符である。なほ筑は竹にて作りし五弦の樂器のことである。

1297 〔縮〕 シユク　新　ちぢ・み（一二・一〇）

本義は絲を引きしめてヲサムルこと。故に糸扁。宿は聲符。わが國にてはチヂミ織の義に用ふるところより單にもののチヂムことにも使ふ。

1298 〔柔〕 ニユウ ジウ にゆ　新　やはら・か（一二・一〇）

木と矛との合字。木をタメルこと。故に木扁。矛は聲符。それより廣くヤハラカ。

1299 〔磨〕 バ ま　新　みが・け（一二・一〇）　替　マ（一二・二七）

本義はヒキウスのこと。故に石を書く。麻は聲符。ウスにてスリコナしたりスリミガクことより廣くミガクとなる。

1300 〔装〕シヤウ さう　新　ソウ（一二・一〇）

物をつゝんでしまつておくこと。故に衣を書く。壯は聲符。それより身をつゝみヨソホフことに轉義した。

1301 〔烈〕レツ れち　新　レツ（一二・一〇）　替　はげ・し（一二・一四）

火と列との合字。火のハゲシイこと。故に火を書く。列は聲符。それより廣くタケクハゲシイことゝなる。

1302 〔複〕フク　新　フク（一二・一二）

衣と复との合字。アハセ着物のこと。故に衣扁。复は聲符。それより廣くカサナル・フタタビ等となる。

1303 〔因〕イン　新　イン（一二・一二）

この字の成因に就いては諸説があつて未だ定説がない。或る説では姻の本字で男が婿に行つて

先方の家にをさまつた貌、即ち家（囗）の中に人（大）がゐるといふ會意。それ故婿が養家に就くことでツク・ヨル等と轉義するといふ。

又ある說では茵の本字でシトネのことといふ。囗は布團を象り大はその縫目なりと。

或ひは思ふ。布團の上に人が大の字に寢てゐる象形ではならうか。寢床に就くことよりツク・ヨル等の意も生まれて來たとも考へられるが、いづれにしても今後の研究に待つ。

1304 〔賜〕シ　新　たまもの（一二・一一）

目上より目下に物を與へ授くること。故に財物の意をもつ貝を書く。易は聲符。

1305 〔章〕シヤウ　新　シヤウ（一二・一三）

音と十との合字。音樂の一段落をいふ。故に音樂の音と數の終りの十とを組合はせたものである。轉じて廣く一段落の意となる。又彰に通じてアキラカ・アラハル等ともなる。

1306 〔旭〕キヨク　こく　新　キヨク（一二・一三）

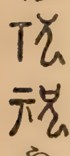
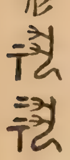
日と九との合字。朝日が輝き出づる貌。故に日を書く。九は聲符。

1307 〔潔〕ケツ けち　新 ケツ（一二・一三）　替 いさぎよ・い（一二・二七）

水の淸きこと。故に三水。絜は聲符。水淸きことよりキヨシ。イサギヨシともなる。

1308 〔示〕シ じ　新 しめ・し（一二・一三）　替 シ（一二・一三）

說文によれば二と小との合字。二は古文の上にて天の意。小は日月星の三つを現はしたもの。それにて日月星が天よりそれ〴〵の光貌により、人類に吉凶を告げ知らす意である。古來人間は天體の異變により吉凶を判じ、その示現を見て祭事を行ふた。それ故祭事、神事に關する字に示が組合はせられる所以であるといふ。

しかし本來この字はかやうな崇高な複雜した感念によつて構成せられたものでなく、もつと原始的な象形文字の一團の一つであり、臺とか机やうのものの單なる象形に過ぎないことは、神や祖の字の條下で述べた通りである。字形からいふと三脚の臺にものが載せてあることを上部の一にて現はしてゐる。思ふに神　祝　宗。祖　祭。祠。祈禱。禍福。禮。禁等宗敎關係の文字に必ず含まれてゐるところより見れば、單に臺や机といふより祭壇へ供へ物がしてあると見る方が、あてはまつてゐはしないか。祝の古形や祖の古形等を見れば說文の解釋は根底

を失ふものである。

1309 〔藍〕 ラン　新 あゐ（一二・一三）

青を染める草のこと。故に草冠。監は聲符。それよりアヰイロのことにも用ふ。

1310 〔短〕 タン　新 みじか・さ（一二・一四）　替 タン（一二・二七）

ミジカイこと。畋獵時代には常に弓矢を帶してゐたから、ものの長短を計るに弓矢を用ふる習慣があつた。それ故短の場合に矢を書いたのである。定木の意味の矩の字にも矢が組合はせられてゐることと同樣である。豆は聲符。

1311 〔與〕 ヨ　新 あた・へ（一二・一四）　替 あづか・らせ（一二・一九）

小篆にて。舁と与との合字。舁は小篆でみる如く四つの手が出し合つてゐる形であり、力を合はせる意があるので、これに聲符の与を組合はせたのである。クミス・トモニ・アヅカル等となる。

アタヘル意に用ひられるのは与に通じたのである。この字は普通與の略字の如く思はれてゐる

が、小篆で見る如く一と勹との合字にて、樋勹でもの（一にてあらはす）を與へる意の字である。

與に似た字に與がある。多くの者が共同して盛んに事を起す意の字であるから、聲符の同は共同の意を一層强めたわけである。

1312 〔認〕ジン にん　新　みと・め（一二・一四）

ミトメシルこと。言扁にてその意をあらはし、忍は聲符である。

1313 〔準〕ジュン シュン　新　ジュン（一二・一四）

水と隼との合字。平かなること。水面は常に平らかなるより三水。隼は聲符である。法の字に三水が加へられたと同様の心理作用から、法則・標準・ナゾラフ等の義に延轉した。なほ准は準の略字である。

1314 〔狂〕キャウ がう　新　キャウ（一二・一四）　啓　くる・ひ（一二・一五）

本義はキチガヒ犬のこと。故にケモノ扁。王は聲符。それより廣くクルフ・キチガヒとなる。

1315 〔請〕 シン セイ しやう 新 こ・う（一二・一四）

謁見して申上ぐること。故に言扁。靑は聲符である。謁見を願ふことよりコウ・ネガフ・イノルとなる。

1316 〔責〕 セキ サク しやく 新 せ・め（一二・一四）

小篆にて責朿と貝との合字であつたのが現形に變化したものである。本義は金錢を貸してその返濟を請求すること。故に貝貨の貝を書く。朿は聲符。返濟をせまることよりセム・シカルとなり、借錢は又當然支拂ふ義務があるところより責任の責ともなる。負債の債はのちに責に人扁が加へられて出來たものである。

1317 〔腸〕 チヤウ ちやう 新 はらわた（一二・一四）

大腸小腸の總名。故に肉月。昜は聲符。肉の條を參照せよ。

1318 〔網〕 バウ まう 新 あみ（一二・一五）

アミの字は最初その象形より出來た网であつたが、これに聲符として亡を加へた罔が出來、更にアミは糸で作るところより糸扁を加へて現形の網が出來た。最初の网が變形してアミガシラとなり罪・罰・置等に組合はされてゐることは、それ〳〵の條下に述べた通りである。

1319〔誇〕コ クワ け　新　ほこり（一二・一六）

この字の旁の夸が誇のもとの字である。大と亏の合字で大言を吐いてホコルこと。故に大と言葉ののび出る形の亏とを組合はせたのである。のち更に言扁を加へて現形の誇が出來た。

1320〔査〕サ しや　新　サ（一二・一七）

木と且との合字。木のテスリのこと。故に木扁。且は聲符。ミル・カンガフ・シラブル等に用ゐられるのは察に通じての假借である。

1321〔確〕カク　新　たしか（一二・一七）　替　カク（一二・二六）

石と隺との合字。カタキこと。故に石扁。隺は聲符。カタキことよりタシカとも轉義する。なほ確の旁の上部を宀冠に書くのは俗字である。

雀の字は隹と冂との合字にて、隹が高く飛んでサカヒ（冂）から出やうとする貌。

1322 〔雇〕コ こ　新 やと・ひ（一二・一七）
隹と戶との合字。本義はフナンウヅラのこと。故に隹を書く。戶は聲符。ヤトフと用ゐられるのは音の假借である。

1323 〔宅〕タク ちやく　新 タク（一二・一七）
スマヒのこと。故に家の象形の宀冠。乇は聲符。なほ乇は草木の地上に生へ出る貌といふ。

1324 〔懷〕クワイ くゑ　新 ふところ（一二・一七）　替 なつか・し（一二・二五）
心に思ひ念ずること。故に立心扁。褱は聲符であるがこの字はフトコロにものをしまふ意の字である。それ故衣の中へ聲符として眔を組合はせたのである。懷をナツカシと使ふのは轉義。フトコロとなるのは褱に通じた假借である。

1325 〔提〕テイ だい　新 テイ（一二・一八）

ヒッサゲ持つこと。故に手扁。是は聲符。

1326 〔否〕 ヒ ヒウ ふ 新 ヒ(一二・一八)

口と不との合字。イナミコバムこと。故に口で然らず(不)といふ會意である。

1327 〔省〕 セイ しやう 新 シャウ 一二・一八) 舊 セイ(一二・二七)

詳細に觀察すること。故に目を書く。少は聲符。官省の省に用ゐられるのは、役所では事こまかに調べるからであらう。カヘリミル・ハブクの意になるのも轉義である。

1328 〔測〕 ソク ショク しき 新 のつと・る(一二・一八)

水の深さをハカルこと。故に三水。則は聲符。それより廣く測度の意になる。

1329 〔賢〕 ケン げん 新 ケン(一二・一九)

本義は財貨多きこと。故に貝を書く。臤は聲符。人間が利巧でなくては財產も出來ないといふところから、カシコイの意になり、更らに才智秀ぐれた聖人に次ぐ德ある人の意ともなるのは拜

金思想を露骨に現はしたものである。

又一説には臤が賢の本字で、君に仕へる臣下のうちで最も腕達者なるもの、即ちカシコキ人の意といひ、貝は後につけ加へられたものといふ。

1330〔試〕シ　新　こころ・み（一二・一九）

ココロミ用ふること。言扁にてその意をあらはし、式は聲符である。

1331〔濃〕ノウ ヂョウ にょう　新　こ・き（一二・一九）

露の多いこと。故に三水。農は聲符。轉じてコシ・アツシ・コマヤカ。

1332〔悟〕ゴ　新　さとり（一二・一九）　替　ゴ（一二・二六）

サトルこと。故に立心扁。吾は聲符である。

1333〔抗〕カウ　新　カウ（一二・一九）

フセギアタルこと。故に手扁。亢は聲符である。

1334 〔迫〕ハク ひやく　新　ハク（一二・一九）　替　せま・り（一二・二五）

近づきセマルこと。故に之遶。白は聲符。

1335 〔巡〕シュン じゆん　新　めぐ・つて（一二・一九）

川と之遶との合字。メグリ行くこと。川と之遶にてその意をあらはしたものである。

1336 〔諭〕ユ トウ つ　新　さと・し（一二・一九）

告げサトスこと。故に言偏。兪は聲符。

1337 〔嚴〕ゲン げん　新　ゲン（一二・二〇）

口二つと𠪚との合字。キビシイ命令のこと。上部の口二つはサケブ意の字。𠪚は険峻なる山のことであるからこの兩字にて會意したものである。

なほ𠪚の聲符になつてゐる敢は古形にて手が二つと古との合字である。進取すること。故に手を二つ書き聲符として古を加へたもの。進取することよりアヘテと使はれる。

1338 〔廢〕ハイ　新　すた・れ（一二・二〇）

本義は家屋がスタレて傾くこと。故に家の象形より出來た广を書く。發は聲符。それより廣くスタルこととなる。

1339 〔霞〕カ げ　新　かすみ（一二・二〇）

カスミのこと。故に雲霧等と同じく雨冠。叚は聲符である。

1340 〔鹿〕ロク　新　しか（一二・二〇）

古形のより小篆のになり現形に變化したもので、古形小篆を見れば直ちに鹿なることを知り得る如く、鹿の特徴たる角と足とをよく表はしてゐる。

1341 〔哀〕アイ　新　アイ（一二・二〇）

口と衣との合字。泣き悲しむこと。故に口を書く。衣は聲符。

1342 〔驗〕ケン ゲン　新　ケン（一二・二二）

馬の一種の名。故に馬扁。僉は聲符。シルシ・アカシ・タメス等に使はれるのは音の假借である。

1343 〔稀〕キ け　新　キ（一二・二二）

本義は稲苗のマバラに生へてゐること。故に禾扁。希は聲符。それより少くないことになる。希に通じマレともなる。

1344 〔蒸〕ジョウ じょう　新　ジョウ（一二・二三）

昔はあかりを取る爲めに麻ガラを燃やしたもので、之を蒸といつた。故に草冠。烝は聲符であるが、火氣の上行する意の字であるから會意もある。烝の古形はで火にて意をあらはし丞が聲符となつてゐる。この丞は承と同系の文字でタスケル意の字である。

1345 〔革〕カク きやく　新　カタ（一二・二三）

獸類の皮の毛を去りアブラをぬき取つたカハのこと。皮を改め作るより改革・變革等と熟しアラタムの意に使はれるやうになつた。詳しくは皮の條を見よ。

1346〔換〕クワン ぐわん　新　クワン（一二・二三）

取りカヘルこと。故に手扁。奐は聲符である。

1347〔呈〕テイ ちやう　新　テイ（一二・二四）

口と壬との合字。本義は公平なること。口をかくは僞言なき意。壬は聲符。シメス・アラハスとなるのは音の假借である。

1348〔伺〕シ　新　うかが・ひ（一二・二四）

司の字に後人扁が加へられたもので、司にウカガフ意があつたが、ツカサドルことに多く司が使はれるやうになつたので、ウカガフ場合の字に伺を書くやうになつた。

1349〔忙〕バウ まう　新　いそが・し（一二・二四）

心づかひのイソガシイこと。故に立心扁。亡は聲符。同じく心と亡との合字でも忘になるとワスレルことで意味が違つて來る。

1350〔訓〕キン クン　新　クン（一二・二四）

サトシオシヘルこと。故に言扁。川は聲符である。

1351〔載〕サイ　新　の・せ（一二・二五）

乘りもののこと。故に車を書く。𢦏は聲符。轉じてノス・シルス等となる。

1352〔涉〕セフ ぜふ　新　セフ（一二・二六）

徒歩にて水をワタルこと。故に三水と步とを組合はせたのである。それより廣くワタル・カカハルと使はれる。

1353〔委〕キ　新　キ（一二・二六）

女と禾との合字。從順にしてシタガフこと。從順なる意を女であらはし。禾は聲符である。それよりマカス。ユダヌと轉義した。

1354
〔策〕サク しやく　新　サク（一二・二六）

竹で作つたムチのこと。故に竹冠。朿は聲符であるが、イバラといふ字であるから會意も含まれてゐやう。ムチのことよりムチウツ。ツエ。カズトリ・ハカリゴト等に轉義した。尙朿の字が教科書には束となつてゐるが朿が正しい。

1355
〔謀〕ボウ む　新　ボウ（一二・二六）

問ひハカルこと。故に言偏。某は聲符である。

1356
〔仁〕ジン にん　新　ジン（一二・二六）

諸說があつて未だ判然としない。人と二との合字で、或る說は道義の完たきこと。道義は人と人との間に起る故に二と人とを合すといふ。又の說ではシタシムが本義で、二人が相睦みあつてゐる會意といふ。又の說では一人の德を二人以上の人に及ぼす意だといふ。

更にある説では二は古文の上にて上人、即ち徳の高き人の意であると。

1357 〔評〕ヒヤウ へイ びやう　新　ヒヤウ（一二・二六）

是非を公平に論ずること。故に言と平とを組合はす。平は又聲符にもなつてゐる。

1358 〔捧〕ホウ ぶ　新　ささげ（一二・二六）

ササグルこと。奉の字が本字にてのち手扁の加へられたもので、詳しくは奉を見よ。

1359 〔冠〕クワン　新　クワン（一二・二七）

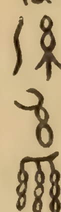
冖と元と寸との合字。カンムリのこと。冖は冢・冤・冥等に見る如くものを覆ふ貌をあらはした字。元は聲符であるが、又元首と熟し首の意も含まれ。カンムリは位階によりそれ〴〵定つてゐるので、寸法即ち法則の意をもつ寸をこれに加へたのである。

1360 〔據〕キョ ご　新　よ・つた（一二・二七）

杖にすがつて體をささへること。それよりヨルとなる。故に手扁。豦は聲符。なほ豦は虎の省

畫と豕との合字とされてゐるが、その成因は不明である。

1361
〔系〕ケイ がい　新　ケイ（一二・二七）

古形には等があり、糸がものにツナイである形を象つたものであり、ツナグ・ツナガル・ツラナルの意をあらはしたものである。系の上の一は單にものを表はしたに過ぎないと思ふ。

1362
〔掃〕サウ　新　サウ（一二・二七）

ハライステルこと。故に手とふき掃除する意の帚（婦を見よ）とを組合はせたのである。

1363
〔創〕シャウ さう　新　サウ（一二・二七）

傷つくこと。故に立刀。倉は聲符。ハジム・ツクルとなるのは音の假借である。

1364
〔侮〕ブ む　新　あなど・られ（一二・二七）

人をアナドルこと。故に人偏。每は聲符。

1365 〔脫〕 タツ タッ だち 新 ダツ 一二・二七）

肉のヤセオチルこと。故に肉月。兌は聲符。轉じてハナル・ハヅル・ヌグ等となる。

漢字起源の研究終

索引（終）

八 畫

六 畫

七 畫

字畫引索引

（索引番號は上字文の數
字に該當し頁數に非ず）

昭和十四年四月　十日印刷
昭和十四年四月二十日第一版發行
昭和十四年四月三十日第二版發行

漢字起源の研究

定價金參圓五拾錢

著者　影山修
東京市神田區猿樂町二丁目八
發行者　小泉準一
東京市神田區三崎町二丁目五ノ八
印刷者　西村由太郎
東京市神田區三崎町二丁目五ノ八
印刷所　西村印刷工場

東京市神田區猿樂町二ノ八
發行所　天泉社
電話神田二三九三番
振替東京五七〇二九番